

加古川市

宗佐遺跡・宗佐南遺跡

— 東播磨南北道路北工区（主要地方道加古川小野線）道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

第 1 分冊



令和 7（2025）年 3 月

兵庫県教育委員会

宗佐遺跡・宗佐南遺跡

第 1 分冊

兵庫県文化財調査報告 第 539 冊

令和 7 年 3 月

兵庫県教育委員会

加古川市

宗佐遺跡・宗佐南遺跡

－ 東播磨南北道路北工区（主要地方道加古川小野線）道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －

第 1 分冊

令和 7（2025）年 3 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会



調査区上空から加古川中流方面（北）を望む



調査区上空から印南野台地方面（南）を望む



調査区上空から東を望む



調査区上空から加古川下流方面（南西）を望む



A地区上層遺構面



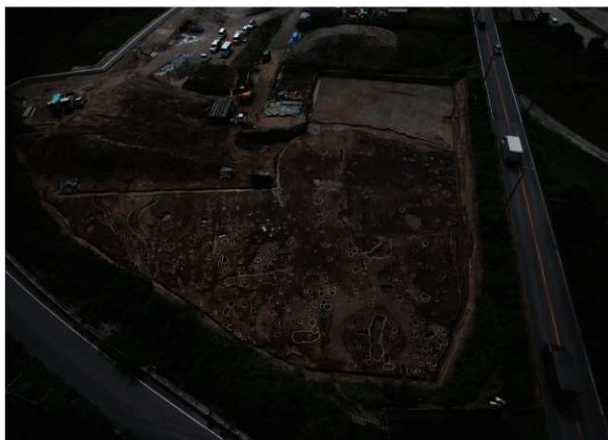
A地区下層遺構面 掘立柱建物跡S81（南から）



A地区下層遺構面 竪穴建物跡SH159（西から）



A地区下層遺構面 SK165（北西から）



B地区上層遺構面（北から）



B地区下層遺構面竪穴建物跡群（東から）



C地区下層遺構面竪穴建物跡群（南から）



C地区SH156床面の礫集中部



C地区S0249遺物出土状況（西から）



D地区全景



D地区竪穴建物跡群（南西から）



E地区火葬遺構SX60（西から）



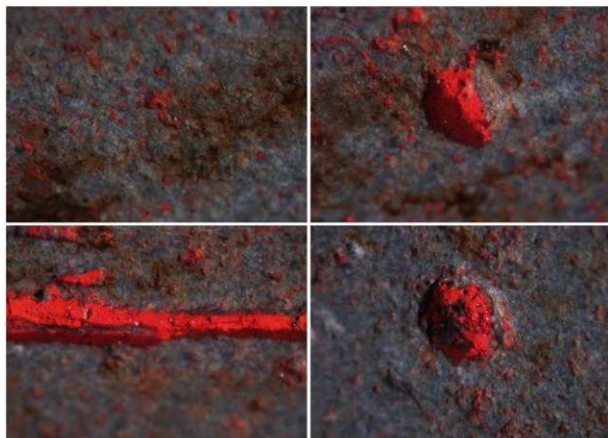
A地区柱穴出土土器



A地区SK165出土土器



A地区出土朱墨付須恵器



A地区出土須恵器に残存する朱墨（拡大写真）



日地区出土緑釉陶器



日地区SP35出土土器



C地区SD249出土土器



C地区SH193出土土器

例 言

- 1 本書は、兵庫県加古川市八幡町に所在する、宗佐遺跡・宗佐南遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本発掘調査は、東播磨南北道路北工区（主要地方道加古川小野線）道路改築事業に伴い、兵庫県東播磨県民局加古川土木事務所の依頼により、兵庫県教育委員会が2017～2019年度に実施した。また整理業務は、同事務所の委託により、2021年度～2024年度に、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部において実施した。

【確認調査】

- ①実施機関：兵庫県立考古博物館
2017年1月11日～2017年2月1日
調査担当者 別府洋二・久保弘幸
- ②実施機関：兵庫県立考古博物館
2017年4月27日・2017年4月28日
調査担当者 中川 渉
- ③実施機関：兵庫県立考古博物館
2018年4月10日～2018年5月2日
調査担当者 篠宮 正・垣内拓郎・西山昌孝・三好愛美・乗本愛実

【本発掘調査】

宗佐遺跡（A地区）

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター
2017年4月10日～2017年8月10日
調査担当者：久保弘幸・新田宏子

宗佐遺跡（B地区）

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター
2017年6月30日～2017年12月1日
調査担当者：久保弘幸・新田宏子

宗佐遺跡（C地区）

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター
2018年4月10日～2018年8月10日
調査担当者：篠宮 正・垣内拓郎・西山昌孝・三好愛美・乗本愛実

宗佐遺跡（D地区）

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター
2018年9月13日～2019年1月25日
調査担当者：垣内拓郎・三好愛美

宗佐遺跡（E地区）

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター
2019年4月9日～2019年8月8日
調査担当者：垣内拓郎・野田優人・岸本一宏・松崎光伸

宗佐南遺跡（A地区）

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター
2018年5月22日～2018年8月10日
調査担当者：篠宮 正・垣内拓郎・三好愛美

宗佐南遺跡（B地区）

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター

2018年9月13日～2019年1月25日

調査担当者：垣内拓郎・三好愛美

【整理事業】

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

2021年度 担当者：久保弘幸・垣内拓郎

2022年度 担当者：久保弘幸

2023年度～2024年度 担当者：池田征弘

- 3 本書の執筆・編集は、(公財)兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部の久保弘幸・池田征弘が担当した。
- 4 遺構面の基本図化(1/50)は、空中写真測量によって実施した。
- 5 遺物写真撮影は、2021・2023・2024年度に(株)地域文化財研究所、2022年度に国際文化財株式会社に委託して実施した。
- 6 自然科学的分析については、下記のとおり委託して実施し、その成果は本書に収録している。
貝同定：(株)パレオ・ラボ AMS年代測定：(株)加速器分析研究所・株式会社 古環境研究所
樹種同定：バリノ・サーヴェイ株式会社 花粉・プラントオパール・珪藻分析：株式会社 古環境研究所
- 7 また宗佐遺跡における微地形形成過程については、立命館大学の青木哲哉氏に現地調査および指導をいただき、本書に王稿を頂戴している。
- 8 本書中の図で示した方位は、調査地点における座標北による。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
- 9 発掘調査及び報告書の作成にあたり、下記の方々よりご指導を頂戴した。記して謝意を表したい。
加古川市教育委員会、寒川旭、宗佐町内会、平尾英希、古林舞香、山中リュウ
- 10 本書中で用いた地層および土器の色調の記号番号は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』によっている。
- 11 本発掘調査および本書に関連する図面・写真・出土遺物は、すべて兵庫県立考古博物館において保管している。

【凡例】

本文ならびに挿図中・表中で用いた遺構・遺物の略称は次のとおりである。

SP：柱穴 SB：掘立柱建物跡 SK：土坑 SD：溝 SE：井戸 SX：その他の遺構

M：金属製品 S：石製品 T：瓦 W：木製品

目 次

第1章	遺跡の位置と環境	
第1節	地理的環境	1
第2節	歴史的環境	3
第2章	調査の概要	
第1節	調査に至る経緯	7
第2節	調査の概要	7
第3節	整理事業の概要	10
第3章	宗佐遺跡A地区	
第1節	本発掘調査区の層序と遺構面	13
第2節	遺構と遺物	13
第3節	小結	21
第4章	宗佐遺跡B地区	
第1節	本発掘調査区の層序と遺構面	23
第2節	遺構と遺物	23
第3節	小結	48
第5章	宗佐遺跡C地区	
第1節	本発掘調査区の層序と遺構面	49
第2節	遺構と遺物	50
第3節	小結	60
第6章	宗佐遺跡D地区	
第1節	本発掘調査区の層序と遺構面	61
第2節	遺構と遺物	61
第3節	小結	66
第7章	宗佐遺跡E地区	
第1節	本発掘調査区の層序と遺構面	67
第2節	遺構と遺物	68
第3節	小結	77
第8章	宗佐南遺跡A・B地区	
第1節		78
第2節	遺構と遺物	78
第3節	小結	81

第9章 自然科学的分析

第1節	転用硯付着赤色顔料の蛍光X線分析	82
第2節	宗佐遺跡出土の貝類同定	83
第3節	宗佐遺跡の樹種同定	84
第4節	宗佐遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定) (1)	89
第5節	宗佐遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定) (2)	94
第6節	宗佐遺跡における花粉分析、珪藻分析、プラント・オパール分析	99
第7節	宗佐遺跡における地形環境	113

第10章 総括

第1節	弥生・古墳時代	127
第2節	古代	130
第3節	中世	134
付表1	A・B地区土坑一覧	139
付表2	土器一覧	141
付表3	瓦一覧	161
付表4	その他の遺物一覧	163

報告書抄録

巻頭図版目次

巻頭図版1	調査区上空から加古川中流方面 (北) を望む 調査区上空から印南野台地方面 (南) を望む
巻頭図版2	調査区上空から東を望む 調査区上空から加古川下流方面 (南西) を望む
巻頭図版3	A地区上層遺構面 A地区上層遺構面 掘立柱建物跡SB1 (南から)
巻頭図版4	A地区下層遺構面 竪穴建物跡SH159 (西から) A地区下層遺構面 SK165 (北西から)
巻頭図版5	B地区上層遺構面 (北から) B地区下層遺構面竪穴建物跡群 (東から)
巻頭図版6	C地区下層遺構面竪穴建物跡群 (南から) C地区SH156床面の礫集中部 (西から)
巻頭図版7	C地区SD249遺物出土状況 (西から) D地区全景
巻頭図版8	D地区竪穴建物跡群 (南西から) E地区火葬遺構SX60 (西から)
巻頭図版9	A地区柱穴出土土器 A地区SK165出土土器
巻頭図版10	A地区出土朱墨付須恵器 A地区出土須恵器に残存する朱墨 (拡大写真)

巻頭図版11	B地区出土緑釉陶器
	B地区SP35出土土器
巻頭図版12	C地区SD249出土土器
	C地区SH193出土土器

挿図目次

第1図	遺跡の位置	1
第2図	調査区と周辺の地形	2
第3図	宗佐遺跡・宗佐南遺跡の位置と周辺の遺跡	4
第4図	工事計画と調査区	8
第5図	調査区配置図	12
第6図	宗佐南遺跡A地区下層トレンチ平面図・断面図	79
第7図	宗佐南遺跡A・B地区の出土遺物	80
第8図	赤色顔料の測定箇所	82
第9図	赤色顔料の蛍光X線スペクトル	82
第9章第2節	図版1 宗佐遺跡出土の貝類	83
第9章第3節	図版1 宗佐遺跡の木材(1)	87
第9章第3節	図版2 宗佐遺跡の木材(2)	88
第9章第4節	図1 暦年較正年代グラフ(1)	92
第9章第4節	図2 暦年較正年代グラフ(2)	93
第9章第5節	図1 暦年較正年代グラフ	98
第9章第6節	図版1 花粉化石・プレバラーテ状況写真	101
第9章第6節	図版2 珪藻化石・プレバラーテ状況写真	104
第9章第6節	図1 プラント・オパール分析結果	106
第9章第6節	図版3 プラント・オパール写真	107
第9章第6節	図2 暦年較正年代図	110
第9章第7節	第1図 調査地区周辺の地形分類図	114
第9章第7節	第2図 調査地区付近における微地形の分布	116
第9章第7節	第3図 トレンチの位置と遺構	117
第9章第7節	第4図 D地区におけるトレンチの地質断面図	118
第9章第7節	第5図 C地区におけるトレンチの地質断面図	119
第9章第7節	第6図 E地区におけるトレンチ1の地質断面図	120
第9章第7節	第7図 E地区におけるトレンチ2の地質断面図	120
第9章第7節	第8図 B地区におけるトレンチ1の地質断面図	121
第9章第7節	第9図 B地区におけるトレンチ2・3の地質断面図	122
第9章第7節	第10図 A地区におけるトレンチ1・2の地質断面図	123
第10図	弥生時代の宗佐遺跡	128
第11図	掘立柱建物の比較	130
第12図	古代の宗佐遺跡	131
第13図	平瓦のタタキ目	132
第14図	古代の特殊遺物	133
第15図	中世の宗佐遺跡	135

表目次

第1表	宗佐遺跡・宗佐南遺跡調査一覧	7
第8章第2節	表1 宗佐遺跡出土の貝類	83
第8章第3節	表1 宗佐遺跡の樹種同定結果	85
第8章第4節	表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$, ^{14}C 年代 (Libby Age), pMC)	91
第8章第4節	表2 放射性炭素年代測定結果 (暦年校正用 ^{14}C 年代、校正年代) (1)	91
第8章第4節	表3 放射性炭素年代測定結果 (暦年校正用 ^{14}C 年代、校正年代) (2)	92
第8章第5節	表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$, ^{14}C 年代 (Libby Age), pMC)	96
第8章第5節	表2 放射性炭素年代測定結果 (暦年校正用 ^{14}C 年代、校正年代)	97
第8章第6節	表1 花粉分析結果	100
第8章第6節	表2 珪藻分析結果	103
第8章第6節	表3 プラント・オーバー分析結果	106
第8章第6節	表4 測定試料及び処理	109
第8章第6節	表5 測定結果	109
第2表	竪穴建物跡一覧	129

第1章 遺跡の位置と環境

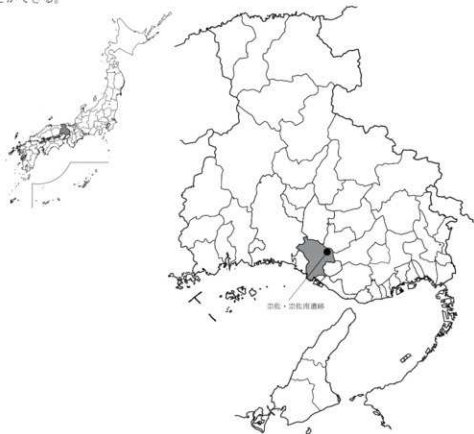
第1節 地理的環境

兵庫県下最大の河川である加古川は、丹波山塊の深部である栗鹿山に源を発し、山地帯を流れる上流部から北播磨地域を流下する中流域、そして流域に広い神積平野を形成しつつ流れる下流域から瀬戸内海に至る。流路延長は96km、流域面積は1,730km²を測る。また、丹波市氷上町水分かれ付近にも源流があるが、ここには日本海へ注ぐ由良川水系の源流もあって、最も標高の低い分水界として知られている。

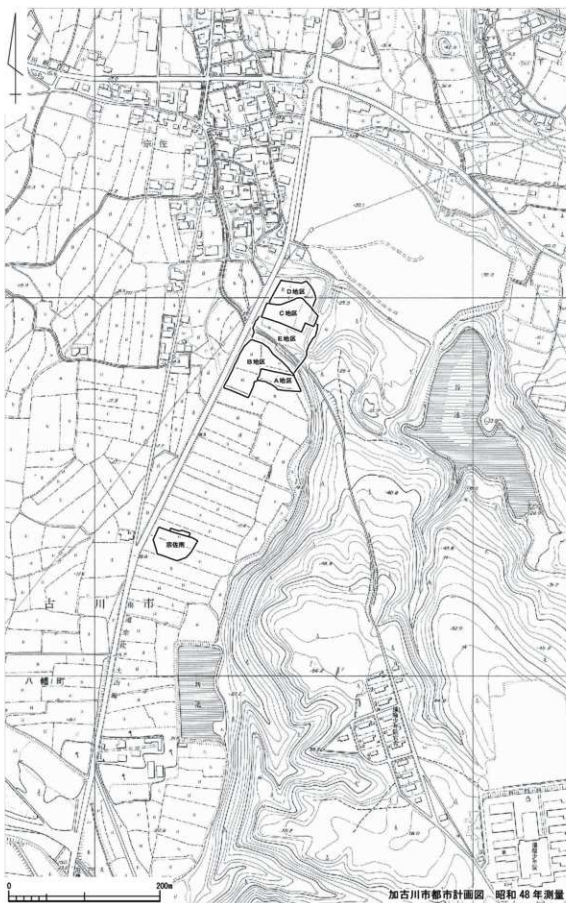
中流域と下流域との境界は、加古川市和小野市の市境付近にある。加古川と支流の美濃川の合流点北側では、東から正法寺山が、西から坊主山が加古川に迫っている。二つの山塊の間は幅わずか400m強で、あたかも門のような景観を見せており、これより南が下流域とされている。

宗佐遺跡は、加古川が下流域に入って間もない、加古川市八幡町宗佐に所在する。遺跡は加古川左岸の大阪層群からなる丘陵上、および丘陵を開析して形成された扇状地上に位置している¹。遺跡の最高所は標高約25mを測り、調査前は農地・竹林となっていた。また扇状地部分は棚田状の水田として開墾されている。丘陵縁辺部に刻まれた開析谷には、いくつもの溜池が築かれて、この地域独特の景観を作り出している。その一方で、開墾が困難な段丘崖には、コナラやアベマキを主体とする二次林が残されて、里山林として利用されてきた。

宗佐遺跡からは、西側（加古川方向）および南側への眺望が開けており、加古川左岸の神積平野を望むことができる。



第1図 遺跡の位置



第2図 調査区と周辺の地形

南西約1.5kmの丘陵上には、宗佐遺跡同様、東播磨道の建設に伴って調査された片山遺跡・皿辻遺跡が位置している。

第2節 歴史的環境

【後期旧石器時代】

東播磨地域は、後期旧石器時代遺跡についての知見は、これまでのところ多いとは言えない。『日本列島の旧石器時代遺跡』データベース（日本旧石器学会）によれば、明石市・加古川市・稲美町・播磨町の東播磨地域東部4市町では、81か所の後期旧石器時代遺跡が知られており、このうちナイフ形石器を出土した遺跡は49遺跡を数える。しかしそのほとんどは表面採集、ないしは原位置を遊離した資料であり、発掘調査によって安定した地層中から石器群が見いだされた例は、明石市西脇遺跡の1例のみである（稲原1996）。このほか加古川本・支流を遡った領域でも、河川に沿う段丘・丘陵上に多数の遺跡が知られている。

東播磨地域東部の丘陵・段丘上に立地する遺跡の多くでは、明確な瀬戸内技法の工程資料が認められないが、横長剥片剥離技術を基盤としたナイフ形石器を基盤とする資料が多く、それらは筆者が示した近畿地方における後期旧石器文化の第Ⅲ段階に位置づけられる（久保1994・2014）。

宗佐遺跡の直近では、美養川との合流点から加古川をやや遡った右岸に、勝手野遺跡がある。勝手野遺跡では、始良Tn火山灰層より下位から、筆者の編年による第Ⅰ段階前半期に位置づけられる可能性がある、台形石器を伴う小規模な石器群が出土している（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2002）。今回の発掘調査でも、また片山遺跡A・B地区からも、風化が強く進行したサヌカイトの二次加工のある剥片が出土していることから、周辺における後期旧石器時代人の活動があったものと推測される。

後期旧石器時代末～縄文時代草創期にあたる細石刃期の遺物が採集された遺跡は、本地域内で5遺跡が知られているが、資料数がわずかであり、今のところ詳細を検討できる状況ではない。

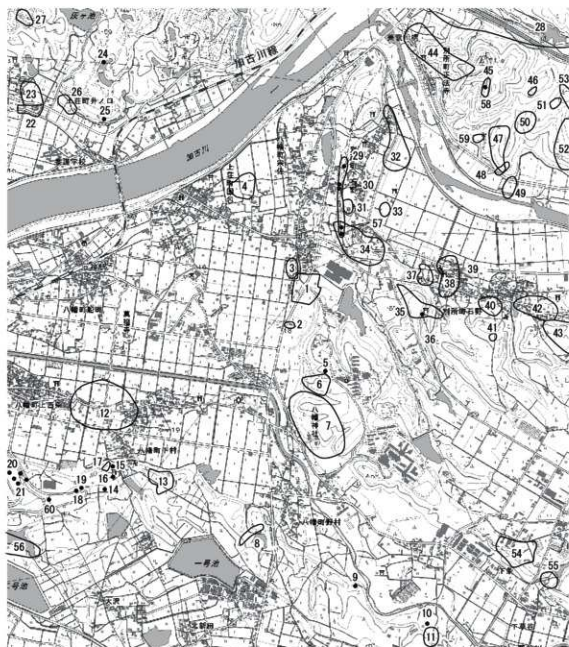
【縄文時代】

東播磨東部では、これまでのところ縄文時代の遺跡自体が希薄であり、全期間を通して不明な点が多い。片山遺跡・皿辻遺跡周辺においても、状況は同様であるが、隣接する北播磨南部～東播磨西部まで視野を広げて概観するならば、いくつかの遺跡を挙げるができる。

草創期 『日本列島の旧石器時代遺跡』データベース（日本旧石器学会）によれば、東播磨東部の4市町で、有茎尖頭器出土遺跡が7か所知られており、草創期のある段階に人類活動があったことを物語っている。しかしいずれも原位置を遊離した有茎尖頭器のみの出土であり、当該期の土器の出土例もない。本地域に限らず、近畿地方では有茎尖頭器を主体とした石器群の出土例は少なく、土器群との供伴例もわずかしかな。草創期の集落等の実態については不明の点が多く、今後の課題である。

早期～前期 宗佐遺跡周辺地域では、確実に縄文時代早期に属する遺跡は知られておらず、当該期の土器が出土した例もない。なお、加古川の最下流域に位置する高砂市域には、前期後半～晩期にわたる日笠山貝塚がある。

中期 この時期の遺跡も顕著なものはないが、加古川中流域にある、支流の万願寺川右岸に位置する加西市堀山遺跡で、石ヒ・大型剥片を副葬した集石墓が検出されており、埋土中より船元Ⅱ式土器が出土している。



- | | | |
|----------------|------------------|--------------------|
| 1 宗佐遺跡 | 21 天王山1・2号窯 | 41 石野谷奥遺跡 |
| 2 宗佐南遺跡 | 22 井ノ口城跡 | 42 石野三坂山散布地 |
| 3 宗佐構居跡 | 23 井ノ口古堡 | 43 石野1～12号墳 |
| 4 国包構居跡 | 24 井ノ口1号墳 | 44 正法寺1～17号墳 |
| 5 野村1～3号墳 | 25 井ノ口2号墳 | 45 正法寺山頂遺跡 |
| 6 野村構居跡 | 26 井ノ口遺跡 | 46 フルムシヨ神社遺跡 |
| 7 野村遺跡 | 27 八ツ塚1～5号墳 | 47 正法寺東尾根1～16号墳 |
| 8 野村古窯跡1～4号窯 | 28 樫山古墳群 | 48 正法寺塔跡 |
| 9 野新村1号墳 | 29 下石野5号墳(愛宕山古墳) | 49 正法寺山脇散布地 |
| 10 野新村古墳 | 30 下石野1・2号墳 | 50 フルムシヨ南西尾根1～18号墳 |
| 11 野新村古窯跡1～3号窯 | 31 下石野上畑遺跡 | 51 フルムシヨ1～3号墳 |
| 12 下村遺跡 | 32 下石野高田散布地 | 52 愛宕山1～14号墳 |
| 13 片山遺跡 | 33 下石野西角散布地 | 53 天王山1～5号墳 |
| 14 皿辻遺跡 | 34 下石野和田ノ上散布地 | 54 下条遺跡 |
| 15 大日山遺跡 | 35 王子山1～14号墳 | 55 下条第1遺跡 |
| 16 下村古墳 | 36 王子山神社跡 | 56 鑑池遺跡 |
| 17 前谷遺跡 | 37 下石野坂芝遺跡 | 57 下石野3・4号墳 |
| 18 東沢1号墳 | 38 石野田中散布地 | 58 正法寺銅剣出土推定地 |
| 19 望塚(盆塚) | 39 石野氏館跡 | 59 正法寺遺跡 |
| 20 天王山1～3号墳 | 40 石野寺山散布地 | 60 東沢中遺跡 |

第3図 宗佐遺跡・宗佐南遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)

後期 印南野台地が加古川に迫った位置にある宮山遺跡で、後期の敷石住居が検出されているほか、加古川市志方町の東中遺跡では元佐吉山式期の土器が出土している。また中流域に位置する小野市高田小山ノ下遺跡で、当該期の土器が出土している。

晩期 加古川右岸に位置する岸遺跡で、晩期後半の土器が弥生時代前期の土器とともに出土している。

【弥生時代】

前期 加古川流域の前期の遺跡は多いとは言えないが、縄文時代晩期の土器とともに弥生時代前期の土器が出土した遺跡として、先述の岸遺跡のほか、東神吉遺跡、砂部遺跡、溝ノ口遺跡、美乃利遺跡などが挙げられる。砂部遺跡では、当該期の焼成土坑、溝などが検出されており、美乃利遺跡では当該期の水田跡が検出されている。

中期 加古川下流域では、左岸を中心に坂元遺跡・溝ノ口遺跡・美乃利遺跡・大野遺跡など、中期の大規模な集落が成立する。このうち溝ノ口遺跡では、竪穴建物跡のほか、方形周溝墓、水田跡等がみつがっている。この他にも、西条廃寺下層遺跡、長畑遺跡、平山遺跡などが、中期後半に成立する。宗佐遺跡の直近では、宗佐遺跡南方の丘陵上に位置する片山遺跡A地区で、中期後半に属する方形周溝墓の可能性のある遺構が検出されている。

後期 後期には、坂元遺跡、北在家遺跡、砂部遺跡などに集落が成立する。また弥生時代終末期から古墳時代初頃にかけては、片山遺跡のC地区で竪穴建物跡が検出されている。

これらの他に宗佐遺跡近辺では、播磨堂遺跡、猫池遺跡、下村遺跡、大日山遺跡、野村遺跡などが弥生時代の遺跡として知られているが、遺跡の詳細については不明の点が多い。

後期後半には、加古川左岸の丘陵上に複数の墳丘墓が築造される。そのうち西条52号墓では、竪穴式石室（木蓋）内に内行花文鏡、鉄剣が副葬され、弥生土器が出土している。

青銅器の出土

二つの注目すべき事例がある。まず、加古川中流域と下流域を画する三木市正法寺山山頂の東側鞍部では、中細c類に分類される銅剣が出土している。また片山遺跡と同一丘陵上にある望塚では、大正年間に、扁平鉞式新段階の六区装束模文銅鐸が出土している（難波洋三ほか2015）。

【古墳時代】

前期古墳 加古川下流域では、前期に大型古墳が築造されるようになり、当該期には東播磨の中心的な地域であったと考えられる。宗佐遺跡の東を、南北に延びる丘陵の北端部、加古川と美養川の合流点から加古川中流域を見下ろす頂上部には、三木市内最大の前方後円墳、愛宕山古墳がある。全長91mを測り、前期後半の築造と考えられている。また日岡丘陵～西条にかけては、前方後円墳がまとまって築造されている。日岡丘陵の最高所に築かれた裾墓古墳（播磨稲目大郎姫命日岡陵に治定）は、全長85mを測る前方後円墳で、上述の愛宕山古墳と墳丘形態の類似性が指摘されている。この裾墓古墳を中心に、西大塚、南大塚、勅使塚の3基の前方後円墳、20基超の円墳が群集する。

中期古墳 中期には西条古墳群が成立する。西条古墳群の中核をなすのは、大型前方後円墳である行者塚古墳（全長100m）、帆立貝型の人塚古墳（61.5m）、尼塚古墳（51m）である。行者塚、人塚は5世紀前半、尼塚は5世紀中葉の築造とされている。最大規模をもつ行者塚古墳は、調査によって、4か所に造り出しをもつ形態であることが明らかにされたほか、円筒埴輪列、食物を模した多数の土製品が検出されている。主体部は調査されていないが、その上面までの調査によって、金銅製帯金具等の副葬物が出土しており、当該期における加古川下流域の王墓のあり方を明らかにする成果となっている。

また東沢1号墳では、調査によって初期須恵器が出土しており、中期初頭に属する古墳とされている。

後期古墳 古墳時代後期には、宗佐遺跡周辺の丘陵、段丘上に、古墳群が形成されるが、その内容について明らかにされているものは少ない。上述した前期の愛宕山古墳から続く丘陵上には、愛宕山古墳群、王子山古墳群、石野古墳群などが知られている。また、加古川・美嚢川合流点の北に位置する正法寺山およびその北側の檜山には、正法寺古墳群をはじめ、正法寺山東尾根古墳群、フルムシヨ南西尾根古墳群などが知られている。加古川対岸の平荘湖古墳群は、かつて100基を超える古墳群であったとされる。平荘湖古墳群内の池尻16号墳は、大型両袖式横穴式石室を持つ方墳である。

生産遺跡 野村古窯跡群、野新村窯跡群などが、古墳時代の窯跡として知られている。

【奈良時代以降】

生産遺跡 東播磨～北播磨地域では当該期には須恵器生産が活発化し、奈良時代以降、平安・鎌倉時代を通して多くの窯跡（群）が成立する。加古川市域北部を見ると、志方窯跡群、白沢窯跡群などが、さらに三木市の久留美跡部窯跡群などが山陽自動車道の建設に伴って調査され、奈良時代～平安時代の須恵器生産の状況が明らかにされている。さらには神戸市西区の神出窯跡群では、平安時代～鎌倉時代にわたる多数の窯跡が調査されており、これら東～北播磨地域の窯跡群出土資料は、当該期の須恵器編年の基礎資料となっている。

集落遺跡・寺院 須恵器生産という産業の発展に伴い、従来の農村的集落に加えて、窯業に係わる集団による集落も成立していったものと思われるが、これまでのところ飛鳥～奈良時代の集落に関する知見は乏しい。しかし加古川流域では奈良時代初頭以降、西条庵寺をはじめとする古代寺院の建立が進んでおり、生産力の増大とともに、集落の形成も進展したものと思われる。片山遺跡C地区で検出された掘立柱建物跡群は平安時代後期に属しており、丘陵地帯の開墾などとの関わりが深いものと思われる。

注

1 『兵庫の地質』（兵庫県土木地質図編纂委員会 1996）によれば、大阪層群上部聖層群の堆積面が高位段丘面であると結論づけている。

第2章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

今回実施した発掘調査は、兵庫県東播磨県民局加古川土木事務所が実施する、(主)加古川小野線道路改築事業(東播磨南北道北工区)に先立つものである。兵庫県教育委員会では、2016年度に、事業計画に基づいて、事業対象地(加古川市)の分布調査を実施した。この分布調査によって遺物が採集された地点のうち、111地点～114地点について、2016年度～2018年度に確認調査を実施した結果111地点(宗佐南遺跡)および113・114地点(宗佐遺跡)において遺構・遺物が検出された。

以上の経緯を受け、兵庫県東播磨県民局長より、兵庫県教育委員会に対して本発掘調査の依頼がなされ、これに基づいて2017年度～2019年度に宗佐遺跡A～E地区および宗佐南遺跡A・B地区の本発掘調査を実施した。

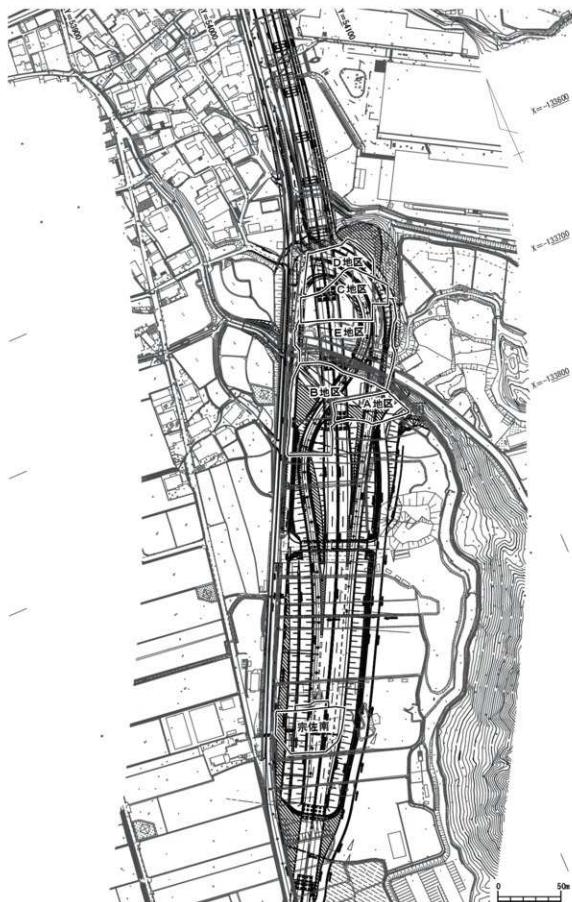
年度	遺跡名	調査番号	調査種別	調査期間	担当者	調査面積(m ²)
2016		2016012	分布調査	2016/4/14・5/27・6/3・6/16	山本誠・深江英憲 上田健太郎	126,000
2016		2016157	確認調査	2017/1/11～2017/2/1	別府洋二・久保弘幸	365
2017		2017058	確認調査	2017/4/27・2017/4/28	中川 渉	30
2018		2018007	確認調査	2018/4/10～2018/5/2	藤宮 正・垣内拓郎・ 西山昌孝・三好愛美・ 桑本愛実	102
2017	宗佐遺跡 A地区	2017063	本発掘調査	2017/4/10～2017/8/10	久保弘幸・新田宏子	1,038
2017	宗佐遺跡 B地区	2017093	本発掘調査	2017/6/30～2017/12/1	久保弘幸・新田宏子	3,110
2018	宗佐遺跡 C地区	2018005	本発掘調査	2018/4/10～2018/8/10	藤宮 正・垣内拓郎・ 西山昌孝・三好愛美・ 桑本愛実	1,329
2018	宗佐遺跡 D地区	2018036	本発掘調査	2018/9/13～2019/1/25	垣内拓郎・三好愛美	1,479
2019	宗佐遺跡 E地区	2019002	本発掘調査	2019/4/9～2019/8/8	垣内拓郎・野田操人・ 岸本一宏・松崎光伸	3,658
2018	宗佐南遺跡 A地区	2018006	本発掘調査	2018/5/22～2018/8/10	藤宮 正・垣内拓郎・ 三好愛美	1,624
2018	宗佐南遺跡 B地区	2018037	本発掘調査	2018/9/13～2019/1/25	垣内拓郎・三好愛美	126

第1表 宗佐遺跡・宗佐南遺跡調査一覧

第2節 調査の概要

1. 分布調査

2016年度の分布調査は、(主)加古川小野線道路改築事業の事業地126,000m²を対象としておこなわれた。分布調査は地表面の観察により実施した。分布調査の時点では、地表面で観察可能な遺構は見いだされなかったが、須恵器・土師器等の散布が認められた。



第4図 工事計画と調査区

【調査の体制】

2016年度 分布調査

調査主体 兵庫県教育委員会

分布調査担当者 兵庫県立考古博物館総務部埋蔵文化財課

山本 誠・深江英恵・上田健太郎

2. 確認調査

確認調査は、分布調査の成果を受けて、遺物が採集された111地点～113地点を対象とし、2m×2mを基本とする試掘坑35か所を設定して実施した。調査体制は以下のとおりである。

【調査の体制】

2016年度

調査主体 兵庫県教育委員会

確認調査担当者 兵庫県まちづくり技術センター 別府洋二・久保弘幸

2017年度

調査主体 兵庫県教育委員会

確認調査担当者 兵庫県まちづくり技術センター 中川 渉

2018年度

調査主体 兵庫県教育委員会

確認調査担当者 兵庫県まちづくり技術センター

篠宮 正・垣内拓郎・西山昌孝・三好愛美・乗本愛実

調査の結果、試掘坑のうち111地点（宗佐南遺跡）、113・114地点（宗佐遺跡）で遺構が検出された。また2018年度の確認調査は、宗佐遺跡C地区の北側（D地区）、および南側隣接地（E地区）の確認調査であり、いずれも遺構・遺物が検出されたことから、D地区・E地区と呼称して本発掘調査の運びとなった。

3. 本発掘調査

2017年度 宗佐遺跡A地区・B地区

【調査の体制】

調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当者 兵庫県まちづくり技術センター 久保弘幸・新田宏子

【成果の概要】

両地区ともに、上下2面の遺構面が検出された。A地区上層遺構面では、奈良時代～平安時代初頭の掘立柱建物跡2棟が検出された。また下層遺構面では、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物跡1棟のほか、同時期の土坑、溝等が検出された。B地区上層遺構面では、平安時代後期～鎌倉時代の柱穴が高密度で検出され、掘立柱建物跡8棟と櫓2条を復元したほか、多数の土坑、溝が検出された。下層遺構面では、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物跡4棟のほか、竪穴状遺構3基、多数の土坑・溝が検出された。

2018年度 宗佐遺跡C地区

【調査の体制】

調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当者 兵庫県まちづくり技術センター 篠宮 正・垣内拓郎・西山昌孝・三好愛美・乗本愛実

【成果の概要】

上下2面の遺構面が検出された。上層遺構面では、弥生時代後期以前の旧河道1条、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物跡4棟、溝・土坑等が検出されたほか、平安時代の溝1条、中世以降の掘立柱建物跡3棟、旧河道などを検出した。下層遺構面では、弥生時代後期以前の溝・旧河道が検出された。

2018年度 宗佐遺跡D地区

【調査の体制】

調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当者 兵庫県まちづくり技術センター 垣内拓郎・三好愛美

【成果の概要】

上下2面の遺構面が検出された。上層遺構面では、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物跡3棟が検出されたほか、平安時代後期の溝1条、中世の柱穴群、旧河道などを検出した。下層遺構面では、弥生時代末期以前の不明遺構が検出された。

2019年度 宗佐遺跡E地区

【調査の体制】

調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当者 兵庫県まちづくり技術センター 垣内拓郎・野田優人・岸本一宏・松崎光伸

【成果の概要】

上下2面の遺構面が検出された。上層遺構面では、平安時代後期～中世の掘立柱建物跡3棟、木棺墓1基、火葬跡2基、鍛冶遺構1基、溝2条が検出された。

2018年度 宗佐南遺跡A地区

【調査の体制】

調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当者 兵庫県まちづくり技術センター 篠宮 正・垣内拓郎・三好愛美

【成果の概要】

上下2面の遺構面が検出された。上層遺構面では、平安時代後期～中世の柱穴群が検出された。下層遺構面では水田面と畦畔3条が検出された。

2018年度 宗佐南遺跡B地区

【調査の体制】

調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当者 兵庫県まちづくり技術センター 垣内拓郎・三好愛美

【成果の概要】

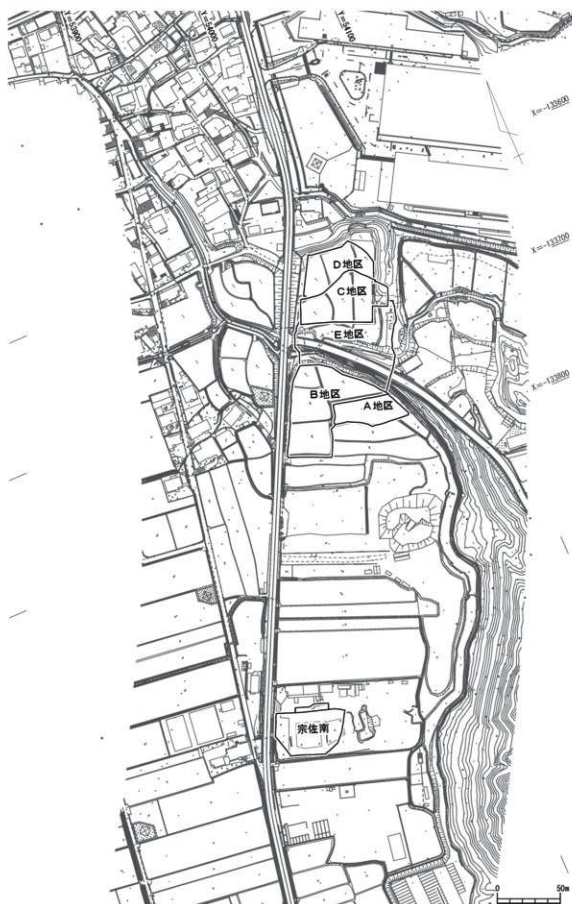
上下2面の遺構面が検出された。上層遺構面では、平安時代後期～中世の柱穴群が検出された。下層遺構面では水田面と、A地区から続く畦畔1条が検出された。

第3節 整理事業の概要

整理事業は、2021年度～2024年度に、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部において実施した。整理事業は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部整理保存課がこれを主管し、所属の職員と嘱託員が遺物図化～報告書編集を担当した。

本書に収録した遺物写真については、(株)地域文化財研究所、国際文化財株式会社に委託して撮影を実施したほか、自然科学的分析については、バリノ・サーヴェイ株式会社、(株)パレオ・ラボ、(株)加速器分析研究所、株式会社 古環境研究所に委託して実施し、その成果は本書中に収録している。また調査地および周辺における微地形の分析は、立命館大学の青木哲哉氏に現地調査と指導をいただき、本書第9章に玉稿を頂戴している。

なお、本報告書に収録した遺物、写真、図等については、すべて兵庫県立考古博物館に保管している。



第5図 調査区配置図

第3章 宗佐遺跡A地区

第1節 本発掘調査区の層序と遺構面

宗佐遺跡のA・B地区は、背後の段丘に形成された開析谷の開口部に形成された扇状地上に位置しており、調査区としては一体の範囲を占めている（図版1）。しかし発掘残土の搬出等、調査の手順的な都合上、A・B地区を区分して調査することとなった。調査はA地区から実施し、終了後にB地区の調査を実施した。

A・B地区が立地する扇状地は、北から南へ広がっており、標高は北側ほど高い。扇状地は、本来ならば緩やかな斜面をなしていたと思われるが、調査前はひな壇状に開墾されて耕地となっていた。A地区およびB地区の南半は扇状地末端に近いため、遺構面は比較的平坦であるが、B地区北半の遺構面は、南向きに下る緩やかな傾斜面をなしている。またA地区東には、段丘の裾が迫っていることから、遺構検出面は北側および東側が高く、南西側は緩やかな凹地となる。

本発掘調査にあたっては、まず調査区内での地層の堆積状況と層相を把握するため、重機による表土層の除去と平行して、調査区の壁面沿いに地層観察用のトレンチを掘削し、地層の堆積状況を把握しつつ遺構面の調査をおこなった。

A地区の層序（図版9～11 写真図版5～7）

A地区では現表土（水田耕土）下に、洪水砂礫層（北壁断面図2層）が広い範囲を覆う。その下位には近世～近代の耕土と思われる古土壌層があり（同3層・4層）、続く5層も耕土と思われる古土壌層（詳細な時期不明）が認められる。遺構面としては調査しなかったが、これらの古土壌層上面から掘り込まれた小規模な溝状、ないしは柱穴状の部分が認められたほか、河道ないしは水路と思われる部分も認められた。

上層遺構面として把握したのは、18層上面である。これを被覆する16層はシルト質砂礫層であるが、土壌化が認められ、律令期の遺物を包含する。18層は土壌化により暗褐色を呈するシルト質砂礫層で、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物を包含する。この下位の19層上面が、下層遺構面である。

堆積物が南側ほど厚くなり、より分層されるものの、基本的な堆積物の傾向は東西および南壁でも同様である。

第2節 遺構と遺物

1. 上層遺構面の遺構と遺物

（1）概要

律令期の掘立柱建物跡、土坑、溝、および平安時代後期～鎌倉時代の柱穴を検出した。遺構はA地区北半で密度が高く、南半では希薄となる。溝は扇状地の傾斜に沿って、北から南へと延びるが、自然為による形成と考えられるものが含まれている。

(2) 遺構と遺物

① 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は2棟が検出された。SB1とSB2は、東西棟、南北棟として直交に近い方位をもち、SB1の北辺とSB2の北辺は、ほぼ一致することから、この2棟はほぼ同時期に設けられた可能性が高いと考えられる。

SB1 (図版12 写真図版8～10)

A地区北半中央のやや東寄りに位置する、東西方向に長軸をもつ建物跡である。柱穴は隅丸方形から不整形形を呈し、最小の柱穴で一辺80cm、最大の柱穴では100cmを測る。検出面からの深さは、50cm～70cmである。建物の東西は南辺の柱根(痕)間で11.9m、南北は西辺の柱根(痕)間で5.7mである。長辺の柱間は2.36m～2.44m、短辺の柱間は1.80m～1.96mを測る。また長軸の方位は、 $W1.1^{\circ}$ Nであるが、短軸(西辺)での測定では、ほぼ座標北方向に一致する。

ほとんどの柱穴内に柱根が遺存しており、底面で柱の径を測定できたものでは、太さ34cm～38cm前後であった。従って建築時の柱の直径は、少なくとも40cm内外はあったものと推定できよう。樹種鑑定をおこなった柱材10点はいずれもヒノキ材であった(第9章第3節参照)。

【遺物】(図版125 写真図版193)

SP24より須恵器杯B蓋(1)が出土しているほか、SP10より土師器丸底甕の底部、SP27より須恵器杯A底部が出土している。

SB2 (図版13 写真図版9～11)

SB1の西に位置する、南北方向に長軸をもつ建物跡である。柱穴は隅丸方形から不整形形を呈し、最小の柱穴で一辺60cm、最大の柱穴では80cmを測る。検出面からの深さは、30cm～50cmである。建物の南北は東辺の柱根間で7.76m、東西は南辺の柱根間で4.10mである。長辺の柱間は1.80m～2.00m、短辺の柱間は1.90m～2.30mを測る。また長軸の方位は、 $N1.2^{\circ}$ Wである。SB2では、柱根は遺存していなかった。

【遺物】

SP16より須恵器杯身が出土しているほか、SP76より須恵器壺底部が、SP83より須恵器壺口縁部が出土している。

SD80 (図版13 写真図版11)

SB2の東辺に沿って、延長5.6m、最大幅40cmのSD80が検出されている。延長方位がSB2東辺によく一致していることから、雨落ち溝の可能性を考慮している。溝の横断形はやや急斜度～緩斜度の掘方をなし、底面は緩やかな凹面となる。溝内は小礫を含むシルト質砂で埋積されていた。細片化した遺物は多数出土しているが、図化記載できる遺物はない。

② 柱穴

上層遺構面で、既述の掘立柱建物跡以外に検出された柱穴は、散漫な分布を示しており、有意な組み合わせを認定できなかった。A地区北西部で、直径25cm～35cmの柱穴が2基一組となるように見える分布を見せる部分があるものの、明確な標と認定するには連続性が不十分と判断し、標とはしていない。ただしこれらの柱穴のうち、SP5では図示できない小片ではあるが、須恵器が出土している。

また下層遺構面から遊離したと思われる、弥生時代末～古墳時代初頭の土師器も、上層遺構面の柱穴内から散発的に出土している。

【遺物】(図版125 写真図版193)

SP103から須恵器杯B(6)が出土している。底部は回転ヘラ切りである。時期は8世紀後半である。SP126から須恵器甕(7)、SP216から土師器甕(8)が出土している。

SP79(図版14 写真図版11・12)

SB2の東に位置し、SD80を切っている。急斜度の掘方を見せ、底は楕底形の凹面をなす。穴内はシルト質細砂～粗砂で埋積されていた。堆積物の層理面が平坦であることから、人為埋積の可能性が考慮される。北西側にまとまって、須恵器杯A(3～5)が出土し、埋土から須恵器杯B蓋(2)が出土している。

【遺物】(図版125 写真図版193)

須恵器杯B蓋(2)・杯A(3～5)が出土している。2は天井部外面にヘラケズリ後ナデが施されている。3～5は底部が回転ヘラ切りである。時期は8世紀後半である。

③ 土坑

10基を記載する。土坑はA地区北半を中心に分布し、SK26のようにごく浅い土坑も含まれており、こうしたものについては、自然為による形成も考慮すべきであろう。なお計測値等は、後掲の付表1に示している。

SK13(図版14 写真図版12)

SB1の領域内北東部に位置する、不整楕円形の土坑である。垂直に近い急斜度の掘方をなし、土坑底は弱い凹凸はあるものの、概ね平坦面となる。土坑内は締まりの悪い砂で埋積されていたが、堆積物の層理面が水平に近いことから、人為埋積の可能性が考慮される。顕著な遺物は出土していない。

SK26(図版14 写真図版12)

SB1の領域内南西隅に位置する、不整四辺形の土坑である。断面形はごく浅い皿状を呈し、土坑内は灰黄色を呈するシルト質極細砂～細砂によって埋積されていた。この色調は、より上位に堆積した中世段階の古土壌層に酷似していることから、上位から掘り込まれた土坑の下底部を検出したものと推定している。土坑底には、不規則な形状の穴が複数認められた。顕著な遺物は出土していない。

SK40(図版14 写真図版12)

A地区西部の北壁寄りに位置する、不整円形の土坑である。東側がやや急斜度、西側は緩斜度の掘方をなし、土坑底は平坦に掘られている。土坑内は黄褐色の砂礫で埋積されていた。顕著な遺物は出土していない。

SK41(図版15 写真図版12)

SK40の南に隣接する、不整円形の土坑である。皿状の掘方をなし、土坑底は平坦に掘られている。土坑内はシルト質砂礫で埋積されていた。顕著な遺物は出土していない。

SK42(図版15 写真図版12)

A地区北壁際に位置しており、壁断面確認のための側溝掘削のため、北半を破壊してしまった。残存部は半円形をなしており、楕形の掘方をなす。土坑内は締まりの悪い砂礫で埋積されており、その状況から、自然為による形成の可能性が考慮される。顕著な遺物は出土していない。

SK44(図版15 写真図版12)

SB2北辺のSP84に切られる、不整楕円形の土坑である。比較的急斜度の掘方をなし、土坑底は緩やかに傾斜している。土坑内はシルト質の粗砂で埋積されており、劣化の著しい土師器の細片が出土している。

SK45 (図版15 写真図版13)

SK44の南に隣接する、不整形円形の土坑である。土坑は緩斜度の掘方をなし、土坑底は2段に掘られている。土坑内はシルト質の粗砂で埋積されており、劣化の著しい土師器の細片が出土している。顕著な遺物は出土していない。

SK52 (図版15 写真図版13)

SB1とSB2の間に位置する、不整形な土坑である。急斜度の掘方をなし、土坑底はほぼ平坦に掘られている。土坑内は砂へ砂礫で埋積されていた。顕著な遺物は出土していない。

SK53 (図版15 写真図版13)

SK52の南に隣接する、不整形円形の土坑である。西側はやや急斜度、東側は緩斜度の掘方をなし、土坑底は平坦に掘られている。土坑内は砂ないしは砂礫で埋積されていた。顕著な遺物は出土していない。

SK67 (図版15)

A地区南西部に位置する、不整形円形の土坑である。緩斜度の掘方をなし、土坑底には弱い凹凸が認められる。土坑内は黒褐色シルト質砂礫で埋積されていた。顕著な遺物は出土していない。

④ 溝

掘立柱建物跡の項で記載したSD80以外に、4条の溝が検出されている。

SD20 (図版7)

A地区中央部北壁際に位置する溝で、北-南へ延び、延長1.9m、最大幅50cmを測る。SB1のSP21に切られている。溝内にはぶい黄褐色の砂礫で埋積されていた。北壁断面のx層が、SD20に相当する。

SD39 (図版15 写真図版13)

A地区東部に位置する溝で、蛇行しつつ北-南の方位に延び、延長20m、最大幅1.4m前後を測る。掘方はやや不規則で、溝底は南側ほど標高を下げ、一部には段差が認められる。溝内は砂礫によって埋積されており、埋積後にSB1の柱穴SP11に切られている。位置、埋土の性状などから、B地区のSD15と同一遺構の可能性が高い。この判断が正しければ、SD39は、本来下層遺構面に帰属する可能性がある。

SD65 (図版7)

A地区南西部の南壁寄りに位置する溝で、北-南の方位に延び、延長2.5m、最大幅70cm前後を測る。溝底は緩やかな凹面をなす。

【遺物】 (図版125 写真図版193)

須恵器杯A (9) が出土している。底部は回転ヘラ切りである。

SD75 (図版7)

A地区中央部に位置し、SB1の中央付近を経由して、緩やかに蛇行しつつ北壁に至る、延長4.4m、最大幅30cm、深さ15cmを測る溝である。溝内は暗褐色シルト質砂で埋積されていた。北壁断面でも検出されているが、掘方の立ち上がりは鮮明ではない。

2. 下層遺構面の遺構と遺物

(1) 概要

弥生時代末～古墳時代初頭の堅穴建物跡、柱穴、土坑、溝を検出した。遺構はA地区北西～西部と南東部～東部で密度が高く、中央部～南部はやや希薄な領域となる。

(2) 遺構と遺物

① 堅穴建物跡

SH159 (図版17 写真図版14・15)

A地区東壁際位置する方形堅穴建物跡で、東端は調査区外に延びる。調査区内にある建物跡の西端が延長3.9mを測ることから、東壁外へは1m程度延びるものと思われる。遺構上部が削平を受けており、検出面から、深さわずかに8cm前後が遺存するのみであったが、南側および西側周壁溝の一部が遺存していた。調査にあたっては、建物跡の中心線を通る直交断面(A-A'・C-C')を設定し、遺構内の堆積状況を記録するとともに、断面で区画された北西部から右回りに、1区～4区と呼称して遺物の取り上げをおこなった。遺構内は、シルト質の砂ないしは砂礫で埋積されていたが、一部で貼床かと思われるシルト質の薄層が認められた(A-A'断面1層)。

SH159の床面からは、2基の柱穴と1基の土坑が検出されている。柱穴は直径25cm～35cmの不整形円形を呈し、深さは30cm前後を測る。柱穴中心間の距離は1.4mである。柱穴の位置からは、SH159の主柱穴が2本柱であったか4本柱であったかは断じ難い。

【遺物】(図版125 写真図版194)

SH159からの出土遺物は僅少であったが、3区床面の貼床層直下より弥生土器鉢(11)、埴土から弥生土器甕(10)が出土している。

SK262 (図版17)

SH159北端付近に位置する、不整形円形の土坑で、長径72cm、短径60cm、深さ15cmを測る。土坑は緩やかな碗底状の断面形を見せ、暗褐色シルト質砂礫で埋積されていた。

SD204・SD205 (図版16・17 写真図版15)

SH159の周囲には、SD204が円形にとりまくように巡る。SD204とSH159の関連は断定し難いが、SH159の東には段丘崖の裾が迫っていることから、背後からの雨水を制御する目的の溝であった可能性を考慮した。SH159に関連する遺構として記載するが、断定することは難しい。SD204の東側は調査区外へ延びており、当該部分の形状などが不明である点も、断定に至らない理由の一つである。

SD204は、調査区内で見える限りほぼ円形にめぐる溝で、直径は内法で10.7m、分岐部を除く延長は20m弱を測る。溝幅は東壁際で北側が55cm、南側が45cmである。溝幅は西側で広がっており、最大で1.2m前後を測る。北西側には、SD204とほぼ平行するSD205が、およそ4m延びた後にSD204と合流しているほか、この部分から3mほど、西向きに分岐する溝が断続する。また、南西側では幅50cm前後の溝が分岐して調査区外へ延びる。

2か所の合流・分岐部については、平面および断面で精査を行ったが、溝間の重複関係は認められず、同時期に存在した合流・分岐であったと判断した。

溝内はいずれもシルト質砂ないしはシルト質砂礫で埋積されており、弥生時代頃の小片化した土器が出土している。

なおSD204に囲まれた領域内には、SH159の他に、SK202・SD203があるが、これらについては、土坑、溝の項で記載する。

【遺物】(図版127 写真図版200)

SD204から弥生土器甕(56)・底部(57・58)・二重口縁壺(59)・鉢(60)、SD205から弥生土器高杯(61)が出土している。

② 柱穴

下層遺構面では多数の柱穴が検出されているが、掘立柱建物跡等の有意な関係性を見出すことはできなかった。柱穴は調査区西部に多く分布しており、ここから西および北へ続くB地区の下層遺構面と通底する分布状況を見せている。柱穴内から出土した遺物は多くないため、時期は不明である。上層面で検出した柱穴から弥生土器が出土している。

【遺物】(図版125 写真図版194)

SP92から弥生土器甕(12)、SP105から弥生土器甕(13)が出土している。

③ 土坑

土坑は13基を記載する。A地区内全域に散漫に分布するが、数基がある程度集まったように見える部分も見られる。なお計測値等は、後掲の付表1に示している。

SK132(図版18 写真図版16)

A地区西部に位置する、不整楕円形の土坑である。垂直に近い急斜度の掘方をなし、土坑底は平坦に掘られている。土坑内は多数の礫と、細片化した弥生土器を含む、砂ないしはシルトで埋積されていた。特に埋土1層と3層には顕著に礫が包含されており、人為埋積の可能性が考慮される。

SK133(図版18 写真図版16)

A地区西部に位置する、楕円形の土坑である。短軸の断面形は緩やかな楕円形を呈し、土坑内は礫を含む砂で埋積されており、その間に細片化した土器が包含されていた。なお土坑の北西肩付近を、SP263が切っている。

SK162(図版18)

A地区北東隅に位置する土坑で、北側を断面観察のための側溝で切れ、南側は上層SB1の柱穴に切られているため、元の形状、規模は不明である。遺存部から見ると、楕円形の土坑かと思われる。緩やかな楕円形の掘方をなし、土坑内は、礫と小片化した土器を多量に含む砂で埋積されていた。

【遺物】(図版125 写真図版194)

弥生土器甕(14・15)が出土している。

SK163(図版19 写真図版17)

A地区東部、SH159をとりまくSD204の北西に位置する、不整形の土坑である。断面形は緩やかな凹面をなし、土坑内は黄褐色の砂で埋積されていた。検出面～埋土上部で多数の遺物(16～19)が検出されており、廃棄土坑の可能性が考慮される。

【遺物】(図版125 写真図版194・195)

弥生土器鉢(16～19)が出土している。外反口縁鉢と直口鉢がある。

SK164(図版18 写真図版16)

A地区中央部北寄りに位置する長形の土坑で、東にはSK165が隣接する。土坑の横断形は緩やかな凹面をなし、小礫を多く含む暗褐色のシルト質砂で埋積されていた。埋土内には、細片化した土器が多く含まれていた。

SK165(図版19 写真図版19～22)

A地区中央部北寄りに位置する、不整隅丸長方形の土坑である。急斜度の掘方をなし、土坑底はわずかな凹面をなすものの、概ね平坦に掘られている。土坑内は細礫を多く含む砂で埋積されていたが、土坑下底付近から埋土中位にかけて、完形に近いものを含む多量の土器が出土したことから、これらを廃

棄した後に人為的に埋積されたものと判断される。

【遺物】(図版125・126 写真図版195～198)

弥生土器壺(20・21)・鉢(22・38・39)・甕(23～34)・底部(35～37)が出土している。20は二重口縁壺である。甕はすべて平底で、体部外面に平行タキが施されるものがほとんどである。口縁部はく字のものがほとんどで、わずかに口縁部端部を上方へつまみ上げるもの(23)がある。

SK201・201b(図版18 写真図版16・17)

A地区中央部南端に位置する土坑である。検出時には1基の土坑と考えていたが、上面を被覆する薄層を除去した段階で、2基の異なる遺構と判明した。このため本来与えていた遺構番号を用いて、201、201bと改称したものである。

いずれも浅い皿状の掘り込みを見せ、小礫を含む砂またはシルト質砂で埋積されていた。

SK202(図版18 写真図版17)

A地区東部、SD204に囲まれた領域内に位置する、瓢形の土坑である。急斜度の掘方と、弱い凹凸はあるものの比較的平坦な底面を見せる。土坑内は小礫を含むシルト質砂で埋積されていた。顕著な遺物は出土していない。

SK207(図版20 写真図版18)

A地区南東部に位置する大型の土坑で、最大径は1.5mを超、深さも40cmに達する。土坑は西側が急斜度の掘方をなし、東側は緩やかな掘り込みの後に急斜度となって段をなす。土坑内はシルト質砂で埋積されており、埋土下層には酸化鉄の集積と還元化が見られた。埋土中位付近に多数の遺物がまとまって出土したことから、土坑が半ば埋積された段階で、廃棄されたものと思われる。

【遺物】(図版126 写真図版198)

弥生土器甕(40～42)・鉢(43)・飯甕(44)が出土している。

SK208(図版20 写真図版17)

A地区南西部に位置する、不整形形の土坑である。東側はやや急斜度、西側は緩斜度の掘方をなし、土坑底には不規則な起伏が見られる。土坑内は多量の礫と土器類が混在する砂、ないしはシルトで埋積されており、層相から人為埋土の可能性が高いものと思われる。

【遺物】(図版127 写真図版199)

弥生土器底部(45)が出土している。

SK223(図版18 写真図版17)

A地区中央部に位置する、不整形四辺形の土坑である。比較的急斜度の掘方をなし、土坑底にはやや不規則な凹凸が認められる。土坑内は多くの礫と、細片化した土器を含む、シルト質の砂を主体とした堆積物で埋積されていた。

SK228(図版18)

A地区西部に位置する、長楕円形の土坑である。

【遺物】(図版127 写真図版199)

弥生土器底部(46)が出土している。体部内外面ともハケが施されている。

SK248(図版20)

A地区東部、SH159をとりまくSD204の北西に位置する、不整形円形の土坑である。緩やかな掘方をなすが、土坑底は中央部が柱穴状に1段下がる。土坑内は小礫とシルト質のブロックを多く含む砂で埋積されていた。

④ 溝

SH159に関連して記載したSD204・SD205を除く溝7条について記載する。

SD147・SD148・SD149 (図版21 写真図版23)

SD149は、A地区東壁際に位置し、東壁に沿って延びる溝で、延長20m、最大幅1.5m、深さ15cm～20cmを測る。緩斜度の掘方をなし、溝底は平坦ないしは緩やかな凹面をなしている。溝内は砂質シルト、ないしはシルト質砂礫で埋積されていた。SH159とSD204に切られていることから、これらの遺構群より前に形成されたことが理解される。またSD147に切られている。

SD147・SD148は、A地区北東部に位置しており、その北端部では合流しているが、重複関係は判然としなかった。SD148は延長4m、SD149は延長4.5mを測り、溝幅は最大で、それぞれ1.3m、1.1mを測る。いずれも緩斜度の掘方をなし、溝底は平坦ないしは緩やかな凹面をなしている。

【SD149出土の遺物】(図版127 写真図版199・200)

弥生土器甕 (47～53)・鉢 (54) が出土している。尖り気味の底部をもつもの (52) があることから庄内期とみられる。

SD203 (図版16・17)

A地区東部に位置し、SH159を切る溝である。調査区東壁から始まり、西南西方向へ約6.5m延びて、SD204に至る。SD204との重複部付近では、SD203の深さはわずか数cmであり重複関係は判然としなかったが、溝は緩斜度の掘方をなし、溝底は緩やかな凹面となっている。溝内は砂礫層で埋積されていた。

【遺物】(図版127 写真図版200)

弥生土器壺 (55) が出土している。二重口縁壺で、一次口縁製作時に、一度端面のある整った口縁を作っている。

SD221 (図版21 写真図版23)

A地区中央部の北壁に始まり、南西方向へ延びる溝で、延長12.4m、最大幅1.3mを測る。溝末端部は幅と深さを減じて収束するように終わる。溝内は黄褐色の砂礫で埋積されていた。その位置から、B地区のSD2247と同一の溝と考えられる。

【遺物】(図版127 写真図版200)

弥生土器甕 (62)・壺 (63) が出土している。63の小型の壺は丸底である。

SD240 (図版21 写真図版23)

SD240はA地区中央部に位置し、東西方向に延びる溝である。延長3.1m、最大幅26cm前後、深さは10cmに満たない小規模な溝である。SD176 (図版8) と平行し、溝幅・深さなども近似する。溝内はいずれも礫を多く含む粗砂で埋積されていた。

SD251 (図版21 写真図版23)

A地区南東部に位置し、南北に延びる溝である。延長4m、最大幅1m、深さは12cmを測る。緩やかな掘方～底面をなし、溝内はシルト質砂礫で埋積されていた。

【遺物】(図版127 写真図版200)

弥生土器甕 (64)・器台 (65) が出土している。64は体部外面に平行タキが施されている。65は小型器台で、庄内期の時期である。

3. 包含層出土の遺物

上層遺構面上の包含層から奈良・平安時代の土器、瓦、木製品、金属製品、下層遺構面上の包含層からは弥生時代の土器、石器が出土している。なお、142～144は確認グリッドから出土した土器である。

【遺物】 (図版128～130・168・175～177・188・189 写真図版201～207・280・288・289・297・298)

奈良・平安時代の土器には、須恵器杯A (69・70・71・143)・杯B (77・78)・杯B蓋 (72～74・82)・蓋 (75)・碗 (66・67・83)・甌 (79)・壺 (80)・底部 (76・81)・鉢 (142)、土師器底部 (68) などがある。69・70・71・143の杯Aは底部へラ切りである。77・78の杯Bは底部へラ切りである。78は内面の火ぶくれが激しい。72の杯B蓋は天井部外面がへラ切り後ナデである。75は環状つまみをもつ蓋状 (あるいは皿) の器形であるが、天井部外面側から穿孔されている。志方窯跡群の中谷4号窯ではつまみのない杯B蓋の天井部に4つ穿孔をうがつたものがあり、甌の蓋と推定されている。66の碗は底部へラ切りである。76の底部はケズリ出しの蛇の目高台で、畳付きの幅が狭く、高台の内側はわずかに削る程度である。京都系の緑釉素地の碗もしくは皿と考えられる。時期は10世紀中頃である。内面は平滑にすり減っており、表面のキズ内や胎土の空隙中に鮮やかな朱色の顔料が残っている。蛍光X線分析により顔料は水銀朱と判断される (第9章第1節)。朱墨硯として使用されたと考えられる。79の甌は底部に2孔以上の穿孔と輪高台をもつ。80の壺は肩部に注口をもつ。浄瓶もしくは多口瓶と考えられる。81は杯・皿などの底部と考えられる破片で、外面に「家」と読める墨書が認められる。82は杯B蓋と考えられる破片で、内面の表面が平滑で、墨痕が認められることから転用硯と考えられる。142は鉄鉢形の鉢で、外面にミガキが施されている。内面も丁寧にナデが施され、胎土も精良である。

弥生時代後期から庄内期にかけての土器には壺 (84～91)・甕 (92～104)・高杯 (105～108)・器台 (109～112)・鉢 (113～115・117)・ミニチュア土器 (118)・手焙形土器 (116)・底部 (119～137・144)・有孔鉢 (138～141) などがある。壺には二重口縁壺 (84)・広口壺 (86・87・90)・細頸壺 (91) などがある。85は壺もしくは器台の口縁部である。端部に鋸歯文・刺突文・円形浮文をもつ。甕は平行タタキの後ハケが施されているものが多い。口縁部は単純口縁が多いが、端面に擬凹線をもつもの (102) や口縁部をやや上につまみ出すもの (103・104) がある。高杯には有俊高杯 (105) がある。器台には小型器台 (109・110・112) がある。底部は平底であるが、尖底気味のもの (125・130) がある。有孔鉢は基本的に単孔であるが、138は径の小さい孔が6つ穿がたれている。

瓦は丸瓦 (T1～3)、平瓦 (T4) が出土している。T1・2の丸瓦は凸面に縄タタキ目が認められる。T4の平瓦は凸面が無文で、凹面にミガキが施されている。

石器には礫石 (S3・4)、台石 (S7)、砥石 (S8・9) がある。

木製品には板材 (W10～13) がある。板材の樹種はW10がトウヒ属、W11がヒノキ、W12がスギ、W13がマツ属である。

金属製品は鉄製品で、用途不明品 (M1) と釘 (M2) がある。

第3節 小結

(1) 上層遺構面

上層遺構面で検出された遺構群は、掘立柱建物跡2棟 (SB1・2) を中心としている。SB1の建物の規模が極めて大きいこと、東西棟、南北棟が企画的に配置されていることが特徴的である。建物跡からの出

土遺物は僅少であるが、SP24より出土した須恵器蓋からみるならば、8世紀の前半におさまるものと思われる。またSB2の東に近接するSP79でまとまって出土した須恵器杯も、この推定と大きな矛盾はない。建物跡が2棟のみであり、他に同時期、同規模の建物跡は、B地区では見いだせなかったことを考慮するならば、当該期遺構群の継続期間は短かったと推定される。

包含層からの出土遺物であるが、須恵器朱墨転用硯(76)、須恵器墨書土器「家」(81)、須恵器浄瓶(80)、須恵器鉄鉢(142)が出土しているのが注目される。

(2) 下層遺構面

下層遺構面で検出された遺構群は、弥生時代後期後半の遺構群である。竪穴建物跡はSH159のわずか1棟であるが、B地区のSH1022と並んで、宗佐遺跡全体の中で、最も低い位置に設けられたものの一つである。建物跡を取り巻くように見えるSD204については、SH159への水の流入を抑止する機能を持つものか、あるいはSH159とは全く無関係に成立したものか、確定的な判断は下せなかった。ただしSD204から西および南へ溝が分岐することから、SD204内から外部への排水が意図されていた可能性は高い。

調査区西部のSD221は北西方向から蛇行して流れる溝の流末である。南側の低地部への用水路と考えられる。

下層遺構面では、複数の土坑からある程度のまとまりをもって遺物の出土が見られた。その中でもSK165の遺物量が突出している。SK165の遺物は、完形に近いものが多数を占めており、細片化したものは少ない。またほとんどの遺物は、土坑下底に接する位置で出土している。こうしたことから、遺物の埋没は、ごく短い期間に生じており、遺物群は一括性が高いと判断される。

第4章 宗佐遺跡B地区

第1節 本発掘調査区の層序と遺構面

宗佐遺跡のB地区は、背後の段丘に形成された開析谷の開口部に形成された扇状地上に位置しており、A地区の北側でより高位を占める領域から、A地区の西側で同標高の領域までを包摂しており（図版3）、全体としては嘴を東に向けた鳥の頭部を彷彿とさせる形状となっている。

B地区の地形を詳細にみるならば、調査区北西部が最も高く、東および南に向けて緩やかに傾斜して標高が下がる。下層遺構面上面の標高で比較すると、調査区北西部では18.6m前後であるのに対し、B地区東端では18.0m前後である。調査区南側に向けては段差を含めて標高を下げ、B地区南端では、下層面相当の砂礫層上面は、標高16.8m前後と約1.8m低くなっている。

本発掘調査にあたっては、まず調査区内での地層の堆積状況と層相を把握するため、重機による表土層の除去と平行して、調査区の壁面沿いに地層観察用のトレンチを掘削し、地層の堆積状況を把握しつつ遺構面の調査をおこなった。

B地区の層序（図版30～32 写真図版34・35）

B地区北壁では、現表土（水田耕土）下に比較的細粒の砂層ないしはシルト質砂層が認められる（北壁断面図2層・3層）。これらは現代の表土（耕土）下を広く覆う洪水砂である。西壁断面では、3層直下に、近世前後の旧河道と考えられる深い凹部が認められる（4層・5層）。この河道堆積物を切って近代の井戸が掘り込まれている。以下には1枚ないし2枚の洪水砂層を挟み、中世ないしはそれ以降の耕土と思われる古土壌層が認められる（北壁8層～10層・12層）ほか、畦畔と考えられる部分（同17層）が認められる。

扇状地の砂礫層が標高を下げる北壁東部では、この下位に平安時代～鎌倉時代と推定される古土壌層が認められ（15層）、その直下が上層遺構検出面となり、北壁西部ではやや標高の高い18層が当該期の古土壌層となる。

北壁東部では29層が弥生時代末～古墳時代初頭の古土壌層であり、その直下が下層遺構検出面となる。また西部ではこの時期の古土壌層は薄く、断続的にしか認められない（20層）。西壁断面では扇状地を構成する礫層が50cm～60cmの段差をもって標高を下げる。

上層・下層の遺構面に伴う古土壌層は、いずれも砂礫層が土壌化したものであり、調査区内で人の活動がおこなわれていた期間にも、断続的に活発な砂礫の供給＝洪水による堆積が生じていたことが理解される。

第2節 遺構と遺物

1. 上層遺構面の遺構と遺物

（1）概要

平安時代後期～鎌倉時代の孤立柱建物跡、樺、柱穴、土坑、溝を検出したほか、少ないながら、律令期に属すると思われる遺構、遺物が検出されている。前項で述べたB地区の形状から、調査区を3分し

てみると、北部からA地区の西に隣接する中央部には高い密度で遺構が分布しているが、調査区南端から約20m北を東西に延びる溝（SD1056）を境界として、南側1/3では畦畔を除くとほとんど遺構が認められない。こうした遺構分布の状況から、律令期～中世にかかる期間には、SD1056以南は低湿な水田領域として機能していたものと考えられる。

なお、標高の高いB地区北部では古土壌層の堆積がごく薄いため、一部では上層遺構検出時に、すでに下層遺構面に達してしまった部分もあった。そのような部分で検出された、本来は下層遺構面に属する遺構については、①上層遺構面の遺構と連続する遺構番号を与え、②本報告書においては下層遺構面の遺構として記載をおこなっている。

（2）遺構

① 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、B地区北部の柱穴が多数分布する範囲で8棟を識別した（図版26）。東西棟、南北棟いずれも見られるが、配置関係を企画性を見出すことは困難である。

SB1（図版33 写真図版36・37）

南北方向に長軸をもつ、2間×4間の総柱式建物跡で、長軸10.0m、短軸4.7m、柱間は、長軸・短軸方向ともに2.2m～2.6mを測る。建物の方位はN5.5° Eである。柱穴は径36cm～50cm、検出面からの深さは、最大で40cmを測る。総柱式の建物であるが、北側のSP497とSP700の間は柱穴が欠く。SB1に伴うものとは断定はし難いが、この柱穴を欠く位置付近に、建物跡と長軸方向が揃う、長方形の土坑SK584が位置している。

【遺物】（図版131 写真図版208）

145は土師器小皿である。底部がヘラ切り後粗いナデと見られる。SP100から出土した。146は土師器杯である。底部は回転系切りである。SP55から出土した。147は台付碗である。大きく開く高い高台をもつ。SP497から出土した。

SK584（図版40 写真図版45）

SB1およびSB2の領域内に位置する、長方形の土坑である。ごく浅い皿状の掘方をなし、土坑内はシルト質の砂で埋積されており、拳大以下の多数の礫が検出された。顕著な遺物は出土しておらず、掘立柱建物跡に伴うか否かも不明であるが、その可能性を考慮して本項で記載しておく。

SB2（図版33 写真図版36・37）

SB1と重複する位置にある建物跡で、調査区内では2間×3間までを確認した。確認部分の規模は、長軸6.6m、短軸5.2m、柱間は長軸方向で2m～2.4m、短軸方向で2.5m～2.9mを測る。建物の方位はN5° Eである。柱穴は径36cm～52cmを測る。検出面からの深さは、最大で50cmである。

SB1との前後関係は、柱穴に直接重複がないため不明である。なおSB1の項で記述したSK584は、SB2のSP70とSP577の間に位置しており、長軸方向も揃っていることから、SB2に伴う可能性も捨象できない。

【遺物】（図版131・176 写真図版208・289）

148は土師器底部で、回転系切りとみられる。SP70から出土した。149は羽口である。先端部の破片で、外面が融解している。SP70から出土した。150は須恵器碗である。底部は回転系切りである。SP59から出土した。151は土師器碗である。表面は摩滅している。SP577から出土した。152は須恵器碗である。SP89から出土した。153は須恵器碗である。体部外面に1条の沈線を描く。SP79から出土した。

SB6は礫石である。SP70から出土した。

SB3 (図版34 写真図版36・38・39)

南北方向に長軸をもつ、2間×4間の総柱式建物跡で、長軸9.3m、短軸4.9m、柱間は、長軸方向で2.0m～2.7m、短軸方向で2.4m～2.6mを測る。建物の方位はN3° Eである。柱穴は径30cm～65cm、検出面からの深さは、最大で50cmを測る。柱穴の中には、全体平面図上で見ると、長径が80cmを超えるものも見られるが(SP769)、これは柱穴内に大型の礫を据えて、柱の基部を支えるような造作が行われていたためである(図版34)。SB4と重複しており、柱穴の重複関係からSB3が新しいと判断している。

なお建物跡北東部に位置するSP162では、上面付近の掘方内より、土師器碗等が出土している。またSB3の北半に、焼土SX164が位置している。SB3との関係性は断定できないが、本項で記載しておく。

【遺物】(図版131 写真図版208)

154は土師器小皿である。底部は回転系切りである。SP769から出土した。155は土師器小皿である。底部は回転系切りである。SP188から出土した。156・157は須恵器碗である。見込みに凹みが認められ、底部は回転系切りである。SP162から出土した。

SX164 (図版44 写真図版49)

直径45cmを測る、円形の焼土である。断面で見ると、深さ10cmほどの掘り込みが見られた。埋土上部(図1層)は大部分が黒褐色を呈し、一部は赤変している。1層は、被熱によって全体が硬化している。また2層は、被熱により暗赤褐色に変色している。

SB4 (図版34 写真図版36・38)

SB3と重複する、2間×2間の総柱式建物跡で、柱穴の重複関係からSB4が古く位置づけられる。2間×2間の規格であるが、5.0m×4.7mと、南北軸の方がやや長い。建物の方位はN3° Eである。柱間は長軸方向で2.3m～2.6m、短軸方向で2.2m～2.8mを測る。柱穴は径34cm～60cmを測る。検出面からの深さは、最大で50cmである。

SB5 (図版35 写真図版38～40)

B地区北部の中央寄りに位置する、東西方向に長軸をもつ1間×3間の建物跡である。建物は長軸7.2m、短軸2.6mを測り、柱間は長軸方向で2.2m～2.5m、短軸方向で2.3m～2.6mを測る。建物の方位はN92.5° Wである。柱穴は径28cm～64cm、検出面からの深さは最大で40cmである。

SB5の柱穴は、他の上層遺構検出面より5cm～7cmほど高い位置で検出された。これは建物跡の北側柱穴列周辺に、貼床面と推定される薄い粘土層が遺存しており、この面上で柱穴が検出されたためである(この貼床状粘土層の範囲をSX803と呼称した)。粘土層の被覆は、北側柱穴列より北側と、北東端柱穴より東側まで広がっていたことから、SB5の規模は、本来もう少し大きかった可能性がある。

なお建物跡北東端にはSK801が位置しており、一般的な柱穴は識別できなかったが、土坑底で礫石状の大型礫が、平坦面を上にして検出されたことから、これが北東端の柱穴と解釈した。礫は溶結凝灰岩の角礫で、緩やかに反った形状を見せるが、礫の平板な面が水平を保つように、礫の下底に大型の河川礫を挟んで設置されていた(写真図版40)。

【遺物】(図版131・189 写真図版208・298)

159は土師器碗である。底部は回転系切りである。SP802から出土した。

M7は鉄釘である。SP256から出土した。

SB6 (図版35 写真図版41)

B地区北部中央付近の北寄りに位置する、南北方向に長軸をもつ1間×3間の建物跡である。建物は長軸6.1m、短軸2.7mを測り、柱間は長軸方向で1.4m～2.5m、短軸方向で2.3m～2.7mを測る。建物

の方位はN1° Wである。柱穴は径30cm～62cm、検出面からの深さは最大で50cmである。SB5同様、建物規模としては小さく、さらに広がる可能性が考慮されるが、調査時の検討ではこれ以上の規模と認識できなかったため、そのままで記載をおこなう。

【遺物】(図版131 写真図版208)

158は須恵器碗である。見込みはわずかに凹む。底部は回転糸切りである。SP636から出土した。

SB7 (図版36 写真図版41)

B地区北部中央付近の南寄りに位置する、東西方向に長軸をもつ1間×2間の建物跡である。建物は長軸5.0m、短軸2.6mを測り、柱間は長軸方向で2.3m～2.5m、短軸方向で2.3m前後を測る。建物の方位はN75.5° Wである。柱穴は径70cm～110cm、検出面からの深さは最大で50cmである。柱穴規模が大型であることから、周辺で精査を繰り返したが、同様の柱穴を検出することができなかった。柱穴規模と建物規模が均衡を欠く印象は否めない。

SB8 (図版36 写真図版42)

B地区北部中央付近、SB5の南に隣接する、南北方向に長軸をもつ2間×4間の総柱式建物跡である。建物は長軸9.2m、短軸5.0mを測り、柱間は長軸方向で2.05m～2.4m、短軸方向で2.3m～2.6mを測る。建物の方位はN4.5° Eである。柱穴は径40cm～60cm、検出面からの深さは最大で50cmである。北東部に位置するSP259のみは、浅い皿状を呈しており、長径105cmを測る楕円形を呈する。SP851の柱底部下底で、完形の須恵器碗が、直立に近い斜位で出土している。

【遺物】(図版131・178 写真図版208・290)

160はSP261、161・167はSP851、162はSP986、163・164・166はSP846、165はSP1119から出土した。160～163は土師器小皿である。161～163は底部が回転糸切りである。160は表面が摩滅している。164は土師器杯である。底部は回転糸切りである。165は土師器碗である。表面は摩滅している。166・167は須恵器碗である。底部は回転糸切りである。166は見込みの凹みがわずかである。167は見込みは凹み、体部外面に1条の沈線を巡らす。

S12は用途不明の石製品である。長細い板状の石材で、両側面が研磨されている。SP883から出土した。

② 櫓

B地区北部東半で、2条を櫓として識別した。

SA1 (図版37)

南北方向に延びる櫓で、延長11.1m、柱間は2.6m～2.9mを測る。櫓の方位はN5° Eである。SB1・SB2の領域と重複することから、これらの掘立柱建物跡との間には時期差が介在する。櫓を構成する柱穴のうち、SP35には、多数の土器が埋置されていた。

【遺物】(図版131 写真図版209)

168は土師器小皿である。底部は回転糸切りと見られる。181は須恵器碗である。見込みに凹みがみられず、底部は回転糸切りである。

SP35 (図版37 写真図版42)

径33cmを測る円形の柱穴である。柱穴内には、図化可能なものだけでも12個体の土器類が、折り重なるように埋置されており、3面にわたって図化しつつ、取り上げをおこなった。ほぼ完形を保った土師器托が主体を占め、これに完形の土師器皿1点、欠損が見られる須恵器碗2点を含む。埋置の順序、埋置方法には特段の法則性は看取できず、正位置、水平を保つものもあれば、他の土器の間に押し込むよ

うに直立ないしは斜位で埋置されたものも認められた。

【遺物】(図版131 写真図版208・209)

169は土師器小皿である。底部は回転ヘラ切りである。170～178は土師器托である。底部は回転系切りである。179・180は須恵器碗である。底部は回転系切りである。180は見込みに凹みの痕跡を残し、179は残さない。

SA2 (図版37)

B地区北半東端付近に位置する櫓で、南北方向に3間の延びを見せる。櫓の方位はN7° Wである。南端はA地区との境界に近いが、A地区ではSA2の延長部は見出されていない。延長8.4m、柱間2.8m～3.1mを測る。

③ 柱穴

B地区では1000基を超える柱穴が検出されているが、掘立柱建物跡を復元できたのはごく一部であった。これは、砂礫層が頻りに堆積、土壌化する本遺跡のような地形環境下においては、遺構の識別自体が困難を伴うことも要因の一つであろう。

建物跡に属さない柱穴で、注目すべき遺物の出土をみたものについて以下に記載するが、その他の柱穴で遺物のみを記載するものについては、柱穴位置図にその位置を示している(図版27・29)。

SP64 (図版38 写真図版49)

B地区北部の東寄りに位置する柱穴である。柱底部の最上部に、破砕された須恵器捏鉢が直立位で埋置されていた。

【遺物】(図版132 写真図版209)

182は須恵器捏鉢である。口縁端部外縁をやや外につまみ出す。回転系切り後ナデが施されている。内面に使用による磨り減りはほとんど認められない。

SP403 (図版38 写真図版49)

B地区北部に位置する柱穴である。柱底部の最上部に、体部の1/2弱を欠損した土師器碗が、斜位で埋置されていた。

【遺物】(図版132 写真図版209)

189は土師器碗である。底部は回転ヘラ切りである。

SP494 (図版38 写真図版49)

B地区北部に位置する柱穴である。柱穴の最上部に、柱を取り巻くように拳大の礫が置かれており、その間に挟まるような状態で、土師器皿、土師器甕が出土している。

【遺物】(図版132・170 写真図版210・282)

197は土師器小皿である。底部は回転系切りである。198は土師器甕である。体部外面に平行タキが施されている。

T28は平瓦である。焼成は軟質で表面は摩滅している。

SP543 (図版38 写真図版49)

B地区北部に位置する柱穴である。柱穴の最上部掘方内に、柱を片側から支えるように拳大の礫が置かれており、同じ面の柱痕内で、須恵器甕の破砕片が出土している。

SP2245 (図版38 写真図版49)

B地区北部西寄りにおいて、下層遺構面で検出された柱穴であるが、出土遺物から上層遺構面に属すると判断した。柱底部上位に、口縁部を欠く土師器甕が正立位で埋置されていた。

【遺物】(図版132 写真図版211)

222は土師器壺である。小型の壺で、底部は回転糸切りである。

【その他の柱穴の遺物】(図版132・189 写真図版209～211・298)

183は土師器杯である。SP86から出土した。184は土師器底部で、回転糸切りである。SP117から出土した。185は土師器托である。底部は回転糸切りである。SP145から出土した。186は土師器小皿である。底部は回転糸切りである。SP209から出土した。187は土師器小皿である。表面は摩滅している。SP259から出土した。188は須恵器碗である。底部は回転糸切りである。SP254から出土した。190は須恵器碗である。底部は回転糸切りである。見込みに凹みの痕跡を残す。SP407から出土した。191は須恵器杯Aである。底部は回転ヘラ切りである。SP429から出土した。192・193はSP442から出土した。192は須恵器小皿である。底部は回転糸切りである。193は須恵器碗である。見込みは凹み、底部は回転糸切りである。194は須恵器碗である。見込みは凹み、底部は回転糸切りである。SP457から出土した。195は須恵器碗である。SP482から出土した。196は土師器小皿である。表面は摩滅している。SP489から出土した。199は須恵器壺である。輪高台をもち、底部は静止糸切りである。SP569から出土した。200は土師器底部で、回転糸切りである。SP600から出土した。201・202はSP764から出土した土師器小皿である。底部は回転糸切りである。203は須恵器小皿である。SP765から出土した。204・205はSP800から出土した土師器底部である。表面は摩滅している。205は高い輪高台をもつ。206は土師器小皿である。底部は回転糸切りである。SP827から出土した。207は須恵器碗である。SP832から出土した。208は須恵器碗である。見込みは深く凹み、底部は回転糸切りである。SP862から出土した。209は須恵器底部である。底部は円板作りである。鉢の底部と見られる。SP867から出土した。210は土師器小皿である。底部は回転糸切りである。SP901から出土した。211は土師器小皿である。表面は摩滅している。SP907から出土した。212は須恵器碗である。底部はヘラ切り後ナデと思われる。SP921から出土した。213は須恵器鉢である。口縁端部を鋭く外方へつまみ出す。胎土が精良である。SP933から出土した。214は須恵器杯Aである。底部は回転ヘラ切りである。SP973から出土した。215は土師器小皿である。底部は回転糸切りである。SP985から出土した。216は土師器壺である。長細い砲弾形で、口縁部はわずかに縮まる。器壁が厚い。真鍮壺の可能性が考えられる。SP991から出土した。217は土師器碗である。底部は回転糸切りである。SP1134から出土した。218は土師器底部である。高い輪高台をもつ。内面に炭素が吸着していることから、黒色土器の可能性がある。SP2006から出土した。219は土師器碗である。底部は回転糸切りである。内面に炭素が吸着しているが、器形的には黒色土器とは考えにくい。SP2018から出土した。220は土師器羽釜である。直立する口縁の端部直下に鐙を巡らす。SP2044から出土した。221は土師器小皿である。底部は回転糸切りである。SP2108から出土した。223は須恵器杯Aである。底部は回転ヘラ切りである。SP2250から出土した。

MSは刃部がナゲ閘の有頭平根三角式鉄鏃である。棘状閘である。SP984から出土した。

MS・M10は鉄釘である。MSはSP798、M10はSP764から出土した。

④ 土坑

B地区上層遺構面では、多数の土坑が検出されているが、以下では32基を記載する。位置については、位置図に示し(図版27)、規模については後掲の付表1に一括して示している。

SK94・SK95 (図版38 写真図版43)

SB1・SB2とSB3との間に挟まれた領域に位置する、不整形ないしは不整楕円形の土坑である。ともに緩斜度の掘方をなす。土坑底は、SK94では碗底状を呈し、SK95では概ね平坦に掘られている。土坑内は砂

ないしはシルト質の砂で埋積されていた。SK94・SK95双方から平高台をもつ須恵器碗の小片が出土している。

【SK94の遺物】(図版189 写真図版298)

M9は鉄釘である。

SK243 (図版39 写真図版43)

B地区中央付近に位置する、不整形な土坑である。東側をSD216に切られているため、元の形状は不明であるが、遺存する部分には不整形な形状を示している。緩斜度の掘方をなし、土坑底は概ね平坦に掘られている。図示可能な遺物は出土していない。

SK312 (図版27)

B地区北部に位置する、円形の土坑である。

【遺物】(図版133 写真図版212)

224は須恵器杯Aである。

SK340 (図版39 写真図版43)

B地区中央部の東寄りに位置する、楕円形の土坑である。西側が緩斜度、東側がやや急斜度の掘方をなし、東西方向にはすり鉢状の断面形を呈する。土坑内はシルト質の砂で埋積されていた。顕著な遺物は出土していない。

SK341 (図版39 写真図版43)

B地区中央部の東寄りに位置する、不整形楕円形の土坑である。緩やかな掘方をなし、土坑底には不規則な凹凸が見られる。皿状の断面形を呈する。土坑内はシルト質の砂で埋積されていた。図示可能な遺物は出土していない。

SK367 (図版39 写真図版44)

B地区中央部に位置する、長楕円形の土坑である。掘方は船底状を呈し、土坑底は緩やかな凹面となす。土坑内は礫を多く含むシルト質砂で埋積されていた。図示可能な遺物は出土していない。

SK385 (図版39 写真図版44)

B地区北西隅に位置する、不整形楕円形の土坑である。土坑は浅い皿状の掘方をなし、土坑底には不規則な凹凸が認められる。土坑内は、径1cm以下の炭化物片を多く含む、シルト質の砂で埋積されていた。土師器高台付碗の小片が出土しているほか、古墳時代の須恵器壺体部、弥生土器壺口縁部の小片などが出土しているが、図示できるものはない。

SK400 (図版116 写真図版44)

B地区北西隅に位置する、土坑としたが北半はE地区SD19に接続することから、詳細はE地区SD19の項目で紹介する。遺構は緩やかな掘方をなし、底は凹面となる。遺構内は、拳大以下の礫を多く含む砂で埋積されていた。灰軸陶器碗(902)が出土したほか、土師器および須恵器碗の小片が出土している。

SX404・SK936 (図版40 写真図版44)

B地区中央部に位置する、ともに不整形な土坑で、SX404がSK936を切っている。調査時の判断で、404はその他の遺構(SX)として分類したが、その後の調査によりSK936と類同の遺構と判断したため、本項で記載する。

この2基の土坑が重複する南側は、中世以降の開墾によって段差が作られており、両土坑ともに段差によって南半が破壊されている。遺構検出面を仔細に観察すると、SX404・SK936周辺では検出面が緩やかな凹部をなしており、これらの土坑はその奥部中央に掘られていることがわかる。

SX404は緩やかながら不規則な掘方をなし、土坑底にも不規則な凹凸が見られる。SK936はやや急斜度の掘方をなし、土坑底は平坦に掘られている。土坑内はいずれも礫を多量に含むシルト質砂で埋積されており、特にSX404では、ボルダー級の礫まで含まれていた。

SK936より、平底の土師器碗、平高台をもつ須恵器碗が出土している。SX404からは底部糸切の須恵器皿、同碗、須恵器鉢、同長頸壺などが出土している。重複関係も踏まえて、ともに平安時代後半以降の成立と判断できる。

【SK936の遺物】(図版133 写真図版212)

231は土師器底部で、回転糸切りである。232・233は須恵器碗である。底部は回転糸切りである。232は底部が突出し、見込みは固まない。233は見込みに凹みの痕跡を残す。

【SX404の遺物】(図版133・168・169・179 写真図版213・214・280・281・291)

251は須恵器小皿で、底部は回転糸切りである。252・253は須恵器碗である。253は見込みに凹みが認められず、底部は回転糸切りである。254は須恵器壺底部で、回転糸切りである。255は須恵器捏鉢である。口縁部は上方に拡張する。底部は回転糸切りである。内面は使用によりすり減っている。256は須恵器淨瓶である。やや肩の張る体部で、肩部に注孔の剝離痕が残る。接合部には不整方向のキザミ目が入れている。

T11・18は平瓦で、凸面のタタキ目はT11が横長斜格子(H2類)である。T18は細い縄タタキ目(H8類)である。

S16は砥石である。表面と左側面が使用されている。

SK424 (図版39 写真図版44)

B地区北西隅に位置する不整形な土坑で、中央を柱穴SP879に切られている。土坑は緩やかな碗底状の掘方をなし、土坑底は凹面となる。土坑内は、礫を多く含む砂ないしはシルト質砂で埋積されていた。須恵器杯B底部、同蓋が出土している。

【遺物】(図版133 写真図版212)

225は須恵器杯B蓋である。226・227は須恵器杯Bである。226は底部回転ヘラ切りで、227は底部回転ヘラ切り後ナデが施されている。

SK501 (図版39 写真図版44)

B地区北東部に位置する、不整形円形の土坑である。緩やかな碗底状の掘方をなし、土坑内は小礫を多く含むシルト質砂で埋積されていた。図示可能な遺物は出土していない。

SK550 (図版40 写真図版44)

B地区北半中央部付近に位置する、不整形丸四辺形の土坑である。またSK550の西には、SB3、SB4が隣接する。土坑はやや急斜度の掘方をなし、土坑底は2段に掘り込まれている。下底面は緩やかな凹面となる。土坑内は拳大以下の礫を多く含む砂ないしはシルト質砂で埋積されていた。須恵器の高台付碗が出土している。

【遺物】(図版133 写真図版212)

228は須恵器台付碗である。高い輪高台をもち、底部は回転糸切りである。体部外面に段状の沈線が巡らされているようである。

SK576 (図版40 写真図版45)

B地区北半東部に位置する、不整形丸四辺形の土坑である。ごく浅い皿状の掘方をなし、土坑底は不規則な凹凸を見せつつも、概ね平坦に掘られている。土坑内はシルト質の砂で埋積されていた。図示可能な遺物は出土していない。

SK590 (図版41 写真図版45)

B地区北半東部の北壁際に位置する土坑で、北側が壁面の地層観察用トレンチで切られているため、元の形状は不明である。遺存部分は椀底状の掘方をなしている。土坑内はシルト質の砂で埋積されている。顕著な遺物は出土していない。

SK622 (図版41 写真図版45)

B地区中央部西側に位置する、円形の土坑である。緩やかな掘方をなし、土坑底は概ね平坦に掘られている。また土坑底で柱穴1基(SP1085)が検出された。土坑内は強い暗褐色の砂礫で埋積されていた。顕著な遺物は出土していない。

SK738 (図版41 写真図版45)

B地区中央部に位置する、不整形形の土坑である。椀底状の掘方をなし、土坑底は緩やかな凹面となる。土坑内は砂礫ないしはシルト質砂で埋積されていた。顕著な遺物は出土していない。

SK909 (図版41 写真図版46)

B地区北西部に位置する、不整形な土坑である。土坑西側をSP950に切られている。緩斜度の掘方をなし、土坑底は緩やかな凹面を呈する。土坑内は礫を多く含むシルト質砂および砂礫層で埋積されていた。平安時代後期以降の須恵器碗が出土している。

【遺物】 (図版133 写真図版212)

229は須恵器碗である。230は須恵器底部で、回転糸切りである。

SK1006 (図版41 写真図版46)

B地区中央部に位置する、不整形な土坑である。ごく浅い皿状の掘方をなし、土坑底には緩やかな凹凸が見られる。土坑内は礫混じりのシルト質砂で埋積されていた。顕著な遺物は出土していない。

SK1027 (図版41 写真図版47)

B地区中央部に位置する土坑で、長形の土坑である。不規則な掘方をなしており、図示したように偏った逆三角形の断面形を示す部分、椀底状の断面形を示す部分が見られる。土坑内はシルト質砂礫で埋積されていた。顕著な遺物は出土していない。

SK1031 (図版41 写真図版46)

B地区中央部西壁際に位置する土坑で、西側を壁面の地層観察用トレンチに切られているため、本来の形状は不明である。横断面は逆台形状を呈し、土坑底は平坦に掘られている。土坑内はシルト質砂礫で埋積されていた。顕著な遺物は出土していない。

SK1040 (図版41 写真図版47)

B地区中央部に位置する不整形形の土坑で、南西側をSP1039に切られている。皿状の掘方をなし、土坑底には不規則な凹凸が見られる。土坑内はシルト質砂礫で埋積されていた。顕著な遺物は出土していない。

SK1089 (図版41 写真図版47)

B地区北半東部の南壁際、A地区との境界に位置する土坑である。南側はA地区へ延びるが、A地区の上層遺構面では捉えられていないことから、A地区北壁に沿って掘削した、壁断面観察のための側溝によって破壊してしまった可能性がある。A地区北壁断面図中央付近の、n層、o層がSK1089に相当する可能性が高いことから、上層遺構面を含めても大過ないだろう。緩やかな掘方をなし、土坑底は平坦に掘られている。土坑内はシルト混じりの砂礫で埋積されていた。図示可能な遺物は出土していない。

SK1090 (図版42 写真図版47)

B地区北部東半に位置する、大型の土坑である。不整形な土坑で、埋土上面からSP38とSP511が切る。全体に緩斜度ではあるが不規則な掘方をなしており、中央部から南西部にかけて、やや急斜度に1段掘り下げられている。土坑最下底面は比較的平坦に掘られている。土坑内はシルト質砂ないしはシルト質砂礫で埋積されていた。土坑内より須恵器杯Bが出土しているが、他に高台付土師器碗小片、須恵器壺底部破片などが出土していることから、平安時代後半以降に属すると思われる。

【遺物】(図版133 写真図版212)

234は須恵器杯Bである。

SK1127 (図版42 写真図版47)

B地区中央部東寄りに位置する、不整形な土坑である。全体に緩斜度の掘方をなし、土坑底には緩やかな凹凸が見られる。土坑内はシルト混じりの砂で埋積されていた。図示可能な遺物は出土していない。

SK1129 (図版42 写真図版47)

B地区北部中央に位置する、不整形な土坑である。全体に緩斜度の掘方をなし、土坑底には不規則に緩やかな凹凸が見られる。土坑内は細礫を多く含むシルト質の砂で埋積されていた。埋土中より、底部系切りの土師器杯が出土している。

【遺物】(図版133 写真図版212)

235は土師器杯である。底部は回転系切りである。

SK2281 (図版44 写真図版64)

B地区北部に位置する土坑で、一端を攪乱に破壊されている。遺存部分の形状からは、本来、不整形の土坑であったと思われる。土坑内の最下層(3層)には、焼土ブロックと炭化物を多量に含む細砂が堆積しており、人為的堆積の可能性が考慮される。3層上面には多量の炭化物が認められる。この上位には礫を含むシルト(2層)、礫を含む砂(1層)が堆積しており、この2層は自然堆積と判断している。図示可能な遺物は出土していない。出土した炭化物1点についてAMS測定を実施し、7世紀中葉から8世紀後葉の時期である可能性が高いという結果がえられた(第9章第4節)。

SK2302・SD2304 (図版43 写真図版66)

B地区中央部に位置する、いずれも長形の土坑で、下層遺構面で検出されたものであるが、出土遺物から上層の遺構と判断した。調査時の判断で2302は土坑、2304は溝と分類したが、その後類同の遺構と判断したため、本項で記載する。

SK2302の横断面は緩やかな碗底形を呈し、土坑底には緩やかな凹凸が認められる。土坑内は砂質シルトおよびシルト質砂礫で埋積されていた。またSD2304の横断面は浅い皿状を呈し、土坑底には凹凸が認められる。土坑内はシルト質砂で埋積されていた。SK2302より平高台をもつ土師器碗が出土している。SD2304からは平高台をもつ須恵器碗のほか細片化した土師器片が多数出土している。

【SK2302の遺物】(図版133・168 写真図版212・280)

236・237は土師器碗である。底部は回転系切りである。

T10は丸瓦である。

【SD2304の遺物】(図版133 写真図版213)

249は須恵器碗である。底部は回転系切りである。

SK2307 (図版43 写真図版67)

B地区北部中央に位置する、下層遺構面で検出されたが、遺物から上層遺構面に伴うと判断される。

不整楕円形とも呼べるような形状をなし、断面形は歪な碗底状を呈する。やはり土坑埋土中より、多数の礫と土器類が出土した。土師器、須恵器の碗のほか、瓦が出土している。埋土から出土した炭化物1点についてAMS測定を実施し、11世紀中葉から13世紀前葉の時期である可能性が高いという結果がえられた(第9章第4節)。

SK2307の北半は攪乱によって切られており、一見すると別の遺構に見えるが、仔細に見るならば、攪乱の下底付近にも土器が断続して出土していることから(写真図版65)、本来は一体の土坑であり、中間部を攪乱によって削平されたために、分断されたものと判断している。

【SK2307の遺物】(図版133・170 写真図版213・282)

238・239は土師器杯である。底部は回転糸切りである。240・241は須恵器碗である。底部は回転糸切りで、見込みに凹みの痕跡を残す。242は白磁皿で、VI類とみられる。

T24・26は平瓦である。T24の凸面のタタキ目は太い縄目(H9類)である。T26は凸面が無文(H10類)で板ナデが施されている。

SK2310 (図版44)

B地区中央部東寄りに位置する、不整楕円形の土坑である。ごく浅い皿状の掘方をなし、土坑底はわずかに凹面となる。土坑内は礫を多く含むシルト質砂で埋積されていた。下層遺構面に至って検出され、顕著な遺物も見られなかったため、当該面に伴う遺構と考えていたが、調査の最終段階で検出されたSD2322と一体の遺構である可能性が生じたため、本項で記載しておく。

⑤ 溝

溝はその性状から、①ほぼ南北方向に直線的に伸びるもの、②蛇行分岐しつつ伸びるもの、③旧河道と考えられるものの三者に大別できる。①は幅50cm以内、延長5m以内の小規模なものである。②はB地区北部東端で見られるもので、砂礫で埋積されている。洪水の浸食で形成されたと推定されるものである。③はB地区西壁沿いに伸びた後、東へ流下してB地区を横断する。

本項では、出土遺物を掲載したものを中心に記載をおこなうが、土坑の項で関連遺構としてすでに記載したものは、本項では記載しない。

SD81 (図版45 写真図版48)

B地区北部東半に位置する溝である。北北西-南南東に伸び、延長2.8m、最大幅30cmを測る。溝内は砂礫で埋積されていた。延長方位、埋土の性状などから、A地区上層遺構面で調査したSD20と同一の溝と考えられる。図示できない資料であるが、中世段階の須恵器碗小片が出土している。

SD216 (図版39 写真図版43)

B地区北部中央付近に位置する溝で、北北東-南南西に伸び、延長3.3m、幅55cm、深さは5cmを測る。溝内は礫を多く含み、炭化物粒を少量含む砂で埋積されていた。図示可能な遺物は出土していない。

SD466 (図版46 写真図版48)

B地区西壁際に位置する、旧河道と思われる溝である。B地区西壁が、ちょうどSD466を縦断する形になっているため、溝幅などは明らかではない。B地区内では上層遺構面以下を調査したが、西壁断面の精査によれば、SD466は上層遺構面より上位、現表土直下から掘り込まれていることから、中世後半期以降に属するものと思われる。溝内は砂、砂礫を主体とした堆積物で埋積されていた。須恵器杯B底部、同壺口縁部が出土しているが、上述の理由により、二次的な流入遺物と考えてよさそう。

【遺物】(図版133 写真図版213)

243は須恵器杯Bである。244は須恵器甕である。

SD621 (図版45 写真図版48)

B地区北部東寄りに位置する溝で、北-南方向へ延びる。延長は2.5m、幅25cmを測る。溝内は礫を多く含む砂で埋積されていた。図示可能な遺物は出土していない。

SD753 (図版45 写真図版48)

B地区北部東寄りに位置する溝で、北-南方向へ延びる。延長は4.0m、幅40cmを測る。溝内は礫、炭化物を多く含む砂で埋積されていた。土師器杯底部が出土している。

SD1016 (図版46 写真図版46)

B地区北部中央に位置する溝で、北-南へ延び、延長3.12m、最大幅90cmを測る。溝上面より2基の柱穴 (SP413・SP919) が切っている。溝内は黒褐色の砂礫で埋積されていた。弥生土器底部、須恵器碗、緑釉陶器底部等が出土している。

【遺物】(図版133 写真図版213)

245は弥生土器底部である。246は緑釉陶器底部である。高台は低い貼り付けで、底部は回転糸切りである。見込みに圈線が入られている。胎土の色調は橙色で、釉は濃緑色である。時期は10世紀後半である。247は須恵器碗である。外面に沈線が巡らされている。

SD1056 (図版46 写真図版48)

B地区中央部南寄りに位置し、B地区を東西に横断する。西壁断面の精査から、SD466と同一溝の可能性が考慮されるが、断定には至らなかった。溝内はシルト質砂および砂礫で埋積されており、堆積物の締まりはわるい。中世後半期の土師器鍋が出土している。

【遺物】(図版133 写真図版213)

248は土師器鍋である。断面三角の低い鐔をもつ。体部外面に平行タタキが施される。時期は15世紀前半である。

SD2322 (図版27 写真図版66)

B地区北部中央に位置する。上層遺構面、下層遺構面の調査では検出できず、検出面以下の地質確認のために掘削したトレンチの壁面で検出された。そのため形状、規模は不明である。断面はやや急斜度の掘方をなし、底は緩やかな凹面を呈する。遺構内は砂〜砂礫で埋積されていた。埋土中より須恵器碗が出土している。

トレンチ調査終了後、再度おこなった平面的調査で、SK2310方向へ浅く溝状に続く可能性が考慮されたが、重機等の影響のため遺構面が損傷しており、確度の高い結論は得られていない。もしSD2322がSK2310の延長部とすれば、遺物の出土が全く決定できなかったSK2310の時期も中世段階ということになるが、確定的な判断を下し得なかった。

【遺物】(図版133 写真図版213)

250は須恵器碗である。

⑥ その他の遺構

B地区のSD1056以南 (B地区南部) では、これまで記載してきた柱穴、土坑、溝などの遺構は認められず、平坦なシルト層が広がっていた。平坦面には2段の段差が認められ、この段差に沿って畦畔と思われる隆起が認められたことから、SD1056以南は水田面にあたと判断している。

水田面の時期は確定が困難であるが、水田土壌中より出土した少数の遺物から、中世段階ないしはそれ以降と思われる。

2. 下層遺構面の遺構と遺物

(1) 概要

弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物跡、土坑、溝を検出した。遺構はB地区北部～中部に分布しており、北西部で密度が高い。中部では遺構は希薄となり、南部には当該期の遺構は分布しないことから、下層遺構面では調査範囲から除外した。

(2) 遺構

① 竪穴建物跡

竪穴建物跡は、SH1022、SH2098、SH2141、SH2157の4棟を検出した。調査時には、他に長方形の輪郭を検出した3か所をSH2094、SH2131、SH2156と呼称して調査したが、調査の結果竪穴建物ではないことが明らかとなったため、これらは竪穴状遺構として別に記載する。

竪穴建物跡は3棟が高位のB地区北西部に隣接して位置し、SH1022のみが低位部に位置している。

SH1022 (図版47・48 写真図版50・51)

他の3棟から離れた、B地区中部の低位部に位置する建物跡で、建物南辺中央付近のSK2223と、南東角のSK2222という、2基の土坑を切っている。平面形は一辺3.7m～3.8mの隅丸方形を呈し、床面からは、2基の柱穴と2基の土坑が検出されている。柱穴は直径15cm・30cmの不整円形を呈し、深さは27cm・35cmを測る。柱穴中心間の距離は約1.4mである。また慎重な断面の精査でも、周壁溝は検出できなかった。建物のほぼ中央にSK2224が、その東に並ぶようにSK2199が位置しており、いずれもSH1022の床面に伴うものと考えられる。

SH1022は砂および砂礫で自然埋積されており、深さは最大で40cmを測る。床面上には炭化物を多く含む堆積物(図3・4層)が広がっており、炭化した板材も認められた(図版48)ことから、焼失建物の可能性も考慮される。これらの炭化物のうち1点についてAMS測定を実施し、2世紀前葉から3世紀前葉である可能性が高いという結果がえられた(第9章第4節)。建物跡南西隅の建物壁直下で、弥生土器鉢(258)と高杯(259)が並んで出土している(図版48・写真図版51)。

SH1022については、床面より上位の地山から極度の湧水があり、床面の精査もおぼつかない状況であったため、まず竪穴床面外周に排水溝を掘削し、断面観察用畦畔に沿って十字方向に排水溝を掘削せざるを得なかった。このため断面観察用畦畔下に位置した2基の土坑については、その南半を排水溝で破壊してしまい調査できなかった。調査上やむを得ずおこなった措置であったが、そのために一部の遺構について不完全な記録に終わったことについては、不適切の誹りにも甘んずるものである。

【遺物】(図版134 写真図版214)

257は弥生土器底部である。底径は小さく、底面に木葉痕が付着している。体部外面は平行タタキ、体部内面はヘラミガキが施されている。258は弥生土器鉢である。内外面ともナデ(あるいはヘラミガキ)が施されている。259は弥生土器高杯である。杯部が有縁で、外面の調整はヘラミガキと見られる。

SK2199 (図版47)

SH1022の中央東寄りに位置する、ほぼ円形の土坑である。急斜度の掘方をなし、土坑底は緩やかな凹面となる。土坑内はシルト質の砂礫で埋積されていた。図示可能な遺物は出土していない。

SK2224 (図版47)

SH1022の中心部に位置する土坑で、平面形は不整楕円形と思われる。やや急斜度の掘方をなし、土坑は西側で一段深く掘られているが、土坑底は概ね平坦に掘られている。土坑内は土器片と礫を含む細砂

および極細砂で埋積されていたが（図6・7層）、特に6層には多量の炭化物が含まれていた。

SK2222（図版48 写真図版51）

SH1022に伴う遺構ではないが、本項で記載する。SH1022南東角に位置し、堅穴建物跡に切られる土坑である。遺存部分から見れば、楕円形ないしは円形の土坑であろう。楕底状の掘方をなし、土坑底中央には小さな凹部が認められる。土坑内は小礫を多量に含むシルト混砂で埋積されていた。図示可能な遺物は出土していない。

SK2223（図版48 写真図版51）

SH1022に伴う遺構ではないが、本項で記載する。SH1022南辺の中央よりやや西に位置する。遺存部分から見れば、楕円形ないしは円形の土坑の可能性が想起される。土坑は楕底状の掘方をなし、土坑底は緩やかな凹面となる。土坑内は礫を含む砂によって埋積されていた。図示可能な遺物は出土していない。

SH2098（図版49 写真図版52・55・57）

B地区北西部に位置する、多角形と考えられる堅穴建物跡である。SH2141、SH2157に極めて近接しており、前者との最小距離は40cm、後者との最小距離は55cmしかない。北側に張出部が設けられているが、突出部を除く最大径は8.6m、最小径は8.0mと、やや歪な形状を呈する。深さは、検出面から最大で40cmを測る。突出部の幅は2.1m、奥行きは1.1mを測る。南西側の幅5.8mを除く西～北～東側に、最大幅1.2m、高さ15cmほどの高床部が設けられている。

堅穴内はシルト質砂礫、あるいは礫混砂で自然埋積されており、これに伴う掘方の浸食もあったと考えられる。綿密な精査を実施し、最終的にその形状を確定するに至らなかったが、全体の印象としては、突出部方向に一角をもつ六角形の可能性があると考えている。なお床面上には礫を少量しか含まないシルト質細砂～中砂の薄層（最大厚7cm）が均質に広がっており、床面の敷き均しと推定している。

床面中心には、浅い土坑SK2184が設けられている。SH2098も湧水が多く、床面を維持することも困難であったため、断面観察用畦畔に沿って排水溝を掘削したことから、SK2184の南東側は失われている。

主柱穴は、床面で検出されたSP2181・2182・2185・2190・2186・2196等に可能性があると思われるが、いずれを選択するにせよ、6本柱とするには柱間が合わない。柱穴の規模は、直径30cm～45cmを測る。また床面東側では柱穴が検出できなかったことで、建物の平面形そのものが判断できなかった。

【遺物】（図版134・189 写真図版214・215・298）

260は弥生土器高杯である。有稜高杯の口縁部と思われる。261は弥生土器鉢である。口縁部は外反し、端部を上につまみ上げる。262は弥生土器広口壺である。板状の縁部部に櫛波状文と竹管文を押した円形浮文をもち、縁部上縁に爪型刺突を入れる。263～265は弥生土器底部である。266・267は弥生土器有孔鉢である。266は体部上半に平行タタキ、体部下半にハケ目、内面にヘラケズリが施されている。

M4は有茎鵝挾三角形の鉄鏝である。板状で薄い。M5は鉄鏝である。直刃で中ほどから先端に向かって幅が狭くなる。基部は折り曲げられている。

SK2184（図版49 写真図版57）

SH2098の中央土坑である。遺存部分から見れば、本来の形状は楕円形であったろうか。浅い皿状の掘方をなし、土坑内は炭の微粒子を含むシルト質極細砂で埋積されていた。図示可能な遺物は出土していない。

SH2141（図版50 写真図版52～54・56）

B地区北西部に位置する、隅丸方形の堅穴建物跡である。四辺は中央が緩やかに膨らむ形状をなして

いるが、北辺では歪な膨らみが看取される。これは建物跡北側が後背の段丘裾に近接し、そこから流下する水に浸食された可能性がある。SH2141の埋土上面からは、自然によって形成されたと思われる、SK389が浸食していることも、その傍証となるだろう。

北辺を除くと、SH2141は一边8.2mと、隅丸正方形に近い規格で構築されている。検出面からの深さは、最大40cmを測る。床面外周には、不連続な状況で周壁溝が巡る。主柱穴は4本（SP2192・SP2193・SP2212・SP2216）で、柱穴の中心間距離は、3.6m～3.8mを測る。柱穴の規模は直径42cm～60cm、深さは44cm～60cmを測る。また建物跡床面中心より、やや南にずれてSK2194が位置している。

【遺物】(図版134・189 写真図版215・298)

268・269は弥生土器高杯である。268は杯部が碗形で、口縁部外面を段状にくぼませている。269は脚部で、四方に円形透かしが入れられている。270は弥生土器鼓形器台である。271～273は弥生土器鉢である。274～276は弥生土器底部である。276は底径がきわめて小さい。277・278は混入した遺物と考えられる。277は須恵器鉢Aである。底部は回転ヘラ切りである。278は土師器甕である。

M3は腸袂柳葉式の鉄鏝である。有稜で厚みをもつ。

SK2194 (図版50 写真図版54)

浅い皿状の掘方をなす、SH2141の中央土坑である。土坑内は炭化物の微粒子を多量に含む、シルト質極細砂～細砂で埋積されていた。

SH2157 (図版51 写真図版52・58・59)

B地区北西部に位置する3棟の堅穴建物跡中で、最も南側に位置する。四辺が直線をなす、隅丸方形の建物跡で、一边は6.0m～6.2mを測ることから、ほぼ正方形と考えてよからう。堅穴内は砂礫層で埋積されていたが、床面全域に、厚さ5cm前後の細砂を主体とした層が認められ、床面上の人為的敷き均し層と考えられる。検出面からの深さは、最大で36cmを測る。

堅穴建物の主柱穴は4基（SP2279・SP2293・SP2319・SP2320）である。柱穴の規模は、直径36cm～42cm、深さ16cm～40cmを測る。また床面上には、建物に伴って設けられた土坑は検出されなかった。床面外周には、周壁溝が全周する。

SH2157の北東隅、南東隅および南辺西寄りの位置には、大型の柱穴が検出されているが、いずれも堅穴を切るものである。このうちSP2255では、平安時代中期前後と思われる、須恵器碗の底部が出土している。

【遺物】(図版134 写真図版215・216)

279・280・283は床面から出土した。279は弥生土器二重口縁壺である。体部外面にごくわずかに化粧土が認められる。280は弥生土器壺である。底部は高く突出する。281・283は弥生土器底部である。283は尖り気味の丸底である。282は弥生土器鉢である。体部外面に平行タキが施されている。284は弥生土器脚部である。285～288は混入の遺物と考えられる。285は須恵器碗である。底部は回転系切りである。286～288は土師器底部である。286・287は高い輪高台をもつ。288は高い平高台をもち、底部は回転系切りとみられる。

② 堅穴状遺構

下層遺構面の検出作業時に、大型方形の遺構として検出したため、堅穴建物跡と考えて遺構番号を付したものの、調査の結果堅穴建物跡ではないと判断した遺構について、堅穴状遺構と分類して記載する。所屬時期については、概ね堅穴建物跡と同時期と思われるものより新しい時期の遺物を出土したもの

の二者があるが、一括して下層遺構面の遺構としておく。なお遺構略号については、調査時点で竪穴建物跡として付していたSHを、その他の遺構としてSXに変更している。

SX2094 (図版52 写真図版60・61)

B地区北部に位置し、SH2098の東に隣接する隅丸長方形の輪郭をもつ遺構で、長辺は4.7m、短辺は3.9mを測る。緩斜度の掘方をなし、遺構底面は凹凸をもちつつも、概ね平坦に掘られていた。遺構内は砂礫およびシルト質礫混砂で埋積されていた。遺構底面では、柱穴2基が検出された。

埋土中からは古墳時代初頭と思われる土師器と、奈良時代および平安時代に属する須恵器杯B蓋、土師器杯、土師器碗などが混在して出土している。

【遺物】(図版135 写真図版218)

312は弥生土器底部である。外面に平行タタキが施され、底部は尖り気味の丸底である。313は弥生土器高杯である。314は土師器杯である。底部は回転糸切りである。315は須恵器碗である。焼成が不良で、色調が橙色である。316は須恵器杯B蓋である。天井部外面に回転ヘラケズリが施されている。

SX2131 (図版52 写真図版61)

A地区との境界に近いB地区北部に位置する、隅丸長方形の遺構で、長辺は5.0m、短辺は4.5mを測る。緩斜度の掘方をなし、遺構底面は凹凸をもちつつも、概ね平坦に掘られていた。遺構内はシルト質砂およびシルト質砂礫で埋積されていた。遺構底面では北東部に柱穴1基が検出されている。なお平面図中で、北西部に3基、南東部に1基の柱穴があるが、これらはすべて遺構埋土上面から掘り込まれたものである。遺構内からは弥生時代末～古墳時代初頭に位置づけられる土器が、多数出土している。

【遺物】(図版135 写真図版216・217)

289は弥生土器広口壺である。290は土師器甕である。長胴甕とみられる。291は弥生土器甕である。口縁部は短く直立気味である。体部外面は平行タタキ後ハケが施されている。292は弥生土器有稜高杯である。293～295は弥生土器底部である。296～298は有孔鉢である。

SX2156 (図版53 写真図版62)

B地区北部の西壁際に位置する遺構である。下層遺構面の精査で検出し、当初は方形の竪穴建物と認識して、SHに区分した。しかし掘り下げをおこなったところ、西半は自然地形と思われる凹部であり、東半も床面と思われる面を精査したにもかかわらず、主柱穴、中央土坑などは検出されなかった。こうしたことから、SH2156としたものは、竪穴建物ではないと判断した。

長辺が8.0m、短辺が6.4mを測る方形を呈する。掘方は、東辺は緩斜度であるが、北辺と南辺は急斜度となっている。遺構内は、砂礫を主体とした堆積物で埋積されていた。北半に柱穴5基、南半に土坑2基と柱穴2基が検出されたが、それぞれ独立した遺構と考えられる。

SX2156の埋土中からは、弥生時代末～古墳時代初頭に位置づけられる土器が、多数出土しているが、その上層では律令期の遺物も多数出土していることから、遺構の成立自体が律令期前後となるか、または律令期に新たな浸食と堆積が生じたか、いずれかの可能性がある。

【遺物】(図版135・169 写真図版217・218・281)

299～302は弥生土器底部である。底径が小さいものが多いが、特に299は底部が尖り気味で、底面がかろうじて残っている。外面はヘラミガキが施されている。304は土師器碗である。305は土師器杯である。手づくね成形とみられる。306は須恵器杯Aである。底部は回転ヘラ切りである。307・309は須恵器杯Bである。底部は回転ヘラ切りである。308・311は須恵器壺である。311は輪高台をもち、体部外面にヘラケズリが施されている。310は須恵器碗である。底部は回転糸切りである。

T20は凸面のタタキ目が細い縄目（B8類）である。凸面側縁が面取りされている。

SK2242 (図版53)

SX2156中央部に位置する、不整形な土坑である。緩斜度の掘方をなし、土坑底は概ね平坦に掘られている。土坑内は少量の炭化物粒を含む砂で埋積されていた。細片化した弥生土器～古墳時代初頭の土師器が出土している。

SK2306 (図版53)

SX2156中央部に位置する、不整形な土坑である。緩斜度の掘方をなし、土坑底は緩やかな凹面となる。土坑内はシルト混じりの砂で埋積されており、細片化した弥生土器～古墳時代初頭の土師器が出土している。

SP2243・SP2244 (図版53 写真図版62)

SX2156南西部に位置する柱穴で、SP2244がSP2243を切る。SP2244は長径30cm前後を測る、不整形の柱穴で、柱穴下底付近で礫がまとまって検出されている。またSP2243は長径55cm前後を測る楕円形の柱穴である。SP2243は、礫を少量含む極細砂～細砂で埋積されており、明確な柱底は検出されなかったことから、柱穴よりも小規模な土坑として分類すべきかもしれない。SP2243の埋土上部より、手焙形土器がやや斜位で出土している。

【遺物】(図版135 写真図版217)

303は弥生土器手焙形土器である。本体と覆部の境が稜をなし、覆部の開口部の縁の外側に粘土を足して厚くしている。一部ケズリ状に見えるがほぼ全面にヘラミガキが施されているようである。

④ 土坑

竪穴建物跡に付属するものを除くと、B地区下層遺構面では32基を記載する。B地区北部～東端部を中心とした、弥生時代末～古墳時代初頭の古土壌層がほとんど遺存していない範囲では、上層遺構面精査時に検出・調査され、出土遺物等から、本来下層遺構面に属すると判断されたものがあるが、個別の記載でそうした状況についても記載している。なお計測値等は、後掲の付表1に示している。

SK8 (図版27)

B地区北東部に位置する、東西方向に長い土坑である。

【遺物】(図版136 写真図版218)

317は弥生土器甕である。くの字口縁で、体部外面に平行タタキが施されている。

SK11 (図版54)

B地区北東部に位置する、不整形な土坑である。やや急斜度の掘方をなし、土坑底は2段に掘られている。土坑内は砂または砂礫で埋積されており、古墳時代初頭の土器が出土している。上層遺構面で調査をおこなったが、出土遺物を基に下層遺構面に属すると判断した。

【遺物】(図版136 写真図版218・219)

318・319は弥生土器ミニチュア土器である。320は弥生土器甕である。口縁部は外反する。321は弥生土器底部である。322～324は弥生土器高杯である。322は杯部が有稜である。323は杯部が碗形で、口縁部外面を段状に押さえている。324は脚部である。

SK73 (図版54)

B地区北部に位置する、不整形な土坑である。浅い皿状の掘方をなし、土坑底は2段に掘られている。土坑内は礫を多量に含む淘汰の悪いシルト質砂で埋積されていた。少数ながら、弥生時代末～古墳時代の遺物が出土している。上層遺構面で調査をおこなったが、出土遺物を基に下層遺構面に属する

と判断した。

【遺物】(図版136 写真図版218)

325は弥生土器有孔鉢である。

SK77 (図版54)

B地区北部東寄りに位置する、不整形な土坑である。浅い皿状の掘方をなし、土坑底は緩やかな凹面を呈する。土坑内は炭化物片を多量に含み、拳の2倍大の礫と小片化した土器を含むシルト質砂で埋積されており、その状況から人為埋積の可能性が考慮される。上層遺構面で調査をおこなったが、出土遺物は弥生時代末～古墳時代と考えられることから、下層遺構面に属すると判断した。図示できる遺物は出土していない。

SK83 (図版55)

B地区北部東寄りに位置する、不整形な土坑である。緩やかな掘方をなし、土坑底には大きな凹凸が認められる。土坑の北～東縁辺に焼土が検出された。図では焼土が馬蹄形を彷彿とさせる平面形をなしているが、これは土坑掘方の傾斜に沿って堆積した、焼土を多量に含む砂の領域であり、竈のような構造物ではない。土坑内は細粒化した焼土、炭化物片などを多量に含むシルト質砂で埋積されていたほか、土坑底では厚さ5cm前後の炭層が認められた。焼土の間で古墳時代初頭の高杯等が出土した。SK83周辺には、こうした焼土に関連するような同時期の遺構はない。焼土内の炭化物のうち1点についてAMS測定を実施し、2世紀前葉から3世紀前葉を中心とする時期であるという結果がえられた(第9章第4節)。

【遺物】(図版136 写真図版219)

326は弥生土器二重口縁甕である。327は弥生土器有稜高杯である。内外面ともヘラミガキが施されている。

SK96 (図版54)

B地区北部東寄りに位置する土坑である。西側を掘乱溝に切られるが、全体の状況から楕円形の土坑と考えられる。浅い皿状の掘方をなし、土坑底は概ね平坦ではあるものの、一部に小規模な凹凸が認められる。土坑内は拳大以下の礫を含むシルト質砂で埋積されており、小片化した弥生時代末～古墳時代初頭の土器が出土している。上層遺構面で調査をおこなったが、出土遺物は弥生時代末～古墳時代と考えられることから、下層遺構面に属すると判断した。

【遺物】(図版136 写真図版219)

328は弥生土器底部である。底径11cmと大型である。

SK227 (図版29 写真図版43)

B地区北部中央に位置する、楕円形の土坑である。

【遺物】(図版136 写真図版219・221)

329・330は弥生土器底部である。底径は小さい。331は弥生土器高杯である。有稜高杯で、口縁部が屈曲して開く。

SK308 (図版29)

B地区北部に位置する。不整形楕円形の土坑である。ごく浅い皿状の掘方をなし、土坑底は概ね平坦に掘られている。調査の過程で、降雨のために断面観察用の畦が流失し、断面図等については記載できない。上層遺構面で調査をおこなったが、出土遺物を基に下層遺構面に属すると判断した。

【遺物】(図版136 写真図版219)

332は弥生土器甕である。くの字口縁で、体部外面に平行タタキが施されている。333・334は弥生土器

底部である。

SK350 (図版54)

B地区北部中央に位置する、不整形の土坑である。北側は緩斜度、南側は急斜度の掘方をなし、土坑底は北から南へ傾斜する。土坑内は礫を多量に含む砂で埋積されており、細片化した弥生時代末～古墳時代初頭の土器がわずかに出土していることから、下層遺構面に属すると判断した。

SK389 (図版56)

B地区北部に位置する、溝状の長形の土坑で、中央部で東向きの分岐が認められる。不規則な掘方をなし、土坑底は平坦な部分も見られるが、不規則な凹部となる部分も認められた。土坑内は拳大以下の礫までを含むシルト質砂礫で埋積されており、弥生時代末～古墳時代初頭の土器が出土している。

埋土の状況からは、洪水による浸食と堆積が強く示唆されることから、堅穴建物跡が埋没した後、上層遺構面の遺構群が形成されるまでの間に、後背の段丘から流下した洪水によって地表面が浸食されて形成された可能性が高いと判断している。正しくは下層遺構面に相当するものではないが、上層遺構面に伴う遺物も認められなかったことから、下層の遺構として取り扱っておく。

【遺物】(図版136 写真図版219)

335は弥生土器底部である。底径は非常に小さい。

SK446 (図版54)

B地区北部東端に位置する土坑で、北東側を地層観察用側溝に切られていることから、元の形状は不明である。逆台形状の断面形をなし、土坑底は平坦に掘られている。土坑内は礫を含むシルト質砂で埋積されていた。弥生時代末～古墳時代初頭の土器が出土していることから、下層遺構面に属すると判断した。

【遺物】(図版136 写真図版219)

336・338は弥生土器底部である。底径は小さい。337は弥生土器甕である。外反口縁で、体部外面に平行タキが施されている。

SK626 (図版56 写真図版45)

B地区中央部西側に位置する、不整形の土坑である。やや急斜度の掘方をなし、土坑底は概ね平坦に掘られている。土坑内は砂礫ないしはシルト質砂で埋積されていた。顕著な遺物は出土していない。

SK746 (図版56 写真図版45)

B地区中央部東寄りに位置する、不整形の土坑である。浅い皿状の掘方をなし、土坑底は平坦に掘られている。土坑内は炭化物片を多量に含むシルトで埋積されており、細片化した弥生時代末～古墳時代初頭の土器がわずかに出土している。SK746周辺に目立った遺構はなく、炭化物が多量に生じた原因は不明である。上層遺構面で調査をおこなったが、出土遺物を基に下層遺構面に属すると判断した。

SK796 (図版56 写真図版46)

B地区北部中央の北壁際に位置する土坑であるが、北側を壁面の地層観察用トレンチに切られているため、本来の形状は不明である。西側は急斜度、東側は緩斜度の掘方をなし、土坑底は東から西へ傾斜する。土坑内は礫を含む砂で埋積されており、細片化した土器が出土している。上層遺構面で調査をおこなったが、出土遺物を基に下層遺構面に属すると判断した。

SK838 (図版56 写真図版46)

B地区北部中央に位置する、不整形の土坑である。皿状の掘方をなし、土坑底には不規則な凹凸が見られる。土坑内は礫を含む砂で埋積されており、細片化した土器が出土している。上層遺構面で調

査をおこなったが、出土遺物は弥生時代末～古墳時代と考えられる細片化した土器であることから、下層遺構面に属すると判断した。

SK874 (図版56 写真図版46)

B地区北西隅に位置する、楕円形の土坑である。皿状の掘方をなし、土坑底は平坦に掘られている。土坑内は礫を多く含むシルト質砂で埋積されていた。図示可能な遺物は出土していない。

SK1001 (図版55)

B地区中央部に位置する、楕円形の土坑である。急斜度の掘方をなし、土坑底には緩やかな凹凸が認められる。土坑内は小礫を多く含むシルト質砂で埋積されていた。弥生時代末～古墳時代初頭の土器が出土している。上層遺構面で調査をおこなったが、出土遺物を基に下層遺構面に属すると判断した。

【遺物】(図版136 写真図版219・220)

339～342は弥生土器甕である。平行タキ後縦方向のハケ目調整が施されているようである。

SK1015 (図版56 写真図版46)

B地区北部の中央に位置する、不整楕円形の土坑である。やや急斜度の掘方をなし、土坑底には緩やかな凹凸が見られる。土坑内は礫混じりの砂で埋積されていた。図2層より、細片化した土器片が多数出土しているが、図示可能なものはない。上層遺構面で調査をおこなったが、出土遺物を基に下層遺構面に属すると判断した。

SK1024 (図版57)

B地区中央部西端に位置する、楕円形の土坑である。緩やかな掘方をなし、土坑底はわずかに傾斜しており、不規則な凹凸が認められる。また南端を上層遺構面の柱穴SP1065が切っている。土坑内は礫を多量に含む砂で埋積されており、弥生時代末～古墳時代初頭の土器が出土した。上層遺構面で調査をおこなったが、出土遺物を基に下層遺構面に属すると判断した。

【遺物】(図版136 写真図版220)

343・344は弥生土器甕である。体部外面に平行タキが施されている。343はくの字口縁で、344は口縁端部が上方につまみ出されている。345は弥生土器底部である。346・347は弥生土器蓋である。

SK1057 (図版57)

B地区中央部に位置する、不整円形の土坑である。当初は柱穴として調査したが、断面観察では柱痕は検出されなかったため、土坑として取り扱う。やや急斜度の掘方をなし、土坑底は概ね平坦に掘られている。土坑内は砂で埋積されており、弥生時代末～古墳時代初頭の土器が出土している。上層遺構面で調査をおこなったが、出土遺物を基に下層遺構面に属すると判断した。

【遺物】(図版137 写真図版220)

348は弥生土器高杯である。脚部で、裾部に円形透かしをもつ。

SK2012 (図版57 写真図版63)

B地区北東隅に位置する土坑である。まず上層遺構面精査時にSK451が検出されたが、その後の調査でこれが下層遺構面に属すること、SK451として認識した範囲の北東側に、より広い土坑が確認され、これとSK451とが分離できなかったため、下層遺構面の調査にあたって改めてSK2012という遺構名を与えて、同一遺構として調査をおこなったものである。

SK2012は、その北東側を調査区壁断面の地層観察用側溝に切られており、さらには調査区外へ広がるため、本来の形状は不整形である。土坑は緩やかな掘方をなし、土坑底はやや傾斜をもちつつも概ね平坦に掘られている。土坑内は砂および砂礫で埋積されており、埋土中より弥生時代末～古墳時代初頭の

遺物が出土している。

【遺物】(図版137 写真図版220)

349・350は弥生土器底部である。350は平底の底部が突出する。

SK2100 (図版57 写真図版63)

B地区北部中央に位置する、不整形円形の土坑である。全体に緩斜度の掘方をなし、土坑底はやや傾斜をもちつつも概ね平坦に掘られている。土坑内は礫を多く含むシルト質砂および砂で埋積されていた。下層遺構面において検出された土坑であるが、上層遺構面段階の土師器甕が出土している。

【遺物】(図版137 写真図版220)

351は土師器甕である。大型で、口縁部が内湾する。体部外面はタテハケが施される。

SK2136 (図版57 写真図版63)

B地区北部に位置する、円形の土坑である。急斜度の掘方をなし、土坑底は平坦に掘られていることから、断面形は逆台形となる。土坑内は多くの礫を含む砂～細砂で埋積されていた。図示可能な遺物は出土していない。

SK2166 (図版57)

B地区中央部に位置する土坑であるが、南半を上層遺構面のSK1006に切られているため、元の形状は不明である。やや歪な掘方をなし、土坑底は狭い凹面となっている。土坑内は細礫を多く含む粗砂等で埋積されており、細片化した土器が少量出土している。図示可能な遺物は出土していない。

SK2174 (図版57 写真図版63)

B地区中央部西壁際に位置する、不整形な土坑である。西側を調査区壁断面観察用の側溝に切られている。浅い皿状の掘方をなし、土坑内は礫を多く含む砂で埋積されていた。図示可能な遺物は出土していない。

SK2202 (図版57 写真図版63)

B地区北部に位置する、楕円形の土坑である。土坑底は緩やかな凹面をなし、土坑内は拳大以下の礫を含むシルト質砂で埋積されていた。図示可能な遺物は出土していない。

SK2203 (図版57 写真図版63)

B地区北部で、SK2202の西に隣接する楕円形の土坑である。横断面は碗底状の掘方をなしている。土坑内はシルト質砂で埋積されていた。図示可能な遺物は出土していない。

SK2218 (図版58)

B地区北部に位置する、長形の土坑である。北半をSP2235が切る。横断面はごく浅い皿状を呈し、土坑底には不規則な凹凸が認められる。土坑内は細砂混じりの粗砂で埋積されていた。図示可能な遺物は出土していない。

SK2225・SK2236・SK2237 (図版58 写真図版63)

B地区北部西壁際に位置する土坑である。西半が調査区外へ延びること、壁断面観察用の側溝に切られていることにより、元の形状は不明である。検出面では明確に識別できず、断面観察で3基の土坑が重複していることが確認できた。最も古いSK2237はやや急斜度の掘方をなし、土坑底は平坦に掘られている。土坑内は拳大以下の礫を多く含むシルト混砂で埋積されており、細片化した弥生土器ないしは土師器が出土している。SK2225・SK2236は、SK2237の埋土を切って掘られている。

SK2225の掘方はやや不規則な斜度で、土坑底は狭い凹面をなす。土坑内は礫混じりの砂で埋積されており、細片化した弥生土器ないしは土師器が出土している。SK2236は溝状の土坑で、横断面は深いW字形

をなす。土坑内は華大以下の礫を含む砂で埋積されており、細片化した弥生土器ないしは土師器を多く包含していた。

SK2296 (図版58 写真図版64)

B地区中部に位置する、不整形円形の土坑である。浅い皿状の掘方をなし、土坑底は弱い凹面となる。土坑内は華大以下の礫を含むシルト質砂礫で埋積されていた。図示可能な遺物は出土していない。

SK2311 (図版58 写真図版65・67)

B地区北部中央に位置する、不整形な土坑で、SH2157を切る。北側が狭く南側が広い形状をなし、土坑上面から下底にかけて、多数の礫とともに土器類が出土した。土坑の横断形は、急斜度の掘方をなす逆台形状を呈し、土坑底はわずかに凹面をなしつつも、概ね平坦な印象を受ける。

土坑内からは弥生土器が出土している。埋土から出土した炭化物1点についてAMS測定を実施し、1世紀中葉から3世紀前葉の時期である可能性が高いという結果がえられた(第9章第4節)。

【遺物】(図版137 写真図版221)

352は弥生土器広口長頸壺である。353は弥生土器甕である。体部外面に平行タキが施されている。底部に木葉痕が付着する。354は弥生土器底部である。

SX1 (図版59)

B地区北東端に位置する。遺構番号を与えているが、検出状況などから、古土壌層が地形面の凹部に遺存したものの可能性が高い。平面は不整形で、底面も不規則な凹凸が広がっており、人為的な造作とは考え難い。埋土はシルト混じりの砂である。SX1の範囲内からは、弥生時代末～古墳時代初頭の遺物が出土している。上層遺構面で調査をおこなったが、出土遺物を基に下層遺構面に属すると判断した。

④ 柱穴

下層遺構面でも多数の柱穴が検出されているが、掘立柱建物跡等の有意な関係性を見出すことはできなかった。柱穴は調査区北部に多く分布しており、A地区の下層遺構面と通底する分布状況を見せている。図示可能な遺物を出土した柱穴については、全体図(図版27・29)に遺構番号を示す。

【遺物】(図版137 写真図版221・222)

355は弥生土器二重口縁壺である。内外面とも化粧土が塗られ、ヘラミガキが施されていたようである。SP200から出土した。356・357はSP201から出土した。356は弥生土器甕である。357は弥生土器底部である。358～361はSP239から出土した。358は弥生土器甕である。359・360は弥生土器底部である。361は弥生土器高杯である。碗形の杯部の破片と思われる。362は弥生土器底部である。SP304から出土した。363・364はSP310から出土した弥生土器底部である。365は弥生土器甕である。口縁部はくの子で、体部外面に平行タキ後部分的にナゲが施されている。底径は小さい。SP373から出土した。366は弥生土器広口壺である。SP414から出土した。367は弥生土器底部である。底部に木葉痕が認められる。SP487から出土した。368は弥生土器有稜高杯である。SP412から出土した。369は弥生土器底部である。SP513から出土した。370は弥生土器甕である。SP1048から出土した。371・372はSP2259から出土した。371は弥生土器甕である。くの子口縁で、体部外面に平行タキが施されている。372は弥生土器直口鉢である。

⑤ 溝

下層遺構面で検出された溝は、その性状から、洪水の浸食で形成されたと推定されるものがほとんどである。本項では、出土遺物を掲載したものを中心に記載をおこなうが、土坑の項で関連遺構としてす

で記載したものは、本項では記載しない。

SD15 (図版45 写真図版47・48)

B地区北部東端に位置する、分岐する溝で、洪水による自然流路と思われる。北北西-南南東に延び、延長11.3m、最大幅2.3mを測る。溝内は砂礫で埋積されていた。延長方位、埋土の性状などから、A地区上層遺構面で調査したSD39と同一の溝と判断される。上層遺構面で検出されたが、弥生時代末～古墳時代初頭の遺物が出土しており、下層遺構面に帰属する可能性がある。なお、西にほぼ同様の溝SD17が隣接して平行に延びており、SD2247に切られている。

【遺物】 (図版138 写真図版222)

373は弥生土器底部である。底は厚く、突出する。

SD17 (図版45 写真図版48)

B地区北部東半に位置する溝である。SD2247に切られている。北北西-南南東に延び、延長5.5m、最大幅1.1mを測る。溝内は砂で埋積されていた。SD15同様の自然流路であろう。図示可能な遺物は出土していない。

SD2247 (SD504) (図版59 写真図版67)

B地区北部東寄りに位置する溝で、上層遺構面で検出されSD504の遺構番号を付したが、下層遺構面で精査した結果、上層遺構面の精査では検出できなかった溝の南端部が検出されたことから、本来は下層遺構面に帰属する溝と判断した。上層遺構面では、埋土の礫上部の隆起が検出されていたものである。B地区北壁に始まり、北から南へ延びた後、大きく蛇行して北東-南西方向へ延びる。延長約18m、最大幅2.6mを測る。溝内は砂礫で埋積されており、弥生時代末～古墳時代初頭の土器が出土している。延長方向から、A地区のSD221と同一の溝と考えられる。

【遺物】 (図版138 写真図版222・223)

375～378は弥生土器壺である。375・376は広口壺である。378は細頸壺である。外面に縦方向のヘラミガキが施されている。374・379～383・386は弥生土器甕である。口縁部はやや外反気味の口縁が多く、体部外面に平行タタキが施され、374・380はさらにタテハケが施されている。384は手づくね成形で、小さい碗形の器形である。器壁が厚い。ルツボの可能性が考えられるが被熱は受けていない。385は弥生土器直口鉢である。387～391は弥生土器底部である。392～396は弥生土器高杯である。杯部が392は碗形、393は口縁部が外反、394は有稜である。

SD2290 (図版60 写真図版63)

B地区北西部に位置する東西方向の溝で、SH2157の西辺を切る。西端は攪乱により壊されている。幅1.6m、残存長2.0m、深さ40cmである。

【遺物】 (図版138 写真図版223)

397は弥生土器甕である。398は弥生土器ミニチュア土器である。399は弥生土器脚部である。

SD2303 (図版58 写真図版64)

B地区中部に位置する溝で、SK2296に切られる。北北東-南南西に直線的に延びており、延長3.4m、幅70cmを測る。溝内は礫混じりの砂および砂質シルトで埋積されていた。

⑥ その他の遺構

SX2308

B地区北部で検出された、広く不整形な凹部である。検出時に遺構の可能性を考慮し、SX1に分類して

遺構番号を与えたが、その後の調査により、凹部に古土壌層が遺存したものと判断した。出土遺物についてはSX2308として記載しておく。

【遺物】(図版176 写真図版288)

S5は用途不明の石材である。側面が平坦に整えられているようにみえる。砂岩製で、表面が風化している。

(3) 包含層出土の遺物

主に奈良時代～平安時代後期頃と弥生時代後期～末期頃の遺物が多いが、層的に出土状況を区別できるものはほとんどない。

【遺物】(図版139～142・168～170・177・188・189 写真図版224～231・280～282・290・297・298)

400～406は土師器小皿である。底部は回転糸切りである。407・409・411は土師器碗である。409は輪高台をもつ。411は平高台で、表面は摩滅している。408・413は土師器杯である。413は底部が回転糸切りである。408は表面が摩滅している。410・412は土師器底部で、回転ヘラ切りである。414～416は土師器底部である。高い輪高台をもつ。417・418は土師器底部である。深く落ち込む底部をもち、回転糸切りである。419は土師器羽釜である。口縁はやや内湾して立ち上がる。420は土師器脚部である。三足盤や火舎に付属する脚の可能性がある。421は土師器甕である。外面に長方形のタキが施されている。

422・423は須恵器小皿である。底部は回転糸切りである。424は須恵器皿である。底部は回転糸切りである。425～435・437・438は須恵器碗である。底部は432が回転ヘラ切りである以外は、回転糸切りである。436・448・449・450は須恵器杯Aである。底部は回転ヘラ切りである。439は須恵器鉢と思われる。底部は回転糸切りである。440～443は須恵器捏鉢である。441～443は口縁部があまり拡張せず、端部外縁に丸みをもつ。444～446は須恵器杯B蓋である。天井部外面は回転ヘラケズリが施されている。447は須恵器杯である。451・452・454～457は須恵器杯Bである。458・461は須恵器碗で、輪高台をもつ。458は底部が回転ヘラ切り、461は底部が回転糸切りである。459・462～464は須恵器底部である。輪高台をもつ。453・473・474は須恵器鉢の底部と思われる。453は高台内に平行する2本線のヘラ記号が刻まれている。460・472は須恵器壺の底部である。高台内に1本線のヘラ記号が刻まれている。465は須恵器杯である。底部は回転ヘラ切りである。466・467は須恵器蓋である。短頸壺の蓋と思われる。468・470・471は須恵器捏鉢である。468は口縁部を内側に倒して外反する。470は口縁部を内側へわずかに曲げてから、端部を外側に折り曲げる。471は口縁部を内側へわずかに曲げてから、端部外縁を外側につまみ出す。469は須恵器鉢である。鉄鉢形であるが口縁部の内湾が弱い。類似する形態のものは神出窯跡群鴨谷2号窯・3号窯で出土している。475・476は須恵器瓶である。475は剥離しているが肩部に注口をもつことから、浄瓶もしくは多口瓶と考えられる。肩部は稜をもって屈曲し、肩上に断面方形の突帯を巡らしている。476は体部が下膨れで、底部は回転ヘラ切りである。478は須恵器双耳壺である。肩部と体部外面上位に頂部に丸みをもつ突帯を巡らす。突帯間にY字型の耳を貼り付けている。477は須恵器風字二面碗である。中央に縦方向のしきりをもつ。側面はヘラケズリが施され、内底面に使用により磨研された箇所がある。479は須恵器小皿である。底部は回転糸切りである。480は須恵器高杯の脚部である。481は緑釉陶器底部で、底部は蛇の目高台である。焼成は須恵質で、表面に薄く淡緑色の釉が施されている。482は灰釉陶器底部である。三日月高台で、体部内外面・高台部外面に灰釉が施されている。K90号窯式である。483は灰釉陶器皿である。高台部は露胎である。K90号窯式である。

484は備前焼播鉢である。口縁端部はあまり拡張しない。時期は14世紀後半である。485は須恵器捏鉢

である。口縁端部は丸みをもち、内側へ折り曲げる。486～488は白磁碗Ⅳ類である。489は龍泉窯系青磁碗である。内面に片切彫りによる施文がある。490は土師器の管状土鍾である。491は土師器の用途不明品である。2か所並んで穿孔されている。

492は弥生土器直口壺である。平底で、底径は小さい。493は弥生土器広口壺である。頸部上位に突帯を貼り付け二重口縁状にみせる。口縁端面と突帯部に波状文を入れる。口縁端面に化粧土が認められる。494は弥生土器直口壺である。外面は化粧土が施されている。495・496は弥生土器二重口縁壺である。496は緑帯部に波状文をもち、緑帯下縁にキザミ目が入れられている。497は弥生土器壺である。外面はヘミガギが施されている。498は弥生土器鉢である。口縁端部は上方につまみ上げられ、端面に擬凹線が施されている。499～510は弥生土器甕である。511は弥生土器直口鉢である。512は弥生土器有孔鉢である。513～518は弥生土器高杯である。513は大型の碗形高杯である。杯部は半球形で、脚柱部は短く、裾部は板状に開き、四方に円形透かしをもつ。514は有稜高杯である。519～541は弥生土器底部である。542～544は弥生土器有孔鉢である。

T5～T9は丸瓦である。T5・6は側面の当面側に分割界線が認められる。T12～T17・T19・T21～23・T25・T27は平瓦である。T12は凸面のタタキ目が横長斜格子（H2類）である。凹面側側縁が面取りされている。T13は凸面のタタキ目が横長斜格子（H4類）である。凹面側側縁がナデにより丸みをもち、T14は凸面のタタキ目がかなり傷んでいるが左偏斜格子（H5類）である。T15～T17・T19・T21は凸面のタタキ目が細い縄目（H8類）である。T16は凹面側側縁を2回面取りしている。T19は凸面に彫砂が付着している。T21は凹面側側縁がナデにより丸みをもち、T22・T23・T25の凸面のタタキ目は太い縄目（H9類）である。T22・T23は布目が丸をもった凹面側側縁部まで及んでいる。T25は凹面側側縁が面取りされている。T27は凹凸両面・側面ともナデが施されている（H10類）。

S10は台石である。表面に2か所くぼんだ部分がある。S11は砥石である。側面が平滑である。

W9は杭材である。断面は多角形である。

M11～M16は鉄釘である。M11は大型で、頭部を折り曲げている。M12～M14・M16は頭部が平らに押しつぶして折り曲げている。M15は頭部を折り曲げている。M17は槌である。M18は用途不明の銅製品である。

第3節 小結

（1）土層遺構面

土層遺構面は奈良時代～室町時代の遺構が検出されている。

A地区で検出された掘立柱建物跡の属する律令期の遺構は土坑が3基のみで非常に少なく、建物の時期よりも新しいようである。包含層の出土遺物からみるとその後も遺跡は継続しているが、遺構はほとんど検出されていない。

11世紀から12世紀にかけては掘立柱建物跡が、A地区の掘立柱建物の北側に建てられ、そしてその西側に土坑が設けられている。掘立柱建物跡は4間×2間、3間×2間、3間×1間など中小規模のものからなり、11世紀代はSB1→SB2、SB5、11世紀末～12世紀前半はSB4→SB3、SB6、SB8と継続的に建て替えが行われている。

B地区南部の東西溝SD1056は15世紀前半の時期である。

包含層からは須恵器浄瓶（475）・突帯双耳壺（478）、緑釉陶器底部（481）、灰釉陶器底部（482）・皿

(483) などが出土している。

(2) 下層遺構面

弥生時代後期後半～末期の堅穴建物跡、溝、土坑などが検出されている。堅穴建物跡は4棟検出され、2棟(SH1022・SH2098)が後期後半、2棟(SH2141・SH2157)が末期と考えられる。SH2098が平面円形である以外は、平面方形である。溝SD2247はE地区より南へ流れている。土坑は後期後半から末期のもので、B地区北半の全面で検出されている。

第5章 宗佐遺跡C地区

第1節 本発掘調査区の層序と遺構面

C地区は、宗佐遺跡の北側にあたり、台地の北側に西に向かって深く刻まれた開析谷の入口部分に位置している。調査区の東側には、谷奥から流れる水を谷の入り口で塞ぐように高さ約4m～6m、東西幅約20m、南北長約94mの盛土堰堤がある。現在、谷奥にはため池が造成されており、そこから放流される水は谷底を流れて、堰堤の東裾部を通り調査区南側を南西方向に流れる用水路へと続く。また、調査区西側には県道84号線の道路基盤として盛土による土手が造成されており、谷の入り口の東西が塞がれる窪地状になっている。

C地区の地形は、北端部は東から西へ流れる旧河道で、その南側はその旧河道によって形成された扇状地で、東から西へ向けて低くなる緩斜面をなしている。調査区西端から約15mの地点にかけては、蛇行した旧河道により西に向かって大きく下がる地形となっている。調査区東側は後世の開発等によって土地が大きく削られている。

C地区の層序（図版63・64 写真図版75～80）

C地区の土層の基本層序は、大きく区分して上から第1層～第7層、基盤層（大阪層群）となる。第1層は、近現代の耕作土や盛土である。第2層は、近世の耕作土（第2a層）および母材となった河川由来の自然堆積物（第2b層）で構成される。第3層は、中世の耕作土や畦畔の土壌層（第3-1a層・第3-2a層）と母材となった自然堆積物（第3-2b層）で構成される。第4層は、奈良時代～平安時代の耕土とみられる土壌層や畦畔とみられる盛土層（第4-1a層・第4-2a層）で構成され、やや遺物を多く含む遺物包含層である。第5層は、弥生時代末～古墳時代初頭の土壌層（第5-1a層・第5-2a層）およびそれらの母材となる河川由来の自然堆積物層（第5-1b層・第5-2b層）で構成され、とくに第5-1b層は土壌化が強く黒色を呈し、遺物も多く出土する遺物包含層である。第6層は、弥生時代後期以前に堆積したとみられる河川堆積物層で、堆積物の供給に2度程間隙があり、上部に堆積したシルトがやや土壌化した層（第6-1a層・第6-2a層）とそれぞれの母材の堆積物層（第6-1b層・第6-2b層）で構成される。第7層は、弥生時代以前に基盤層（地山層）の直上に堆積した砂礫を主体とする河川堆積物（第7b層）で基本的に構成されるが、上部層の影響のためか一部土壌化が見られる層（第7a層）もみられる。

調査区における旧地形は、概ね東および南側が高く、北および西側に向けて低くなる地形である。特に調査区西端部については旧河道が存在しているため基盤層が急激に低くなっており、調査区西端から約15mの地点にかけては、西に向かって大きく下がる地形となっている。そのため、後世の開発等によって土地が大きく削られた調査区東側では、第1層の直下に第7b層が堆積している。そして、第2層～第6層は調査区西部に向かって徐々に堆積するが、地山層が下がり、第7層が削られて大きく地形が下がる調査区西端では第3～6層が厚く堆積する。

遺構の検出は、主に第7b層の黄褐色土上面でおこない、第1面（上層遺構面）とした。ただし、それより上部の土壌層が堆積する調査区西端については、遺物包含層である第4層除去面を第1面（上層遺構面）、同じく遺物包含層の第5層除去面を第2面（下層遺構面）とした。

第2節 遺構と遺物

1. 上層遺構面の遺構と遺物

(1) 概要

第1面(上層遺構面)では弥生時代後期以前、弥生時代末期～古墳時代初期、平安時代後期、中世の遺構を検出した。東から西に下がる緩斜面で、調査区北端には流路SR1が東から西に流れている。東部は削平された部分が多く、一部で掘立柱建物跡や柱穴、土坑、旧河道の氾濫による落ち込みなどが検出されている。西半の削平の影響が少ない部分では掘立柱建物跡や土坑・溝のほか、竪穴建物跡が集中して見つかっている。

(2) 遺構と遺物

① 竪穴建物跡

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴建物跡が4棟検出された。

SH156 (図版65～68 写真図版88～93)

C地区西部で検出された。平面は円形で、屋内高床部を有している。屋内高床部の内縁は六角形を呈し、各辺の交点に主柱穴が位置している。北側に張り出しが付いているようである。直径は7.0mで、深さは35cmである。床面と高床部との段差は10cm程度である。周壁溝がめぐり、屋内高床部内縁にも部分的に細い溝が検出されている。床面中央部には土堤付きの中央土坑が位置し、その中央や東寄りに円形の土坑が設けられていた。直径40cm、深さ40cmで、底に炭が堆積し、埋土に炭化物を多く含んでいた。土堤は橙色土を多く含む褐色土を5cm程度の高さで盛り上げている。土堤内の埋土には炭や炭化物を多く含み、焼土粒もわずかにみられた。SP353の北側の床面には台石が検出された。東壁際の床面では、長さ10cm前後、幅5cm前後の礎20点が集中して置かれていた。

【遺物】(図版147・180～182・190 写真図版239・240・292・293・298)

図化した遺物はほとんどが埋土から出土したもので、床面から出土したものは弥生土器底部(657)・台石(S19)、礎(S21～S40)、鉄鏝(M19)で、その他、張り出し部から弥生土器鉢(652)が出土している。

644・647・649は弥生土器壺である。644は口縁端部に擬凹線が施されている。648・650は弥生土器甕である。645は弥生土器器台である。645は口縁端部が垂下し、端面に擬凹線文と爪型の刺突文が施されている。646・651は弥生土器有稜高杯である。651は稜から口縁部が大きく開き、外面に凹線文が施されている。652・653は弥生土器鉢である。654は弥生土器有孔鉢である。655～661は弥生土器底部である。

S19は台石である。S21～S40は長楕円形の礎である。長さ10cm前後、幅5cm前後のものを選んでいうので、網の錘などの用途が推定される。

M19は圭頭式の鉄鏝である。板状で薄く、無間である。

SH179 (図版69 写真図版94～98)

C地区西部で検出され、SH193を切っている。平面は方形で、壁際には周壁溝がめぐっている。長辺4.0m、短辺3.7m、深さ20cmである。中央土坑は中央よりやや北側に寄った場所に位置する楕円形の土坑である。深さは20cmで、埋土に炭化物・焼土を含んでいる。東壁際の中央よりやや北寄りに土坑SK355が位置する。床面よりの深さは20cmで、埋土上層から古墳時代前期の土器が出土している。中央土坑の南側に柱穴SP340が検出されているが、組み合わせになる柱穴を検出できなかったことから、主柱穴は不明

である。

【遺物】(図版147・180 写真図版240・292)

SK355脇の床面から土師器鉢(664・665)、SK355の埋土上層から土師器の直口壺(662)・二重口縁の甕(663)、北東隅床面から台石(S20)が出土している。

SH180(図版70・71 写真図版84～87)

C地区西部で検出され、西半はSD249に切られて残存していない。平面は方形で、南辺のみ周壁溝が検出されている。南北4.1mで、東西も4m程度と推定される。深さは20cmである。中央土坑は中央よりやや南側に寄った場所に位置する楕円形の土坑である。深さは10cmで、埋土に炭化物・焼土を含んでいる。中央土坑の東側では床面に近い位置で、埋土に含まれた焼土が集中して検出されている。柱穴はいくつか検出されているが、組み合わせになる柱穴を検出できなかったことから、主柱穴は不明である。

【遺物】(図版147 写真図版240)

埋土から弥生土器甕(666)・鉢(667)が出土している。

SH193(図版72～74 写真図版99～104)

C地区西部で検出された。北半をSR1に、南部をSH179に切られている。平面は多角形で、周壁溝がめぐっている。六角形もしくは五角形と推定される。最大径は8.6mである。東半部に屋内高床部をもち、床面との段差は15cm程度で、盛土で造成されている。外周の屈曲部の内側に位置するSP296・SP358・SP347などが主柱穴の可能性があるが、SP347が深さ30cm程度である以外は、浅いものが多く不明である。

中央土坑は床面中央部が広く浅くぼんたところに、複数の土坑が設けられている。建物の建て替えに伴う土坑位置の移動によるものと思われるが、土坑相互の関係はほとんどわからない。SK338はSK379を切る浅い土坑で、埋土中(b層の上面)に炭層が広がっている。SK379も浅い土坑で、埋土(a層)中に焼土が集中している部分がある。SK374は深さ20cm程度の深い土坑で、坑底に炭層が堆積し、埋土にも炭が多く含まれている。SK374の東側に位置するSK377は深さ30cm程度の土坑で、埋土に炭化物を多く含んでいる。SK380は深さ20cmの土坑で、埋土には炭・焼土が含まれていない。

中央土坑南側の床面ではSK375が検出されている。上部を攪乱により削り取られているが、深さは床面より60cmと深い。埋土から弥生土器小型器台(678)が出土している。高床部除去面では土坑SK376が検出された。深さは床面より40cm程度と深く、埋土から弥生土器が出土している。2層出土の土器とともに出土した炭化材についてはAMS測定を行い、1世紀前葉から2世紀中葉の年代が得られている。

その他、SP194・SP352・SP344・SP356を円形に並ぶ主柱穴とみれば、別の堅穴建物跡が存在した可能性も考えられる。

【遺物】(図版147・148・178 写真図版241・290)

高床部の下層で検出されたSK376の埋土から弥生土器甕(668～671・673・674)・碗形高杯(676)・鉢(677)、SK375から弥生土器小型器台(678)、埋土から弥生土器甕(672)・底部(679)が出土している。甕の口縁端部に面も持たないものが多く、小型器台を含むことから、庄内期に入る時期のものと考えられる。675は中世の土師器皿とみられ、混入遺物か。

SI14は低床部で出土した砥石である。表裏と側面が使用されている。

② 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は3棟検出された。

S81(図版75 写真図版81)

C地区の西端で検出された。桁行1間(2.4m)、梁行1間(2.4m)の前面に幅の狭い廂(0.6m)が付いている。建物の方位はN30.5°Eである。柱穴は直径40cm～20cmの円形で、深さは35cm～10cmである。柱穴から土師器底部(545)、須恵器甕の破片などが出土している。

【遺物】(図版143 写真図版232)

545は土師器底部で、底部が回転ヘラ切りである。SP229から出土した。

SB2 (図版76 写真図版83)

C地区の東部で検出された。桁行4間(6.8m～6.5m)、梁行1間(2.5m)で、北側の2間において梁の間に柱を加え総柱としている。建物の方位はN38.5°Eである。柱穴は直径50cm～15cmの円形で、深さは45cm～5cmである。柱穴から遺物は出土していない。

SB3 (図版75 写真図版83)

C地区の西部で検出された。桁行3間(5.0m～4.8m)、梁行1間(3.2m～3.3m)の側柱建物で、方位はN15°Eである。柱穴は直径45cm～20cmの円形で、深さは45cm～10cmである。柱穴はSD249を上部から掘りこむ。柱穴からは須恵器の破片が出土しているのみである。

③ 柱穴

柱穴は西部の堅穴建物跡や掘立柱建物跡の検出された部分の周辺と東部のSB2の周辺で検出されている。建物跡に属さない柱穴で、注目すべき遺物の出土をみたものについて以下に記載する。

SP132 (図版80 写真図版117)

C地区中央部のSH156の東側で検出された柱穴である。柱穴底付近から土師器壺(680)が出土している。

【遺物】(図版148 写真図版242)

680は弥生土器壺である。小型の直口壺で、突出する底部は欠けている。

SP182 (図版70)

C地区西部のSH180内で検出された柱穴である。柱穴内から管状土鍾(548)が出土している。

【遺物】(図版143 写真図版232)

548は土師器管状土鍾である。

SP246 (図版61 写真図版117)

C地区東部のSR7の西側で検出された柱穴である。柱穴内から弥生土器鉢(681)・壺(682)が出土している。682は検出面付近で出土した。

【遺物】(図版148 写真図版242)

681は弥生土器鉢である。外面はナデが施されている。682は弥生土器壺である。広口壺で、体部外面は平行タタキ後ヘラミガキが施されている。

SP252 (図版61)

C地区西部のSD249の西側で検出された柱穴である。柱穴内から弥生土器底部(683)が出土している。

【遺物】(図版148 写真図版242)

683は弥生土器底部である。

SP253 (図版61)

C地区西部のSD249の西側で検出された柱穴である。柱穴内から須恵器底部(546)が出土している。

【遺物】(図版143 写真図版232)

546は須恵器碗である。

SP304 (図版81 写真図版117)

C地区西部のSK287内で検出された柱穴である。柱穴内から土師器杯(547)・丸瓦(T34)が出土している。

【遺物】(図版143・171 写真図版232・283)

547は土師器杯で、底部が回転ヘラ切りである。表面は摩滅している。

T34は丸瓦である。

④ 土坑

土坑は建物跡が検出された部分の周囲にも広がっている。

SK13 (図版77 写真図版105)

C地区の南東隅で検出された東西に長い長楕円形の土坑である。南部は側溝掘削により壊され、隣接のE地区までは延びていない。土坑内の東端では長さ50cm以下の石材が見つかった。埋土から弥生土器の底部が出土している。

SK22 (図版77 写真図版105)

C地区の東部で検出された土坑である。2段掘りになっており、中央が柱穴状に深い。埋土に炭化物片を含むが、遺物は出土していない。堅穴建物跡の中央土坑の可能性ある。

SK125 (図版77 写真図版105・106)

C地区の中央付近で検出された平面楕円形の浅い土坑である。埋土から遺物は出土していない。

SK126 (図版77 写真図版106)

C地区の中央付近で検出された平面不整形の深い土坑である。埋土から須恵器碗が出土している。

【遺物】(図版143 写真図版232)

549・550は須恵器碗である。549は器壁が非常に厚い。その他、底部回転系切りの須恵器底部も出土している。

SK136・137・138 (図版77・78 写真図版106・107)

C地区の中央付近のSH156の東側で検出された土坑である。平面長方形の浅い土坑で、類似する土坑が南北に並んで3基検出されている。SK136の埋土から弥生時代後期の脚付鉢・甕が出土している。

SK140・141 (図版78 写真図版107)

C地区の中央付近のSH156の東側で検出された土坑である。平面不整形長方形の浅い土坑で、SK140がSK141を切っている。埋土から遺物は出土していない。

SK150 (図版78 写真図版107)

C地区の中央付近で検出された平面長楕円形の深い土坑である。埋土から土師器鍋・鉢、鉄釘が出土している。

【遺物】(図版143・190 写真図版232・298)

551は土師器鍋である。体部外面下半に平行タタキ痕が認められ、ススが付着している。552は土師器鉢である。体部外面は指頭痕の凹凸が大きく、下端はヘラケズリが施されている。内面はハケ目が施され、底部はすり減っている。底部外面は砂が付着している。

M20・M21は鉄釘である。M21は木質が付着している。

SK159・160・161・177 (図版61・78 写真図版107・108)

C地区の中央付近のSH156の南側で検出された土坑群である。土坑間の切れあいは不明である。埋土から遺物は出土していない。

SK170 (図版78 写真図版108)

C地区の西部のSH180の南側で検出された不整形の浅い土坑である。埋土から遺物は出土していない。

SK186 (図版78 写真図版108)

C地区の西部のSH180の北東隅を切る楕円形の土坑である。埋土から土器の細片が出土している。

SK187 (図版78 写真図版109)

C地区の中央部に位置する不整形の土坑である。西側は擾乱によって壊されている。埋土から遺物は出土していない。

SK192 (図版79 写真図版109)

C地区の東部のSR1の南側に位置する不整形の土坑である。埋土はSR1の溢流堆積物で、河道の氾濫によるくぼみと思われる。埋土から中世後期の土師器鍋の破片が出土している。

SK208 (図版79 写真図版109)

C地区の東部のSR1の南側に位置する段の肩部で検出された土坑である。埋土から遺物は出土していない。

SK243 (図版81)

C地区の東部のSR1の南側に位置する不整形の土坑である。最上層の埋土には炭・粘土を含んでいる。

SK244 (図版79 写真図版109)

C地区の中央部のSR1の南側に位置する土坑である。埋土の上層に炭化物を多く含んでいることから、火を焚いた跡と考えられる。

SK247 (図版79 写真図版109)

C地区の西部のSH179上で検出された長い土坑である。

【遺物】 (図版143 写真図版232)

553は須恵器碗である。554は須恵器捏鉢である。口縁部はあまり拡張せず、丸みをもつ。13世紀頃の時期である。

SK265 (図版80 写真図版110)

C地区の西部のSD249の西側で検出された円形の浅い土坑である。

【遺物】 (図版143 写真図版232)

555は須恵器杯Bの底部と思われる。

SK270 (図版80 写真図版110)

C地区の西部のSD249の西側で検出された楕円形の浅い土坑である。

SK286 (図版80 写真図版110)

C地区の西部のSK287の西側で検出された不整形の浅い土坑である。

SK287 (図版81)

C地区の西部のSD249の西側で検出された大きな落ち込み状の遺構である。

【遺物】 (図版146・171・172 写真図版238・283・284)

640は土師器碗である。表面は摩滅している。641は須恵器碗である。642は須恵器皿である。643は須恵器甕である。外面には方形タタキ痕、内面には長方形の当具痕が残る。10・11世紀頃の時期である。

T30は丸瓦である。凸面は縦方向のナデが施されている。T41は平瓦である。凸面に太い罫目タタキ (H9類) が施される。

SK318 (図版80 写真図版110)

C地区の西部のSK287上の西端部で検出された不整形の浅い土坑である。西側に位置するSK319を切る。東部は検出されていない。

SK319 (図版80 写真図版110)

C地区の西部のSK287上の西端部で検出された不整形の浅い土坑である。東側に位置するSK318に切られる。

SK348 (図版70・71 写真図版110)

C地区の西部のSH180内で検出された土坑である。平面形は楕円形である。出土遺物から竪穴建物跡に属さないのは明らかである。

【遺物】 (図版143 写真図版232)

556は土師器杯である。表面は摩滅している。557～559は土師器碗である。559は底部が回転糸切りである。

SK371 (図版80 写真図版111)

C地区の東部で検出された不整形の深い土坑である。洪水砂礫で埋まっている。

SK386 (図版80 写真図版111)

C地区の東部で検出された不整形の土坑である。

SK388 (図版80 写真図版111)

C地区の東北隅付近、SR1の南側で検出された不整形の土坑である。

④ 溝

溝は西端の地形の低い部分で、南北方向に設けられたものが多い。ただし、北側はSR11にあたり、南側はE地区の遺構面が削平を受けた部分であることから、延長部分については不明である。

SD228 (図版82・83 写真図版112)

C地区の西端付近で検出された東西方向の溝である。延長が短く、浅い。

SD231 (図版82・83 写真図版112)

C地区の西端付近で検出された南北方向の溝である。SD232に南接し、南端は調査区外に延びている。直線的な溝で、浅い。埋土から弥生土器の破片が出土している。

SD232 (図版82・83 写真図版112)

C地区の西端付近で検出された南北方向の溝である。SD231に北接している。直線的な溝で、浅い。埋土から弥生土器の破片が出土している。

SD235 (図版82)

C地区の東部、SR389内で検出された東西方向の溝である直線的な溝で、浅い。埋土から須恵器・土師器が出土している。

SD242 (図版82・83 写真図版112・115)

C地区の西部で検出された南北方向の溝である。SD381上で、SD301の東側に位置する。5-2a層上面で検出した。直線的な溝で、浅い。埋土から弥生土器壺の破片が出土している。

SD249 (図版82・83 写真図版113・114)

C地区の西部で検出された南北方向の溝である。SH180・E地区SH65を切って検出されているが、SH179までは及んでいない。直線的で、深さのある溝である。

【遺物】(図版143・144・171・172 写真図版232～235・284)

560～564・576は土師器杯である。底部は回転ヘラ切りである。565～575・577～579は土師器碗である。底部はやや突出する平高台で、回転系切りである。577は見込みがやや深く落ち込んでいることから、托状の器形かもしれない。580は土師器甕である。581は須恵器杯Aである。底部は回転ヘラ切りである。582～594は須恵器碗である。突出する平高台は底部回転系切りで、594を除けば体部との境がなだらかである。587・590は大型の碗で、587は体部に段状の沈線、590は沈線を巡らせている。これらの須恵器碗は神出黒跡群鴨谷支群出土の須恵器と特徴が似ている。595は須恵器壺の直立する口縁部である。口縁部と体部との取り付けの角度が水平でないことから、平瓶の可能性が考えられる。

T32は丸瓦である。丸瓦部は縦方向のナデが施されている。T39は平瓦である。凸面に細い縄目タタキが施されている。側面に布目が認められる。

SD259 (図版82・83 写真図版112)

C地区の西部で検出された南北方向の溝である。SD381上で、SD301の北側に位置する。第5層上面で検出した。

【遺物】(図版148 写真図版242)

684・685は弥生土器甕である。684は外反する口縁部である。685は底部である。686は弥生土器高杯である。

SD264 (図版82・83 写真図版112)

C地区の西部で検出された東西方向の溝である。SD249の西側に位置する。延長が短く、浅い。

SD269 (図版82・83 写真図版112)

C地区の西部で検出された東西方向の溝である。SD249の西側に位置する。延長が短く、浅い。

SD282 (図版82・83 写真図版112)

C地区の西部で検出された東西方向の溝である。SD249の西側に位置する。直線的な溝で、浅い。

SD301 (図版82・83 写真図版115)

C地区の西部で検出された南北方向の溝である。SD381上で、SD242の西側に位置する。5-1a層上面で検出した。直線的な溝で、浅い。埋土から弥生土器壺の破片が出土している。

【遺物】(図版148 写真図版242)

687は弥生土器底部である。外面はヘラミガキが施されている。

⑤ 流路

宗佐遺跡の位置する谷筋を東から西へ流れる谷川の流路である。扇状地の形成過程で蛇行を繰り返すが、中世末頃まではSR1部分が主要な流路となっている。

SR1 (図版82・84 写真図版116)

C地区の北端で検出された流路である。調査区西端では少なくとも幅約8m以上、深さ約1.5m以上の規模となる。調査区東側では、流路の南側のみ検出できしており、流路の中心は北側にある。谷地形の中央を東から西へ流れるもので、調査区東側で北西方向に走り、調査区の中央部の東寄りあたりで南西方向に流れを変え、蛇行している。埋土の堆積物は、大礫～中礫が多く含まれる珪円礫を中心とした砂礫層であり、大規模な洪水によって谷奥から供給された土砂によって短期間に埋没したとみられる。埋土からは、弥生土器や古代～中世の須恵器、古代瓦、中世の土師器羽釜の破片が含まれるなかで、平安時代後期以降の遺物が主である。最も新しいもので16世紀後半頃の土師器鍋や備前焼・丹波焼等が出土し

ており、埋没時期はこの頃に求められる。なお、流路の埋没後には、地層観察からその上部には耕作地が形成され、調査区東側にある盛土堰堤が造成されている。

【遺物】(図版144～146・172・175・178・183・184・190 写真図版235～238・284・288・290・293・294・298)

596～599は土師器小皿である。手づくね成形で、口径が小さい。600・601は土師器鍋である。600は口縁端部が外側にわずかに膨らむ、601は口縁端部が拡張しない。602～608は土師器羽釜である。体部外面は平行タタキが施されるものが多い。602は鐙がほとんど退化している。603は低い鐙をもつ。604・606は口縁部が短く上方へ立ち上がる。605は口縁部が内湾する。607・608は口縁部が上方へ高く立ち上がり、608は口縁部外面に鉄釜を模倣した凹凸が認められる。609は土師器播鉢である。横方向の粗いハケ目が顕著である。609～612は羽釜状の鐙をもち、609・610は縦方向にクシ目が入れている。613・614は鐙をもち、613は縦方向に波状のクシ目が入れている。615・616は土師器鍋である。体部外面に格子タタキが施されている。617は土師器火鉢である。平面円形で、三脚をもつ。618は土師器火入である。平面方形で、隅に脚をもつ。粘土板を組み合わせて成形している。

619～622は須恵器捏鉢である。619は口縁部が拡張しない。620は口縁部あまり拡張せず、丸みをもつ。621は口縁部が玉縁状に膨らむ。622は端部外縁が膨らむ。623～625・633は須恵器甕である。624の時期は古墳時代後期である。625は底部付近の破片である。633は灰かぶりが著しい。626～629・632は備前焼播鉢である。626～628は口縁端部が直上に拡張し、端部は明瞭な面をなしていない。時期は乗岡編年中世5b期(15世紀後葉頃)と思われる。632は上方に拡張し、端部は鋭い。時期は乗岡編年中世4a期(14世紀前葉頃)と思われる。630は備前焼甕である。口縁部外面に2条の凹線をもつ。体部に「井」字状のヘラ記号が認められる。時期は乗岡編年中世6期(16世紀前葉～中葉)である。631は丹波焼播鉢である。口縁端部は拡張せず丸味をもつ。スリ目は1本引きである。時期は16世紀後半である。634・635は丹波焼甕である。634は肩部にヘラ描きによる刻線が認められる。636は白磁皿である。器壁が薄く、釉色は灰色である。

T44は平瓦である。凸面に縄目タタキが施されているようである。

S2は砥石である。長方形の板状砥石である。表裏と側面が使用されている。S13は台石の破片とみられる。S15は砥石である。使用面は表面と側面である。S41・S42は五輪塔である。竜山石製で、S41が火輪、S42が水輪である。S46は石臼の下臼の受け皿部分である。砂岩製である。

M22は鉄釘である。

SR389 (図版82)

C地区中央北側でその一部分を検出した。そのほとんどが、SR1を主として後世の河道の移動によって削られているため、局所的に残存するのみで、埋土は主に砂礫で充填される。なお、この上部には、古代の須恵器を含む暗褐色の泥が溜まったような状況が認められたため、流路が埋没し、河道が移動した際に、窪地上の地形が残されたとみられる。

SR6・SR7 (図版82)

C地区東端で局所的に確認できる砂礫層の堆積で、流路は西側へ貫流しない。これらは、ほぼ同一時期に埋没するものとみられるが、土層ではSR6がSR7の埋土上部に堆積する。SR1埋没後に造成された東側の盛土堰堤とは異なる土が、盛土堰堤に対してV字型に切り込む形で堆積しており、その最下部が砂礫層であり、SR6・SR7埋土と対応する。おそらく、SR6・SR7埋土は、盛土堰堤造成後に発生した洪水により運搬された溢流堆積物、あるいは破堤堆積物と考えられる。これらの堆積は少なくとも、東側盛土堰

堤が造成された後であり、近世以降の可能性はある。

【SR6の遺物】(図版146 写真図版238)

637は須恵器碗である。

【SR7の遺物】(図版146 写真図版238)

638は須恵器鉢である。片口をもつ鉢の口縁部である。639は弥生土器高杯である。杯部が碗形である。

2. 下層遺構面の遺構と遺物

(1) 概要

上部の土壌層が堆積する調査区西端では、第5層除去面を第2面(下層遺構面)とし、弥生時代後期以前の遺構を検出した。検出された遺構は溝と流路のみである。

① 溝

溝は西端の地形の低い部分で検出された。

SD381 (図版82～84 写真図版115)

C地区の西部で検出された南北方向の溝である。調査区西側の第7層が途切れて傾斜変換する斜面の裾に位置し、やや西側に湾曲する深い溝である。埋土は暗色化を呈しており、SR390が埋没後に窪んだ箇所が溝状となって、堆積土が土壌化した可能性がある。南側のE地区のSD204に続く。SD242・259・301はSD381の埋没後のくぼみ部分やその排水のために掘られた溝の可能性が考えられる。南側に続くSD204からは弥生時代後期の土器が出土している。

② 流路

流路は西端の地形の低い部分で検出された。

SR390 (図版82)

C地区西側でのみ検出できたもので、第7層を上部から削る流路である。埋土は第6-2b層にあたる。埋土は砂礫層を中心としており、洪水によって埋没したと推測される。遺物の出土はなかった。

3. 包含層出土の遺物

弥生土器と平安時代の土器が多いが、弥生土器も奈良～平安時代の土壌層である4層から出土したものが多い。なお、近世の暗渠から出土した遺物を最後にまとめて掲載する。

【遺物】(図版149～151・171・172・179・180・183・190 写真図版242～250・283・284・291・293・298)

688～691は土師器皿である。688・691は手づくね成形で、689・690は回転台成形であるが、表面が摩滅している。692～696は土師器碗である。底部は692～694・696が回転糸切り、695が回転ヘラ切りである。697は土師器甕である。口縁端部を上につまみ上げる。698は土師器羽釜である。鏝はほとんど退化している。699・700は土師器播鉢である。内面に粗いハケ目を施す。699は口縁部外面に鏝をもつ。700は使用により内面が摩滅している。

701は須恵器皿である。702は須恵器杯Aである。底部は回転ヘラ切りである。703は須恵器杯Bである。底部は回転ヘラ切りである。704・705は須恵器碗である。底部に輪高台をもつ。706は須恵器底部である。高い輪高台をもち、台付皿と考えられる。底部は回転ヘラ切りである。707・708は須恵器碗である。底

部は回転糸切りである。709・710は須恵器杯B蓋である。天井部外面に回転ヘラ切り後ナデが施されている。711は須恵器鉢である。口縁部は外反し、端部は丸味をもつ。712は須恵器捏鉢である。713は須恵器提瓶の口縁部である。714は須恵器甕である。体部に矢羽根状のタタキが施される。715は緑釉陶器碗である。胎土は須恵質で、薄い緑釉が施されている。716は瀬戸焼皿である。717は備前焼壺である。体部外面に櫛描波状文が入れている。718・719は無文の龍泉窯系青磁碗である。719は口縁部が外反し、見込みに圏線をもつ。720は白磁皿である。低い三角高台で、畳付が露胎である。

721は弥生土器壺である。櫛描直線文上に円形浮文を貼り付け、その上に櫛描格子状文、その下に列点文を配している。722～725は弥生土器広口壺である。722は口縁端面に縦凹線後竹管文が押されている。726～729は二重口縁壺である。726・727は緑帯部に波状文が巡らされている。728は竹管文が押された円形浮文をもつ。729は緑帯部下縁にキザミが入れている。730は弥生土器長頸壺である。731～736は弥生土器甕である。733～736は体部外面に平行タタキが施されている。737は土師器甕である。長胴の甕と思われる。738は弥生土器甕である。体部外面はハケが施されている。739・740は弥生土器鉢である。739は口縁部が内湾し、体部外面は平行タタキが施されている。740は体部外面に平行タタキが施されている。741～745は弥生土器高杯である。746は弥生土器脚部である。脚部外面に2条の沈線を巡らす。747・748は弥生土器器台である。747は口縁端部上方につまみ出す。748は脚柱部が筒状で、脚柱部が大きく開く。749～761は弥生土器底部である。底径の小さいものが多い。762・763は弥生土器脚部である。764・765は弥生土器有孔鉢である。766は土師器の鈎鎌型蛸壺である。

T33・T35は丸瓦である。T33・T35は凸面に縄タタキが施されている。T38・T40・T42は平瓦である。T38は縦長格子文（H1類）のタタキが施されている。T40は凸面に細い縄タタキ目（H8類）が施されている。T42は凸面に太い縄タタキ目（H9類）が施されている。凹面側縁線は2面取りされている。

S17は砥石である。パチ形の砥石である。全面使用されている。S18は砥石である。表裏両面に磨り面が認められるが、裏面は弱い。

S43は一石五輪塔である。竜山石製である。

M23は不明鉄製品である。M24は鉄釘である。M25は楔である。

767～781、T29・31・36・37・43はSH156の東側に位置する近世の擾乱暗渠とその周辺から出土した遺物である。767・768は土師器羽釜である。鈎は低く、768は体部外面に平行タタキが施されている。769は須恵器小皿である。底部は回転糸切りである。771は備前焼鉢である。口縁端部が上方に拡張し、端部は丸味をもっている。時期は15世紀後半である。772は丹波焼甕である。口縁部は短く外反し、口縁部内面に凹線が巡る。時期は14世紀中・後葉である。774は施釉陶器皿である。釉色はやや緑がかった灰色である。肥前系の陶器か。775・776は龍泉窯系青磁碗である。775は雷文帯碗である。776は見込みが円形に軸刺ぎされ、中心に小さな穴がうがたれ、その周りがすり減っている。777は瓦質土器底部である。三山形の脚部で底部の形状が弧状をなすことから、風炉の底部の可能性がある。778は須恵質陶棺である。棺身上端部の破片である。縦方向の幅広の突帯をもち、受部面が水平に短く突出する。外面はナデ、内面はハケが施されている。E地区で同一個体の別破片（1084）が出土している。779は弥生土器鉢である。780は弥生土器高杯である。781は弥生土器有孔鉢である。

T29・T31・T36は丸瓦である。T29・T31は玉縁部の破片である。T36は丸瓦である。凹面にコピキB痕が認められる。T37・T43は平瓦である。T37は凸面に横長斜格子文（H3類）のタタキが施され、凹面には布目が認められず、不鮮明な凹凸が認められる。調整台の痕跡の可能性はある。T43の凸面のタタキ目は不鮮明であるが、太い縄目（H9類）と思われる。

第3節 小結

(1) 上層遺構面

北端には中世末頃までの埋没した谷川のSR1が流れ、その南側に遺構が展開している。

8・9世紀の遺構は土坑SK126・SK265のみである。

10・11世紀の遺構は溝、掘立柱建物跡、土坑、落ち込みなどがある。南北方向の溝SD249は10世紀前半の須恵器・土師器がまとも出土している。この周辺に10～11世紀の掘立柱建物跡SB1、土坑SK348・SK287などが検出されている。

13世紀の遺構は土坑SK247が検出されている。

16世紀の遺構は土坑SK150が検出されている。

SB2・3は時期がわからないが、近接の遺構の状況からSB2は16世紀、SB3は13世紀の可能性もある。

(2) 下層遺構面

弥生時代後期後半と古墳時代前期の竪穴建物跡、流路が検出されている。

流路SR1は当初、調査区西端で大きく南向きに蛇行していた（SR390）ようで、弥生時代後期に最終的に溜り状になった部分がSD381である。

竪穴建物跡は4棟検出され、3棟（SH156・SH180・SH193）が後期後半、1棟（SH179）が古墳時代前期と考えられる。SH156は平面円形、SH193は平面多角形、SH179・180は平面方形である。

第6章 宗佐遺跡D地区

第1節 本発掘調査区の層序と遺構面

D地区はC地区の北側に隣接し、開析谷の北側で東西方向に延びる段丘崖面の裾部にあたる。

D地区の地形は、南端部は東から西へ流れる流路で、調査区西南部は、蛇行した流路により西に向かって大きく下がる地形となっている。その北側の調査前の現況は営農されていない耕地で、流路によって形成された扇状地が、本来は東から西へ向けて低くなる緩斜面をなしていたと考えられるが、後世の開発等によって土地が大きく削られ、平坦にされている。また、北部には流路の氾濫の影響により大きく削られた部分がある。

D地区の層序（図版87～90 写真図版126～131）

基本層序は、C地区の基本層序に合わせて設定しており、第1層～第7層、基盤層（地山層）となる。ただし、第3層・第4層、および第5層・第6層については堆積構造や遺物から帰属時期が判断できないため、基本層序番号を並列して表記する。層の呼称は、C地区の調査に倣っている。

第2節 遺構と遺物

1. 上層遺構面の遺構と遺物

（1）概要

C地区と同様に基本的に第7層上面を上層遺構面（第1面）として調査をおこなった。弥生時代末期～古墳時代初期、平安時代後期、中世の遺構などほとんどの遺構がこの面で検出された。

調査区南端にはC地区で検出された流路の北半が東から西に向かって流れ、西部で大きく蛇行し、時期によって異なる複数の流路が検出されている。流路の北側は削平の影響が大きいため、河道寄りのやや地形の下がった部分で弥生時代後期の堅穴建物跡や中世の土坑・柱穴などが検出されている。

（2）遺構と遺物

① 堅穴建物跡

弥生時代後期の堅穴建物跡が3棟検出されている。

SH12（図版91 写真図版132・133）

調査区中央部に位置する。SH166の北東隅を切って検出された。平面形は方形で、規模は東西5.0m、南北5.1mである。建物埋土と考えられる黒褐色土や暗褐色土を取り除くと、基盤層が礫層であったため、床面をはっきり認識できなかった。東部と北部の一部では褐色の比較的しまりの良い面が床面にあたると考えられる。中央部は礫層が堆積していたため、床面を明瞭に確認することはできなかった。しかしながら、1辺3.5mの方形の範囲で1段くぼんでいることから、周囲に壁内高床部が巡っているとみられ、床部内側の段がなだらかになっていることから、埋没時には崩れていたと考えられる。柱穴は低床部南東隅で1基（SP186）のみ検出され、建物内で土坑、炉などの遺構は検出されていない。

【遺物】（図版152 写真図版251）

埋土から弥生土器底部(790)と不明土製品(791)が出土している。790は弥生土器底部である。外面は平行タタキ目が認められる。791は用途不明の土製品である。円形の穴がうがたれている。

SH165 (図版92・94 写真図版132・134～136)

調査区中央部に位置する。SH166の西部を切って検出された。南部はSX163に切られている。平面形はやや丸みをもつ方形で、規模は東西6.0m、南北は中央土坑で折り返せば5.5mである。周囲に周壁溝が廻り、形状は不確かながら屋内高床部をもつとみられる。中央部には径40cm、深さ35cmの中央土坑SK193があり、その周囲は堤状に盛り上がっている。土坑埋土、周堤盛土とその周辺の覆土には焼土・炭・炭化物などが含まれる部分が認められる。柱穴は検出されなかった。

【遺物】(図版152・190 写真図版251・298)

埋土から弥生土器甕(792・793)・鉢(794)・鉄鏝(M26)が出土している。

792・793は弥生土器甕である。792は口縁部がやや上方に拡張する。793はくの字口縁で、外面は平行タタキの後、縦方向のハケが施されている。794は弥生土器鉢である。小型の鉢で、体部外面はヘラミガキが施されている。

M26は有茎柳葉形式の鉄鏝である。鏝身部は厚みをもつ。

SH166 (図版92・93 写真図版132・134)

調査区中央部に位置する。北東隅をSH12、北西部をSH165、南部を流路に切られている平面形は方形であるが、規模は東西3m以上、南北4m以上で、深さは20cmである。建物に伴う柱穴などの遺構は検出されなかった。残存部中央付近では、比較的炭化物を多く含む層が確認された。

【遺物】(図版152 写真図版251)

埋土から弥生土器甕(795)・高杯(796)が出土している。795は弥生土器甕である。くの字口縁で、体部内面に横方向のハケが施され、体部外面は摩滅している。

② 柱穴

流路寄りのやや地形の下がった部分などで、まばらに検出されている。柱穴から出土した土器は少なく、時期が不明のことが多い。図化した遺物のみ取り上げる。

【遺物】(図版152 写真図版251)

782・783はSP132から出土した。782は須恵器小皿である。底部は回転糸切りである。783は須恵器碗である。底部は回転糸切りである。見込みに凹みの痕跡を残す。12世紀前半頃の時期である。

784・785はSP140から出土した土師器小皿である。手づくね成形である。口縁部外面のナデが強く、底部との境がくぼむ。

③ 土坑

流路寄りのやや地形の下がった部分で検出されたものが多い。遺物を伴うものは少なく、時期が不明のものが多い。

SK2 (図版95)

調査区北東隅に位置する。平面は楕円形で、長1.4m、幅1.0m、深さ30cmである。

SK3 (図版95)

調査区東部に位置する。平面は不整楕円形で、長0.9m、幅0.5m、深さ7cmである。

SK5 (図版95)

調査区東部に位置する。平面は長楕円形で、長0.7m、幅0.3m、深さ10cmである。

SK6 (図版95)

調査区東端に位置する。平面は不整楕円形で、長1.75m、幅1.45m、深さ25cmである。

SK7・8 (図版95)

調査区東端に位置する。SK8をSK7が切っている。SK8は平面不整楕円形と思われ、長0.8m以上、幅0.6m、深さ10cmである。SK7は平面円形で、直径1.15m、深さ20cmである。埋土から土器細片が出土している。

SK10 (図版95)

調査区東端に位置する。平面は円形で、径1.1m、深さ20cmである。

SK64 (図版96)

調査区中央部に位置する。SH12の北東隅で重複しているが、前後関係は不明である。平面は不整長方形で、長2.3m、幅1.1m、深さ20cmである。

SK71 (図版96)

調査区中央部に位置する。平面は楕円形で、長0.9m、幅0.55m、深さ8cmである。

SK91 (図版96)

調査区中央部の流路の肩の内側に位置する。平面は半円形で、長0.65m、幅0.3m、深さ6cmである。

SK111 (図版96)

調査区西部に位置する。平面は長楕円形で、長0.5m、幅0.2m、深さ20cmである。埋土から土器細片が出土している。

SK159 (図版96 写真図版137)

調査区西部で、流路の肩部に位置する。平面は長楕円形で、長1.6m、幅1.0m、深さ30cmである。

【遺物】 (図版152 写真図版251)

786は手づくね成形の土師器皿である。787は弥生土器壺である。

④ 井戸

流路肩付近で検出されている。流路が埋没し、耕作地化した後に掘削されたとみられる。

SE4 (図版99 写真図版138)

調査区西部に位置する素掘りの井戸である。平面は不整円形で、径3m、深さ90cmである。埋土には礫が多く含まれていた。

SE9 (図版99 写真図版138)

調査区東端に位置する石組の井戸である。安全のため下部は重機による断ち割り確認した。石組の内径は80cmで、検出面より深さ1.6mまで石組が積み、その下45cmは素掘りで水溜が掘られている。

⑤ 流路

調査区の南端に東から西へ流れる谷川の流路である。南端のSR1が主流路で、西部では時期により蛇行して変化した流路 (SR160・SX204) が認められる。

SR1 (図版85 写真図版124)

C地区の北端で検出したSR1と同一の流路の北半部分にあたる。大規模な洪水によって谷奥から供給された土砂によって短期間に埋没したとみられる。埋土からは、弥生土器や古代～中世の須恵器、古代瓦、

中世の土師器羽釜の他、最も新しいもので15世紀後半頃の土師器鍋等が出土している。なお、地層観察から、埋没後にはその上層に耕作地が形成されたことが分かる。流路埋没土上層からは、胎衣壺とみられる土師器の壺の上に鉢を被せたものが2組(853～856)並んで出土している。また、その近くからは、ほぼ完品で底部に墨書をもつ16世紀の備前焼徳利(858)も見つかっている。

【遺物】(図版152～154・172・173・185・186 写真図版252～255・285・295)

799～812・T46は東壁際の11層でまとまって出土した。800は須恵器底部である。輪高台をもつ。壺の底部と思われる。801～806は須恵器碗である。底部は回転系切りで、見込みのくぼみはごくわずかである。807～809は須恵器捏鉢である。口縁端部は拡張しない。底部外面はナデが施され、内面は使用による摩耗が認められる。810・811は土師器鍋である。器壁が厚い。812は須恵器甕である。内面はナデが施されている。813・814は土師器小皿である。813は回転台成形、814は手づくね成形である。815は土師器皿である。手づくね成形とみられる。口縁部は横ナデが施されている。816は土師器皿である。高い輪高台をもつ。817・818は土師器羽釜である。罎は低く、体部外面に平行タタキが施されている。819は土師器鍋である。口縁部の器壁は厚いが、体部は平行タタキにより薄く仕上げられている。820・821は大型の土師器羽釜である。直立する口縁の外面には鉄釜を模倣して2条の突帯を巡らす。体部外面には平行タタキが施されている。822は須恵器杯Aである。底部は回転ヘラ切りである。823は須恵器杯Bである。底部は回転ヘラ切りである。824は須恵器皿である。高い輪高台をもつ。825・826は須恵器碗である。827は土師器羽釜である。短く直立する口縁をもち、体部外面に平行タタキが施されている。焼成は陶器質である。828は須恵器壺で、輪高台をもつ。体部外面にはヘラケズリが施され、底部外面に指頭痕が認められる。葉壺形の壺と見られる。829～832は須恵器捏鉢である。830～831は口縁端部が拡張しない。12世紀前半の時期である。832は口縁端部外縁が丸味をもって拡張する。14世紀前半の時期である。833は弥生土器長頸壺である。834は弥生土器二重口縁壺である。835・836は弥生土器甕である。くの字口縁で、836は体部外面に平行タタキが施されている。837は弥生土器底部である。838は弥生土器外反口縁高杯である。杯部の体部外面はヘラミガキが施されている。839は弥生土器脚部である。円孔透かしは4方である。

T45は丸瓦である。行基式の丸瓦で、凸面に縄タタキ後横方向のナデが施されている。T46・48は平瓦である。凸面は縄目タタキが認められる。

S47は石臼の上臼である。側面に挽き木を差し込む柄穴が2か所穿たれている。スリ目はかなりすり減っている。花崗岩製である。S49は石臼の下臼である。竜山石製である。S50は茶臼の下臼である。砂岩製である。

12世紀前半の土器がまとまってみられ、弥生時代後期以降古墳時代を欠き、8世紀、9世紀、14世紀、15世紀後半の時期の土器が含まれている。

SR160 (図版85)

SR1と同一の流路の一部で、D地区の西部で北側へ蛇行した流路である。流路肩部や埋土から比較的平安時代の須恵器が多く出土している。

【遺物】(図版154・173 写真図版255・285)

840は須恵器皿である。口縁端部が外側に小さく巻き込む。底部は回転ヘラ切りである。841・843は須恵器杯Aである。底部は回転ヘラ切りである。842は土師器皿である。手づくね成形とみられる。844は須恵器底部である。壺とみられる。845は須恵器碗である。底部はしっかりと突出した平高台で、回転系切りである。846・847は須恵器捏鉢である。846は口縁端部が拡張せず、外傾する面をもつ。847は口縁端

部が上方に拡張し、端部外縁が丸味をもつ。848は須恵器甕である。口縁端部は拡張せず、内面に凹みをもつ。849・850は土師器甕である。直線的に開く口縁部をもつ。851は弥生土器広口壺である。口縁端部に波状文と竹管文を入れている。852は弥生土器底部である。弥生時代後期と9世紀から13世紀までの土器が出土している。

T50は平瓦である。凸面は縄目タキが認められる。

④ その他の遺構

SX80 (図版97 写真図版137)

D地区の中央部で検出された土坑群である。東西に長い不整形の土坑で、部分的に深い箇所（SK203・SK204）がある。全体は長さ5.2m、幅3.2mで、SK203は深さ90cm、SK204は深さ110cmである。

【遺物】(図版152 写真図版251)

788は土師器皿である。手づくね成形である。789は播但型の土師器鍋である。15世紀前半頃の時期と思われる。

2. 下層遺構面の遺構と遺物

(1) 概要

局所的に残る第4層または第5層の除去面で確認できた下層遺構については、第2面として部分的に調査を実施した。検出された遺構はSX204のみである。

(2) 遺構と遺物

SX204 (図版98)

谷川の流路が北側へ蛇行し、堅穴建物SH165を削ったあとに形成された窪みと考えられる。埋土は暗色化した砂質土で、弥生土器の破片が極僅かに見つかった。上層で検出したSX163については、SX204形成後も残った窪みに、溜まった堆積土が土壌化したものとも考えられることから、同一遺構の上層・下層とも捉えられる。

【SX163の遺物】(図版152 写真図版251)

797は弥生土器壺である。内面にヘミガキが施されている。798は弥生土器底部である。

3. 包含層出土の遺物

主に流路埋積後に堆積した土層より出土した遺物が多い。

【遺物】(図版155・173 写真図版256・257・285)

853～856は流路埋没後の土層から出土した陶衣壺とみられる土師器の鉢と蓋に利用された脚付鉢の2組のセットである。853・854は土師器脚付皿である。底部は回転系切りで、脚は三足である。855・856は土師器鉢である。853は底部回転系切りで、854は体部外面に線刻が認められる。857は土師器短頸壺である。底部には砂が付着している。858は備前焼徳利である。陶衣壺の近辺から出土した。頸部が細く、体部が下膨れである。底部に墨書が認められるが、未判読である。16世紀代の時期である。859は土師器小皿である。底部は回転系切りである。860は須恵器碗である。見込みに凹みが認められる。861は小型の須恵器捏鉢である。口縁端部は拡張しない。内面は使用により摩耗している。862は大型の須恵器捏鉢である。口縁端部は内縁・外縁ともやや拡張している。輪高台をもち、底部は回転系切りである。863は

須恵器甕である。土師質焼成である。864・865は土師器羽釜である。864は口縁部が直立し、865は口縁部が内湾する。体部内面はハケ目が認められる。866は瓦質土器の脚部をもつ底部で、方形の火鉢と思われる。867は弥生土器広口壺で、頸部に2条の貼り付け突帯が見巡らされている。弥生時代中期の時期である。868は弥生土器甕である。くの字口縁で、体部外面に平行タキが施されている。

T47・49・51は平瓦である。凸面のタキキ目はT47が細い縄目、T49が太い縄目で、T51が無文である。

第3節 小結

(1) 上層遺構面

南端には中世末頃までの埋没した谷川のSR1が流れている。その北岸は溢流による基盤層の浸食が幾度もなされたとみられるが、弥生時代後期の堅穴建物跡を削っていることと、SR160が9世紀以降である以外、個々の時期は明らかにしたい。

流路SR1北側の遺構は少なくともSP132が12世紀、SP140・SK159が14世紀、SX80が15世紀であることが分かる程度である。

(2) 下層遺構面

弥生時代後期後半と古墳時代前期の堅穴建物跡、流路が検出されている。

流路SR1は弧を描いて南向きに蛇行していた流れが主なものであるが、溢流により北岸の弥生時代後期の堅穴建物跡が削り取られている。

堅穴建物跡は3棟（SH12・SH165・SH1669）検出され、いずれも時期は弥生時代後期後半で、平面方形である。

第7章 宗佐遺跡E地区

第1節 本発掘調査区の層序と遺構面

E地区はB地区北側、C地区の南側で、宗佐遺跡の中央にあたる。隣接し、開析谷の北側で東西方向に延びる段丘崖面の裾部にあたる。台地から北西に派生する小尾根の裾が西に低く広がり、その南側は段丘崖となって、調査区外の南東の台地段丘崖へと延びる。調査区内には、調査着手前には、段丘崖の縁辺に東西方向の市道が敷設されて、調査区西側の県道84号に接続しており、段丘崖の裾にはコンクリート製の用水路がめぐっていた。そして、調査区の東には台地の西に刻まれた開析谷があって、現在ため池（谷池）が造成されており、そこから放流される水は谷底を流れて堰堤の東裾部を通過して、調査区内を西に流れる幅約6mの用水路へと続き、段丘裾のコンクリート製用水路と接続して、調査区西へ抜けていた。調査区東端部の南半には、これら今回の調査着手前の調査区を抜ける用水路の撤去、付け替え工事の際に実施された調査箇所が一部重なる。また、調査区東端部の北半は、開析谷の入り口を塞ぐように築かれた高さ約4m～6m、東西幅約20m、南北長約94mの盛土堰堤の南部分にあたる。

E地区の層序（図版102～106 写真図版148・149）

宗佐遺跡の基本層序については、平成30年度C地区の土層を基に、複数の単層を同時に堆積間隙を基準とする堆積単位としてまとめて捉え、上から第1層～第7層および基盤層（地山層）に区分して把握している。そして、第1層～第7層については、特別に細分化する場合は、第3-1層のように枝番を付し、土壌化層と母材となる自然堆積層に細分化する場合、前者をa層、母材となる後者をb層と区別し、それぞれ数字の後ろに付して、第2a層、第2b層、第3-1a層、第3-1b層のように呼称する。

C地区の南に隣接するE地区における層序の把握については、基本的に調査区西壁断面で行い、地形変化が大きい調査区南側では遺構面の下層確認を行った。その結果、今回もこれまでと同様に第1層～第7層および最下層で基盤層（地山層）となる大阪層群とみられる明黄褐色のシルト質砂礫を確認した。各基本層序および旧地形と堆積状況については、次のとおりである。

第1層は、近現代以降の旧表土や耕作土、盛土、造成土、埋め戻し土である。第2層は、近世の耕作土（第2a層）および母材となった河川由来の洪水による氾濫・溢流堆積物、自然堆積物（第2b層）で構成される。第2b層は、C地区で見つかった谷川から氾濫・溢流した戦国時代の洪水砂に相当し、調査区の北西部に分布する。第3層は、中世の耕作土や畦畔の土壌層（第3-1a層・第3-2a層・第3-3a層・第3-4a層）と母材となった自然堆積物（第3-1b層・第3-2b層）で構成される。第3層の最下層では、マンガンおよび酸化鉄が強く沈着する層が認められ、鍵層として認識できた。また、第4層は、奈良時代～平安時代の耕土とみられる土壌層や畦畔とみられる盛土層（第4a層）で構成され、やや遺物を多く含む遺物包含層である。調査区南側の第4層の上面には、第3層最下層の影響により、マンガンおよび酸化鉄の沈着が一部及ぶ。第5層は、弥生時代末～古墳時代初頭の土壌層（第5a層）およびそれらの母材となる河川由来の自然堆積物層（第5b層）で構成され、土壌化が強く黒色を呈し、遺物が多く出土する遺物包含層である。調査区西壁断面では遺構埋土にこれに対応する層は認められるが、おもに調査区北西部にあたるC地区から連続する基盤層の旧地形が下がる部分に広がっていた。第6層は、弥生時代後期以前に堆積したとみられる河川堆積物層で、堆積物の供給に複数の間隙があり、上部に堆積したシルトが土壌化した層（第6-1a層・第6-2a層）とそれぞれの母材となる砂礫を主とする自然堆積物層（第6

ー1b層・第6ー2b層)で構成される。特に、調査区北西の第6ー2a層およびこれに対応すると考えられる第6a層は土壌化が強く黒色を呈する点特徴的である。調査区南側のそれより下層については、砂礫を主体とする旧河道の堆積物となっているが、激しい湧水のため把握することはできなかった。しかし、調査区の南半では、基盤層が南に下降する段丘崖が形成されており、基盤層の斜面に風化土または崩落土とみられる土が地形に沿って堆積し、その上部は土壌化して黒色を呈している。その上部にこれらの旧河道の堆積物が認められることから、段丘崖南側の基盤層直上の斜面崩落土等を第6層の最下層として認識した。第7層は、調査区西壁では明確に認識できなかったが、弥生時代以前に基盤層(地山層)の直上に堆積した砂礫を主体とし埋没中州を形成する河川堆積物(第7b層)で基本的に構成され、上部層の影響のため一部土壌化が進む層(第7a層)も調査区北側の一部では認められた。また、その下層には印南野台地を形成する岩盤層として大阪層群(神戸層群)が存在し、調査区南側の段丘崖に顕著に露出する。

調査区における旧地形は、現地形と同様に、調査区の東側の印南野台地から北西に派生する小尾根の裾が西に低く広がり、その南側は段丘崖となっており、その裾には埋没旧河道が存在する。そのため、調査区では概ね東側から北東側が高く、西側が低くなっており、段丘崖となる南側は大きく地形が下がる。また、調査区北西部はC地区と連続する旧河道が存在しているため基盤層が急激に低くなっており、北西方向に下がる地形となっている。そのため、後世の開発等によって土地が大きく削られた調査区東側では、第1層の直下に第7b層が堆積しており、第2層～第6層は調査区西部および南側に堆積している。特に、地山層が下がり、第7層が削られて大きく地形が下がる調査区西側および段丘崖の裾となる南側では第3～6層が厚く堆積する。また、第7層は、C地区から南側に連続しており、主に調査区北側中央から東部にかけて堆積し、東から延びる段丘裾の小尾根状地形の一部を形成している。

遺構の検出は、主に調査区北東側の旧地形が高い部分については主に第7b層の黄褐色土上面で行ない、第1面とした。ただし、それより上部の土壌層が堆積する調査区西端および、南側については、第3層最下層のマンガン・酸化鉄沈着層を鍵層として、遺物包含層である第4層除去面を第1面(上層遺構面)、同じく遺物包含層の第5層除去面を第2面(下層遺構面)とした。

第2節 遺構と遺物

1. 上層遺構面の遺構と遺物

(1) 概要

上層遺構面では平安時代後期～中世の遺構を検出した。調査区の中央には東西に溜池から流れる用水路が流れていることから、南北に分断されている。この用水路はC・D地区で検出された谷川の流路SR1が埋没した後の流路と考えられる。用水路の北側は更新世段丘の先端が伸びて、緩斜面をなしていたと考えられるが、耕作地の造成により段状に成形されていることから削平を受けている部分が多い。遺構が検出されているのは東部の一部と西端の地形の低い部分である。

用水路の南側は東から更新世段丘崖の南側に広がるB地区の北側に続く平地部で、B地区に引き続くように柱穴などの遺構がひろがっている。

(2) 遺構と遺物

① 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、E地区西端部で2棟、南東隅で1棟検出した。

SB1 (図版107 写真図版150・152)

用水路の南側で、E地区の西端で検出された。桁行2間(4.6m～4.9m)、梁行2間(3.9m～4.3m)の総柱建物である。建物の方位はN7°Eである。柱穴は直径40cm～20cmの円形で、深さは30cm～20cmである。柱穴から13世紀代の土師器鍋の破片が出土している。

SB2 (図版108 写真図版150・152)

用水路の北側、E地区の西端で検出された。桁行2間(2.3m)以上、梁行2間(2.8m)の東西棟の側柱建物で、西側は調査区外である。桁行の柱穴の間隔は北列と南列でかなり異なる。建物の方位はN2°Wである。柱穴は直径40cm～25cmの円形で、深さは50cm～10cmである。柱穴から須恵器杯B(870)、土師器小皿(871)、須恵器碗などが出土している。

【遺物】(図版156 写真図版258)

869は須恵器杯である。SP104から出土した。870は須恵器杯Bである。SP107から出土した。871は土師器小皿である。SP114から出土した。底部は回転系切りである。

SB3 (図版108 写真図版151・152)

E地区の南東隅で検出された。桁行2間(6.4m)、梁行1間(2.5m)の南北棟の側柱建物で、南側に隣接するB地区内では関連する柱穴は検出されていないことから、側溝内に桁行の西側の柱列が存在したと推定される。建物の方位はN45.5°Wである。柱穴は直径30cmの円形で、深さは20cm～15cmである。柱穴から土師器小皿(872)・托(873)が出土している。

【遺物】(図版156 写真図版258)

872は土師器小皿である。SP92から出土した。底部は回転系切りと見られる。873は土師器托である。SP92から出土した。表面は摩滅している。

② 柱穴

柱穴は、掘立柱建物跡が検出されたE地区西端部・南東隅と北東部の一部で検出されている。柱穴から出土した遺物は細片が多く、西端部で検出された柱穴から出土した一部のみ掲載する。その他、北東部で検出された柱穴からは12世紀後半頃の須恵器が比較的多く出土している。

【遺物】(図版156・190 写真図版258・298)

874は土師器小皿である。SP5から出土した。表面は摩滅している。875は須恵器杯Aである。SP10から出土した。底部は回転ヘラ切りである。876は須恵器杯Aである。SP117から出土した。底部は回転ヘラ切りである。877は須恵器小皿である。底部は回転系切りである。878は鉄かぶと形の土師器鍋である。SP185から出土した。体部外面にススが付着している。879は須恵器碗である。SP210から出土した。底部は回転系切りで、見込みに凹みが認められる。

M27は板状の銅製品であるが、用途は不明である。SP52から出土した。

③ 土坑

土坑は西南端付近と北東部で検出された。

SK12 (図版112 写真図版160)

調査区西南端に位置する。長0.8m、幅0.7mの不整楕円形で、深さは20cmである。

SK38 (図版112 写真図版160)

調査区西南端に位置する。長1.8m、幅0.9mの不整楕円形で、深さは20cmである。

SK135 (図版112 写真図版161)

調査区東北部に位置する。長2.0m、幅1.9mの不整方形で、深さは25cmである。12世紀前半の須恵器碗と律令期の土師器甕が出土している。

【遺物】 (図版156 写真図版258)

880は土師器甕である。体部は長胴気味で、口縁部はくの字に折れ曲がり、端部に面をもつ。881は須恵器碗である。底部は回転糸切りで、見込みに凹みが認められる。

④ 溝

溝は西端部で検出された。

SD19 (図版116 写真図版169・170)

調査区西南端で検出された南北方向の溝で、南側に隣接するB地区で検出されたSK400と同一の遺構と考えられる。長4.2m、幅は1.0m、深さ36cmを測る。南端付近では、粘土を貼り付けたようにみられる部分が認められた。埋土からは須恵器碗・台付碗・杯、土師器杯・碗とともに轆の羽口が出土している。須恵器碗には底部ヘラ切りのもの、土師器碗には底部ヘラ切りと糸切りの両方が認められる。

【遺物】 (図版156 写真図版259)

898は土師器羽口である。孔径は2.5cmで、先端は融解している。899は土師器杯である。底部は回転ヘラ切りである。900・901は土師器碗である。901は底部が回転糸切りである。902は灰軸陶器碗である。底部は回転糸切りで、輪高台は典型的な三日月形よりは湾曲が弱い。施釉はハケ塗りと思われる。黒釉90号窯式のなかでは後出的なものと考えられる。9世紀後半の時期である。

SD40 (図版116 写真図版170・171)

調査区西端で検出した。SD40は北西方向へ延びて、調査区の外へと続く。幅約5m、深さ約25cmを測り、幅に対して浅いため、落ち込み状の様相を呈する。第2面で検出したSD202の上部に位置しており、SD202の埋没後にできた産地に形成された遺構とみられる。溝の埋没後にはSX50およびSX60が形成される。溝の埋土からは9世紀から12世紀前半頃の土器と埴形埴が出土している。

【遺物】 (図版157・174・190 写真図版259・260・286・298)

903は土師器小皿である。底部は回転糸切りである。904は土師器皿である。表面は摩滅している。905～907は土師器杯である。905は底部が回転ヘラ切りとみられ、906・907は表面が摩滅している。908～910は土師器碗で、908・909は底部が回転ヘラ切りで、910は表面が摩滅している。911は土師器鍋である。表面は摩滅している。912は土師器甕である。913は土師器製塩土器である。白色砂粒を多く含む。914は須恵器皿である。底部は回転ヘラ切りと見られる。915・916は須恵器杯Aである。底部は回転ヘラ切りである。917～919は須恵器碗である。917は体部外面に沈線を描き、底部が回転ヘラ切りである。918は見込みに凹みを持ち、底部が回転糸切りである。919は底部が回転ヘラ切りである。920は須恵器壺である。底部に輪高台をもつ。921は須恵器捏鉢である。体部は丸みを持ち、口縁部は拡張せず、端部外面を強くくぼませている。

T55は丸瓦である。丸瓦部外面は横方向ナデである。

M30は埴形埴である。上部は船状に融解し、下部は砂などからまり、空隙が多い。

⑤ その他の遺構

その他には墓などの遺構と炉とみられる遺構が検出されている。墓に関連する遺構には木棺墓(SX170)と火葬跡(SX50・60)があり、炉状の遺構には鍛冶炉の可能性が考えられるSX62と炉状の土坑であるSX212・214がある。

SX50 (図版113 写真図版162・163)

調査区北西端で検出された。SX60上に設けられた火葬跡である。平面形は長方形を呈するが、北側は失われて確認できなかった。そのため、東西長軸1.15m、南北短軸は2.32mが残存し、高さは8cmを測る。遺構埋土には炭と焼土が含まれ、炭は遺構全体に及ぶ。炭の除去後、須恵器や瓦が出土している。

【遺物】(図版156・174・190 写真図版258・287・298)

882は土師器小皿である。底部は回転系切りである。883・884は須恵器碗である。883は見込みに凹みを持ち、底部が回転系切りである。

T58・T61は平瓦である。T58は凸面がほとんど無文で、大の字に似た形の特徴的な文様のタキ目が端部にみられ、離砂が付着している。T61は凸面が無文である。

M28は鉄釘である。

SX60 (図版114 写真図版164～166)

調査区北西端で検出された。SD40埋没後に設けられ、SX50が上に設けられている。平面形は長方形を呈し、南北長軸3.97m、東西短軸1.47m、残存高15cmを測る。遺構中央部の埋土からは被熱痕を有する粘土塊を検出した。被熱痕が底部側へ向くものが多いことから、壁面に貼り付けられた粘土が、被熱後に崩れたものと考えられる。出土遺物として粘土塊とともに須恵器碗などが出土し、粘土塊の下からは白磁碗が出土している。遺物からみるとSX50とは大きな時期差はない。

【遺物】(図版156 写真図版258・259)

885～889は土師器小皿である。底部は回転系切りである。890～892は土師器杯である。底部は回転系切りである。893は須恵器小皿である。底部は回転系切りである。894～896は須恵器碗である。見込みに凹みを持ち、底部が回転系切りである。897は白磁碗Ⅳ類である。12世紀前半の時期である。

SX62 (図版112 写真図版160・161)

調査区北西部で検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸0.61m、短軸0.47mを測る。埋土の黒褐色の細砂～中砂を除去すると、にぶい赤褐色の細砂～中砂の焼土が存在していた。この焼土層の上面からは硬化した面を確認できなかった。焼土層上面までの深さは4cmを測る。焼土層上面からは土師器片が出土している。周辺の遺構からは、椀形滓(M30)や羽口(898)などが見つかり、鍛冶炉の痕跡の可能性が推測される。

SX170 (図版115 写真図版151・167・168)

調査区東部の微高地上に位置する。墓壇の平面形は隅丸長方形で長軸2.15m、短軸1.04mを測る。断面は箱形を呈し、深さは9cmを測る。木棺の平面形は隅丸長方形で、長軸1.71m、短軸0.54mを測る。断面は箱形を呈し、深さは9cmを測る。出土遺物は墓壇から土師の細片が出土しており、時期は中世と考えられる。

SX184 (図版112 写真図版161)

調査区東端の高所部で検出された炉状の遺構である。長0.65m、幅0.4mの範囲で、赤褐色の被熱痕を含む層が認められ、その上に炭が薄く残っていた。炭混じりの土はその周囲の長1.1m、幅0.5mの範囲で確認された。赤褐色土層の部分で須恵器片が出土している。

SX212 (図版114 写真図版161・162)

調査区南西部で検出された炉状の土坑である。西辺を同じく炉状の土坑のSX214に切られている。平面形は方形を呈し、長軸1.04m、短軸0.86m、深さ12cmを測る。壁面には被熱痕がみられ、埋土には焼土は壁側に、炭は底付近の全体に堆積していた。埋土から回転ヘラ切りの須恵器底部が出土している。

SX214 (図版114 写真図版162)

調査区南西部で検出された炉状の土坑である。南東隅が炉状の土坑のSX212を切っている。平面形は方形を呈し、長軸1.02m、短軸0.58m、深さ11cmを測る。壁面に被熱痕がみられる部分はSX212よりやや少ないが、炭は底より少し上で多く堆積していた。埋土から土器細片しか出土していない。

2. 下層遺構面の遺構と遺物

(1) 概要

下層遺構面では弥生時代後期・末期の遺構を検出した。堅穴建物跡は調査区北端の東から延びる更新世段丘の北裾から埋没田中州にかけての位置で2基と、調査区南東隅の更新世段丘崖下の裾で1基存在し、西端ではC地区で検出されたSR1の古い流路(SR390)が南へ続き、蛇行して北東から南西に向かって流れている(SD204)。その流路の埋没後更新世段丘の南裾に沿って溝(SD202・222など)が設けられている。

① 堅穴建物跡

弥生時代後期・末期の堅穴建物跡が3棟検出されている。

SH65 (図版109 写真図版153～155)

調査区北西部で検出された堅穴建物跡で、北半はC地区で検出されている。建物跡の南西隅は落ち込みSX67を切っている。平面は長方形で、規模は東西4.8m、南北4.0m、深さ50cmである。南壁際中央部で土坑を検出した。平面は長方形に近い長楕円形を呈し、長径1.1m、短径60cm、深さ約25cmを測る。主柱穴などその他の屋内施設は検出されていない。

【遺物】(図版157 写真図版260・261)

922は南壁際土坑、923～925は埋土下半から出土した。922・923は弥生土器二重口縁壺である。縁帯部に櫛描波状文が巡らされている。924は弥生土器鉢である。体部は下膨れで、口縁部は弱く外反する。925は弥生土器高坏の脚部である。脚柱部が中実で、裾部が開いている。

SH201 (図版110 写真図版156・157)

調査区南東隅で検出した堅穴建物跡である。南に隣接するB地区まで建物の範囲が及んでいたと考えられるが、関連する遺構は検出できていない。段丘崖裾に寄せて造ったことから、平面が北西側の径の小さい不整形円形を呈すると考えられる。検出部の長径は約7.0mで、深さは10cm程度である。検出された主柱穴は3基で、本来は6～7基と推定できる。中央土坑は平面円形に近く、周囲に堤を盛り上げたもので、周堤は6cm前後の高さが遺存していた。中央土坑の直径は上端で約1.5m、深さは約50cmである。北東部の床面には貼床がなされた部分があり、少量の炭化材も検出されている。

中央土坑埋土から出土した炭化物のC14年代は1世紀後葉から3世紀前葉である。(第9章第4節)

【遺物】(図版157 写真図版260・261)

いずれも埋土から出土したものである。926は弥生土器小型器台である。二重口縁である。927・928は小型の弥生土器底部である。

SH230 (図版111 写真図版158・159)

調査区北東隅に位置する堅穴建物跡である。西方向に傾斜する緩斜面に構築されていたため、北西部の周壁が削平されているが、直径は8m前後である。床面中央のやや西寄りにやや歪な円形の中央土坑を検出した。直径約1mで、中央土坑から北方向に幅約40cmの排水溝が住居跡外まで延びている。深さは約25cmである。また、周壁近くの南部と北部には各1基の土坑があり、貯蔵穴の可能性もある。南側の土坑SK244は、長100cm、幅80cm、深さ40cmである。北側の土坑SK237は長130cm、幅70cm、深さ20cmである。主柱穴は5～6本と判断され、柱間は約2mであるが、排水溝両側の柱間は狭くなっている。埋土からは北東部を中心に土器が出土した。なお、堅穴住居跡は礫を多く含んだ黄色土を掘り込んでいるが、その層は北西部ではほぼ砂礫層となっていた。

【遺物】(図版157 写真図版260・261)

929はSK244、931はSK231、930は埋土から出土した。929は弥生土器甕である。くの字口縁で、端部がやや上につまみだされる。体部外面に平行タタキが施される。930は弥生土器の有段高杯である。931は弥生土器器台である。直線的に開く口縁で、縁部部に擬凹線が入れられている。

② 柱穴

下層ではほとんど柱穴は検出されていない。上層で検出された柱穴から出土した弥生土器を掲載する。

【遺物】(図版158 写真図版262)

937はSP36から出土した弥生土器底部である。底面に木葉痕が付き、ヘラ描き沈線が入れられている。938はSP84から出土した弥生土器鉢である。高い柱状の底部をもつ。

③ 溝・流路

流路は調査区西端で検出された。北に隣接するC地区のSR1の古い流路(SR390)が南へ続き、蛇行して北東から南西に向かって流れている(SD204)。溝はSD202・222などが更新世段丘の南裾に沿って検出されている。流路SD204の埋没後に設けられたものである。

SD202 (図版118～120 写真図版171～173)

更新世段丘の南裾に沿って検出された溝である。流路SR1から南側へ水を引き込む溝と考えられ、南側のB地区へ南折し、A地区まで続いている。SD202に隣接して断続的に検出されている溝はSD202に先行する溝の部分と思われる。溝の断面はV字形で、幅は約4.5～8mで検出面から砂礫層までの深さは約1.4mであるが、砂礫層はさらに下に続いていたことから、2m以上の深さになろう。埋土から弥生時代中期以降8世紀頃までの土器が出土するが、溝として機能したのは古墳時代後期までであろう。

【遺物】(図版160・161 写真図版265～268)

990・991は須恵器杯B蓋である。992は土師器製塩土器である。993は須恵器短頸壺である。996は須恵器大口壺である。994・995・997は須恵器甕である。993・995は下層から出土していることから、溝が機能していた最終の時期を示すものと考えられる。

998は弥生土器大口壺である。口縁部内面に2条の突帯と円形浮文、端面に波状文と円形浮文をもつ。弥生時代中期(Ⅲ期)の時期である。999は弥生土器長頸壺である。1000～1004は弥生土器甕である。体部外面に平行タタキが施されるものが多いが、1001はタテハケが施されている。1005は弥生土器器台である。大きく直線的に開く口縁で、口縁の端面に波状文をもつ。口縁端部の垂下部は剝離している。1006は弥生土器二重口縁壺の口縁部で、縁部部に櫛描波状文が入れられている。1007は弥生土器の脚台

部である。1008～1012は弥生土器の平底の底部である。

1013～1018は断面D付近で溝西部を別の溝として認識した部分で出土した土器である。1013・1014は土師器甕である。1013は口縁部が強く屈曲し、端面が上方を向いている。体部外面の肩部にヨコハケが施されている。1014は外反する口縁をもち、端面をはさんで細くしている。1015～1017は弥生土器底部である。底径が比較的小さいものが多い。1018は弥生土器高杯である。小さい碗形の杯部をもつ。弥生時代末期から明らかに古墳時代前期までくだるもの（1013）も含まれている。1019～1024は断面D付近で出土した土器である。1019は弥生土器二重口縁壺である。1020・1021は弥生土器甕である。口縁部はく字で、体部外面に平行タタキが施されている。1022・1023は弥生土器底部である。1022の底面の沈線は葉脈痕と見られる。1024は弥生土器高杯の脚柱部である。

SD203（図版121 写真図版173）

SD204の東肩を切って検出された南北方向の溝である。調査区北端まで延びているが、北側に隣接するC地区では対応する遺構は検出されていない。幅は60cm～40cm、深さは20cmである。

南辺部溝群（図版118～120 写真図版172・173・175・176）

SD202に近接して断続的に検出された溝で、SD202の続きと考えられるものも含まれている。

SD215・SD216・SD219はSD202の南側に位置する溝である。細い溝が複雑に流路を変えた痕跡と見られる。深さは15cm～20cmである。弥生時代後期から末期にかけての土器が出土している。

SD217はSD215・SD216・SD219の南に引き続く部分に位置する溝である。深さは30cmである。弥生時代末期の土器が出土している。

SD222・SD227はSD202の北側で検出された溝であるSD222がSD227を切っているが、それほど時期差はないようである。深さは30cm程度である。SD222の部分から弥生時代後期から末期にかけての土器が比較的多く出土している。

【SD215の出土遺物】（図版160 写真図版265）

979・980は弥生土器二重口縁壺である。979は縁帯部の上下縁に列点文を刻む。980は外反する縁帯部に櫛描波状文と竹管文が押された円形浮文をもつ。981・982は弥生土器甕である。短いく字口縁をもつ。

【SD217の出土遺物】（図版160 写真図版264・265）

983は弥生土器底部である。底径は比較的小さい。984は弥生土器脚部である。985は弥生土器甕である。口縁部下に穿孔されている。

【SD219の出土遺物】（図版160 写真図版265）

986は弥生土器底部である。

【SD222の出土遺物】（図版158・159 写真図版261～264）

940は弥生土器広口壺である。口縁部は体部からなだらかに湾曲して開く。941・942は弥生土器細頸壺である。943～950は弥生土器甕である。く字口縁で、体部外面に平行タタキが施されたものが多い。946は口縁部が内湾し、体部外面上半にタテハケが施されている。951・953は弥生土器鉢である。やや内湾する口縁をもつ。952は弥生土器有孔鉢である。954～957は弥生土器高杯である。954・955は外反口縁高杯である。958～971は弥生土器底部である。972・973は弥生土器甕である973は口縁部下に穿孔されている。

【SD227の出土遺物】（図版160 写真図版265）

987は弥生土器底部である。

【SD229の出土遺物】(図版160 写真図版265)

988・989は弥生土器底部である。底径は比較的小さい。

SD204・SX235 (図版117 写真図版174)

SD204は調査区西端で検出された流路である。北に隣接するC地区のSR1の古い流路(SR390)が南へ続き、蛇行して北東から南西に向かって流れている。幅2.4mで、断面V字形で切れ込み、深さは1.3mである。東岸付近の上層で弥生時代後期の土器が溜まって出土した部分はSX235として取り上げている。その他、埋土の上層で主に弥生時代後期から末期にかけての土器などが出土している。

【SD204の出土遺物】(図版160 写真図版264・265)

いずれも上層から出土したものである。974は土師器甕である。古墳時代の長胴甕とみられる。975は弥生土器甕である。口縁端面に擬凹線をもつ。976は弥生土器碗形高杯である。977は弥生土器甕である。978は弥生土器底部である。

【SX235の出土遺物】(図版158 写真図版261・262)

932は弥生土器広口壺である。口縁端面に擬凹線をもち、体部外面はヘラミガキが施されている。表面は赤褐色で、化粧土が塗られているようである。933は弥生土器甕である。外反口縁である。934は弥生土器の外反口縁高杯である。935・936は弥生土器底部である。935は体部外面にヘラミガキ、936は体部外面に平行タギが施されている。

3. 包含層出土の遺物

奈良・平安時代の土壌層と考える4a層や弥生時代後期～古墳時代初頭の土壌層と考える5a層から出土したものが比較的多い。

【遺物】(図版162～167・174・175・183・184・186・190 写真図版269～279・286～288・294・295・298)

1025・1026は土師器小皿である。手づくね成形である。1027は土師器皿である。手づくね成形である。1028・1029は土師器杯である。底部は回転糸切りである。1030は土師器底部である。高い輪高台をもつ。1031・1033・1034は土師器羽釜である。1031の鏝は痕跡程度の高さしかない。1033・1034は大型の羽釜である。高く上方へ延びる口縁の外面に鉄釜を模倣した凹凸を巡らす。1032は須恵器甕である。口縁部は短く外反する。1035は土師器甕である。砲弾形の体部をもつと思われる。1036は土師器甕である。1037・1038は須恵器杯身である。1037は底部に回転ヘラケズリが施されている。1039・1041は須恵器杯B蓋である。1040は須恵器蓋である。大型の皿の蓋と思われる。1042・1043・1045・1050・1051は須恵器杯Aである。1042は内外面に墨跡が認められる。1043・1050・1051は底部回転ヘラ切りである。1045は内面に墨跡が認められる。1044は須恵器壺の底部である。外面は回転ヘラケズリが施されている。1046・1049は須恵器小皿である。底部は回転糸切りである。1047は須恵器皿である。1048は須恵器台付皿である。杯部底面は回転ヘラ切りである。1052・1053は須恵器杯Bである。1054は須恵器杯である。口径が大きく、深い杯Bと思われる。1055は須恵器壺の底部である。高台内に一文字状のヘラ描き沈線が入れている。内面は被熱により爆れている。1056は須恵器碗である。輪高台をもつ碗で、底部は回転ヘラ切りである。器壁が厚い。1057は須恵器底部である。輪高台をもち、底部は回転ヘラケズリが施されている。1058は須恵器碗である。輪高台をもち、底部は回転ヘラ切りである。体部外面に段状の沈線をもつ。1059は須恵器台付皿である。1060は須恵器壺である。1061～1069は須恵器碗である。底部は回転糸切りである。1070～1072は須恵器鉢である。1070は端部が拡張せず、端面は外傾する。1071・1072は端部

外縁が丸みをもってふくらんでいる。1073は須恵器甕の体部である。外面に松葉の付着痕が認められる。1074・1075は口縁部に小さい玉縁をもつ白磁碗Ⅱ類である。1076・1077・1079・1080は口縁部に玉縁をもち、低いケズリ出し輪高台の白磁碗Ⅳ類である。1078は細く高いケズリ出し輪高台の白磁碗Ⅴ類である。1081は白磁皿である。1082は内面に草花文をもつ龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2類である。1083は実測図上面側が焼成により酸化しているが、下面側は酸化が弱く黒灰色～暗灰色を呈している。表面に指頭で押したような凹みが多く認められる。炉壁の可能性も考えられるが用途は不明である。1084は須恵質陶棺である。棺身上端部の破片である。縦方向の幅広の突帯をもち、受部面が水平に短く突出する。外面はナデ、内面はハケが施されている。C地区で同一個体の別破片(778)が出土している。

1085は弥生土器壺である。体部に2条の突帯を巡らす。上段の突帯はキザミ目突帯である。1086は弥生土器手埴形土器である。覆部の口縁部の外端にキザミ目が入れられている。1087は弥生土器壺である。体部外面に櫛描直線文と櫛描波状文をもっている。1088～1092は弥生土器広口壺である。1088は端面に凹線をもつ。1093～1095は弥生土器長頸壺である。1096～1099は弥生土器二重口縁壺である。1097は口縁部端面と縁部下縁にキザミ目をもつ。1098は表面の摩滅が著しいが、縁部部に波状文と竹管文が押された円形浮文をもつ。1099は縁部部に櫛描波状文と縁部下縁にキザミ目をもつ。1100は弥生土器短頸壺である。口縁端部がやや内湾する。1101は弥生土器壺である。球形の体部で、底部は小さい。1102～1123は弥生土器甕である。くの字の単純口縁で、体部外面に平行タタキが施されるものが多い。1113・1115は体部外面に平行タタキ後タテハケが施されている。1118～1120は口縁端部が二重口縁状につまみ出されている。1124～1158は弥生土器底部である。1156のように底径の小さいのはあるが、丸底のものは認められない。1158は底部に棒状の圧痕が認められる。1159・1160は弥生土器鉢である。1161～1170は弥生土器有孔鉢である。1171～1182は弥生土器高杯である。1171～1178は外反口縁高杯である。1183・1184は弥生土器脚台である。1185・1186は弥生土器蓋である。1187は弥生土器手埴形土器である。1188・1189は弥生土器蛸壺である。口縁部直下に横長楕円形の穿孔をもつ。1190は土師器製埴土器の底部である。1191はミニチュア土器である。底部は平底である。1192は土師器蛸壺である。釣鐘形の蛸壺である。

T56は丸瓦である。凸面は縄目タタキ後横方向ナデで、凹面は糸切り痕と布目が認められる。T57・59・60は平瓦である。凸面のタタキ目はT57が平行タタキ、T59が縄目タタキで、T60は無文(板ナデ)である。

S1は凸基式の石礎である。サヌカイト製である。S44は一石五輪塔である。竜山石製である。S45は石仏である。舟形の平面に地藏菩薩の立像が彫り込まれている。右手に錫杖、左手に宝珠をもち、蓮華座の上に立っている。S48は石臼の上臼である。竜山石製である。スリ目は使用によりかなりすり減っている。

M29は用途不明の鉄製品である。円盤状の手板に、リング状の鉄板を重ねたような形状をしている。

第3節 小結

(1) 上層遺構面

本来は更新世段丘が張り出した部分にあたることから最も安定した地形と考えられるが、溜池の用水路や耕作地の造成による削平のため遺構の残存状況は良くない。

上層遺構面は平安時代の遺構が検出されている。

南西隅では南北方向の短い溝SD19が検出されている。溝埋土から9世紀後半の灰軸陶器底部（902）が出土している。近接する炉状遺構SX212・SX214も同時期のものとみられる。

西端部ではSD202の埋没後溜り状になり（SD40）、完全に埋没したのち、12世紀前半に火葬跡SX50・60が設けられている。その後、掘立柱建物SB2が建てられている。東北部では12世紀前半のSK135とおおむね同時期とみられる木棺墓SX170が検出されている。

（2）下層遺構面

弥生時代後期後半～末期の竪穴建物跡、溝などが検出されている。竪穴建物跡は3棟検出され、2棟（SH201・SH230）が後期後半、1棟（SH65）が末期と考えられる。SH201・SH230は平面円形で、SH65は平面方形である。溝SD204はC地区より南側に向かって流れ、更新世段丘の端に当たって西に抜けていたと思われる。弥生時代後期まで流れていたようである。更新世段丘の段丘崖の南側に沿って弥生時代後期後半に設けられた溝は当初SD216の部分から東に向かって流れていたが、段丘先端を開削し、西北方のSD202の部分からの流れに代わっている。この部分は古墳時代後期まで流れていたようである。

第8章 宗佐南遺跡A・B地区

第1節 本発掘調査区の層序と遺構面

宗佐南遺跡は、加古川左岸中流部に位置し、埋没した扇状地が段丘化した完新世段丘に立地し、旧中州と旧河道が埋没している。宗佐遺跡の南方向200mに位置し、調査区は南側のA地区とA地区の北側中央に隣接するB地区に分かれる。

宗佐南遺跡の基本層序 (図版123 写真図版188)

宗佐南遺跡の土層の基本層序は、調査面の下層まで含めて13層を確認しており、ほぼ平坦で水平堆積をしている。

第1層は現代の擾乱、第2層は現代の盛土、第3層は盛土が行われる以前の耕作土である。第4層は灰黄色の細砂～極細砂の耕作土であり、上部に鉄分を多く含んでおり第3層の床土である。第5層はにぶい黄褐色の細砂～極細砂でマンガン斑を含んだ水田土壌層である。第6層はにぶい黄褐色の細砂でマンガン斑を含んだ水田土壌層である。第7層は灰黄褐色の細砂～極細砂で第8層・第9層の水田面に堆積層で、継続して水田耕作を行っていた状況が読み取れる。

第8層は第9層を盛上げた畦畔であり、第9層は褐色のシルト質極細砂～極細砂で鉄分とマンガン斑を多く含んだ水田土壌層である。第10層は黒褐色のシルト質極細砂で水田土壌の基盤となっている。

第11層は灰白色極細砂の自然堆積物層である。

第12層は褐色の極細砂であり、第13層は黄灰色の極細砂の自然堆積物層であり、以下は沖積地の自然堆積層である。

第13層以下は砂礫層で第5層まで噴き上がった噴砂の痕跡を確認できた。また、後述する下層遺構の柱穴様遺構の埋土も噴砂でラミナ状の堆積をしていた。

水田土壌層の1層上から出土した炭化物のC14年代は2σ 暦年代範囲1452calAD-1522calAD(65.6%)・1578calAD-1624calAD(29.9%)である(第9章第4節参照)。

第2節 遺構と遺物

1. A地区の遺構と遺物

(1) 上層遺構面の遺構と遺物

遺構は水田面を覆う第7層上面で検出した柱穴様の遺構である。調査区中央部分にのみ調査区に直交する方向に疎らに分布しており、25基検出(調査)し、当初は柱穴痕跡として調査を進めていった。これ以外にも同様の痕跡があったが、不明瞭なため調査しなかったものも存在する。これらの柱穴様の遺構で構成する掘立柱建物跡は確認できなかった。遺構としたものは直径が25cm～45cmの円形である。一段掘削で柱痕跡の関係を確認しようとしたが、不明瞭なものが多かったため、断割して断面を観察した。

一様に最深度は堅い礫層上面で止まっている。深さは34cm～48cmある。また断面形状は逆三角形、立体復元推定すると逆円錐形状をなすものがP2・P3・P4・P7・P11・P12・P15・P16・P20・P22・P24・P27と多く、最下点には鉄分が沈着しているものが多い。

以上断割の観察から柱穴様の遺構としたものには、柱痕跡は残っていないかった。以下、個別の観察を記す。

P2は垂直に断割ったところ、噴出源点と噴出孔が斜めになっており、途中の堆積層境で横に砂が走っていることが観察できる。また上層のシルト層にも水平方向のひび割れがみられる。

P3・P4・P22は明瞭な噴砂は吹き上がっていないが、途中のシルト層を巻き込んでラミナ化している様子が見られる。なお、P4は左側に縦・横・斜の液状化裂がみられる。

P6は上層のシルト層にも水平方向のひび割れがみられる。

P7は一度噴出した噴砂が、落ち込んで堆積層が乱れた痕跡を明瞭に見ることができる。

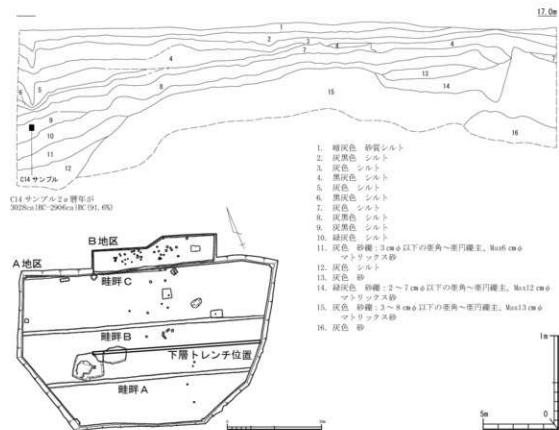
P11・P12・P15も一度噴出した噴砂が、堆積層とともに攪拌されてから落ち込んだ痕跡を明瞭に見ることができる。

P16は砂礫層と黒色シルト層の間の白色シルト層の塊も合わせて吹き上がって攪拌されている様子が見られる。P20は1点であるが小礫が吹き上がっている。

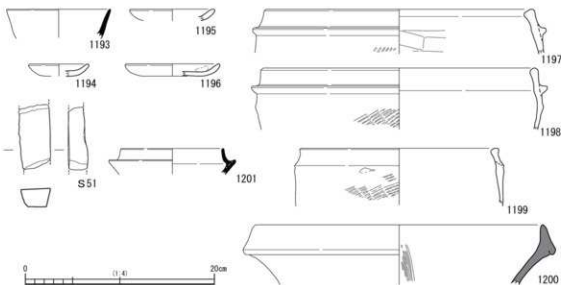
P22は一度右手から噴出したのち、左手から重複するように吹き上がってラミナ化している。

P24は一度噴出した噴砂が、堆積層とともに攪拌されてから落ち込んだのち、噴砂砂裂痕跡が明瞭に見ることができる。P27はP25と砂裂痕跡も合わせて複雑に噴出している。P27左手には小礫が上部まで吹き上がっている。

以上、断割して断面観察した結果、地震による液状化の噴砂孔と判断した。本来はさらに上層の第6層上面で検出できた可能性が高い。



第6図 宗佐南遺跡A地区下層トレンチ平面図・断面図



第7図 宗佐南遺跡A・B地区の出土遺物

水田土壌層を覆う耕作堆積層および柱穴様噴砂孔検出時に土師器小皿や羽釜や備前焼描鉢が出土している。

【遺物】(第7図 写真図版299)

1193は水田土壌、1194～1200は水田土壌を覆う層から出土したものである。1193は須恵器杯の口縁部である。1194～1196は土師器小皿である。手づくね成形で、1196は口縁部が歪んでいる。1197～1199は土師器羽釜である。体部外面に平行タタキが施されている。1197・1198は鐏が断面三角で、1199は鐏が退化し段状になっている。時期は1197・1198が15世紀前半、1199が16世紀中頃である。1200は備前焼描鉢である。口縁の縁帯は上方へ高く拡張する。時期は15世紀後半である。S51は砂岩製の砥石である。表面と片側面に使用面が認められる。

(2) 下層遺構面の遺構と遺物

下層遺構面を覆う第7層を除去し、水田面と水田畦畔を3条確認した。水田畦畔3条は南から畦畔A、畦畔B、畦畔Cと呼称した。畦畔Aと畦畔Bについては全体の幅は調査できたが、畦畔Cは調査区北端で検出したため幅は確認できなかった。調査区内で検出した畦畔はいずれも直線で、延長は畦畔Aが43m、畦畔Bが51m、畦畔Cが30mであるが、延長方向の端部はいずれも検出できていない。畦畔間の間隔は畦畔Aと畦畔B、畦畔Bと畦畔C、いずれも芯々約11mである。畦畔Aと畦畔Bの幅は1.0m前後であり、高さは25cm前後の断面形が半円形をしている。水田畦畔の方向は東西方向で北から71度、西に振っている。水田畦畔で区画された水田面の標高は16.85m前後で高低差は認められない。延長方向の端部を検出していないため一区画の面積は明らかではないが、調査面積は調査区南端と畦畔A間の水田①は315㎡、畦畔Aと畦畔B間の水田②は470㎡、畦畔Bと畦畔C間の水田③は515㎡である。

水田土壌層からは、須恵器杯1193が出土しているほか、下層から時期不明の土師の小片が出土している。

2. B地区の遺構と遺物

(1) 上層遺構面の遺構と遺物

柱穴37基を検出した。調査区中央に集中する傾向にあるが、これらの柱穴で構成する掘立柱建物跡は復元できなかった。柱穴は直径が25cm～45cmの円形で、深さは35cm～52cm、下部は堅い礫層上面まで掘っているものもある。柱穴内の埋土は、P3やP36のように柱穴底面の礫層から噴き上がったシルトから細砂のラミナで、柱底が残らないものと、SP11・SP31のように埋土にシルトや細砂のラミナが含まれるが柱痕が認められるものがある。礫層から噴き上がりのあるものはA地区と同様に噴砂孔の可能性がある。P11の埋土からは時期不明の土器片しか出土していない。埋土の状況からA地区の柱穴と同じ平安時代～鎌倉時代に属するものと考えられる。

調査区東壁で確認できた畦畔盛土は、平面的には斑鉄の沈着の帯としてしか認識できず、土質の違いから畦畔として検出できなかった。

なお、第3層上層掘削時には平安時代～鎌倉時代に帰属する須恵器の破片が僅かであるが出土している。

(2) 下層遺構面の遺構と遺物

畦畔を検出した。畦畔は、A地区の畦畔Cの延長上にあり、同一遺構である。畦畔の高さは、北側肩部分で18cm前後、A地区検出の北側畦畔の右肩部も含めた幅は約1mである。

水田土壌・水田面から遺物は出土していない。

【遺物】(第7図 写真図版299)

1201はP18から出土した須恵器杯身である。底面には自然軸が掛かる。時期は6世紀後半である。

第3節 小結

宗佐南遺跡は、2面の遺構を調査した。上層では合わせて遺構検出面から同時期の遺物が出土していることから、これらの噴砂孔の時期は、室町時代以降に比定することができる。室町時代以降と考えられる柱穴様の遺構群を検出・調査したが掘立柱建物跡は確認できなかった。これらの柱穴様の遺構群の断割調査を行い、断面観察を行ったところ、地震に伴う液状化の噴砂孔であると結論づけた。これらの噴砂孔が分布する範囲は下層の断割調査によると礫層が盛り上がっている地点であり、加古川左岸の段丘に平行している。今後周辺の調査で同様の痕跡が見つかる可能性が高い。

下層で検出した水田は、調査地点周辺の主要地方道宗佐土山線以東の低地で最近の開発が行われるまで表層に残っていた畦畔痕跡と一ほぼ致する。調査した水田構築の時期については水田土壌から古代の須恵器が出土しているが、水田という性格上、特定はできない。しかし、平坦地に作った水田であり、畦畔間隔が約11mの等間隔であることから古代の条里地割に関する畦畔の可能性が高い。この畦畔は1町(約109m)四方の坪を縦に10等分した長地型の地割の一部であると考えられる。畦畔の方位は北から71度、西に振っており、経線の方角はN19°Eとなる。加古郡条里の主要部分が古代山陽道を基準としたN44°Eの条里地割が広がっている。宗佐周辺では加古川の氾濫で乱れている部分が多いが、正方位やN19°Eの地域が存在しており、施工時期などの違いや里単位によって基準が異なったことが考えられる。

第9章 自然科学的分析

第1節 転用硯付着の赤色顔料の蛍光X線分析

1. はじめに

宗佐遺跡A地区から出土した緑釉素地の碗もしくは皿(76)の内面は、転用硯の使用により研磨され平滑になっている。この平滑な面には研磨時に生じたキズや胎土の空隙があり、その部分に磨られた朱墨の赤色顔料が鮮やかに残っている(巻頭図版10)。このうち1か所について蛍光X線分析を実施した。



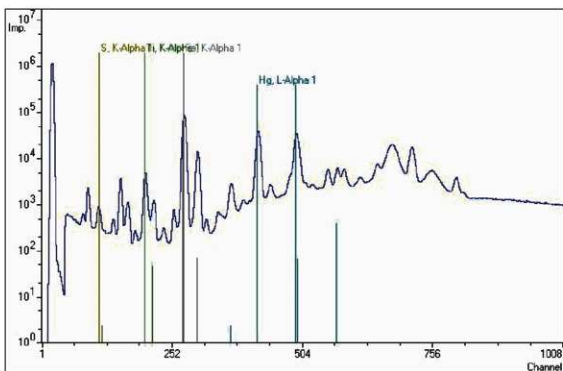
第8図 赤色顔料の測定箇所

2. 試料の分析方法

兵庫県立考古博物館が保有する蛍光X線分析はスペクトロ社製エネルギー分散型蛍光X線分析装置M I D E X - Mを用いて行った。検出器はベルチエ冷却SDD(液体窒素不要)である。

3. 結果

鉄Feに次ぐ強い反応として水銀(Hg)が検出されたことから、付着する赤色顔料は水銀朱と考えられる。



第9図 赤色顔料の蛍光X線スペクトル図

第2節 宗佐遺跡出土の貝類同定

三谷 智広（パレオ・ラボ）

1. はじめに

兵庫県の宗佐遺跡から出土した貝類の同定結果を報告する。

2. 試料と方法

試料は、宗佐遺跡のC地区のSH156の東側に位置する暗渠から出土した貝類である。暗渠の時期は、近世と考えられている。肉眼で試料を観察し、現生標本との比較により、部位と分類群の同定を行った。

3. 結果

同定結果を表1に示す。C地区の暗渠から出土したのは、アカニシ（*Rapana venosa*）であった。殻軸を中心に残存しており、螺塔や体層部分は破片となっている。1個体分によ来すると考えられる。アカニシは、水深30m以浅の砂泥底に生息する。食用となる貝類のため、食用として利用された後に廃棄されたと考えられる。

表1 宗佐遺跡出土の貝類

試料番号	地区	遺構	層位等	分類群	左右	部分	状態	点数
1	C	暗渠003	—	アカニシ	—	殻軸	破片	15

参考文献

奥谷喬司編（2000）日本近海産貝類図鑑。1173p。東海大学出版会。



図版1 宗佐遺跡出土の貝類 1. アカニシ（C区暗渠003出土）

第3節 宗佐遺跡の樹種同定

バリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

宗佐遺跡（加古川市八幡町宗佐に所在）では、弥生時代後期～古墳時代初頭の堅穴住居跡や溝、奈良時代～平安時代初頭、平安時代後期～鎌倉時代、戦国時代の遺構・遺物が確認されている。

本分析調査では、奈良時代～平安時代初頭の柱材及び建築部材、中世の建築部材について樹種同定を実施し、用材選択や古植生に関する資料を作成する。

2. 試料

試料は、奈良時代～平安時代初頭の柱材10点と建築部材1点、中世の建築部材4点の合計15点（試料番号1～15）である。

3. 分析方法

剃刀を用いて木口（横断面）、柃目（放射断面）、板目（接線断面）の3断面について徒手切片を作製する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）やRichter他（2006）を参考にする。

4. 結果

樹種同定結果を表1に示す。柱材および建築部材は、針葉樹4分類群（マツ属複雑管束亜属、トウヒ属、ヒノキ、スギ）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複雑管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・トウヒ属 *Picea* マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、柔細胞、放射仮道管、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。柔細胞の細胞壁は厚く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。放射仮道管の有縁壁孔のフチは主としてトウヒ型。分野壁孔はトウヒ型で、1分野に3～6個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分

番号	処理番号	報告番号	器種	地区	遺構	層位	時期	樹種	備考
1	2	W7	柱根	A区	SP270		奈良～平安初頭	ヒノキ	SB1の柱穴
2	1	W6	柱根	A区	SP24		奈良～平安初頭	ヒノキ	SB1の柱穴
3	10	W5	柱根	A区	SP22		奈良～平安初頭	ヒノキ	SB1の柱穴
4	3	W4	柱根	A区	SP19		奈良～平安初頭	ヒノキ	SB1の柱穴
5	11	W8	柱根	A区	SP31		奈良～平安初頭	ヒノキ	SB1の柱穴
6	7	W3	柱根	A区	SP12		奈良～平安初頭	ヒノキ	SB1の柱穴
7	6	W2	柱根	A区	SP10		奈良～平安初頭	ヒノキ	SB1の柱穴
8	9		柱根	A区	SP21		奈良～平安初頭	ヒノキ	SB1の柱穴
9	12	W1	柱根	A区	SP1		奈良～平安初頭	ヒノキ	SB1の柱穴
10	5		柱根	A区	SP18		奈良～平安初頭	ヒノキ	SB1の柱穴
11	20	W11	建築部材	A区		灰色砂礫層	中世	ヒノキ	
12	19	W10	建築部材	A区		灰色砂礫層	中世	トウヒ属	
13	18	W12	建築部材	A区		灰色砂礫層	中世	スギ	
14	21	W13	建築部材	A区		灰色砂礫層	中世	マツ属複維管束亜属	
15	16		建築部材	A区		暗褐色砂層	奈良～平安初頭	マツ属複維管束亜属	

表1 宗佐遺跡の樹種同定結果

野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・スギ *Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don ヒノキ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

5. 考察

柱材および建築部材は全て針葉樹材であり、4分類群に同定された。各分類群の材質等についてみると、マツ属複維管束亜属は、本州ではアカマツまたはクロマツである。二次林や海岸砂丘等に生育する常緑高木であり、木材は軽軟な部類に入るが、強度と保存性は比較的高い。トウヒ属は、山地に生育する常緑高木である。木材は、軽軟な部類に入るが、強度と保存性は低いとされる。ヒノキは、山地・丘陵地に生育する常緑高木である。木材は、木理が通直で割裂性や耐水性が高い。スギは、沖積地や谷筋等に生育する常緑高木である。木材は、木理が通直で割裂性が高い。

時期別・器種別にみると、奈良時代～平安時代初頭の柱材は、いずれも掘立柱建物跡（SB1）を構成する柱材であり、全てヒノキに同定された。この結果から、柱材として、耐水性の高い木材の利用が推定される。一方、奈良時代～平安時代初頭の建築部材はマツ属複維管束亜属に同定され、柱材とは異なる樹種の選択・利用が推定される。

伊東・山田（2012）のデータベースによれば、加古川市を含む播磨地域では、八反田遺跡と吉田南遺跡において、奈良時代～平安時代の柱材について樹種同定が実施されている。それらの結果を見ると、八反田遺跡の奈良時代とされる柱材10点は全てヒノキ、平安時代とされる柱材1点がカヤ、吉田南遺跡の奈良時代後半とされる柱材3点はヒノキ1点とコウヤマキ2点にそれぞれ同定されている。ヒノキの利用が多い結果は、今回の結果とも整合的である。

中世の建築部材4点は、マツ属複維管束亜属、トウヒ属、ヒノキ、スギに同定され、様々な種類の針葉樹材が利用されていたことが推定される。種類・材質の違いは、用途・機能の違いを反映している可能性がある。

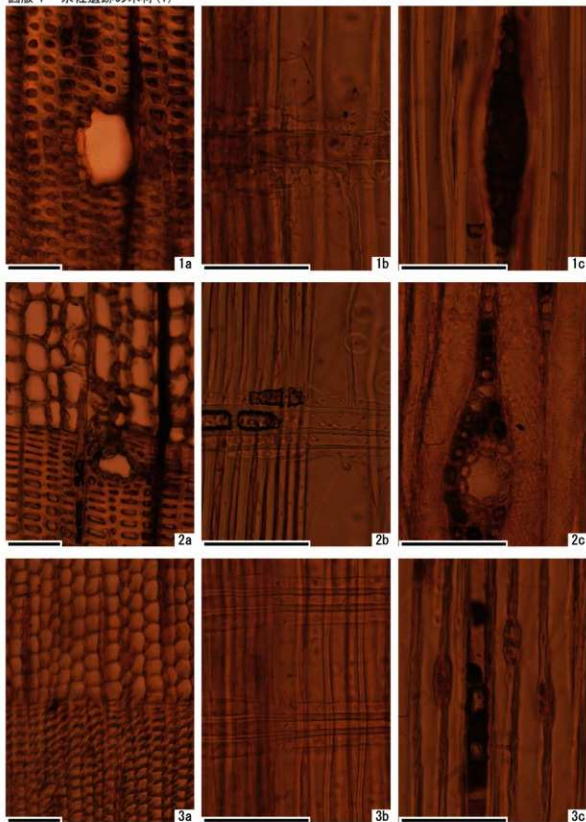
伊東・山田（2012）のデータベースによれば、播磨地域における中世の建築部材では、ヒノキが柱材、肘木、高欄の斗束に利用された例がある。一方、他の3分類群については、建築部材として利用された

例が確認できない。なお、建築部材以外では、マツ属複雑管束重属は井戸部材や杭、スギは井戸部材や板材に利用された例がある。一方、トウヒ属については、兵庫県内では旧石器時代の自然木に確認された例はあるが、縄文時代以降の木製品に確認された例は報告されていない。トウヒ属が他の3分類群に比べて、より高い山地に生育する種類である点も含めると、当該期における木材の入手と利用を考える上で興味深い結果である。

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 III. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久 (編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース, 海青社, 444p.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p.

図版 1 宗佐遺跡の木材(1)



1. マツ属複維管束亜属(試料番号15)

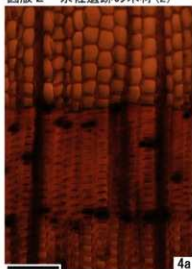
2. トウヒ属(試料番号12)

3. ヒノキ(試料番号8)

a: 木口, b: 柱目, c: 板目

各写真のスケールは0.1mm

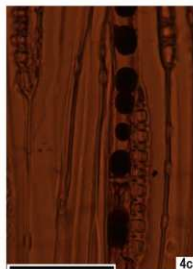
図版 2 宗佐遺跡の木材(2)



4a



4b



4c

4. スギ(試料番号13)

a:木口, b:柱目, c:板目

各写真のスケールは0.1mm

第4節 宗佐遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）（1）

（株）加速器分析研究所

1. 測定対象試料

宗佐遺跡（宗佐南遺跡含む）の測定対象試料は、土坑等から出土した炭化材9点である（表1）。

2. 化学処理工程

- （1）メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- （2）酸-アルカリ-酸（AAA: Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l (1 M) の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001 Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AaA」、1 M未満の場合には「AnA」と表1に記載する。
- （3）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- （4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- （5）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- （6）グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3. 測定方法

加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、14Cの計数、13C濃度（13C/12C）、14C濃度（14C/12C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxII）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4. 算出方法

- （1） $\delta 13C$ は、試料炭素の13C濃度（13C/12C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- （2）14C年代（Libby Age: yrBP、表1）は、過去の大気中14C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0 yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用し、 $\delta 13C$ によって同位体効果を補正する（Stuiver and Polach 1977）。14C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、14C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- （3）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の14C濃度の割合である。pMCが小さい（14Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（14Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値も $\delta 13C$ によって補正されている（表1）。
- （4）暦年較正年代（または単に較正年代）とは、年代が既知の試料の14C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の14C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（ $1\sigma=68.3\%$ ）あるいは2標準偏差（ $2\sigma=95.4\%$ ）で表示される。グラフの縦軸が14C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プロ

グラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない14C年代値である(表2の「暦年較正用(yrBP)」)。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20較正曲線(Reimer et al. 2020)を用い、OxCalv4.4較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正の結果を表2(1 σ ・2 σ 暦年代範囲)に示す。暦年較正年代は、14C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。今後、較正曲線やプログラムが更新された場合、「暦年較正用(yrBP)」の年代値を用いて較正し直すことが可能である。

5. 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料9点のうち、試料3、4、9を除く6点(試料1、2、5~8)の14C年代は、1940 $\pm$ 20yrBP(試料6)から1880 $\pm$ 20yrBP(試料1)の間にまとまる。暦年較正年代(1 σ)は、最も古い試料6が33~124cal ADの間に2つの範囲、最も新しい試料1が130~205cal ADの間に2つの範囲で示され、弥生時代後期頃に相当する(小林2009)。

その他の試料3点の14C年代は、試料3が1340 $\pm$ 20yrBP、試料4が910 $\pm$ 20yrBP、試料9が380 $\pm$ 20yrBPである。暦年較正年代(1 σ)は、試料3が654~675cal ADの範囲、試料4が1049~1202cal ADの間に3つの範囲、試料9が1459~1615cal ADの間に2つの範囲で示される。

今回測定された試料はすべて炭化材で、樹皮を確認できなかった。このため、以下に記す古木効果を考慮する必要がある。

樹木は外側に年輪を形成しながら成長するため、その木が伐採等で死んだ年代を示す試料は最外年輪から得られ、内側の試料は年輪数の分だけ古い年代値を示す(古木効果)。今回測定された試料は樹皮が残存せず、本来の最外年輪を確認できないことから、測定された年代値は、その木が死んだ年代よりも古い可能性がある。

また、試料1、2、5~8が含まれる1~3世紀頃の暦年較正に関しては、これまで北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘があった(尾寄2009、坂本2010など)。2020年に更新された較正曲線IntCal20(Reimer et al. 2020)では、新たに日本産樹木のデータが採用された結果、この範囲の較正年代値が日本産樹木の測定値に近づいた。系統的に認められる差異の原因究明を含め、今後も関連する研究の動向を注視する必要がある。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 337-360
- 小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散、西本豊弘編、新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代、雄山閣、55-82
- 尾寄大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代、設楽博己、藤尾慎一郎、松木武彦編弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭、同成社、225-235
- Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), *Radiocarbon* 62 (4), 725-757
- 坂本 悠 2010 較正曲線と日本産樹木-弥生から古墳へー、第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集、(株)加速器分析研究所、85-90
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-363

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 、 ^{14}C 年代 (Libby Age)、pMC)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-240262	1	地区:B 遺構:SH1022 1区 下層 焼土内	炭化材	AAA	-28.55 $\pm$ 0.16	1,880 $\pm$ 20	79.14 $\pm$ 0.23
IAAA-240263	2	地区:B 遺構:SK83 焼土内	炭化材	AAA	-29.03 $\pm$ 0.15	1,890 $\pm$ 20	79.01 $\pm$ 0.23
IAAA-240264	3	地区:B 遺構:SK2281	炭化材	AAA	-27.18 $\pm$ 0.17	1,340 $\pm$ 20	84.61 $\pm$ 0.23
IAAA-240265	4	地区:B 遺構:SK2307	炭化材	AAA	-26.57 $\pm$ 0.17	910 $\pm$ 20	89.30 $\pm$ 0.24
IAAA-240266	5	地区:B 遺構:SK2311	炭化材	AAA	-29.77 $\pm$ 0.21	1,910 $\pm$ 20	78.84 $\pm$ 0.22
IAAA-240267	6	地区:C 遺構:2C 376SK(193SH2区) 土器 S-4	炭化材	AAA	-26.89 $\pm$ 0.17	1,940 $\pm$ 20	78.55 $\pm$ 0.23
IAAA-240268	7	地区:D 遺構:C2 165SH4区 SP	炭化材	AAA	-27.13 $\pm$ 0.19	1,900 $\pm$ 20	78.90 $\pm$ 0.22
IAAA-240269	8	地区:E 遺構:E-8 SH201 中央土坑	炭化材	AAA	-31.47 $\pm$ 0.17	1,920 $\pm$ 20	78.75 $\pm$ 0.23
IAAA-240270	9	地区:赤佐南 遺構:3D 畦畔 AB の間水田土壌の1層上	炭化材	AAA	-29.05 $\pm$ 0.18	380 $\pm$ 20	95.40 $\pm$ 0.25

[IAA 登録番号: #C630]

表2 放射性炭素年代測定結果 (暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代) (1)

測定番号	試料名	暦年較正(yrBP)	較正条件	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
IAAA-240262	1	1,879 $\pm$ 22	OxCal v4.4 IntCal20	130calAD - 145calAD (15.5%) 154calAD - 205calAD (52.8%)	88calAD - 92calAD (0.9%) 119calAD - 228calAD (94.6%)
IAAA-240263	2	1,893 $\pm$ 23	OxCal v4.4 IntCal20	123calAD - 203calAD (68.3%)	79calAD - 100calAD (7.7%) 107calAD - 219calAD (87.7%)
IAAA-240264	3	1,342 $\pm$ 21	OxCal v4.4 IntCal20	654calAD - 675calAD (68.3%)	649calAD - 686calAD (74.7%) 743calAD - 773calAD (20.7%)
IAAA-240265	4	908 $\pm$ 21	OxCal v4.4 IntCal20	1049calAD - 1082calAD (37.1%) 1151calAD - 1177calAD (25.0%) 1193calAD - 1202calAD (6.1%)	1044calAD - 1087calAD (39.1%) 1092calAD - 1105calAD (4.2%) 1120calAD - 1213calAD (52.1%)
IAAA-240266	5	1,910 $\pm$ 22	OxCal v4.4 IntCal20	81calAD - 99calAD (14.7%) 110calAD - 168calAD (42.7%) 186calAD - 203calAD (10.8%)	65calAD - 210calAD (95.4%)
IAAA-240267	6	1,939 $\pm$ 23	OxCal v4.4 IntCal20	33calAD - 38calAD (3.5%) 61calAD - 124calAD (64.8%)	16calAD - 166calAD (93.5%) 187calAD - 202calAD (2.0%)

表 2 放射性炭素年代測定結果（暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）(2)

測定番号	試料名	暦年較正用(yrBP)	較正条件	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
IAAA-240268	7	1,903 $\pm$ 22	OxCal v4.4	85calAD - 94calAD (6.5%)	76calAD - 212calAD (95.4%)
			IntCal20	117calAD - 171calAD (45.4%) 182calAD - 203calAD (16.4%)	
IAAA-240269	8	1,919 $\pm$ 23	OxCal v4.4	69calAD - 131calAD (55.7%)	31calAD - 41calAD (2.2%) 60calAD - 208calAD (93.2%)
			IntCal20	142calAD - 158calAD (8.9%) 192calAD - 199calAD (3.7%)	
IAAA-240270	9	378 $\pm$ 20	OxCal v4.4	1459calAD - 1500calAD (51.7%)	1452calAD - 1522calAD (65.6%) 1578calAD - 1624calAD (29.9%)
			IntCal20	1600calAD - 1615calAD (16.6%)	

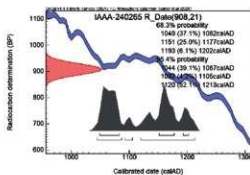
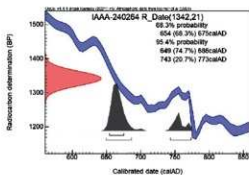
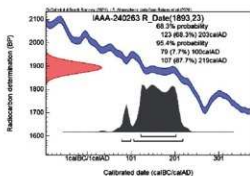
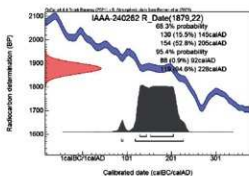


図 1 暦年較正年代グラフ (1)

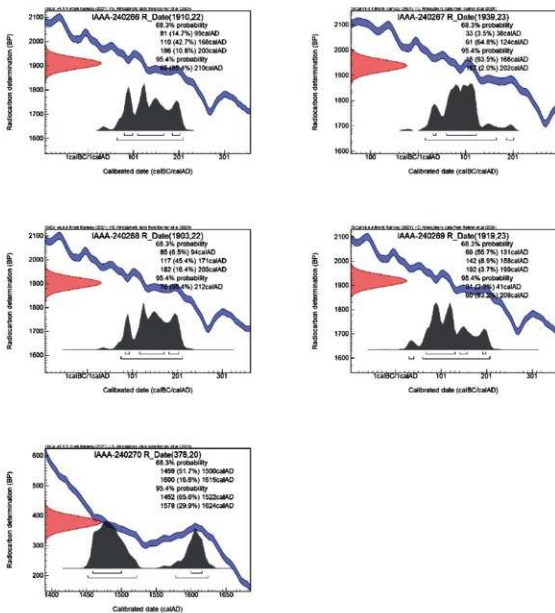


図2 暦年較正年代グラフ(2)

第5節 宗佐遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）（2）

（株）加速器分析研究所

1. 測定対象試料

宗佐遺跡・宗佐南遺跡は、兵庫県加古川市八幡町宗佐に所在し、扇状地上に立地する。測定対象試料は、地質トレンチ等から採取された土壌、およびその中から抽出された炭化物等の合計8点である（表1）。試料AMS土4は炭化物の可能性が高いが、保存状態があまり良くない細片であるため、「炭化物？」とした。試料となった土壌（炭化物等が抽出された土壌を含む）はいずれも弥生時代後期以前に形成された古土壌と考えられている。

2. 化学処理工程

（1）炭化物？、炭化物の化学処理

- 1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- 2) 酸-アルカリ-酸（AAA: Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（2）土壌の化学処理

- 1) 試料をすりつぶす（Bulk）。
- 2) 酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には1mol/l（1M）の塩酸（HCl）を用い、表1に「HCl」と記載する。
以下、(1) 3)以降と同じ。

3. 測定方法

加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、14Cの計数、13C濃度（13C/12C）、14C濃度（14C/12C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxII）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4. 算出方法

- （1） δ 13Cは、試料炭素の13C濃度（13C/12C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

- (2) 14C年代 (Libby Age: yrBP, 表1) は、過去の大気中14C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用し、 $\delta 13C$ によって同位体効果を補正する (Stuiver and Polach 1977)。14C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、14C年代の誤差 ($\pm 1 \sigma$) は、試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の14C濃度の割合である。pMCが小さい (14Cが少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (14Cの量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta 13C$ によって補正されている (表1)。
- (4) 暦年較正年代 (または単に較正年代) とは、年代が既知の試料の14C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の14C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1 \sigma = 68.3\%$) あるいは2標準偏差 ($2 \sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が14C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta 13C$ 補正を行い、下1桁を丸めない14C年代値である (表2の「暦年較正用 (yrBP)」。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20較正曲線 (Reimer et al. 2020) を使い、OxCal v4.4較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正の結果を表2 ($1 \sigma \cdot 2 \sigma$ 暦年代範囲) に示す。暦年較正年代は、14C年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。今後、較正曲線やプログラムが更新された場合、「暦年較正用 (yrBP)」の年代値を用いて較正し直すことが可能である。

5. 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料8点の14C年代は、 $6070 \pm 30 \text{ yrBP}$ (AMS土8) から $1770 \pm 20 \text{ yrBP}$ (AMS土9) の間にある。暦年較正年代 (1σ) は、最も古いAMS土8が5025 ~ 4910 cal BCの間に3つの範囲、最も新しいAMS土9が245 ~ 329 cal ADの間に2つの範囲で示される。全体としては縄文時代前期初頭頃 (AMS土8) から古墳時代前期頃 (AMS土9) に相当し (佐原2005、小林編2008、小林2009、2017)、AMS土9のみ弥生時代後期よりも若干新しい。層位の上下関係に対して試料の年代値は整合的である。

なお、試料AMS土4、同9が含まれる1 ~ 3世紀頃の暦年較正に関しては、これまで北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘があった (尾畠2009、坂本2010など)。2020年に更新された較正曲線IntCal20 (Reimer et al. 2020) では、新たに日本産樹木のデータが採用された結果、この範囲の較正年代値が日本産樹木の測定値に近づいた。系統的に認められる差異の原因究明を含め、今後も関連する研究の動向を注視する必要がある。

試料の炭素含有率は、炭化物?、炭化物が60%を超える十分な値、土壌が1%を超える特に低くない値を示した。

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1), 337-360
- 小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 55-82
- 小林謙一 2017 縄文時代の実年代 一土器型式編年と炭素14年代一, 同成社
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
- 尾寄大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代, 設楽博己, 藤尾慎一郎, 松木武彦編 弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235
- Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), Radiocarbon 62 (4), 725-757
- 佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編集, 日本の考古学 上 ドイツ展記念概説, 学生社, 14-19
- 坂本聡 2010 較正曲線と日本産樹木-弥生から古墳へ-, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, (株)加速器分析研究所, 85-90
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19 (3), 355-363

表 1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$, ^{14}C 年代 (Libby Age), pMC)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{14}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-231816	AMS 土 2	宗佐遺跡 A 地区 地質トレンチ 1 12 層	土壌	HCl	-25.21 ± 0.28	5,820 ± 30	48.45 ± 0.17
IAAA-231817	AMS 土 4	宗佐遺跡 B 地区 南区 地質ト レンチ 7 層	炭化 物?	AaA	-24.01 ± 0.23	2,060 ± 20	77.40 ± 0.22
IAAA-231818	AMS 土 5	宗佐遺跡 B 地区 南区 地質ト レンチ 15 層	土壌	HCl	-20.54 ± 0.25	4,070 ± 30	60.25 ± 0.20
IAAA-231819	AMS 土 6	宗佐遺跡 B 地区 地質トレンチ 2 6 層	土壌	HCl	-23.64 ± 0.26	2,600 ± 20	72.36 ± 0.21
IAAA-231820	AMS 土 7	宗佐遺跡 B 地区 地質トレンチ 2 20 層	土壌	HCl	-23.26 ± 0.22	4,050 ± 30	60.44 ± 0.19
IAAA-231821	AMS 土 8	宗佐遺跡 B 地区 地質トレンチ 2 22 層	土壌	HCl	-24.78 ± 0.24	6,070 ± 30	46.99 ± 0.17
IAAA-231822	AMS 土 9	宗佐遺跡 E 地区 B-5 北 地質 調査トレンチ 4 層黒褐色シルト	炭化物	AaA	-24.61 ± 0.24	1,770 ± 20	80.24 ± 0.23
IAAA-231823	AMS 土 10	宗佐南遺跡 9 層上部	炭化物	AaA	-24.86 ± 0.23	4,360 ± 30	58.11 ± 0.19

[IAA 登録番号: #C388]

表2 放射性炭素年代測定結果 (曆年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	試料名	曆年較正用(yrBP)	較正条件	1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
IAAA-231816	AMS ± 2	5,821 $\pm$ 28	OxCal v4.4 IntCal20	4720calBC - 4657calBC (54.2%) 4636calBC - 4616calBC (14.1%)	4784calBC - 4744calBC (8.0%) 4731calBC - 4591calBC (85.9%) 4566calBC - 4555calBC (1.5%)
IAAA-231817	AMS ± 4	2,058 $\pm$ 23	OxCal v4.4 IntCal20	102calBC - 66calBC (30.5%) 61calBC - 36calBC (23.2%) 15calBC - 5calAD (14.6%)	152calBC - 129calBC (6.3%) 123calBC - 12calAD (89.1%)
IAAA-231818	AMS ± 5	4,069 $\pm$ 26	OxCal v4.4 IntCal20	2662calBC - 2652calBC (4.2%) 2631calBC - 2569calBC (51.0%) 2521calBC - 2499calBC (13.0%)	2847calBC - 2812calBC (8.5%) 2744calBC - 2730calBC (1.4%) 2694calBC - 2687calBC (0.5%) 2677calBC - 2559calBC (66.3%) 2540calBC - 2491calBC (18.8%)
IAAA-231819	AMS ± 6	2,599 $\pm$ 23	OxCal v4.4 IntCal20	802calBC - 785calBC (68.3%)	807calBC - 774calBC (95.4%)
IAAA-231820	AMS ± 7	4,045 $\pm$ 25	OxCal v4.4 IntCal20	2621calBC - 2601calBC (11.9%) 2584calBC - 2563calBC (17.0%) 2535calBC - 2493calBC (39.3%)	2663calBC - 2652calBC (1.2%) 2631calBC - 2472calBC (94.2%)
IAAA-231821	AMS ± 8	6,066 $\pm$ 29	OxCal v4.4 IntCal20	5025calBC - 5020calBC (2.0%) 5011calBC - 4935calBC (62.8%) 4918calBC - 4910calBC (3.4%)	5199calBC - 5189calBC (1.5%) 5050calBC - 4895calBC (89.2%) 4869calBC - 4848calBC (4.8%)
IAAA-231822	AMS ± 9	1,768 $\pm$ 23	OxCal v4.4 IntCal20	245calAD - 257calAD (13.4%) 282calAD - 329calAD (54.8%)	234calAD - 266calAD (23.4%) 271calAD - 351calAD (72.1%)
IAAA-231823	AMS ± 10	4,361 $\pm$ 26	OxCal v4.4 IntCal20	3011calBC - 2976calBC (30.4%) 2969calBC - 2944calBC (18.5%) 2939calBC - 2916calBC (19.4%)	3079calBC - 3063calBC (3.9%) 3028calBC - 2906calBC (91.6%)

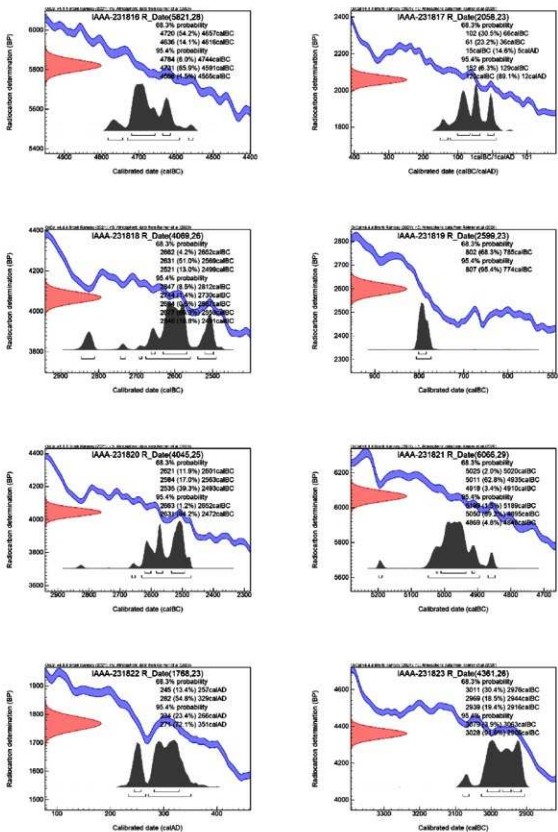


図1 暦年較正年代グラフ

第6節 宗佐遺跡における花粉分析、珪藻分析、プラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

宗佐遺跡は、兵庫県加古川市八幡町宗佐地内に所在する。遺跡は、中位段丘面の開析谷に形成された扇状地上に立地する。今回の調査地であるA地区は、この扇状地の南端にあたり、これより南には加古川が形成した沖積平地が広がり、低湿地へと続く。

今回の分析調査では、遺跡内で採取された土壌試料について、花粉分析、珪藻分析、プラント・オパール分析を実施して、堆積当時の植生、環境、農耕を含めた土地利用について検討する。また、併せて放射性炭素年代測定を行い、土層の堆積年代に関する資料を得る。

2. 試料

花粉分析、珪藻分析、プラント・オパール分析の対象試料は、A地区深堀トレンチ2の3層、6層、7層（第9章第7節第10図8層、11層、12層）の土壌試料3点である。3層は、7.5YR4/1褐色を呈する中粒砂が僅かに混じる粘土質シルトからなり、僅かに腐植を含む。団粒構造が確認されることから土壌化の影響を受けていることが推定される。6層は、7.5YR4/3褐色を呈する中粒砂が僅かに混じる極細粒砂質シルトからなる。堆積構造は認められず塊状構造をなす。7層は、7.5YR5/3にぶい褐色を呈する粘土混じり極細粒砂質シルトからなる。堆積構造は認められず塊状構造をなす。

放射性炭素年代測定の対象試料は、A地区地質トレンチ1の8層（第9章第7節第10図8層）より抽出された木片と、A地区深堀トレンチ2の10層（第9章第7節第10図15層）より抽出された炭化物の2点である。

3. 花粉分析

(1) 分析方法

花粉化石の抽出は、以下の順に物理・化学的処理を施して行う。

- 1) 試料約2～3gを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離する。
- 2) 傾斜法により粗粒砂を除去する。
- 3) フッ化水素酸処理（約30分）により珪酸塩鉱物などを溶解する。
- 4) アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分）を行う。
- 5) フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）により有機物を濃集する。
- 6) 残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入してプレパラートを作成する。

検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に産出する全ての種類について同定・計数する。結果は同定・計数結果の一覧表として示す。なお、複数の種類（分類群）をハイフンで結んだものは種類間の区別が困難なものである。

(2) 分析結果

表1 花粉分析結果

種類 (分類群)	Taxon	深堀トレンチ2		
		3層	6層	7層
木本花粉	Arboreal pollen			
ツガ属	<i>Tsuga</i>	4	-	-
マツ属	<i>Pinus</i>	1	-	-
コウヤマキ属近似種	cf. <i>Sciadopitys</i>	4	3	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	1	-	-
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Aeglops</i>	1	-	-
コナラ亜属近似種	cf. <i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	2	1	1
草本花粉	NonArboreal pollen			
イネ科	Gramineae	43	-	3
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	5	-	-
キク亜科	Carduoideae	6	-	-
タンポポ亜科	Cichorioideae	4	-	15
不明花粉	Unknown			
同定不能花粉	Poorly preserved Pollen	61	15	3
シダ類孢子	Fern spore			
単条型孢子	Monolete spore	37	10	8
三条型孢子	Trilete spore	4	3	1
合計	Total			
木本花粉	Arboreal pollen	9	4	1
草本花粉	NonArboreal pollen	58	-	18
不明花粉	Pteridophyta	61	15	3
シダ類孢子	unknown	41	13	9
合計	Total	169	32	31

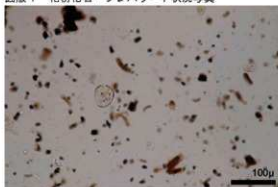
花粉分析結果を表1、各試料の花粉分析プレパラート状況写真を図版1に示す。以下に層別別に花粉化石の産状を示す。

3層では、花粉化石が比較的多産するが、産出化石の保存状態が著しく悪い。花粉外膜は溶解・破損しており、種類同定できないものが大部分を占める。同定された種類は、針葉樹のツガ属、マツ属、コウヤマキ属近似種、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、広葉樹のサワグルミ属-クルミ属、コナラ亜属近似種、草本植物のイネ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科、シダ類孢子など特徴的な形態を有する種類からなる。6層・7層は、花粉化石はほとんど産出しない。産出花粉化石は、種類同定ができないほど保存状態が著しく悪い。6層では、針葉樹のコウヤマキ属近似種、シダ類孢子などが、7層では、コナラ亜属近似種、イネ科、タンポポ亜科など特徴的な形態を有する花粉がわずかに確認されただけである。

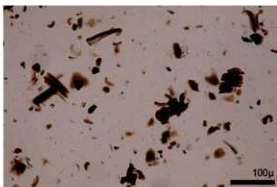
(3) 考察

調査地は、加古川左岸の扇状地に位置する。調査地点である深堀トレンチ2地点の3層は、土壌化が多少進行している堆積物、6層・7層は、塊状構造を示す泥質堆積物からなる。花粉化石は、3層から比較的多く産出したが、6層・7層はほとんど産出しなかった。また、産出化石はいずれも保存状態が著しく悪かった。一般に、花粉化石は土壌化作用が進行するような場所では、物理・化学・生物的要因により分解消失することが知られている(中村, 1967など)。また、花粉・孢子の分解作用に対する抵抗力は、花粉・孢子中の外壁中に含まれているスポロポレニンの量にほぼ一致するとされる(Havinga, 1964)。

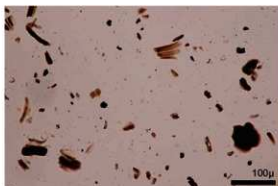
図版 1 花粉化石・プレパラート状況写真



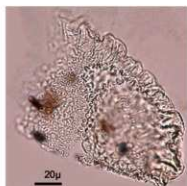
プレパラート状況写真(3層)



プレパラート状況写真(6層)



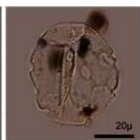
プレパラート状況写真(7層)



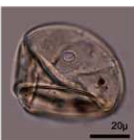
ツガ属破片(3層)



コウヤマキ属(3層)



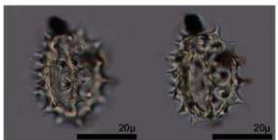
サウグルミ属-クミ属(3層)



イネ科(3層)



単条型孢子(3層)



キク亜科(3層)



ヨモギ属(3層)

そのため、花粉に比較して、スποロポレニンの量が多いとされるシダ類孢子や外膜が厚い針葉樹花粉は風化作用の影響を受けても化石として残りやすい (Brooks & Shaw, 1971, Stanley & Linskens, 1974 ; 徳永・山内, 1971 など)。今回の結果でも、針葉樹とシダ類孢子の他、分解が進行しても同定可能な形態が特徴的な種類が多く、各層準に取り込まれた花粉・孢子が堆積時・後に分解消失していることが推定される。産出した種類は、当該期の植生構成要素であったとみられる。特に土壌化の影響を受けている3

層については、下記するように調査地近辺の植生を反映している可能性が高い。

土壌発達のみられる堆積物の花粉分析結果は、湖・池沼・湿地の堆積物と比較して、花粉の供給原から堆積物に取り込まれるまでの過程が単純で距離が短い。そのため、調査地点近辺の局地的な植生を反映する可能性が高く、森林域の土壌の花粉分析から、森林群落の動態の検討が行われている（三浦、1990、三宅・中越、1998など）。今回の調査層では、3層が土壌化の影響を受けていたことから、産出した種類が調査地近辺の植生を構成していた要素であった可能性が高い。分解が進行しており偏った組成になっているが、木本と比較して、イネ科、ヨモギ属などの草本植物が多く産出することから、3層形成期の調査地近辺は草地の卓越する植生であった可能性が示唆される。

4. 珪藻分析

(1) 分析方法

珪藻化石の抽出は、以下の物理・化学的処理を施して行う。

- 1) 湿重約5gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。
- 2) 分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。
- 3) 自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。
- 4) 乾燥した試料上に封入剤のブリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作成する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が産出した後は、標準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。

珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange-Bertalot (2000)、Hustedt (1930-1966)、Krammer and Lange-Bertalot (1985～1991)、Desikachary (1987)などを参考にする。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類表に示した。

塩分に対する適応性とは、淡水中の塩類濃度の違いにより区分したもので、ある程度の塩分が含まれた方がよく生育する種類は好塩性種とし、少量の塩分が含まれていても生育できるものを不定性種、塩分が存在する水中では生育できないものを嫌塩性種として区分している。これは、主に水域の化学的な特性を知る手がかりとなるが、単に塩類濃度が高いか低いかにいったことが分かるだけでなく、塩類濃度が高い水域というのは概して閉鎖水域である場合が多いことから、景観を推定する上でも重要な要素である。

pHに対する適応性とは、アルカリ性の水域に特徴的に認められる種群を好アルカリ性種、逆に酸性水域に生育する種群を好酸性種、中性の水域に生育する種を不定性種としている。これも、単に水の酸性・アルカリ性のいずれかがわかるだけでなく、酸性の場合は湿地であることが多いなど、間接的には水域の状況を考察する上で必要不可欠である。

流水に対する適応性とは、流れのある水域の基物（岩石・大型の藻類・水生植物など）に付着生育す

る種群であり、特に常時、流れのあるような水域でなければ生育出来ない種群を好流水性種、逆に流れのない水域に生育する種群を好止水性種として区分している。流水不定は、どちらにでも生育できる可能性もあるが、それらの大半は止水域に多い種群である。なお、好流水性種と流水不定性種の多くは付着性種であるが、好止水性種には水塊中で浮遊生活する浮遊性種も存在する。浮遊性種は、池沼あるいは湖沼の環境を指標する。

なお、淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区分している。陸生珪藻は、陸域の乾いた環境を指標することから、古環境を推定する上で極めて重要な種群である。

(2) 分析結果

珪藻分析結果を表2に示す。深堀トレンチ2地点の3層からは珪藻化石が産出したが、その他の試料は無化石であった。以下、試料ごとに結果を記す。

3層からは3個体産出した。産出した分類群は、淡水生種のみで構成される。保存状態は、殻が壊れているため不良である。産出した種は、淡水生種で流水不明種の*Cymbella* spp.、*Pinnularia* spp.等である。6層および7層は、無化石である。

表2 珪藻分析結果

種 類	生態性			環境 指標種	深堀トレンチ2		
	塩分	pH	流水		3層	6層	7層
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-
海水生種					0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0
汽水生種					0	0	0
淡水～汽水生種					0	0	0
淡水生種					3	0	0
珪藻化石総数					3	0	0

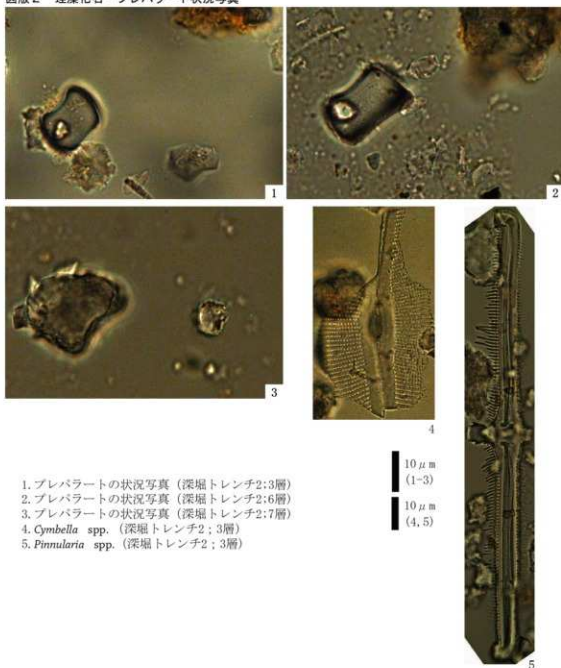
凡例

塩分:塩分濃度に対する適応性	pH:水素イオン濃度に対する適応性	流水:流水に対する適応性
Euh : 海水生種	al-bi: 真アルカリ性種	l-bi: 真止水性種
Euh-Meh: 海水生種～汽水生種	al-il: 好アルカリ性種	l-ph: 好止水性種
Meh : 汽水生種	ind : pH不定性種	ind : 流水不定性種
Ogh-Meh: 淡水生種～汽水生種	ae-il: 好酸性種	r-ph: 好流水性種
Ogh-hil: 貧塩好塩性種	ae-bi: 真酸性種	r-bi: 真流水性種
Ogh-ind: 貧塩不定性種	unk : pH不明種	unk : 流水不明種
Ogh-hob: 貧塩嫌塩性種		
Ogh-unk: 貧塩不明種		

環境指標種

- A: 外洋指標種 B: 内湾指標種 C1: 海水藻場指標種 C2: 汽水藻場指標種
 D1: 海水砂質干潟指標種 D2: 汽水砂質干潟指標種
 E1: 海水泥質干潟指標種 E2: 汽水泥質干潟指標種 F: 淡水底生種群 (以上は小杉, 1988)
 G: 淡水浮遊性種群 H: 河口浮遊性種群 J: 上流性河川指標種 K: 中～下流性河川指標種
 L: 最下流性河川指標種 M: 湖沼浮遊性種 N: 湖沼沼沢湿地指標種 O: 沼沢湿地付着性種
 P: 高層湿原指標種群 Q: 陸域指標種群 (以上は安藤, 1990)
 S: 好汚濁性種 U: 広適応性種 T: 好清水性種 (以上はAsai and Watanabe, 1995)
 R: 陸生珪藻 (RA: A群, RB: B群, R1: 未区分、伊藤・堀内, 1991)

図版2 珪藻化石・プレバラー特状況写真



1. プレバラー特の状況写真 (深堀トレンチ2;3層)
2. プレバラー特の状況写真 (深堀トレンチ2;6層)
3. プレバラー特の状況写真 (深堀トレンチ2;7層)
4. *Cymbella* spp. (深堀トレンチ2;3層)
5. *Pinnularia* spp. (深堀トレンチ2;3層)

(3) 考察

3層から産出した種の生態性について述べると、淡水生種で流水不明種の*Cymbella* spp.、*Pinnularia* spp. は、いずれも殻の破損が大きく、種の同定はできないが、これら2属はいずれも湿地に最も特徴的に認められ、主要な構成種になる属である。

ただ、3層、6層および7層は無化石であるか、産出数が非常に少なかったため、珪藻化石の生態性や群集の生育特性による直接的な堆積環境の推定は困難である。経験的には、堆積後に好氣的環境下で大気に曝されると、短期間に分解消失することがわかっている。次に、珪藻化石を構成するシリカ鉱物は、温度が高いほど、流速が早いほど、水素イオン濃度指数が高いほど溶解度が大きくなり溶けやすいたことが実験により推定されている(千木良, 1995)。また、小杉(1986)によると、珪藻の遺骸は、堆積

する際には、その大きさからシルトと準動と共にするとされていることから、粗粒な堆積物の場合、珪藻殻は取り込まれにくいことが推定される。分析対象となった各層は、もともと珪藻化石が取り込まれにくい環境であったか、取り込まれた珪藻化石も堆積後に分解・消失した可能性が高い。

5. プラント・オパール分析

(1) 分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行う。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)する。
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μ mのガラスビーズを約0.02g添加(0.1mgの精度で秤量)する。
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)により脱有機物処理を行う。
- 4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)により分散する。
- 5) 沈底法により20 μ m以下の微粒子を除去する。
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラートを作成する。

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。計数結果から、試料1g中の植物珪酸体個数を算出した(試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率を乗じて求める)。おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重)を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁殖状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。

(2) 分析結果

1) 分類群

産出したプラント・オパールの分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表3、図1に示す。主要な分類群については顕微鏡写真を図版3に示す。なお、植物珪酸体の生産量は植物種によって差異があることから、検出密度の評価は分類群によって異なる。そこで、プラント・オパール群集の占有状況を比較するために、植物体生産量(推定)を算出した。

[イネ科-タケ亜科]

[イネ科]

イネ、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族型

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型(ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサ節など)、その他

[イネ科-その他]

未分類等では、メダケ節型が多く優占する。他には、ススキ属型、ウシクサ族型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが認められるが、いずれもやや低い密度である。

表3 プラント・オパール分析結果 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	深堀トレンチ2		
		3層	6層	7層
イネ科	Gramineae			
イネ	<i>Oryza sativa</i>	25	5	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	6		
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	44	22	31
ウシクサ族型	<i>Andropogoneae type</i>	19	5	16
タケ亜科	Bambusoideae			
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	126	142	89
ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>	76	120	52
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	38	33	16
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	19	16	16
その他	Others	50	44	37
その他のイネ科	Others			
未分類等	Others	113	115	100
プラント・オパール総数	Total	516	502	357

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.74	0.15	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.38		
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.55	0.27	0.38
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	1.46	1.65	1.03
ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>	0.36	0.58	0.25
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	0.29	0.25	0.12
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	0.06	0.05	0.05

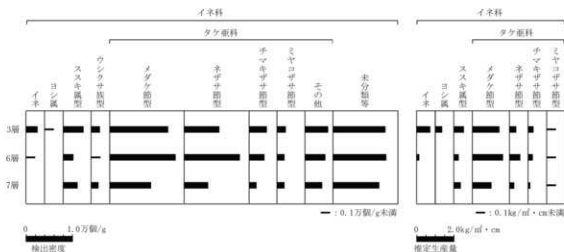
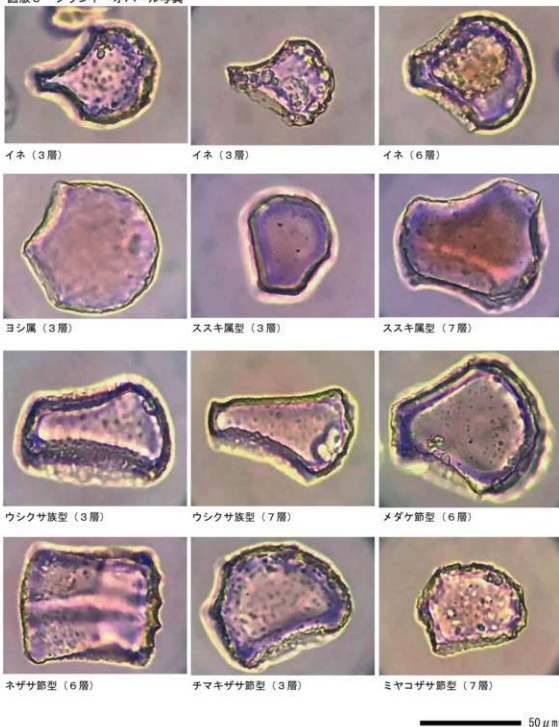


図1 プラント・オパール分析結果

(3) 考察

プラント・オパール分析において稲作跡の探査や検証を行うにあたっては、通常、イネのプラント・オパールが試料 1gあたり5,000個以上の密度で検出された場合に、当該地点で稲作が行われていた可能性が高いと判断している (杉山, 2000)。ただし、最近の調査では密度が3,000個/g程度あるいはそれ未満

図版3 プラント・オバール写真



であっても水田遺構が検出された事例が報告されていることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行う。また、ヨシ属やマコモ属は湿地あるいは湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育する。このことから、これらの植物の産出状況を検討することで、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。これらを参考にして、稲作の可能性と周辺環境について検討する。

深堀トレンチ2地点の3層では、イネのプラント・オパールが2,500個/gと比較的高い密度であり、稲作跡の判断基準値に近い値である。また、花粉分析ではイネ科草本が多く産出している。こうしたことから、3層では調査地もしくは近傍において稲作が営まれていた可能性が考えられる。6層でもイネのプラント・オパールが産出しているが、密度は500個/gと低い値である。なお、イネ科草本花粉は認められないことから、ここで産出したイネのプラント・オパールは、上層あるいは他所から混入したものとみられる。したがって、6層では調査地において稲作が行われていた可能性を積極的に肯定することはできない。7層ではイネが産出しないこと、イネ科草本花粉が微量であることなどから、調査地で稲作が行われていた可能性は考え難い。

イネ以外の分類群の産出状況を見ると、各層ともメダケ節型が多く優勢となっている。また、ネザサ節型やススキ属型も比較的多い。一方、ヨシ属は3層で少量産出するが、6層と7層では認められない。また、マコモ属はいずれの層からも産出しない。こうしたことから、これらの層の堆積時の調査地周辺は比較的乾いた環境であり、メダケ節やネザサ節などのササ類やススキ属などが生育していたと推定される。なお、未分類のイネ科草本も多く認められることから、各層堆積時の調査地周辺は草地の広がった状態であったと推定され、花粉分析で示唆された植生とも矛盾しない。

6. 放射性炭素年代測定

(1) 方法

1) 化学処理

木片については、試料の付着物を取り除いた後、酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表4に記載する。

炭化物については、試料の付着物を取り除いた後、酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。酸処理には1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用い、表4に「HC1」と記載する。

化学処理後の試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させ、真空ラインで二酸化炭素を精製する。精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

2) 測定

加速器をベースとした¹³C-AMS専用装置を使用し、¹³Cの計数、¹³C濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (H₂C₂O₄ II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

3) 算出

- ① δ¹³Cは、試料炭素の¹³C濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である。
- ② ¹⁴C年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0 yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach, 1977)。¹⁴C年代はδ¹³Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値

を結果表に示す。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- ③ 暦年較正年代とは、得られた ^{14}C 年代値と年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線とを照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（ $1\sigma=68.3\%$ ）あるいは2標準偏差（ $2\sigma=95.4\%$ ）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{14}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20 データベース（Reimer et al., 2020）を用い、OxCal v4.4 較正プログラム（Bronk Ramsey, 2009）を使用する。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」・「cal BP」という単位で表される。

表4 測定試料及び処理

試料番号	調査区	層位	試料	前処理・調整	測定法
4	地質トレンチ	8層	木片	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS
5	深堀トレンチ2	10層	炭化物	酸処理 (HCL)	AMS

※AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

(2) 結果

加速器質量分析法 (AMS: Accelerator Mass Spectrometry) によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素（ ^{14}C ）年代および暦年代（較正年代）を算出した。表5にこれらの結果を示し、図2に暦年較正結果（較正曲線）を示す。

表5 測定結果

試料番号	測定 $\delta^{14}\text{C}$ (‰)	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	暦年較正周年年代 (年BP)	^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	
					1 σ (68.3%確率)	2 σ (95.4%確率)
4	231358	-26.72 $\pm$ 0.21	1496 $\pm$ 23	1500 $\pm$ 20	564-600 cal AD (68.3%)	545-608 cal AD (88.4%) 622-638 cal AD (7.0%)
5	231359	-22.12 $\pm$ 0.22	5805 $\pm$ 31	5810 $\pm$ 30	4712-4650 cal BC (47.3%) 4641-4612 cal BC (21.0%)	4771-4766 cal BC (0.6%) 4725-4548 cal BC (94.8%)

BP: Before Physics (Present), AD: 紀元, BC: 紀元前

(3) 所見

放射性炭素年代測定の結果、地質トレンチ1の8層で抽出された木片は、補正 ^{14}C 年代が1500 $\pm$ 20年BP、2 σ の暦年較正値は545 cal AD $\sim$ 608 cal AD (88.4%)、622 cal AD $\sim$ 638 cal AD (7.0%)であった。深堀トレンチ2の10層で抽出された炭化物は、補正 ^{14}C 年代が5810 $\pm$ 30年BP、2 σ の暦年較正値は4771 cal BC $\sim$ 4766 cal BC (0.6%)、4725 cal BC $\sim$ 4548 cal BC (94.8%)であった。

7. まとめ

宗佐遺跡A地区における植生、環境、土地利用を検討した。深堀トレンチ2の7層と6層は、花粉化石はほとんど産出せず、珪藻化石は産出しなかった。一方、プラント・オパールはメダケ節型やネザサ

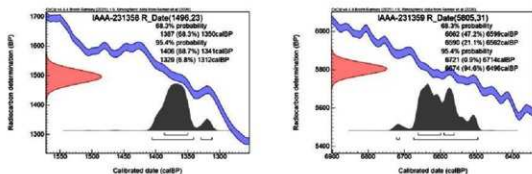


図2 暦年較正年代図

節型、さらにススキ属型が多く産出した。これらのことから、当時の調査地は乾いた環境であり、土壌化の進行により花粉や珪藻が分解・消失したと推定される。3層では、イネのプラント・オパールが比較的多く産出している。花粉化石も比較的多く産出しており、イネ科やヨモギ属などの草本植物が多い。こうしたことから、調査地もしくは近傍で稲作が営まれており、周辺は草地の卓越する植生が示唆される。珪藻化石は極めて少なく堆積環境の推定は困難であったが、湿地に特徴的に認められる淡水生種で流水不明種が産出しており、水田の環境と矛盾しない。なお、3層の堆積年代については、対応する地質トレンチ1の8層より抽出された木片で放射性炭素年代測定を行ったところ、古墳時代後半(AD 545-638)の年代値が得られている。したがって、宗佐遺跡では遅くとも古墳時代後半には稲作が開始されていたと判断される。また、深掘トレンチ2の10層の堆積年代に関しては、堆積物中より抽出された炭化物で放射性炭素年代測定を行った結果、縄文時代前期(BC 4771-4518)の年代値が得られている。

引用文献

- 安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
- Asai Kazumi & Watanabe Toshiharu, 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, 35-47.
- Brooks, J. & Shaw, G. 1971, Recent developments in the chemistry, biochemistry, geochemistry and post-tetrad ontogeny of sporopollenins derived from pollen and spore exines. "Pollen: Development and Physiology"
- Desikachary, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, 1-13, Plates, 401-621.
- 藤原宏志, 1976, プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) 一 数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法一. 考古学と自然科学, 9, 15-29.
- 藤原宏志・杉山真二, 1984, プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) 一 プラント・オパール分析による水田址の探査一. 考古学と自然科学, 17, 73-85.
- Habing, A. J. 1964, Investigation into the differential corrosion susceptibility of pollen and spores. Pollen et Spores, 6 : 621-635.
- Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr.

Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.

Hustedt, F., 1937-1938, Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III, Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809p, 1-155p, 274-349p.

Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.

Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.

伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 日本珪藻学誌, 6, 23-44.

小杉正人, 1986, 陸生珪藻による古環境の解析とその意義—わが国への導入とその展望—. 植生史研究, 1, 9-44.

小杉正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.

Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1985, Naviculaceae. Bibliotheca Diatomologica, vol. 9, p. 250.

Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1986, Bacillariophyceae, Süßwasser flora von Mitteleuropa, 2 (1) : 876p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1988, Bacillariophyceae, Süßwasser flora von Mitteleuropa 2 (2) : 596p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1990, Bacillariophyceae, Süßwasser flora von Mitteleuropa 2 (3) : 576p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1991a, Bacillariophyceae, Süßwasser flora von Mitteleuropa 2 (4) : 437p.

Lange-Bertalot, H., Witowski, A., Metzeltin, D., 2000, ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA Annotated diatom micrographs. Diatom Flora of Marine Coasts, 1, 925p.

三浦 修, 1990, 森林土壌の花粉分析—方法論的問題と森林群落の動態研究への適用. 植生史研究, 5, 3-18.

三宅 尚・中越信和, 1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態. 植生史研究, 6, 1, 15-30.

中村 純, 1967, 花粉分析. 古今書院, 232p.

Stanley Robert & Linskens Hans, 1974, Pollen: biology, biochemistry, management, Springer-Verlag Berlin Heidelberg New York, 307p.

杉山真二, 1999, 植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史. 第四紀研究8 (2) , 109-123.

杉山真二, 2000, 植物珪酸体 (プラント・オパール), 考古学と植物学, 同成社, 189-213.

杉山真二・藤原宏志, 1986, 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—, 考古学と自然科学, 19, 69-84.

杉山真二・松田隆二・藤原宏志, 1988, 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追及のための基礎資料として—, 考古学と自然科学, 20, 81-92.

徳永重元・山内輝子, 1971, 花粉・胞子. 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.

千木良雅弘, 1995, 風化と崩壊. 近未来社, 204p.

第7節 宗佐遺跡の地形環境

青木 哲哉（立命館大学非常勤講師）

1. はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活の間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査地区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査地区では、微地形とそれを構成する堆積物が直接観察され、堆積物については詳細な区分が行える。このため、堆積物ごとの細かいオーダーで地形環境を復元し、その変化を辿ることができる。しかも、堆積物には編年された考古遺物がしばしば含まれる。復元された地形環境の時期はそれを通じて明確にすることが可能となる。また調査地区では、人間活動の痕跡である遺構が検出されるため、過去の人間生活が知られる。そこでは、地形環境と人間生活の係わりをも分析できるのである。

本稿では、宗佐遺跡の調査地区における地形環境を明らかにし、それと人間活動との関係について考察したい。調査では、調査地区付近における地形の分類と堆積物の把握を試みた。地形分類では、まず1/20,000空中写真の判読から調査地区周辺の地形を区分し、ついで1/5,000空中写真の判読と現地踏査によって調査地区付近における微地形の分類を行った。堆積物に関しては、調査地区での地質断面を詳細に観察した。地質断面の観察は、遺構検出面より上位だけでなく、調査地区の北部と南部で掘削したトレンチの断面によって遺構検出面以深についても行った。こうして得られた地形と堆積物の調査結果に、遺構の分布や時期などの発掘調査成果を加えて、調査地区付近の地形環境ならびにそれと人間活動との係わりを考察した。

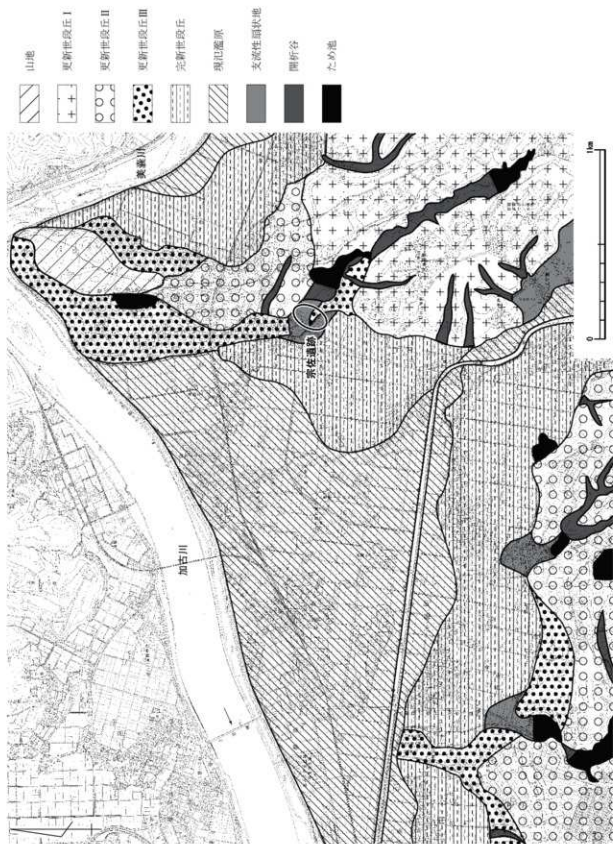
2. 調査地区付近の地形

(1) 調査地区周辺の地形

本遺跡の調査地区は加古川中流部の沖積低地に位置する。そこは下流部に広がる沖積低地より数km上流にあたる。この付近における加古川は、調査地区よりやや上流で美養川と合流し、流れを西南西へ変える。このような加古川に沿って幅2km前後の沖積低地が延び、周辺には3面の更新世段丘が認められる（第1図）。本稿では、これらを高位のものから更新世段丘Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと呼ぶ。他方、沖積低地は完新世段丘、現況氾原、及び支流性扇状地などに分けられる。こうした地形のうち、調査地区の大半は加古川左岸の支流性扇状地に、また一部が更新世段丘Ⅲに位置する。

調査地区周辺にみられる各地形の特徴は次のとおりである。

〔更新世段丘Ⅰ〕この段丘は調査地区の東から南東にかけて認められる。更新世段丘Ⅱとの境界では、段丘崖が比較的緩やかな傾斜で6～7mの比高をもつ。調査地区の南では、比高15m以上の急崖で沖積低地と接する。



〔更新世段丘Ⅱ〕これは調査地区の北東側や南西方などにみられる。段丘崖の比高は10m前後で、段丘面は緩やかに起伏している。

〔更新世段丘Ⅲ〕この段丘は調査地区ならびにその北方や西方に分布する。更新世段丘Ⅱの加古川寄りにみられ、比高5～6mの段丘崖をもつ。

〔完新世段丘〕調査地区周辺の加古川左岸では、これが更新世段丘の段丘崖下に比較的連続して認められる。現況氾濫原とは50cm～1mの崖で接し、更新世段丘と比べて段丘面の起伏は小さい。

〔現況氾濫原〕この地形は加古川沿いにみられる。これは最も低い地形面で、洪水時に冠水する危険性が高い。地表の起伏は完新世段丘より大きい。

〔支流性扇状地〕この扇状地は加古川の支流によって形成された小規模なものである。調査地区周辺では、更新世段丘を刻む開析谷の出口付近に分布し、完新世段丘や現況氾濫原より急な地表傾斜をなす。これらは完新世段丘と傾斜変換線で接しており、現況氾濫原との境界には段丘崖が認められる。

〔開析谷〕これは更新世段丘を下刻してつくられた谷である。幅は100m以下で、長さは1km以下のものが多い。調査地区が位置する支流性扇状地の背後には、比較的長い開析谷がみられる。これは、主に更新世段丘Ⅰを刻むもので、長さが約1.5kmに及ぶ。

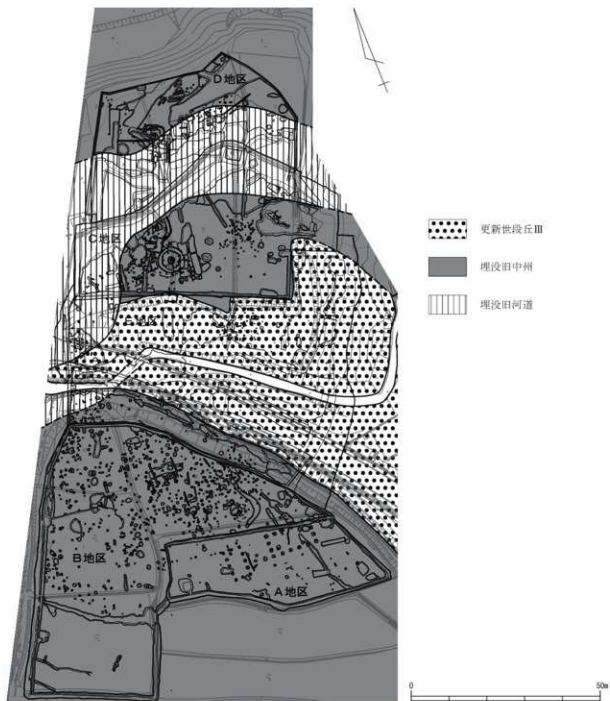
(2) 調査地区の微地形と遺構の分布

本遺跡のA地区、B地区、C地区、D地区、ならびにE地区西部と南部は、支流性扇状地に位置する(第2図)。この支流性扇状地は概ね南東から延びる開析谷の出口付近に形成されている。C地区、D地区、及びE地区西部と南部は扇尖にみられ、そこでの地表は西に傾斜する。また、A地区とB地区は扇尖から扇端に位置し、地表高度が南に下がる。このような支流性扇状地は、その前面に広がる加古川の沖積低地(完新世段丘Ⅳ)より地盤が高い。

西部と南部を除くE地区では、更新世段丘Ⅲが東西に細長く延びる。これは調査地区の東で南から西へ曲がる更新世段丘Ⅲの西端にあたる。調査地区での更新世段丘Ⅲは上部が侵食されている。上面は西へ傾斜し、E地区西部で支流性扇状地下に埋没する。この地形がみられるE地区の北東端では、弥生時代後期の堅穴住居跡が1棟検出されている。なお、調査地区付近では現在、扇状地をつくった支流がこうした更新世段丘Ⅲを斜めに横切る谷中を流れる。

調査地区の支流性扇状地では、埋没した旧中州と旧河道が認められる。これらのうち埋没旧中州は、主にA地区からB地区にかけてと、C地区及びD地区に分布する。C地区とD地区の埋没旧中州上ではそれぞれ弥生時代後期の堅穴住居跡が数棟、またC地区のそれでは古墳時代初頭の堅穴住居跡が1棟が検出されている。また、A地区からB地区の埋没旧中州上では、弥生時代後期の堅穴住居跡が数棟、8世紀の掘立柱建物跡が2棟、さらに11世紀から12世紀の掘立柱建物群が認められる。ただし、扇端に位置するB地区南部では、堅穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されていない。

一方、埋没旧河道はC地区とD地区の境界付近ならびにE地区南西端に分布する。いずれも概ね東から西へ延びるものである。中でもC地区とD地区の境界付近にみられる埋没旧河道は、比較的規模が大きく、10m前後の幅をもつ。E地区北西端と南西端では、埋没旧河道上にそれぞれ12世紀及び11世紀から12世紀の小規模な掘立柱建物跡(1間×1間の建物)がみられる。埋没旧河道上では、他に顕著な遺構が検出されていない。



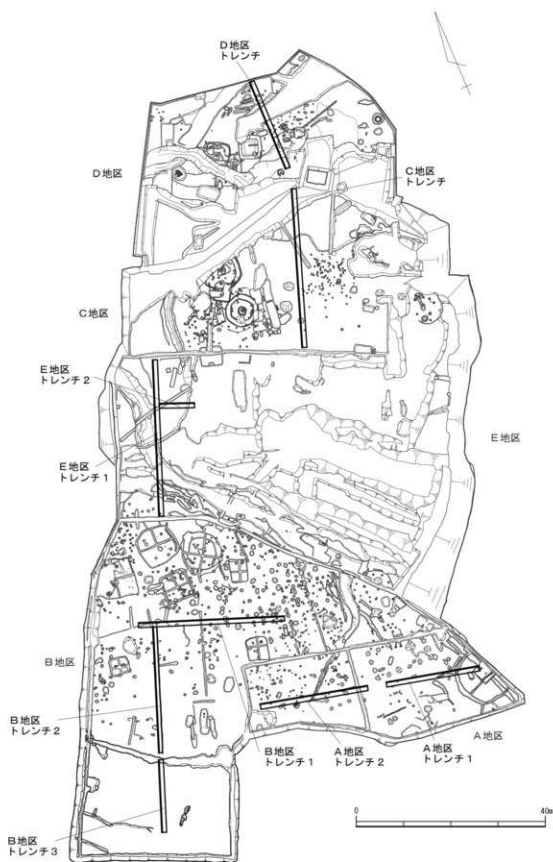
第2図 調査地区付近における微地形の分布

3. 調査地区における堆積物の特徴

(1) C地区、D地区、及びE地区の堆積物について

C地区、D地区、ならびにE地区では、大きくみて下位から大阪層群（または神戸層群）、支流性の扇状地堆積物、及び細粒堆積物が認められる（第4図～第7図）。

大阪層群は明黄褐色や褐黄色のシルト質砂礫（第4図の堆積物9。第5図の堆積物22、第6図の堆積



第3図 トレンチの位置と遺構



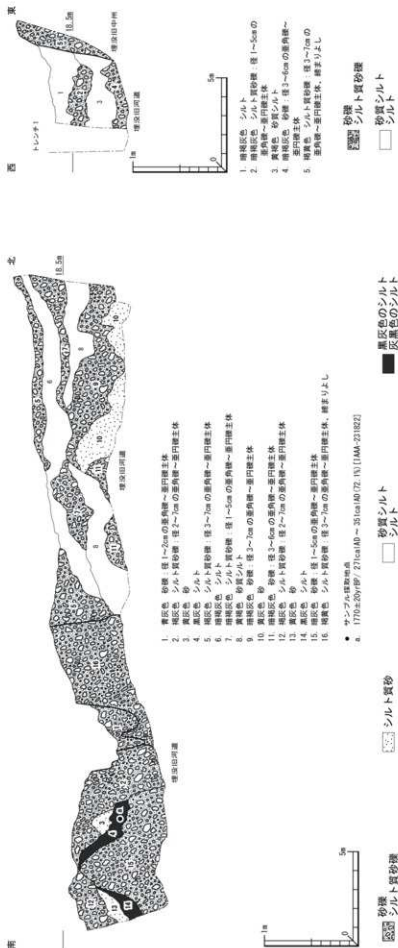
第4図 D地区におけるトレンチの地質断面図

物16)や黄褐色のシルト質砂(第4図の堆積物8)、黄褐色の砂質シルト(第4図の堆積物7)からなる。いずれも非常によく締まっており、シルト質砂礫にはクサレ礫が多数混入する。C地区とD地区では、これらが扇状地堆積物の下位に位置し、現地表下およそ1.7m以深にみられる。他方、西部と南部を除くE地区では、大阪層群が約3mの高まりをなす。そこには、更新世段丘Ⅲが東西に細長く延びる。調査地区におけるこの段丘は、上部の段丘堆積物が侵食されており、下位にみられる大阪層群だけが残存している。E地区での大阪層群は主に黄褐色のシルト質砂礫で、これは径3~7cmの亜角礫～亜円礫を主体とする。こうした高まりの上面は西へ高度を下げ、E地区西部で支流性扇状地の堆積物下に埋没していく。

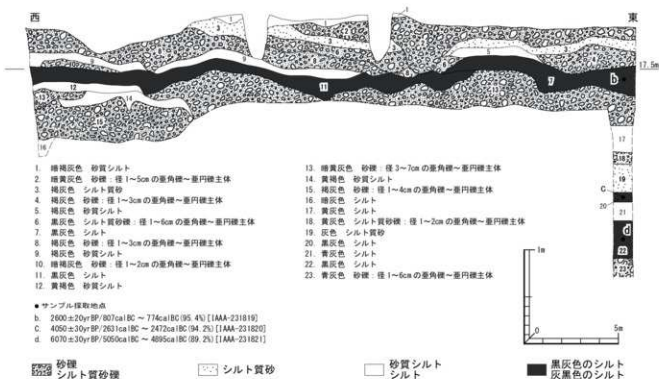
その上位にみられる支流性の扇状地堆積物は、旧中州堆積物に相当し、C地区、D地区、及びE地区南部で認められる。この堆積物は黄褐色や黄褐色などを呈する砂礫(第4図の堆積物2・3・5・6、第5図の堆積物6・8・10・12・13・15・17・21、第6図の堆積物15)とシルト質砂礫(第5図の堆積物19、第6図の堆積物12、第7図の堆積物5)で、礫は径1~9cmの亜角礫から亜円礫を主体とする。これらは、2m以上の層厚をもち、数層に分けられる。間にはシルト質砂(第5図の堆積物9・11・14・18)、砂質シルト(第5図の堆積物16・20)、及びシルト(第5図の堆積物7)が厚さ40cm以下でレンズ状にはさまれる。

旧中州堆積物の上位にみられる細粒堆積物は、暗黄褐色や黄褐色などの砂質シルトとシルトに細分される。これらは表土(現耕土)を除いて30~70cmの厚さで扇状地全面を被覆する。埋没旧中州上では、それらのうち最下部にみられる暗黄褐色のシルト(第4図の堆積物1)上面で弥生時代後期や古墳時代初頭の竅穴住居跡などが検出される。

C地区とD地区の境界付近には、この暗黄褐色シルト(第4図の堆積物1)を切る旧河道が東から西へ延びる。またE地区南西端では、これとほぼ同じ層位の旧河道が局部的に確認される。



第7図 E地区におけるトレンチ2の地質断面図



第8図 B地区におけるトレンチ1の地質断面図

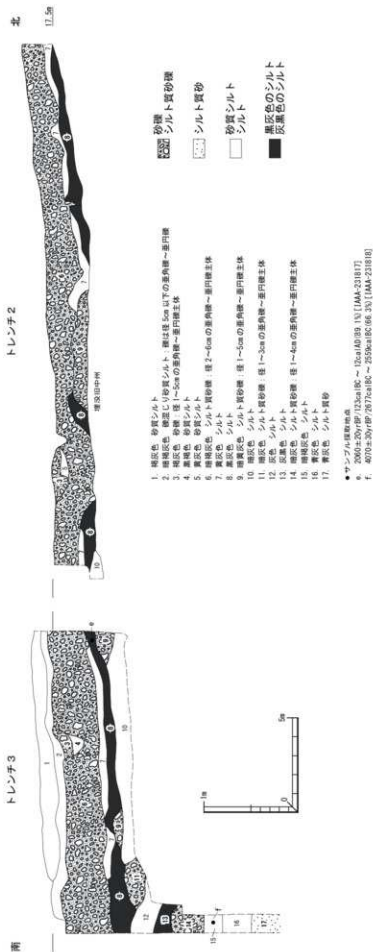
4) をなす。これらのD地区南東部とE地区北西端の旧河道では、上部に数十cmの厚さで褐色や暗褐色などの砂質シルトやシルトが数層観察される。そこには、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物を含む土壌層がみられ、さらにそれより上位の土壌層には11世紀から12世紀(平安時代後期)の遺物が混入する。このようなD地区南東部とE地区北西端の旧河道は連続する可能性がある。

最も新しい旧河道はこうした旧河道堆積物を切る。これは約2.5mの深さと10m前後の幅をもち、旧河道堆積物は主に褐色の砂礫と砂質シルトの互層である。これらの多くには14世紀から16世紀の遺物が混入し、下位には12世紀前半の遺物を含む堆積物が局所的に認められる。

一方、E地区南西端の旧河道でも2本の旧河道が重複してみられる。下位の旧河道は約10mの幅をもつ。主に褐色のシルト質砂礫(第6図の堆積物2)によって埋積されており、礫は径2~7cmの亜角礫~重円礫を主体とする。これより下位には、部分的に黒灰色のシルト(第6図の堆積物4)と黄灰色の砂(第6図の堆積物3)がみられる。それらのうち黒灰色シルトからは $271 \sim 351\text{cal AD}$ ($1770 \pm 20\text{yr BP}$)の年代値が得られている¹⁾。上位の旧河道は幅3~4mの小規模なもので、旧河道堆積物は青灰色の砂礫(第6図の堆積物1)である。これは主に径1~2cmの亜角礫~重円礫からなる。

(2) A地区とB地区の堆積物について

A地区とB地区の堆積物は下位から細粒堆積物、支流性の扇状地堆積物、及び細粒堆積物に大きく分けられる。下位の細粒堆積物は、現地表下およそ1.8m以深にみられる。これは、少なくとも現地表下約4mまで認められ、10層前後に細分される。これらの多くは、灰色や青灰色などのシルト(第9図の堆積物10・12・16、第10図の堆積物10・12~14・16・18・21)であり、主に加古川による洪水堆積物と考



第9図 B地区におけるトレンチ2・3の地質断面図

えられる。間には、黒灰色や灰黒色のシルト（第8図の堆積物20・22、第9図の堆積物13、第10図の堆積物15・17・19・22・24）が3層前後はさまれる。これらはA地区とB地区付近が低湿化した際に生成された堆積物である。なお、両地区の東部では、この層位に砂礫やシルト質砂礫などの粗粒堆積物（第9図の堆積物18・19・23、第10図の堆積物23・25）がみられる。

こうした堆積物のうち、A地区にみられる灰黒色シルト（第10図の堆積物24）の年代値は4731±4591cal BC（5820±30yrBP）である²⁾。他方、B地区にみられる黒灰色のシルト2層（第8図の堆積物20・22）は、それぞれ5050±4895cal BC（6070±30yrBP）と2631±2472cal BC（4050±30yrBP）、また暗褐色のシルト（第10図の堆積物15）は2677±2559cal BC（4070±30yrBP）の年代値を示す³⁾。

その上位に位置する流注性の扇状地堆積物は、旧中州堆積物に該当し、C地区、D地区、及びE地区における流注性扇状地の堆積物（旧中州堆積物）に連続する。これは褐色や暗褐色、暗黄灰色などの砂礫（第8図の堆積物2・4・8・10・13・15、第9図の堆積物3、第10図の堆積物5・7・9）とシルト質砂礫（第8図の堆積物6、第9図の堆積物6・9）からなる。礫は径1～8cmの亜角礫～亜円礫を主体とし、1m前後の厚さで認められる。

間には、褐色のシルト質砂（第8図の堆積物3）、褐色や黄褐色の砂質シルト（第8図の堆積物5・9・12・14、第9図の堆積物5、第10図の堆積物6）、黄灰色のシルト（第9図の堆積物7）、ならびに黒灰色のシルト（第8図の堆積物11、第9図の堆積物8、第10図の堆積物8）が薄くはさまれる。中でも黒灰色のシルトは連続性が高く、扇状地形成期の土壌化によって生成されたものである。この黒灰色シルトからは、807～774cal BC（2600±20yrBP）と123cal BC～12cal AD（2060±20yrBP）の年代値が得られている⁴⁾。こうした黒灰色シルトより下位の砂礫は扇端にあたるB地区南部では認められない。また、上位の砂礫はA地区とB地区のほぼ全域でみられ、南に向かって薄くなる。

扇状地堆積物を覆う細粒堆積物は、黄褐色や灰褐色などの砂質シルトとシルトで、表土を除いて約1mの厚さで認められる。この堆積物は、A地区とB地区の全域に分布し、10層前後に細分される。B地区では、これらのうち下部に位置する暗褐色の砂質シルトに弥生時代後期から古墳時代初頭、またその上位にみられる灰黄褐色のシルトに11世紀から12世紀の遺物が含まれる。

4. 地形環境の変遷

これまでに述べた事柄から、調査地区では次のような地形環境の変遷が考察される。

〔ステージ1〕本遺跡のA地区とB地区では、5000cal BC以前から主にシルトが加古川の氾濫によって何度も堆積した。その間、少なくとも3度の低湿化がみられ、黒灰色のシルトが生成された。この状況は2600cal BCごろまで続いた。

〔ステージ2〕調査地区では、更新世段丘Ⅲ（大阪層群の高まり）の段丘崖下に主に砂礫が堆積した。砂礫は東側の開析谷から流出する小規模な支流によってもたらされたもので、これに伴い調査地区の北部（D地区）から南部のB地区中央部にかけて流注性扇状地が形成された。扇状地の形成は800cal BCまたは100cal BCごろに一時停止し、扇状地上では直前に堆積したシルトが土壌化した。

〔ステージ3〕流注性扇状地では、再び支流による砂礫の搬出がみられた。この時期、砂礫の堆積はD地区からB地区南部にまで及び、扇状地は拡大した。こうした2度にわたる扇状地の発達期にC地区、D地区、ならびにA地区からB地区に中州が形成された。

〔ステージ4〕旧中州上では、弥生時代後期までに支流によるシルトの堆積がみられた。これによって旧中州は地下浅所に埋没した。

〔ステージ5〕C地区とD地区の境界付近に支流が流れた。この流路は弥生時代後期までにまず砂、次に砂質シルトとシルトによって概ね埋積された。ただし、埋没旧中州上は旧河道の上面よりまだ数十cm高かった。

〔ステージ6〕弥生時代後期になると、C地区、D地区、及びA地区からB地区の埋没旧中州上に竪穴住居が多数建てられた。さらに、古墳時代初頭には竪穴住居がC地区の埋没旧中州上とE地区の更新世段丘Ⅲにつくられ、居住域が高所に及んだ。また、300cal AD（古墳時代初頭）ごろまでに支流がE地区南西端を流れた。これはその後砂礫によって埋積された。

〔ステージ7〕A地区とB地区では、弥生時代後期以降11世紀から12世紀までに洪水が発生し、埋没旧中州上に砂質シルトやシルトが堆積した。その間、8世紀にはA地区の埋没旧中州上に2棟の掘立柱建物が建てられ、またB地区の埋没旧中州上では11世紀から12世紀に掘立柱建物群がつくられた。この大きな原因のひとつは、流注性扇状地の埋没旧中州上がその前面に広がる加古川の沖積低地より高かったことにある。他方、C地区とD地区の境界付近では古墳時代初頭以降、地盤高のやや低い旧河道上面に洪水が及び、砂質シルトとシルトが堆積した。これに伴い、旧河道の埋積は終わったものの、その上面は埋没旧中州上よりわずかに低かった。この付近では、その後12世紀前半までに支流が西へ流下し、そこにみられた旧河道はほとんど侵食された。

〔ステージ8〕C地区とD地区の境界付近に形成された流路には、その後も継続して支流が流れた。この流路は、16世紀ごろに大量の砂礫とシルトなどが堆積し、短期間に埋積された。

〔ステージ9〕C地区、D地区、及びE地区西部では、16世紀以降に数度の洪水が発生し、砂質シルトやシルトが堆積した。他方、A地区とB地区では、12世紀以降に洪水が数度及び、砂質シルトやシルトがほぼ全域を覆った。こうした堆積に伴って、旧中州と旧河道はさらに深く埋没した。

5. おわりに

本遺跡の調査地区では、更新世段丘Ⅲと流注性扇状地が認められる。更新世段丘Ⅲは南部と西部を除くE地区に分布する。そこでの更新世段丘Ⅲは段丘堆積物が侵食されており、下位の大阪層群（または神戸層群）が約3mの高まりをなす。上面は西へ高度を下げ、E地区西部で流注性扇状地下に埋没する。こうした段丘面は標高が高く、洪水が及ばない。そのため、竪穴住居が古墳時代初頭に建てられた。

調査地区における他の範囲には、流注性扇状地が広がる。これは、南東の開析谷から流下する小規模な支流によって800cal BCまたは100cal BC前後に形成されたものである。そこには、埋没した旧中州と旧河道が認められる。埋没旧中州はC地区、D地区、及びA地区からB地区にかけて分布する。これらは弥生時代後期までに浅く埋没し、その上は主に居住域として利用された。A地区からD地区の埋没旧中州上には弥生時代後期に、またC地区のそれには古墳時代初頭に竪穴住居が建てられた。さらに、A地区からB地区の埋没旧中州上では、8世紀に掘立柱建物が建てられ、11世紀から12世紀には掘立柱建物群が立地した。

他方、埋没旧河道は扇状地をつくった支流の流路跡で、C地区とD地区の境界付近とE地区南西端に分布する。中でも、旧河道の多くが集中するのはC地区とD地区の境界付近で、そこでは概ね東から西へ延びる埋没旧河道が重複して5カ所で認められる。これらのうち、弥生時代後期以降に埋積が完了した流路跡は3カ所でみられ、これらは2種類に区分される。ひとつは、弥生時代後期以前に形成され、埋積が11世紀から12世紀までのものである。これはD地区南東部とE地区北西端に局地的に存在するだけで、多くが侵食されている。他の一つは、形成が12世紀前半以前で、16世紀ごろに埋積された旧河道

である。これはC地区とD地区の境界付近を東西に連続して延びる。

これらのうち、前者の旧河道は弥生時代後期から古墳時代初頭に埋積途中であり、それが終わった11世紀から12世紀でも埋没旧中州上はその上面より数十cm高かった。そのため、埋没旧中州上は排水の便がよく、比較的高燥な環境を呈していた。また、このような埋没旧中州上は前面に広がる加古川の沖積低地と比べて高く、加古川本流による水害の危険性が低かった。支流性扇状地の埋没旧中州上に堅穴住居や掘立柱建物が建てられた背景には、こうした地形環境の存在があったと考えられる。本遺跡の調査地区では、以上のような地形環境と人間活動の関係が認められるのである。

注

- 1) 放射性炭素年代値は(株)加速器分析研究所によるものである。
- 2) 前掲1)
- 3) 前掲1)
- 4) 前掲1)

第10章 総括

第1節 弥生・古墳時代

1. はじめに

ここでは調査区の地形に合わせて、更新世段丘の西側への張り出しの南側を南部、谷中央を流れる流路（SR1）の南側を中部、流路の北側を北部として区分する。

宗佐遺跡で検出された弥生・古墳時代の遺構はほとんどが弥生時代後期後半から末期（庄内期）にかけてのものと考えられる。ただし、数多く出土する甕については後期と末期を区別することが難しく、末期については土器の底径が小さく尖底化の傾向が見られるものと一部の特徴的な器形を含むことで認定したものがあり、十分には後期との分別はなしていない。

2. 弥生時代後期・末期

流路 調査区内における弥生時代の流路SR1は、当初、北側に張り出し、調査区西端付近で南側に折れ（C地区SR390）、更新世段丘の先端付近に当たり、西側に抜けていたようである。弥生時代後期には南側に折れた部分（C地区SR390）は埋積し、東岸付近のC地区SD381、E地区SD204・SX235が溝状の溜りとして残っていた。その後SR1は両岸を侵食し、北部のD地区SH165・166や中部のC地区SH193の一部を削り取っている。

溝 溝は更新世段丘の南に沿って設けられている。当初はE地区SD216が西から流れているが、後に更新世段丘の先端を切って北西方向から流れるE地区SD202に付け替えられている。溝の先端は当初B地区SD15やA地区SD251がわずかに残る部分でそのまま南東に向いていたとみられるが、後に南向きのB地区SD247・A地区SD221に変わっている。調査区南端部付近の低地で営まれた水田への用水路と考えられる。

竪穴建物跡 竪穴建物跡は古墳時代のものを含めて15棟検出された（第2表）。このうち末期と考えられるものは3棟、古墳時代前期と考えられるものは1棟である。

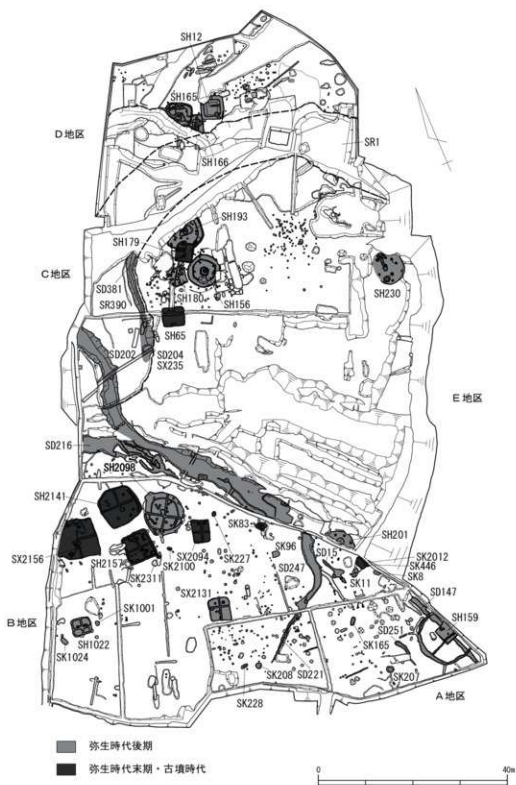
平面形は多角形のものが3棟、円形のものが2棟、方形のものが10棟である。規模は多角形及び円形のものが大きく、最大径8.6m以下、径7m以上である。方形のものは、一辺8.2mであるB地区SH2141を除けば、一辺6.0m以下、3.8m以上と多角形及び円形のものに比べて小さい。

後期の竪穴建物跡には屋内高床部をもつものがあり、多角形竪穴建物跡にはすべて屋内高床部が設けられている。中央土坑には深い穴をもつものと浅い炉状の穴をもつものがあり、深い穴をもつものには土堤をめぐらすものがある。

集落の変遷 竪穴建物は北部・中部・南部それぞれにおいて各1か所で継続的に建て替えられた箇所があり、それに加えて集中箇所からやや離れて散在するものがある。

北部ではSR1の北岸に接した位置で弥生時代後期の方形の竪穴建物跡が近接して建て替えられており、同時期には1棟しか存在しなかったとみられる。D地区SH166がD地区SH165・SH12より古い。

中部ではSR1の南岸に接した位置で弥生時代後期から古墳時代前期にかけての時期に集中的に竪穴建物跡が建て替えられている。C地区SH156・C地区SH193・C地区SH180・E地区SH65（末期）・C地区SH179（古墳時代前期）の順と考えられる。中部の東端では西側の竪穴建物群から約1.5m高い位置で1棟のみ円形の竪穴建物跡が検出されている。なお、更新世段丘が西側へ突出していた中部の東南部は、溜池の



第 10 図 弥生時代の宗佐遺跡

第2表 竪穴建物跡一覧

区域	地区	遺構名	時期	平面形	長辺・直径(m)	短辺(m)	主柱穴	屋内高床部	中央土坑
北部	D	SH12	弥生後期	方形	5.1	5		あり	
北部	D	SH165	弥生後期	方形	6	5.5		あり	深い穴 土曜付き
北部	D	SH166	弥生後期	方形	4+	3+			
中部	C	SH156	弥生後期	多角形	7		6本	あり	深い穴 土曜付き
中部	C	SH179	古墳前期	方形	4	3.7	2本?		浅い戸
中部	C	SH180	弥生後期	方形	4.1	4.0+	2本?		浅い戸
中部	C	SH193	弥生後期	多角形	8.6		5~6本	あり	深い穴
中部	E	SH65	弥生末期	方形	4.8	4			
中部	E	SH230	弥生後期	円形	8		4~5本		深い穴
南部	E	SH201	弥生後期	円形	7		3本+		深い穴 土曜付き
南部	B	SH1022	弥生後期	方形	3.8	3.7	2本		浅い戸
南部	B	SH2098	弥生後期	多角形	8.6	8	5~6本	あり	浅い戸
南部	B	SH2141	弥生末期	方形	8.2	8.2	4本		浅い戸
南部	B	SH2157	弥生末期	方形	6.2	6	4本		
南部	A	SH159	弥生後期	方形	3.8	3.0+	2本		

用水路などによる掘削のため遺構は検出されていないが、谷川の氾濫の影響を受けない最も安定した地形であったことから、この部分にも竪穴建物などの遺構が存在した可能性がある。

南部では調査区北西隅付近の溝E地区SD216・202の南側に接した位置で弥生時代後期から弥生時代末期にかけての時期に集中的に竪穴建物が増えて替えられている。B地区SH2098・SH2141・SH2157との順と考えられる。また、竪穴建物群から南側の少し離れた位置で1棟（B地区SH1022）、B地区SD247を挟んで東側の段丘崖下に接した部分で2棟（E地区SH201・A地区SH159）が位置している。B地区SH1022・A地区SH159は小規模で、特にA地区SH159は溝で取り囲まれていることなどから、北西部の竪穴建物に対して異なる機能をもつ竪穴建物と考えられる。

東播磨地域は近畿地方の動向と共通して弥生時代後期前半に集落遺跡が衰退し、後期後半に増加することが明らかにされている（兵庫県立考古博物館2023）。宗佐遺跡の弥生時代の集落が弥生時代後期後半に始まり、古墳時代前期に衰退する状況は、加古川左岸における手末遺跡や大中遺跡と同様の傾向を示している。

3. 古墳時代

古墳時代の遺構については前期のC地区SH179以外は、弥生時代から継続するSR1とE地区SD202のみとなる。E地区SD202は古墳時代後期に埋没したとみられる。

出土遺物も古墳時代に属するものは極めて少ないが、C地区・E地区の包含層から同一個体の陶棺片2点（778・1084）が出土している。いずれも棺身上端部の破片で、焼成は灰黒質である。縦方向の幅広の突帯をもち、受部面が水平に短く突出している。外面はナデ、内面はハケが施されている。突帯をもつことから亀甲形陶棺とみられ、6世紀末から7世紀前半頃のものと思われる（宮本1994）。谷中に横穴式石室を埋葬施設とする古墳が存在していたと推定される。

第2節 古代

1. 古代の遺構について

概要 古代の遺構は南部南東部のA地区SB1・SB2からなるユニットとその近辺から検出された8世紀の遺構が主なものである。その他、南部では西北隅付近で9世紀頃の土坑・溝が検出されている。北・中部ではSR1が弥生時代以降と同じ流路を流れ、D地区SR160が北西に分流していた時期があるようである。中部では8・9世紀の土坑が少数検出されている。

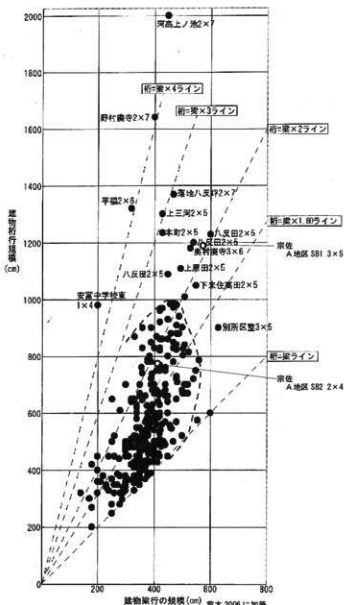
南部南東部の建物群 A地区SB1・SB2は正方位を取り、北辺をそろえてL字形に配置されている。規模の大きいSB1が東西棟で主屋、規模の小さいSB2が南北棟で副屋と考えられる。建物の柱穴から出土した土器は少ないが、SP79などの近接する遺構から出土した土器から見て8世紀前半を下らないものと考えられる。

SB1の規模は長11.9m、幅5.7mと非常に大きく、SB2の規模は長7.7m、幅4.1mで標準的な規模である(第11図)。特にSB1は格別に大きいことは明らかである。規模に近い掘立柱建物跡が検出されているのは佐用郡衙推定地である八反田遺跡(佐用町)と古代寺院跡の奥村廃寺(たつの市)である。いずれも南北棟の建物であり、八反田遺跡では政府の周辺にある施設の一部、奥村廃寺では僧房と推定されている建物で、付属的な位置付けの建物である。

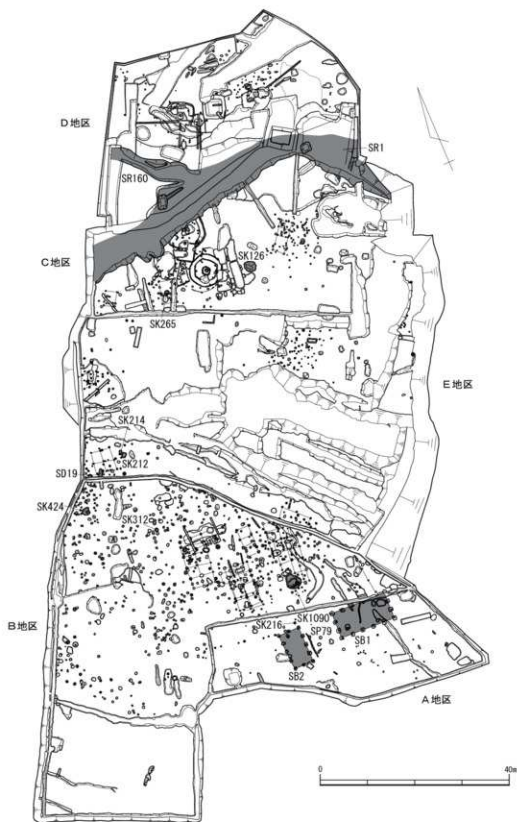
L字形の配置は官衙の要素の強いコの字形配置の省略型とされ、そのなかでは主屋の建物規模からして上位に位置するものと思われる(平田2006)。

2. 古代の瓦について

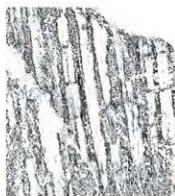
宗佐遺跡では瓦が少なからず出土している。ごく少数中世のものを含むが、ほとんどが古代に属するものである。図示した点数は南からA地区4点、B地区24点、E地区10点、C地区16点、D地区7点と全地区にわたり出土している。



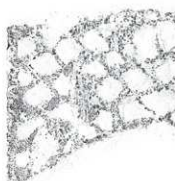
第11図 建物規模の比較



第 12 図 古代の宗佐遺跡



H 1 類 T38



H 2 類 T11



H 3 類 T37



H 4 類 T13



H 5 類 T14



H 6 類 T58



H 7 類 T57



H 8 類 T15



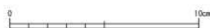
H 9 類 T25



H 10 類 T26

- H 1 類 縦長長方形格子
H 2 類 横長斜格子
H 3 類 横長斜格子
H 4 類 横長斜格子
H 5 類 右上がりの偏斜格子

- H 6 類 「大」字風の文様
H 7 類 平行文
H 8 類 細い縄目
H 9 類 太い縄目
H 10 類 無文



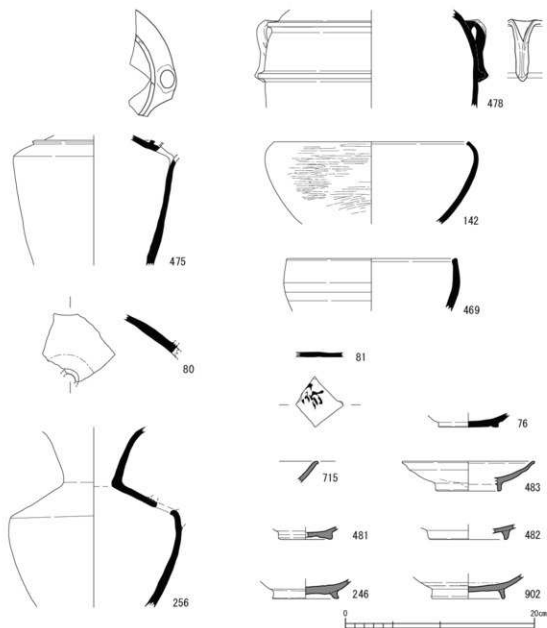
第 13 図 平瓦のタタキ目

中世の巴文軒丸瓦以外には軒瓦は出土しておらず、丸瓦には玉縁式と行基式の両方が存在する。平瓦は第13図に示す通り凸面のタタキ目に複数の種類を確認することができる。個々の種類の時期を特定することは難しいが、桶巻作りを含まないことから8世紀中頃以降、粘土紐巻き上げ成形の平瓦（H3類のT37）や「大」字風の文様（H6類）のタタキ目の平瓦が神出窯産とみられる（神戸市教育委員会2018）ことから11・12世紀まで瓦を使用した建物は長期間継続していたことがうかがわれる。

2. 古代の特殊遺物について

古代の宗佐遺跡の性格を示す特殊な遺物について取り上げる。

浄瓶 肩部に注口をもつ須恵器壺が3点出土している。475はB地区包含層、80はA地区包含層、256はB地区SX404から出土している。475は肩の内側にしっかりと突帯をもち、多口瓶の可能性もある。



第14図 古代の特殊遺物

平安時代中期頃のものと考えられる。80は注口の径が小さいことから浄瓶の可能性が高い。256は注口が1か所であることから浄瓶と判断される。SX404からは12世紀の土器が出土している。なおB地区包含層からは須恵器突帯付双耳壺(478)も出土している。

鉄鉢形須恵器 鉄鉢形須恵器は2点出土している。142はヘラミガキが丁寧に施されており、志方窯跡群の中谷4号窯の時期に近い8世紀第2四半期頃のものと思われる(兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2001)。A地区の包含層から出土している。469は口縁部の湾曲が弱く、神出窯跡群鴨谷支群の製品とみられ、10・11世紀頃のものと考えられる(兵庫県立考古博物館2011)。B地区の包含層から出土している。

墨書土器 須恵器の底部(81)に「家」と記されているとみられる。A地区の包含層から出土している。

朱墨硯 京都産の緑釉素地の底部(76)で、底面を朱墨硯として使用されている。A地区の包含層から出土している。時期は10世紀前半である。

施釉陶器 緑釉陶器は3点出土している。715・481は京都系で、715はC地区包含層、481はB地区包含層から出土している。481は蛇の目高台で、時期は9世紀後半である。246は近江系で、時期は10世紀後半である。B地区SD1016から出土している。

灰釉陶器は3点出土している。482・483はB地区包含層、902はE地区SD19から出土している。いずれも黒雫90号式で、時期は9世紀後半である。

4. 古代の宗佐遺跡の性格について

南部南東部の8世紀前半の建物群は官衙的要素のあるL字形の配置のなかでは主屋の建物規模が大きく、上位に位置するものと思われる。主屋の建物規模は官衙や寺院で実務的に用いられる建物のなかでは大型に属する規模にあたる。この規模の建物を主屋にしたユニットは、「家」と記された墨書土器の出土と合わせると、官衙や寺院などに関連した経営主体による開発拠点施設と考えたい。

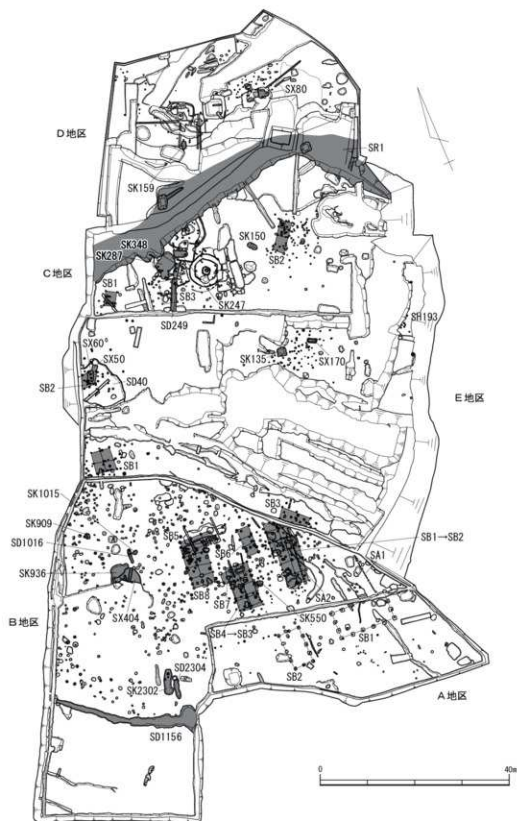
それに加えて、少なからず瓦が出土していることから、建物群が設けられたと同時に、やや遅れた時期に瓦葺建物が存在していたことが分かる。建物遺構は検出されていないが、瓦の出土範囲からすると用水路掘削によって損壊の大きいE地区の更新世段丘が張り出した部分が、より谷の奥に存在したものと思われる。浄瓶や鉄鉢などが出土していることから、仏堂が存在したと考えられる。瓦や仏事に関係する須恵器の時期から平安時代後期までは存続していただろう。

南部南東部の建物群は建て替えがなく、一時期のみで継続していない。施釉陶器などの出土状況からみると南部北西部付近からの出土が多く、拠点施設の位置は移動したと考えられる。

第3節 中世

1. 概要

谷川の流路SR1は中世においても、同じ流路を保ってきた。中世においても流路と段丘崖によって地形が区分される箇所ごとに様相が異なっている。流路は谷奥に溜池が設けられたことにより16世紀後半に埋没したとみられ、その溜池の用水路は地形の高いE地区の更新世段丘の張り出し部に設けられた。



第 15 図 中世の宗佐遺跡

2. 南部

10世紀については土坑B地区SK550が検出されているのみである。

11世紀～12世紀にかけては、南部南東部の建物群の北側で掘立柱建物が建て替えられている。11世紀に属するのはB地区SB1→B地区SB2、B地区SB5、11世紀～12世紀に属するのはB地区SB4→B地区SB3、B地区SB6、B地区SB8、12世紀に属するのはB地区SA1である。桁行4間～2間、梁行2間の主屋が4回建て替えられ、一部の段階では桁行3間、梁行1間の副屋が付属している。11世紀から12世紀の土坑・溝などが建物の西側で検出されている。

南部で検出されている東西溝B地区SD1056は水田域の北側を画する用水路で、時期は15世紀前半である。

検出された中世の建物の規模は中小規模であることから、この区域は近隣土地の耕作者の宅地と考えられる。

3. 中部

前節で述べたとおり、この区域もしくはその東側に12世紀頃までは仏堂が存在したと考えられる。1点のみ中世後期の巴文軒丸瓦(T53)が出土していることから、溜池築造直前まではなんらかの形で、仏堂が維持されていたことも考えられる。

10世紀については北西部で南北方向の溝C地区SD249で須恵器碗・土師器碗などがまとまって出土し、その近辺では11世紀にかけて小規模な掘立柱建物跡や土坑などが検出されている。

E地区SD202埋没後のくぼみ(E地区SD40)は11世紀前半まで残り、完全に埋没した12世紀前半に火葬跡(E地区SX50・SX60)が設けられている。その東側のやや高い位置に12世紀後半の土坑SK135があり、その近くで木棺墓SX190が検出されている。

その後は北部で13世紀の土坑C地区SK247と16世紀の土坑C地区SK150があり、その横で検出されているC地区SB2もその時期の可能性がある。

この区域は、溜池の用水路による損壊が大きいことから、確かなことは分らないが仏堂に関連して設けられた遺構が多いのだろう。

4. 北部

流路SR1の攻撃面側の氾濫が多いためか、土地の利用は低調である。14世紀の土坑D地区SK459と15世紀の落ち込みD地区SX80が検出されているのみである。

参考文献

- 荒木幸治2006年「統計的にみた古代集落の格差」『古代集落から見た播磨ー徹底討論!! ムラと役所』
第6回播磨考古学研究集会実行委員会
- 稲原昭嘉1996年「明石市西脇遺跡出土の石器群について」『旧石器考古学』52 旧石器文化談話会
- 久保弘幸1994年「瀬戸内技法を伴う石器群の変遷」『瀬戸内技法とその時代』中・四国旧石器文化談話会
- 久保弘幸2014年「西日本後期旧石器文化の編年と瀬戸内技法」『旧石器考古学』79 旧石器文化談話会
- 神戸市教育委員会2018年『神出窯跡群発掘調査報告書』
- 坂江 渉2010年『播磨国風土記を通してみる古代地域社会の復元的研究』
- 篠宮 正2007年「東播磨地域の編年」『弥生土器集成と編年ー播磨編ー』
- 難波洋三ほか 2015「兵庫県加古川市望塚出土銅鐸の研究」『兵庫県立考古博物館研究紀要』第8号
- 日本旧石器学会2018年『日本列島の旧石器時代遺跡ー日本旧石器（先土器・岩宿）時代遺跡データベースー』
- 兵庫県教育委員会2022年『兵庫県遺跡地図』
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2001年『志方窯跡群Ⅱ』
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2002年『勝手野古墳群』
- 兵庫県立考古博物館2011年『神出窯跡群Ⅲ』
- 兵庫県立考古博物館2012年『東沢1号墳』
- 兵庫県立考古博物館2023年『兵庫県立考古博物館研究紀要第16号 大中遺跡調査研究・活用プロジェクト成果報告』
- 兵庫県まちづくり技術センター 2024年『片山遺跡・皿辻遺跡』
- 平田博幸2006年「建物配置からみる古代の播磨社会」『古代集落から見た播磨ー徹底討論!! ムラと役所』
第6回播磨考古学研究集会実行委員会
- 宮本康二1994年「堂山3号墳出土陶棺の位置付けとその系譜」『堂山古墳ー本文編ー』大阪府教育委員会

付表 1 A・B地区土坑一覧

地区	番号	図版	遺構面	形態	長さ (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
A	13	14	上層	不整楕円形	122	93	55
A	26	14	上層	不整四角形	114	100	5
A	40	14	上層	不整円形	60	-	16
A	41	15	上層	不整円形	110	93	12
A	42	15	上層	不明	(60)	-	(23)
A	44	15	上層	不整楕円形	77	55	18
A	45	15	上層	不整楕円形	80	56	18
A	52	15	上層	不整形	65	64	16
A	53	15	上層	不整楕円形	75	64	15
A	67	15	上層	不整楕円形	95	62	10
A	132	18	下層	不整楕円形	86	68	34
A	133	18	下層	楕円形	126	87	12
A	162	18	下層	不明	(68)	(56)	(15)
A	163	19	下層	不整円形	165	150	18
A	164	18	下層	長形	150	52	13
A	165	19	下層	不整隅丸長方形	184	87	25
A	201	18	下層	不整形	123	104	13
A	201b	18	下層	不整楕円形	105	84	7
A	202	18	下層	瓢形	170	112	12
A	207	20	下層	不整円形	159	137	40
A	208	20	下層	不整円形	125	122	28
A	223	18	下層	不整四角形	83	76	22
A	228	18	下層	長楕円形	150	64	15
A	248	20	下層	不整楕円形	82	63	16
A	262	17	下層	不整楕円形	70	57	15
B	8	27	下層	楕円形?	150	60	17
B	11	54	下層	不整形	224	130	28
B	73	54	下層	不整楕円形	95	74	10
B	77	54	下層	不整形	200	163	13
B	83	55	下層	不整形	220	150	25
B	94	38	上層	不整形?	(106)	106	22
B	95	38	上層	不整楕円形	100	75	10
B	96	54	下層	楕円形	(163)	127	10
B	227	43	下層	楕円形	120	90	10
B	243	39	上層	不整形	115	(80)	16
B	308	27	下層	不整楕円形	350	160	8
B	312	27	上層	円形	90	90	16
B	340	39	上層	楕円形	96	75	16
B	341	39	上層	不整楕円形	155	127	18
B	350	54	下層	不整円形	98	85	17
B	367	39	上層	長楕円形	123	50	22
B	385	39	上層	不整楕円形	146	78	12
B	389	56	下層	長形	656	180	38
B	400	116	上層	長形?	(167)	77	26
B	424	39	上層	不整形	177	176	26
B	446	54	下層	不明	112	(56)	20
B	501	39	上層	不整楕円形	92	58	12
B	550	40	上層	不整隅丸四角形	155	120	40
B	576	40	上層	不整隅丸四角形	130	77	10
B	584	40	上層	長方形	130	105	6
B	590	41	上層	不明	(180)	(50)	(18)
B	622	41	上層	円形	110	-	16
B	626	56	下層	不整楕円形	96	74	22

地区	番号	図版	遺構面	形態	長さ (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
B	738	41	上層	不整形	84	75	20
B	746	56	下層	不整楕円形	115	98	8
B	796	56	下層	不明	(125)	(64)	(15)
B	838	56	下層	不整楕円形	156	93	10
B	874	56	下層	楕円形	123	73	12
B	909	41	上層	不整形	132	100	26
B	936	40	上層	不整形	270	120	25
B	1001	55	下層	楕円形	95	75	25
B	1006	41	上層	不整形	130	71	8
B	1015	56	下層	不整楕円形	115	87	23
B	1024	57	下層	楕円形	174	92	13
B	1027	41	上層	長形	147	60	12
B	1031	41	上層	不明	130	76	16
B	1040	41	上層	不整円形	100	85	18
B	1057	57	下層	不整形	80	78	15
B	1089	41	上層	不整形?	178	128	11
B	1090	42	上層	不整形	327	316	50
B	1127	42	上層	不整形	238	105	14
B	1129	42	上層	不整形	160	110	12
B	2012	57	下層	不整形	(285)	(225)	33
B	2100	57	上層	不整楕円形	104	63	33
B	2136	57	下層	円形	80	-	38
B	2166	57	下層	不明	(67)	(40)	(28)
B	2174	57	下層	不整形	(126)	113	15
B	2184	49	下層	楕円形	100	(80)	7
B	2194	50	下層	不整楕円形	110	90	20
B	2199	47	下層	円形	50	(50)	25
B	2202	57	下層	楕円形	70	60	22
B	2203	57	下層	楕円形	126	65	20
B	2218	58	下層	長形	252	91	8
B	2222	48	下層	楕円形ないしは円形	(74)	(40)	(22)
B	2223	48	下層	楕円形ないしは円形	(100)	(50)	(26)
B	2224	47	下層	不整楕円形	(105)	(60)	20
B	2225	58	下層	不明	(80)	(70)	(33)
B	2236	58	下層	不明	112	30	40
B	2237	58	下層	不明	(146)	(87)	20
B	2242	53	下層	不明	(80)	(90)	20
B	2281	44	下層	不整円形	133	(105)	22
B	2296	58	下層	不整楕円形	247	150	12
B	2302	43	上層	長形	540	196	34
B	2306	53	下層	不整円形	53	(20)	13
B	2307	43	上層	不整楕円形	137	115	15
B	2310	44	上層	不整楕円形	317	205	12
B	2311	58	上層	不整形	120	105	25

付表2 土器一覽

番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量 (cm)			備考
						口径	器高	底径	
1	須恵器	杯B蓋	A	SB1	SP24	(16.0)	(1.65)	-	
2	須恵器	杯B蓋	A	SP79		(13.6)	2.3	天井部 (9.15)	
3	須恵器	杯A	A	SP79		(13.15)	3.4	8.05	
4	須恵器	杯A	A	SP79		13.0	4.75	9.8	
5	須恵器	杯A	A	SP79		13.0	3.1	9.05	
6	須恵器	杯B	A	SP103		13.4	5.1	9.9	
7	須恵器	甕	A	SP126		(34.4)	(7.9)	-	
8	土師器	甕	A	SP216		13.1	11.8	-	
9	須恵器	杯A	A	SD65		(11.75)	(3.1)	(8.45)	
10	弥生土器	甕	A	SH159		-	(7.15)	4.5	
11	弥生土器	鉢	A	SH159	床面	(14.05)	7.9	3.75	
12	弥生土器	甕	A	SP92		(15.2)	(4.7)	-	
13	弥生土器	甕	A	SP105		-	(4.8)	(5.3)	
14	弥生土器	甕	A	SK162		(16.4)	(4.3)	-	
15	弥生土器	甕	A	SK162		-	(4.3)	4.5	
16	弥生土器	鉢	A	SK163		(14.6)	(6.95)	-	
17	弥生土器	鉢	A	SK163		(11.2)	7.45	4.3	
18	弥生土器	鉢	A	SK163		(10.1)	9.35	4.05	
19	弥生土器	鉢	A	SK163		-	(7.6)	6.0	
20	弥生土器	壺	A	SK165		(18.8)	(5.75)	-	
21	弥生土器	壺	A	SK165		-	(8.7)	5.0	
22	弥生土器	鉢	A	SK165		(10.55)	8.8	4.4	
23	弥生土器	甕	A	SK165		(9.5)	(5.05)	-	
24	弥生土器	甕	A	SK165	1段下f	(12.6)	(5.15)	-	
25	弥生土器	甕	A	SK165		(13.7)	(7.85)	腹径 (13.3)	
26	弥生土器	甕	A	SK165		(14.5)	(8.75)	腹径 (13.8)	
27	弥生土器	甕	A	SK165		(13.7)	(10.1)	腹径 (15.7)	
28	弥生土器	甕	A	SK165		(13.4)	(14.75)	-	
29	弥生土器	甕	A	SK165		13.25	18.35	5.3	
30	弥生土器	甕	A	SK165		(13.05)	(8.6)	腹径 (14.05)	
31	弥生土器	壺	A	SK165		(18.8)	(5.55)	-	
32	弥生土器	甕	A	SK165		15.95	26.45	(4.95)	
33	弥生土器	甕	A	SK165		(13.8)	19.1	4.4	
34	弥生土器	甕	A	SK165		(14.8)	18.9	腹径 15.4	
35	弥生土器	底部	A	SK165		-	(2.55)	4.45	
36	弥生土器	底部	A	SK165		-	(6.35)	4.2	
37	弥生土器	底部	A	SK165		-	(8.65)	(5.45)	
38	弥生土器	鉢	A	SK165		15.7	6.9	-	
39	弥生土器	鉢	A	SK165		(25.5)	(6.8)	-	
40	弥生土器	甕	A	SK207		-	(7.4)	-	
41	弥生土器	甕	A	SK207		14.55	(7.3)	-	
42	弥生土器	甕	A	SK207		(16.8)	(5.45)	-	
43	弥生土器	鉢	A	SK207		(13.8)	7.2	4.0	
44	弥生土器	散餅壺	A	SK207		-	-	-	
45	弥生土器	底部	A	SK208		-	(10.0)	4.7	
46	弥生土器	底部	A	SK228		-	(3.7)	4.9	
47	弥生土器	甕	A	SD149	北半	(15.55)	(7.8)	-	
48	弥生土器	甕	A	SD149	北半	(15.55)	(9.1)	-	
49	弥生土器	甕	A	SD149	南半	(16.8)	(22.0)	(5.0)	
50	弥生土器	甕	A	SD149		(13.2)	14.5	4.1	
51	弥生土器	甕	A	SD149	南半	-	(7.4)	3.8	
52	弥生土器	甕	A	SD149	北半	-	(6.8)	(2.9)	
53	弥生土器	甕	A	SD149	南半	-	(8.1)	4.3	
54	弥生土器	鉢	A	SD149	北半	(31.6)	(7.8)	-	
55	弥生土器	二重口縁壺	A	SD203		-	(4.35)	-	
56	弥生土器	甕	A	SD204	北半	(13.8)	(4.9)	-	
57	弥生土器	底部	A	SD204	北半	-	(4.0)	4.6	
58	弥生土器	底部	A	SD204	北半	-	(5.35)	3.65	
59	弥生土器	二重口縁壺	A	SD204	南半	(20.9)	(3.75)	-	

番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量 (cm)			備考
						口徑	器高	底径	
60	弥生土器	鉢	A	SD204	北平	-	(6.7)	-	
61	弥生土器	高杯	A	SD205	-	-	(5.35)	-	
62	弥生土器	甕	A	SD221	-	(13.55)	(6.8)	-	
63	弥生土器	甕	A	SD221	-	(4.65)	6.8	腹径 (7.0)	
64	弥生土器	甕	A	SD251	-	(15.2)	(19.5)	(4.5)	
65	弥生土器	器台	A	SD251	-	(8.8)	8.1	8.7	
66	須恵器	甕	A	包含層	-	(12.0)	4.45	(6.8)	
67	須恵器	甕	A	包含層	-	(14.8)	(3.05)	-	
68	土師器	底部	A	包含層	-	-	(2.3)	(7.4)	
69	須恵器	杯A	A	包含層	-	-	(2.4)	(9.2)	
70	須恵器	杯A	A	包含層	-	-	(1.55)	-	
71	須恵器	杯A	A	包含層	-	(15.0)	3.0	(11.0)	
72	須恵器	杯B蓋	A	包含層	-	(15.0)	(2.65)	-	
73	須恵器	杯B蓋	A	包含層	-	(14.7)	(1.55)	-	
74	須恵器	杯B蓋	A	包含層	-	(15.7)	(1.1)	-	
75	須恵器	蓋	A	包含層	-	(18.8)	3.1	-	
76	須恵器	底部	A	包含層	-	-	(1.5)	(6.4)	緑釉素地、朱 墨転用
77	須恵器	杯B	A	包含層	-	-	(2.0)	(8.2)	
78	須恵器	杯B	A	包含層	-	(13.2)	4.0	9.7	
79	須恵器	甕	A	包含層	-	-	(2.4)	-	
80	須恵器	甕	A	包含層	-	-	(4.5)	-	注口あり
81	須恵器	底部	A	包含層	-	-	-	-	
82	須恵器	蓋	A	包含層	-	-	-	-	
83	須恵器	甕	A	包含層	-	(15.8)	(5.3)	-	
84	弥生土器	甕	A	包含層	-	(18.5)	(4.6)	-	
85	弥生土器	甕	A	包含層	-	(19.8)	(2.6)	-	
86	弥生土器	甕	A	包含層	-	(11.5)	(4.7)	-	
87	弥生土器	甕	A	包含層	-	-	(7.8)	-	
88	弥生土器	甕	A	包含層	-	(16.55)	(11.85)	-	
89	弥生土器	甕	A	包含層	-	-	(6.0)	-	
90	弥生土器	甕	A	包含層	-	(15.3)	(24.1)	5.0	
91	弥生土器	甕	A	包含層	-	-	(11.35)	-	
92	弥生土器	鉢	A	包含層	-	(14.7)	(5.1)	-	
93	弥生土器	甕	A	包含層	SP66磨割時	(17.35)	(5.4)	-	
94	弥生土器	甕	A	包含層	SP186東側検出面	(14.5)	(13.15)	-	
95	弥生土器	甕	A	包含層	-	(13.8)	(10.6)	腹径 (16.2)	
96	弥生土器	甕	A	包含層	-	(14.85)	(6.9)	-	
97	弥生土器	甕	A	包含層	-	(16.9)	(5.4)	-	
98	弥生土器	甕	A	包含層	-	(16.2)	(4.25)	-	
99	弥生土器	甕	A	包含層	SD65	(13.2)	(7.15)	-	
100	弥生土器	甕	A	包含層	-	-	(14.1)	4.45	
101	弥生土器	甕	A	包含層	-	(13.7)	(16.15)	腹径 15.6	
102	弥生土器	甕	A	包含層	-	(14.8)	(22.0)	腹径 (22.1)	
103	弥生土器	甕	A	包含層	-	(17.0)	(25.5)	4.2	
104	弥生土器	甕	A	包含層	-	(16.95)	29.1	4.95	
105	弥生土器	高杯	A	包含層	第1面精査	(25.8)	(4.0)	-	
106	弥生土器	高杯	A	包含層	-	-	(9.3)	-	
107	弥生土器	高杯	A	包含層	-	-	(11.1)	-	
108	弥生土器	高杯	A	包含層	-	-	(8.55)	(12.6)	
109	弥生土器	器台	A	包含層	-	-	(5.6)	(9.5)	
110	弥生土器	器台	A	包含層	-	-	(6.95)	脚柱部 3.35	
111	弥生土器	器台	A	包含層	-	-	(12.4)	-	
112	弥生土器	器台	A	包含層	-	9.4	(3.5)	-	
113	弥生土器	鉢	A	包含層	-	-	(8.8)	腹径 (8.0)	
114	弥生土器	鉢	A	包含層	-	-	(3.25)	6.55	
115	弥生土器	鉢	A	包含層	-	-	(4.85)	6.0	
116	弥生土器	手箱形土器	A	包含層	-	-	(5.9)	-	
117	弥生土器	鉢	A	包含層	-	-	(5.1)	-	

番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量 (cm)			備考
						口徑	器高	底径	
118	土師器	ニナツ土器	A	包含層		(2.3)	2.2	-	
119	土師器	底部	A	包含層		-	(4.0)	5.45	
120	土師器	底部	A	包含層		-	(5.1)	5.1	
121	土師器	底部	A	包含層		-	(5.2)	5.55	
122	土師器	底部	A	包含層		-	(3.7)	5.9	
123	土師器	底部	A	包含層		-	(3.75)	6.45	
124	土師器	底部	A	包含層		-	(6.0)	4.4	
125	土師器	底部	A	包含層		-	(7.7)	3.3	
126	弥生土器	底部	A	包含層		-	(5.0)	8.4	
127	土師器	底部	A	包含層		-	(3.15)	4.85	
128	土師器	底部	A	包含層		-	(7.0)	4.5	
129	土師器	底部	A	包含層		-	(9.25)	4.05	
130	土師器	底部	A	包含層		-	(8.6)	2.8	
131	土師器	底部	A	包含層	SP046	-	(5.2)	4.2	
132	土師器	底部	A	包含層		-	(2.95)	5.45	
133	土師器	底部	A	包含層		-	(5.0)	5.2	
134	土師器	底部	A	包含層		-	(4.4)	4.2	
135	土師器	底部	A	包含層	SK044	-	(3.35)	3.7	
136	土師器	底部	A	包含層		-	(6.7)	5.0	
137	弥生土器	底部	A	包含層		-	(6.0)	8.9	
138	弥生土器	有孔鉢	A	包含層	SD065	(3.0)	4.5	-	
139	弥生土器	有孔鉢	A	包含層	第1面精査	-	(3.25)	4.6	
140	土師器	有孔鉢	A	包含層		-	(5.05)	3.0	
141	土師器	有孔鉢	A	包含層		-	(4.7)	3.6	
142	須恵器	杯	A	包含層		(20.6)	(8.7)	-	
143	須恵器	杯A	A	包含層		-	(2.1)	(8.0)	
144	土師器	甕 (底部)	A	包含層		-	(4.15)	4.1	
145	土師器	小皿	B	SB1	SP100	8.5	1.7	6.4	
146	土師器	杯	B	SB1	SP55	(14.95)	(4.0)	(7.95)	
147	土師器	台付碗	B	SB1	SP497	(14.15)	5.65	9.2	
148	土師器	底部	B	SB2	SP70下底付近	-	(0.75)	5.2	
149	土師器	羽口	B	SB2	SP70下底付近	-	-	-	
150	須恵器	碗	B	SB2	SP59	-	(2.85)	6.8	
151	土師器	碗	B	SB2	SP577	-	(2.55)	(5.55)	
152	須恵器	碗	B	SB2	SP89	(12.4)	(3.6)	-	
153	須恵器	碗	B	SB2	SP79	(14.4)	(4.8)	-	
154	土師器	小皿	B	SB3	SP769柱裏	(9.0)	1.6	(5.2)	
155	土師器	小皿	B	SB3	SP188	(9.1)	2.1	5.1	
156	須恵器	碗	B	SB3	SP162	16.0	5.75	5.9	
157	須恵器	碗	B	SB3	SP162	-	(2.55)	(5.9)	
158	須恵器	碗	B	SB6	SP636	(13.2)	4.8	4.4	
159	土師器	碗	B	SB5	SP802	-	(1.85)	(5.2)	
160	土師器	小皿	B	SB8	SP261	(8.75)	(1.25)	(6.5)	
161	土師器	小皿	B	SB8	SP851	(9.8)	1.7	(6.25)	
162	土師器	小皿	B	SB8	SP986	(9.7)	2.05	(6.5)	
163	土師器	小皿	B	SB8	SP846圈方	-	(0.75)	5.25	
164	土師器	杯	B	SB8	SP846圈方	-	(1.9)	(5.9)	
165	土師器	碗	B	SB8	SP1119	-	(3.05)	(6.3)	
166	須恵器	碗	B	SB8	SP846圈方	(14.6)	(5.9)	(5.7)	
167	須恵器	碗	B	SB8	SP851	14.95	6.15	5.8	
168	土師器	小皿	B	SA1	SP33	(8.0)	1.45	(6.3)	
169	土師器	小皿	B	SA1	SP35	8.0	2.1	6.3	
170	土師器	托	B	SA1	SP35	9.3	3.3	6.3	
171	土師器	托	B	SA1	SP35	9.45	3.1	4.9	
172	土師器	托	B	SA1	SP35	10.0	3.35	6.0	
173	土師器	托	B	SA1	SP35	9.2	3.4	5.3	
174	土師器	托	B	SA1	SP35	(8.95)	2.9	(5.9)	
175	土師器	托	B	SA1	SP35	(9.2)	3.2	(5.4)	
176	土師器	托	B	SA1	SP35	9.1	3.25	5.9	
177	土師器	托	B	SA1	SP35	9.55	3.0	5.65	
178	土師器	托	B	SA1	SP35	-	(2.7)	5.1	
179	須恵器	碗	B	SA1	SP35	-	(1.8)	4.9	
180	須恵器	碗	B	SA1	SP35	16.65	4.5	7.5	
181	須恵器	碗	B	SA1	SP643	(15.8)	5.1	5.7	
182	須恵器	型鉢	B	SP64		(27.5)	10.7	(9.0)	
183	土師器	杯	B	SP86		(15.0)	3.6	7.45	

番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量 (cm)			備考
						口径	器高	底径	
184	土師器	底部	B	SP117		-	(1.2)	5.1	
185	土師器	托	B	SP145		(9.05)	3.25	5.4	
186	土師器	小皿	B	SP209		(8.1)	1.8	(4.6)	
187	土師器	小皿	B	SP259		(9.8)	2.2	(5.2)	
188	須恵器	碗	B	SP254		(14.6)	(5.8)	(6.9)	
189	土師器	碗	B	SP403		(11.35)	4.2	5.1	
190	須恵器	碗	B	SP407		-	(2.3)	(5.9)	
191	須恵器	杯A	B	SP429		(12.4)	(3.55)	-	
192	須恵器	小皿	B	SP442		10.1	2.15	6.0	
193	須恵器	碗	B	SP442		(14.3)	5.0	5.05	
194	須恵器	碗	B	SP457		-	(2.25)	(5.5)	
195	須恵器	碗	B	SP482		-	(2.4)	-	
196	土師器	小皿	B	SP489		(8.8)	1.3	(5.35)	
197	土師器	小皿	B	SP494		7.8	1.55	5.1	
198	土師器	襖	B	SP494	段下付	(28.7)	(10.4)	-	
199	須恵器	壺	B	SP569		-	(4.9)	(12.0)	
200	土師器	底部	B	SP600		-	(2.1)	7.15	
201	土師器	小皿	B	SP764		(9.9)	2.25	(5.95)	
202	土師器	小皿	B	SP764		(11.25)	2.5	(6.55)	
203	須恵器	小皿	B	SP765		(12.1)	(2.5)	-	
204	土師器	底部	B	SP800	南半	-	(0.7)	(7.1)	
205	土師器	底部	B	SP800	南半	-	(2.1)	(9.0)	
206	土師器	小皿	B	SP827		(8.35)	1.25	(5.9)	
207	須恵器	碗	B	SP832	1段下付	(14.7)	(3.4)	-	
208	須恵器	碗	B	SP862		-	(3.4)	(6.35)	
209	須恵器	底部	B	SP867		-	(2.5)	(13.8)	鉢?
210	土師器	小皿	B	SP901		(11.0)	1.4	(7.9)	
211	土師器	小皿	B	SP907		(9.7)	2.1	(6.6)	
212	須恵器	碗	B	SP921	柱痕	-	(1.65)	(6.1)	
213	須恵器	鉢	B	SP933		(20.6)	(3.7)+	-	
214	須恵器	杯A	B	SP973		(13.0)	2.7	(7.7)	
215	土師器	小皿	B	SP985		(9.5)	2.05	(5.05)	
216	土師器	壺	B	SP991		(12.95)	(22.3)	-	真鍮壺?
217	土師器	碗	B	SP1134		-	(2.8)	3.95	
218	土師器	底部	B	SP2006		-	(2.0)	-	
219	土師器	碗	B	SP2018		-	(1.5)	(4.9)	
220	土師器	羽釜	B	SP2044		(16.8)	(6.65)	-	
221	土師器	小皿	B	SP2108		9.4	1.9	5.8	
222	土師器	壺	B	SP2245		-	(7.35)	7.6	
223	須恵器	杯A	B	SP2250		(14.55)	3.25	(11.4)	
224	須恵器	杯A	B	SK312		-	(1.7)	(8.05)	
225	須恵器	杯B蓋	B	SK424		(14.7)	(1.2)	-	
226	須恵器	杯B	B	SK424		-	(1.6)	(10.4)	
227	須恵器	杯B	B	SK424		-	(2.7)	(7.9)	
228	須恵器	台杯碗	B	SK550	1段下付	-	(3.55)	(7.6)	
229	須恵器	碗	B	SK909		(15.3)	(4.05)	-	
230	須恵器	底部	B	SK909		-	(0.9)	4.9	
231	土師器	底部	B	SK936		-	(1.6)	(6.9)	
232	須恵器	碗	B	SK936		-	(1.75)	(6.5)	
233	須恵器	碗	B	SK936		(16.0)	(4.4)	(5.6)	
234	須恵器	杯B	B	SK1090	残層上面	-	(1.95)	(12.1)	
235	土師器	杯	B	SK1129		(14.1)	4.1	(7.05)	
236	土師器	碗	B	SK2302		-	(1.5)	6.35	
237	土師器	碗	B	SK2302		-	(2.55)	(5.2)	
238	土師器	杯	B	SK2307		-	(2.0)	(7.85)	
239	土師器	杯	B	SK2307		-	(1.35)	(7.3)	
240	須恵器	碗	B	SK2307		(17.0)	(2.8)	-	
241	須恵器	碗	B	SK2307		(15.95)	(5.0)	(5.6)	
242	白磁	皿	B	SK2307		(8.8)	(2.2)	-	
243	須恵器	杯B	B	SD466		-	(1.4)	(10.0)	
244	須恵器	襖	B	SD466		(18.0)	(2.6)	-	
245	弥生土器	底部	B	SD1016		-	(3.05)	(3.45)	
246	緑釉陶器	底部	B	SD1016		-	(2.1)	(7.0)	
247	須恵器	碗	B	SD1016		(11.8)	(3.75)	-	
248	土師器	鍋	B	SD1056	東側	(21.7)	(4.6)	-	
249	須恵器	碗(底部)	B	SD2304		-	(1.3)	(7.2)	

番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量 (cm)			備考
						口径	器高	底径	
250	須恵器	甕	B	SK2322		(15.5)	(2.7)	-	
251	須恵器	小皿	B	SX0404		7.55	1.45	5.1	
252	須恵器	碗	B	SX0404		(15.5)	(2.3)	-	
253	須恵器	碗	B	SX0404		(15.15)	5.4	(5.2)	
254	須恵器	壺	B	SX0404		-	(3.3)	10.1	
255	須恵器	埴鉢	B	SX0404		(28.4)	10.55	(11.5)	
256	須恵器	浄瓶	B	SX0404		-	(49.0)	-	
257	弥生土器	底部	B	SH1022	下層	-	(6.5)	4.0	
258	弥生土器	鉢	B	SH1022		12.6	6.7	4.3	
259	弥生土器	高杯	B	SH1022		(16.8)	(8.85)	-	
260	弥生土器	高杯	B	SH2098	上層暗褐色砂礫	(18.8)	(4.3)	-	
261	弥生土器	鉢	B	SH2098		(16.8)	(4.7)	-	
262	弥生土器	壺	B	SH2098		(14.0)	(2.35)	-	
263	弥生土器	底部	B	SH2098		-	(4.1)	5.6	
264	弥生土器	底部	B	SH2098	下層	-	(3.2)	4.1	
265	弥生土器	底部	B	SH2098	上層暗褐色砂礫	-	(3.75)	(4.6)	
266	弥生土器	有孔鉢	B	SH2098	上層暗褐色砂礫	(13.85)	10.5	2.9	
267	弥生土器	有孔鉢	B	SH2098	下層	-	(3.15)	1.6	
268	弥生土器	高杯	B	SH2141		(11.0)	(3.75)	-	
269	弥生土器	高杯	B	SH2141		-	(5.35)	(10.0)	
270	弥生土器	鼓形器台	B	SH2141		-	(8.25)	-	
271	弥生土器	鉢	B	SH2141		(8.9)	5.05	(3.2)	
272	弥生土器	鉢	B	SH2141		(11.2)	6.2	3.65	
273	弥生土器	鉢	B	SH2141		(11.7)	7.15	4.1	
274	弥生土器	底部	B	SH2141		-	(3.0)	4.9	
275	弥生土器	底部	B	SH2141	下層	-	(3.1)	4.0	
276	弥生土器	底部	B	SH2141		-	(2.8)	2.15	
277	須恵器	杯A	B	SH2141		-	(1.35)	(9.9)	
278	土師器	甕	B	SH2141	下層(東側)	(18.8)	(6.2)	-	
279	弥生土器	壺	B	SH2157	床面	(18.8)	(11.3)	-	
280	弥生土器	壺	B	SH2157	床面	-	(4.8)	5.25	
281	弥生土器	底部	B	SH2157		-	(3.45)	(4.05)	
282	弥生土器	鉢	B	SH2157		-	(6.35)	4.1	
283	弥生土器	底部	B	SH2157	床面	-	(4.3)	-	
284	弥生土器	脚部	B	SH2157		-	(3.3)	(19.0)	
285	須恵器	碗	B	SH2157		-	(3.0)	6.05	
286	土師器	碗(底部)	B	SH2157		-	(4.2)	8.3	
287	土師器	碗(脚部)	B	SH2157		-	(2.55)	(8.0)	
288	土師器	托(脚部)	B	SH2157		-	(2.45)	6.25	
289	弥生土器	壺	B	SH2131		(13.8)	(4.95)	-	
290	土師器	甕	B	SH2131		(17.4)	(6.5)	-	
291	弥生土器	甕	B	SH2131		(15.2)	(17.3)	-	
292	弥生土器	高杯	B	SH2131		(24.75)	(4.0)	-	
293	弥生土器	底部	B	SH2131		-	(6.65)	4.6	
294	弥生土器	底部	B	SH2131		-	(3.3)	5.35	
295	弥生土器	底部	B	SH2131		-	(5.2)	(5.0)	
296	弥生土器	有孔鉢	B	SH2131		-	(4.6)	4.4	
297	弥生土器	有孔鉢	B	SH2131		-	(4.4)	(3.6)	
298	弥生土器	有孔鉢	B	SH2131		-	(5.75)	(3.9)	
299	弥生土器	底部	B	SH2156		-	(4.4)	1.45	
300	弥生土器	底部	B	SH2156	上層	-	(2.95)	4.35	
301	弥生土器	底部	B	SH2156	上層	-	(4.0)	5.3	
302	弥生土器	底部	B	SH2156		-	(7.6)	4.1	
303	弥生土器	平焰形土器	B	SH2156	SP2243	-	(17.7)	-	
304	土師器	碗	B	SH2156	上層	(16.8)	(5.05)	-	
305	土師器	杯	B	SH2156	上層	(15.8)	2.5	(10.6)	
306	須恵器	杯A	B	SH2156		(12.8)	2.8	(8.5)	
307	須恵器	杯B	B	SH2156	上層	(13.4)	4.45	(8.0)	
308	須恵器	壺	B	SH2156	上層	(20.9)	(2.75)	-	
309	須恵器	杯B	B	SH2156	上層	-	(2.3)	(10.1)	
310	須恵器	碗	B	SH2156	上層	16.6	5.0	(5.8)	
311	須恵器	壺	B	SH2156	上層	-	(13.75)	(18.0)	
312	弥生土器	底部	B	SH2094		-	(3.55)	-	
313	弥生土器	高杯	B	SH2094		-	(5.3)	-	
314	土師器	杯	B	SH2094		(12.4)	3.4	(9.0)	
315	須恵器	碗	B	SH2094		(13.5)	(4.7)	-	

番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量 (cm)			備考
						口径	器高	底径	
316	須恵器	杯口蓋	B	SH2094		(20.0)	(2.05)	-	
317	弥生土器	甕	B	SK8		(14.8)	(7.5)	腹径 (15.3)	
318	弥生土器	三つアツ土器	B	SK11	東半	-	(5.2)	(3.9)	
319	弥生土器	三つアツ土器	B	SK11	東半	-	(4.8)	-	
320	弥生土器	甕	B	SK11	東半	(15.2)	(3.5)	-	
321	弥生土器	底部	B	SK11	東半	-	(6.05)	4.55	
322	弥生土器	高杯	B	SK11	東半	(25.6)	(7.3)	-	
323	弥生土器	高杯	B	SK11		(12.1)	(5.4)	-	
324	弥生土器	高杯	B	SK11		-	(7.95)	-	
325	弥生土器	有孔鉢	B	SK73		-	(2.7)	2.95	
326	弥生土器	壺	B	SK83		-	(4.7)	-	
327	弥生土器	高杯	B	SK83		(17.35)	(6.65)	脚柱径 最小3.4	
328	弥生土器	底部	B	SK96	西半	-	(2.6)	11.2	
329	弥生土器	底部	B	SK227		-	(3.3)	3.8	
330	弥生土器	底部	B	SK227		-	(2.6)	3.8	
331	弥生土器	高杯	B	SK227		-	(10.3)	-	
332	弥生土器	甕	B	SK308	1段下付	(15.9)	(3.5)	-	
333	弥生土器	底部	B	SK308	1段下付	-	(3.35)	4.5	
334	弥生土器	底部	B	SK308	1段下付	-	(3.4)	4.7	
335	弥生土器	底部	B	SK389		-	(4.2)	2.7	
336	弥生土器	底部	B	SK446		-	(3.7)	4.0	
337	弥生土器	甕	B	SK446		(14.7)	(6.7)	-	
338	弥生土器	底部	B	SK446		-	(6.05)	3.8	
339	弥生土器	甕	B	SK1001		(13.6)	(11.65)	-	
340	弥生土器	甕	B	SK1001		-	(2.55)	(4.1)	
341	弥生土器	甕	B	SK1001		-	(16.5)	4.4	
342	弥生土器	甕	B	SK1001		-	(7.65)	3.5	
343	弥生土器	甕	B	SK1024		(13.8)	(9.15)	-	
344	弥生土器	甕	B	SK746		(15.0)	(10.45)	-	
345	弥生土器	底部	B	SK1024		-	(4.55)	4.8	
346	弥生土器	蓋	B	SK1024		-	(6.05)	(12.0)	
347	弥生土器	蓋	B	SK1024		-	(5.9)	(12.8)	
348	弥生土器	高杯	B	SK1057		-	(4.2)	(15.6)	
349	弥生土器	底部	B	SK2021		-	(3.85)	3.9	
350	弥生土器	底部	B	SK2021		-	(5.95)	(5.8)	
351	土師器	甕	B	SK2100		(25.6)	(8.1)	-	
352	弥生土器	壺	B	SK2311		(17.6)	(8.6)	-	
353	弥生土器	甕	B	SK2311		-	(15.8)	4.6	
354	弥生土器	底部	B	SK2311		-	(3.4)	3.6	
355	弥生土器	壺	B	SP200		21.7	(10.85)	-	
356	弥生土器	甕	B	SP201		(15.7)	(6.45)	-	
357	弥生土器	底部	B	SP201		-	(3.7)	5.1	
358	弥生土器	甕	B	SP239		(12.8)	(3.9)	-	
359	弥生土器	底部	B	SP239		-	(2.1)	3.7	
360	弥生土器	底部	B	SP239		-	(2.55)	4.7	
361	弥生土器	高杯	B	SP239		-	-	-	
362	弥生土器	底部	B	SP304		-	(2.75)	5.0	
363	弥生土器	底部	B	SP310		-	(2.7)	3.1	
364	弥生土器	底部	B	SP310		-	(3.0)	5.5	
365	弥生土器	甕	B	SP373		14.95	19.5	3.9	
366	弥生土器	壺	B	SP414		(12.7)	(4.65)	-	
367	弥生土器	底部	B	SP487		-	(4.0)	5.2	
368	弥生土器	高杯	B	SP412	南側埋土	-	(5.0)	-	
369	弥生土器	底部	B	SP513		-	(2.65)	4.7	
370	弥生土器	甕	B	SP1048		(15.0)	(3.0)	-	
371	弥生土器	甕	B	SP2259		(15.4)	(5.65)	-	
372	弥生土器	鉢	B	SP2259		(12.1)	7.0	3.5	
373	弥生土器	底部	B	SD15		-	(4.8)	6.45	
374	弥生土器	甕	B	SD2247		(14.8)	(9.0)	-	
375	弥生土器	壺	B	SD2247	SK504	12.7	(4.2)	-	
376	弥生土器	壺	B	SD2247		(13.6)	(5.2)	-	
377	弥生土器	壺	B	SD2247		-	(14.6)	5.7	
378	弥生土器	長頸壺	B	SD2247		(7.4)	(11.7)	-	
379	弥生土器	甕	B	SD2247		(13.8)	(7.1)	-	

番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量 (cm)			備考
						口徑	器高	底径	
380	弥生土器	甕	B	SD2247		(14.4)	21.0	(16.0)	
381	弥生土器	甕	B	SD2247		(15.5)	(19.75)	腹径18.3	
382	弥生土器	甕	B	SD2247	SX504	(15.55)	(5.2)	-	
383	弥生土器	甕	B	SD2247	SX504	-	(4.8)	-	
384	弥生土器	ハツボ?	B	SD2247	SX504	(8.75)	(4.6)	-	
385	弥生土器	鉢	B	SD2247		(13.65)	6.45	4.2	
386	弥生土器	甕	B	SD2247		-	(12.0)	4.7	
387	弥生土器	底部	B	SD2247	SX504	-	(6.6)	5.0	
388	弥生土器	底部	B	SD2247	SX504	-	(6.1)	4.8	
389	弥生土器	底部	B	SD2247	SX504	-	(7.4)	4.0	
390	弥生土器	底部	B	SD2247	SX504	-	(2.3)	4.5	
391	弥生土器	底部	B	SD2247	SX504	-	(3.4)	5.5	
392	弥生土器	高杯	B	SD2247		(15.75)	(3.75)	-	
393	弥生土器	高杯	B	SD2247	SX504	(16.7)	(4.8)	-	
394	弥生土器	高杯	B	SD2247	SX504	(21.2)	(5.5)	-	
395	弥生土器	高杯	B	SD2247		-	(5.5)	-	
396	弥生土器	高杯	B	SD2247		-	(7.8)	(15.1)	
397	弥生土器	甕	B	SD2290		(16.8)	(2.25)	-	
398	弥生土器	シコツ土器	B	SD2290		-	(2.6)	2.1	
399	弥生土器	脚部	B	SD2290		-	(4.3)	-	
400	土師器	小皿	B	包含層	灰色砂礫層	(8.35)	1.35	5.15	
401	土師器	小皿	B	包含層	灰色砂礫層	(8.75)	1.7	(5.3)	
402	土師器	小皿	B	包含層	灰色砂礫層	(9.5)	1.95	(5.7)	
403	土師器	小皿	B	包含層	灰色砂礫層	(10.3)	1.9	6.1	
404	土師器	小皿	B	包含層	灰色砂礫層	(10.8)	2.2	5.8	
405	土師器	小皿	B	包含層	灰色砂礫層	(10.7)	2.6	5.3	
406	土師器	小皿	B	包含層	土層精査	(10.0)	2.6	5.35	
407	土師器	碗	B	包含層	上面遺構直下	(11.0)	(3.4)	-	
408	土師器	杯	B	包含層	灰色砂礫層	(14.7)	4.2	(7.6)	
409	土師器	碗	B	包含層	灰色砂礫層	(13.0)	(4.2)	-	
410	土師器	底部	B	包含層	灰色砂礫層	-	(1.05)	5.95	
411	土師器	碗	B	包含層	精査面	-	(1.8)	(5.6)	
412	土師器	底部	B	包含層	面掘削	-	(1.75)	-	
413	土師器	杯	B	包含層	-	(1.55)	6.2	-	
414	土師器	底部	B	包含層	灰色砂礫層	-	(2.5)	(7.3)	
415	土師器	底部	B	包含層	SP2321	-	(2.6)	6.6	
416	土師器	底部	B	包含層	SP2321	-	(3.0)	(8.0)	
417	土師器	底部	B	包含層	灰色砂礫層	-	(2.5)	7.3	
418	土師器	底部	B	包含層	灰色砂礫層	-	(3.3)	7.25	
419	土師器	羽釜	B	包含層	灰色砂礫層	(28.1)	(4.45)	-	
420	土師器	脚部	B	包含層	-	-	-	-	
421	土師器	甕	B	包含層	灰色砂礫層	-	-	-	
422	須恵器	小皿	B	包含層	灰色砂礫層	7.05	1.5	3.9	
423	須恵器	小皿	B	包含層	灰色砂礫層	(9.05)	(1.5)	-	
424	須恵器	皿	B	包含層	灰色砂礫層	(11.3)	2.75	6.15	
425	須恵器	碗	B	包含層	灰色砂礫層	(15.7)	(5.0)	(5.7)	
426	須恵器	碗	B	包含層	灰色砂礫層	(13.8)	(4.9)	-	
427	須恵器	碗	B	包含層	灰色砂礫層	(13.8)	(4.95)	5.4	
428	須恵器	碗	B	包含層	灰色砂礫層	-	(3.85)	(6.0)	
429	土師器	碗	B	包含層	灰色砂礫層	-	-	-	
430	須恵器	碗	B	包含層	灰色砂礫層	-	(1.7)	(5.2)	
431	須恵器	碗	B	包含層	灰色砂礫層	-	(2.75)	(5.5)	
432	須恵器	碗	B	包含層	灰色砂礫層	-	(3.65)	(7.0)	
433	須恵器	碗	B	包含層	灰色砂礫層	-	(2.45)	6.1	
434	須恵器	碗	B	包含層	灰色砂礫層	-	(2.7)	5.3	
435	須恵器	碗	B	包含層	灰色砂礫層	-	(2.3)	(5.4)	
436	須恵器	杯A	B	包含層	灰色砂礫層	-	(1.9)	7.4	
437	須恵器	碗	B	包含層	灰色砂礫層	-	(1.6)	6.0	
438	須恵器	碗	B	包含層	灰色砂礫層	-	(3.8)	6.0	
439	須恵器	鉢	B	包含層	灰色砂礫層	-	(3.75)	(12.0)	
440	須恵器	段鉢	B	包含層	灰色砂礫層	-	(2.75)	(12.6)	
441	須恵器	段鉢	B	包含層	灰色砂礫層	-	(3.1)	-	
442	須恵器	段鉢	B	包含層	灰色砂礫層	-	(3.85)	-	
443	須恵器	段鉢	B	包含層	灰色砂礫層	-	-	-	
444	須恵器	杯B蓋	B	包含層	灰色砂礫層	-	(1.65)	-	

序号	類別	器種	地区	遺構	層位	法量 (cm)			備考
						口徑	器高	底徑	
445	須惠器	杯-B蓋	B	包含層		-	(1.4)	-	
446	須惠器	杯-B蓋	B	包含層		-	(0.85)	-	
447	須惠器	杯-A	B	包含層	灰色砂礫層	(14.8)	(4.95)	-	
448	須惠器	杯-A	B	包含層	灰色砂礫層	(13.65)	2.65	(11.0)	
449	須惠器	杯	B	包含層	暗褐色砂礫	(13.8)	(3.3)	(9.5)	
450	須惠器	杯-A	B	包含層	灰色砂礫層	-	(1.85)	(11.5)	
451	土師器	杯-B	B	包含層	上面遺構	(13.4)	3.7	(7.0)	
452	須惠器	杯-B	B	包含層	灰色砂礫	-	(3.8)	(9.8)	
453	須惠器	鉢	B	包含層	灰色砂礫層	-	(2.2)	(13.0)	
454	須惠器	杯-B	B	包含層	精査面直上	-	(1.9)	(7.95)	
455	須惠器	杯-B	B	包含層	上層遺構面直下包含層	-	(1.55)	(9.3)	
456	須惠器	杯-B	B	包含層	灰色砂礫層	-	(2.6)	(9.6)	
457	須惠器	杯-B	B	包含層	灰色砂礫	-	(1.85)	(8.0)	
458	須惠器	碗	B	包含層	灰色砂礫	-	(2.4)	6.9	
459	須惠器	底部	B	包含層	-	(1.75)	(8.0)	-	
460	須惠器	蓋	B	包含層	下層包含層	-	(2.35)	(8.0)	
461	須惠器	碗	B	包含層	灰色砂礫層	-	(2.4)	(8.0)	
462	須惠器	底部	B	包含層	-	(2.2)	(10.1)	-	
463	須惠器	底部	B	包含層	灰色砂礫層	-	(2.7)	(9.6)	
464	須惠器	底部	B	包含層	灰色砂礫層	-	(0.9)	(6.95)	
465	須惠器	杯	B	包含層	灰色砂礫	(13.0)	3.7	(7.8)	
466	須惠器	蓋	B	包含層	灰色砂礫	(15.6)	(3.35)	-	
467	須惠器	蓋	B	包含層	灰色砂礫	(13.8)	3.35	(10.4)	
468	須惠器	捏鉢	B	包含層	灰色砂礫層	(17.2)	(5.95)	-	
469	須惠器	鉢	B	包含層	灰色砂礫層	(17.8)	(5.55)	-	
470	須惠器	捏鉢	B	包含層	精査面直上	-	(3.75)	-	
471	須惠器	捏鉢	B	包含層	灰色砂礫層	-	(3.8)	-	
472	須惠器	蓋	B	包含層	灰色砂礫層	-	(5.0)	(9.4)	
473	須惠器	鉢	B	包含層	灰色砂礫層	-	(5.4)	(12.4)	
474	須惠器	鉢	B	包含層	灰色砂礫	-	(5.0)	(14.35)	
475	須惠器	瓶	B	包含層	灰色砂礫層	-	(13.7)	-	淨瓶or多口瓶
476	須惠器	瓶	B	包含層	包含層	-	(9.75)	8.1	
477	須惠器	二面碗	B	包含層	灰色砂礫	-	-	-	
478	須惠器	双耳壺	B	包含層	灰色砂礫	-	(10.4)	-	
479	須惠器	小皿	B	包含層	下層包含層	(10.6)	(2.35)	-	
480	土師器	高杯	B	包含層	灰色砂礫層	-	(2.4)	(13.9)	
481	埴輪陶器	底部	B	包含層	灰色砂礫層	-	(1.35)	(5.8)	
482	埴輪陶器	底部	B	包含層	灰色砂礫層	-	(1.6)	(8.2)	
483	灰釉陶器	皿	B	包含層	精査面直上	(13.8)	3.2	(6.4)	
484	無釉陶器 (備前)	擂鉢	B	包含層		(30.7)	(5.25)	-	
485	須惠器	捏鉢	B	包含層	灰色砂礫層	-	(2.65)	-	
486	白磁	碗	B	包含層	灰色砂礫	(15.4)	(4.15)	-	IV類
487	白磁	碗	B	包含層	灰色砂礫	(15.6)	(3.4)	-	IV類
488	白磁	碗	B	包含層	灰色砂礫層	-	(2.4)	(5.95)	IV類
489	青磁	碗	B	包含層	灰色砂礫層	-	-	-	龍泉窯系
490	土師器	土師	B	包含層	灰色砂礫				
491	土師器	不明	B	包含層					
492	弥生土器	蓋	B	包含層	灰色砂礫	8.0	11.6	1.8	
493	弥生土器	蓋	B	包含層		(20.6)	(9.2)	-	
494	弥生土器	蓋	B	包含層	下層包含層	(18.75)	(8.75)	-	
495	弥生土器	蓋	B	包含層	灰色砂礫層	(20.75)	(2.8)	-	
496	弥生土器	蓋	B	包含層	SD1056東	(24.5)	(4.7)	-	
497	弥生土器	蓋	B	包含層	下層包含層	-	(12.45)	-	
498	弥生土器	鉢	B	包含層	灰色砂礫	(23.8)	(3.55)	-	
499	弥生土器	甕	B	包含層		(17.35)	(8.6)	-	
500	弥生土器	甕	B	包含層	灰色砂礫層	(14.9)	(5.0)	-	
501	弥生土器	甕	B	包含層		(15.6)	(4.65)	-	
502	弥生土器	甕	B	包含層		(14.9)	(5.35)	-	
503	弥生土器	甕	B	包含層	灰色砂礫層	(13.7)	(7.2)	-	
504	弥生土器	蓋	B	包含層	灰色砂礫	(12.6)	(5.75)	-	
505	弥生土器	甕	B	包含層	下層包含層	(18.7)	(5.3)	-	
506	弥生土器	甕	B	包含層		(18.8)	(9.9)	-	
507	弥生土器	甕	B	包含層	下層包含層	(11.0)	(4.9)	-	

序号	類別	器種	地区	遺構	層位	法量 (cm)			備考
						口径	器高	底径	
508	弥生土器	甕	B	包含層	下層包含層	-	(9.7)	4.0	
509	弥生土器	甕	B	包含層	灰色砂礫	(15.0)	(13.3)	-	
510	弥生土器	甕	B	包含層	灰色砂礫	-	(3.2)	(3.5)	
511	弥生土器	鉢	B	包含層	SD01056東	(10.75)	7.25	4.15	
512	弥生土器	有孔鉢	B	包含層		(13.4)	7.1	-	
513	弥生土器	高杯	B	包含層	包含層	-	(11.0)	(15.0)	
514	弥生土器	高杯	B	包含層	灰色砂礫層	(24.6)	(4.85)	-	
515	弥生土器	高杯	B	包含層	灰色砂礫	-	(5.9)	(11.8)	
516	弥生土器	高杯	B	包含層	灰色砂礫	-	(6.8)	脚柱径 最小2.9	
517	弥生土器	高杯	B	包含層	下層	-	(6.65)	脚柱部 3.2	
518	弥生土器	高杯	B	包含層	灰色砂礫層	-	(7.3)	-	
519	弥生土器	底部	B	包含層	北壁	-	(6.2)	5.6	
520	弥生土器	底部	B	包含層	北壁	-	(5.35)	5.5	
521	弥生土器	底部	B	包含層	精査面	-	(3.6)	5.3	
522	弥生土器	底部	B	包含層	SD1056東	-	(3.35)	5.5	
523	弥生土器	底部	B	包含層		-	(4.7)	5.35	
524	弥生土器	底部	B	包含層		-	(4.55)	4.65	
525	弥生土器	底部	B	包含層	下層包含層	-	(5.4)	3.55	
526	弥生土器	底部	B	包含層		-	(5.2)	4.55	
527	弥生土器	底部	B	包含層		-	(4.15)	4.9	
528	弥生土器	底部	B	包含層	灰色砂礫層	-	(3.0)	3.8	
529	弥生土器	底部	B	包含層	暗褐色砂礫	-	(2.95)	4.25	
530	弥生土器	底部	B	包含層	下層	-	(4.6)	(3.7)	
531	弥生土器	底部	B	包含層	灰色砂礫	-	(3.5)	6.65	
532	弥生土器	底部	B	包含層		-	(4.9)	(5.4)	
533	弥生土器	底部	B	包含層		-	(2.4)	3.2	
534	弥生土器	底部	B	包含層	灰色砂礫	-	(4.45)	(6.0)	
535	弥生土器	底部	B	包含層		-	(3.6)	4.65	
536	弥生土器	底部	B	包含層	灰色砂礫	-	(3.8)	4.6	
537	弥生土器	底部	B	包含層	SBSPP97	-	(4.95)	4.45	
538	弥生土器	底部	B	包含層	灰色砂礫層	-	(3.95)	(3.85)	
539	弥生土器	底部	B	包含層	灰色砂礫	-	(4.9)	4.0	
540	弥生土器	底部	B	包含層	灰色砂礫	-	(4.1)	(5.35)	
541	弥生土器	底部	B	包含層		-	(7.5)	(6.0)	
542	弥生土器	有孔鉢	B	包含層		-	(4.8)	4.45	
543	弥生土器	有孔鉢	B	包含層	低地部	-	(3.5)	3.1	
544	弥生土器	有孔鉢	B	包含層	SX2308	-	(3.65)	5.3	
545	土師器	底部	C	SB1	SP229	-	(6.9)	(5.55)	
546	須恵器	碗	C	SP253		(15.5)	(3.9)	-	
547	土師器	杯	C	SP304		(11.2)	(2.6)	6.2	
548	土師器	土鉢	C	SP182					
549	須恵器	碗	C	SK126		(14.7)	(3.95)	-	
550	須恵器	碗	C	SK126		-	(2.05)	(7.0)	
551	土師器	鍋	C	SK150		(20.9)	(8.3)	-	
552	土師器	鉢	C	SK150		(23.6)	8.8	-	
553	須恵器	碗	C	SK247	灰色礫(上層)	(16.1)	(3.15)	-	
554	須恵器	控鉢	C	SK247		-	(3.7)	-	
555	須恵器	杯B	C	SK265	埋土	-	(1.6)	-	
556	土師器	杯	C	SK348		10.8	2.55	-	
557	土師器	碗	C	SK348		(11.95)	(4.25)	-	
558	土師器	碗	C	SK348		(11.4)	(3.5)	-	
559	土師器	碗	C	SK348		-	(3.75)	-	
560	土師器	杯	C	SD249	土器集中部下層	(11.7)	2.5	(6.4)	
561	土師器	杯	C	SD249		(11.7)	3.3	6.7	
562	土師器	杯	C	SD249		(10.9)	3.1	-	
563	土師器	杯	C	SD249		(11.8)	(3.55)	(6.8)	
564	土師器	杯	C	SD249		(12.4)	(3.9)	(6.4)	
565	土師器	碗	C	SD249		(10.2)	4.75	4.9	
566	土師器	碗	C	SD249	土器集中部下層	11.6	4.05	4.6	
567	土師器	碗	C	SD249		(12.6)	4.4	6.0	
568	土師器	碗	C	SD249		12.3	4.15	6.1	
569	土師器	碗	C	SD249		(12.7)	(3.6)	(4.8)	
570	土師器	碗	C	SD249	土器集中部下層	(11.6)	4.4	5.7	
571	土師器	碗	C	SD249		(11.0)	(4.3)	5.7	

番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量 (cm)			備考
						口径	器高	底径	
572	土師器	碗	C	SD249		-	(4.95)	(5.3)	
573	土師器	碗	C	SD249		-	(2.9)	5.65	
574	土師器	碗	C	SD249		-	(3.25)	6.3	
575	土師器	碗	C	SD249		-	(1.65)	6.1	
576	土師器	杯	C	SD249		-	(1.3)	(6.6)	
577	土師器	碗	C	SD249		-	(1.4)	6.3	
578	土師器	碗	C	SD249		-	(1.3)	(6.0)	
579	土師器	碗	C	SD249		-	(2.65)	(6.4)	
580	土師器	鍋	C	SD249		(29.7)	(6.7)	-	
581	須恵器	杯A	C	SD249		(13.0)	3.0	8.7	
582	須恵器	碗	C	SD249		(12.15)	4.55	6.1	
583	須恵器	碗	C	SD249		(15.3)	(5.15)	(5.8)	
584	須恵器	碗	C	SD249	埋土	13.9	5.2	6.45	
585	須恵器	碗	C	SD249		(12.2)	(4.1)	-	
586	須恵器	碗	C	SD249		(13.6)	5.2	6.0	
587	須恵器	碗	C	SD249		(16.6)	6.45	6.3	
588	須恵器	碗	C	SD249		(12.4)	4.95	(5.8)	
589	須恵器	碗	C	SD249	土器集中部下層	(12.7)	(4.5)	-	
590	須恵器	碗	C	SD249		19.0	6.1	7.7	
591	須恵器	碗	C	SD249	埋土	-	(5.05)	(6.6)	
592	須恵器	碗	C	SD249		(14.2)	(3.0)	-	
593	須恵器	碗	C	SD249		-	(2.7)	5.7	
594	須恵器	碗	C	SD249		-	(2.4)	(7.0)	
595	須恵器	平瓶	C	SD249		(10.9)	(5.85)	-	
596	土師器	小皿	C	SR1	碗層(下位)	(7.6)	1.4	-	
597	土師器	小皿	C	SR1	黄灰色砂	(7.6)	1.4	(5.5)	
598	土師器	小皿	C	SR1		(7.4)	1.4	-	
599	土師器	小皿	C	SR1	砂礫層	(7.8)	1.6	-	
600	土師器	鍋	C	SR1	南側屑部	(20.6)	(7.8)	-	
601	土師器	鍋	C	SR1	黄灰色砂	(24.4)	(6.55)	-	
602	土師器	羽釜	C	SR1	黄灰色粗砂	(25.6)	(5.05)	-	
603	土師器	羽釜	C	SR1	黄灰色粗砂	(17.4)	(4.8)	-	
604	土師器	羽釜	C	SR1		(22.8)	(6.2)	-	
605	土師器	羽釜	C	SR1	砂礫層	(18.0)	(3.8)	-	
606	土師器	羽釜	C	SR1		(25.0)	(7.6)	-	
607	土師器	羽釜	C	SR1		(24.4)	(6.5)	-	
608	土師器	羽釜	C	SR1	碗層	(34.7)	(8.95)	-	
609	土師器	播鉢	C	SR1	周辺	(25.7)	(4.2)	-	
610	土師器	播鉢	C	SR1	南側屑部	(23.4)	(5.1)	-	
611	土師器	播鉢	C	SR1	黄灰色粗砂	(23.7)	(8.5)	-	
612	土師器	播鉢	C	SR1	碗層	(23.2)	(6.7)	-	
613	土師器	播鉢	C	SR1	黄灰色砂	(29.1)	(11.2)	-	
614	土師器	播鉢	C	SR1	南側屑部	(30.0)	(7.3)	-	
615	土師器	鍋	C	SR1		(24.9)	(4.5)	-	
616	土師器	鍋	C	SR1		(25.7)	(5.3)	-	
617	土師器	火鉢	C	SR1	周辺	-	(6.45)	(16.3)	
618	土師器	火入	C	SR1	黄灰色砂	-	(3.7)	-	
619	須恵器	埴鉢	C	SR1	南側屑部	(25.9)	(6.2)	-	
620	須恵器	埴鉢	C	SR1	碗層	(29.4)	(3.35)	-	
621	須恵器	埴鉢	C	SR1	南側屑部	-	(2.2)	-	
622	須恵器	埴鉢	C	SR1	4a層	(25.4)	(6.2)	-	
623	須恵器	甕	C	SR1		(22.9)	(6.1)	-	
624	須恵器	甕	C	SR1	下部層か?	(23.9)	(7.6)	-	
625	須恵器	甕	C	SR1		-	(7.3)	-	
626	無釉陶器 (備前)	播鉢	C	SR1		(32.8)	(8.65)	-	
627	無釉陶器 (備前)	播鉢	C	SR1		(31.95)	(12.7)	(13.55)	
628	無釉陶器 (備前)	播鉢	C	SR1	黄灰色砂	(30.45)	(6.4)	-	
629	無釉陶器 (備前)	播鉢	C	SR1	碗層	-	(6.75)	(10.8)	
630	無釉陶器 (備前)	甕	C	SR1		-	(14.7)	-	
631	無釉陶器 (丹波)	播鉢	C	SR1		(29.9)	(3.2)	-	

番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量 (cm)			備考
						口径	器高	底径	
632	無釉陶器 (備前)	擂鉢	C	SR1	南側層部	-	(4.1)	-	
633	須恵器	甕	C	SR1		(25.5)	(5.4)	-	
634	無釉陶器 (丹波)	甕	C	SR1	上面	-	(5.3)	-	
635	無釉陶器 (丹波)	甕	C	SR1	黄灰色砂	-	(4.5)	(13.85)	
636	白磁	皿	C	SR1		(11.6)	(2.4)	-	
637	須恵器	碗	C	SR6		(15.5)	(4.6)	(6.5)	
638	須恵器	鉢	C	SR7		(13.15)	(2.0)	-	
639	弥生土器	高杯	C	SR7		(11.65)	(5.95)	-	
640	土師器	碗	C	SK287		-	(2.6)	(4.95)	
641	須恵器	碗	C	SK287	埋土	(14.8)	(2.75)	-	
642	須恵器	皿?	C	SK287		(19.4)	(1.5)	-	
643	須恵器	甕	C	SK287	埋土	-	(5.1)	-	
644	弥生土器	甕	C	SH156		(15.9)	(2.8)	-	
645	弥生土器	器台	C	SH156	灰褐色層	-	(2.3)	-	
646	弥生土器	高杯	C	SH156	下段(上面)	-	(3.75)	-	
647	弥生土器	甕	C	SH156		-	-	-	
648	弥生土器	甕	C	SH156	3層	-	(9.8)	-	
649	弥生土器	甕	C	SH156	4層	-	(24.2)	4.65	
650	弥生土器	甕	C	SH156	3層	(15.6)	(1.85)	-	
651	弥生土器	高杯	C	SH156	2層	-	(4.35)	-	
652	弥生土器	鉢	C	SH156	連り出し部	(11.3)	(7.2)	-	
653	弥生土器	鉢	C	SH156		10.7	6.75	3.7	
654	弥生土器	有孔鉢	C	SH156		(12.0)	11.6	(4.5)	
655	弥生土器	底部	C	SH156	高床部上面	-	-	-	
656	弥生土器	底部	C	SH156	SP195	-	(3.45)	4.45	
657	弥生土器	底部	C	SH156	床面	-	(2.1)	(3.6)	
658	弥生土器	底部	C	SH156		-	(3.9)	(4.8)	
659	弥生土器	底部	C	SH156		-	(3.9)	3.8	
660	弥生土器	底部	C	SH156		-	(3.65)	4.2	
661	弥生土器	底部	C	SH156	3層	-	(7.0)	-	
662	土師器	甕	C	SH179	SK355	9.2	10.6	-	
663	土師器	甕	C	SH179	SK355	(11.2)	(19.3)	-	
664	土師器	鉢	C	SH179	SK355	(13.7)	(3.0)	-	
665	土師器	鉢	C	SH179	SK355	-	(3.1)	4.4	
666	弥生土器	甕	C	SH180	東端焼土上面	-	(2.65)	-	
667	弥生土器	鉢	C	SH180		(7.7)	(4.05)	3.0	
668	弥生土器	甕	C	SH193	SK376	(16.8)	(13.8)	-	
669	弥生土器	甕	C	SH193	SK376	(17.8)	(17.35)	-	
670	弥生土器	甕	C	SH193	SK376上層	(13.0)	(6.4)	-	
671	弥生土器	甕	C	SH193	SK376上層	-	(3.85)	4.6	
672	弥生土器	甕	C	SH193		(17.8)	(11.8)	-	
673	弥生土器	甕	C	SH193	SK376	-	(14.4)	(4.8)	
674	弥生土器	甕	C	SH193	SK376	-	(12.15)	(6.25)	
675	土師器	皿	C	SH193	下段	(12.9)	(2.8)	-	
676	弥生土器	高杯	C	SH193	SK376上層	(13.3)	(9.5)	-	
677	弥生土器	鉢	C	SH193	SK376上層	(11.75)	(6.15)	3.75	
678	弥生土器	器台	C	SH193	SK375	(9.5)	10.4	9.4	
679	弥生土器	甕	C	SH193	下段	-	(3.05)	5.1	
680	弥生土器	甕	C	SP132		8.65	(13.45)	-	
681	弥生土器	鉢	C	SP246		-	(5.45)	(2.5)	
682	弥生土器	甕	C	SP246	検出面	(15.6)	(20.15)	-	
683	弥生土器	底部	C	SP252		-	(3.1)	4.3	
684	弥生土器	甕	C	SD242・ 259		(17.1)	(3.0)	-	
685	弥生土器	甕	C	SD259	4-3a・5a層	-	(4.45)	3.6	
686	弥生土器	高杯	C	SD259	4-3a・5a層	-	(6.35)	-	
687	弥生土器	底部	C	SD301		-	(2.6)	3.4	
688	土師器	皿	C	包含層	4-2a・3a層除去面	(10.8)	1.75	(6.85)	
689	土師器	皿	C	包含層	SH180褐色層	(10.7)	(1.45)	(6.6)	
690	土師器	皿	C	包含層		(9.9)	(1.5)	(7.1)	
691	土師器	皿	C	包含層		(11.3)	(2.65)	-	
692	土師器	碗	C	包含層	4a層	(9.3)	3.65	(4.5)	
693	土師器	碗	C	包含層		(12.3)	4.25	6.2	

番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量 (cm)			備考
						口径	器高	底径	
694	土師器	碗	C	包含層		(11.3)	(5.35)	5.2	
695	土師器	碗	C	包含層	4a層?	-	(1.8)	6.8	
696	土師器	碗	C	包含層	4a層上面	-	(1.5)	7.0	
697	土師器	甕	C	包含層		(24.6)	(6.7)	-	
698	土師器	羽釜	C	包含層	調査区北壁	(24.7)	(6.7)	-	
699	土師器	植鉢	C	包含層	調査区北壁	(21.3)	(4.45)	-	
700	土師器	植鉢	C	包含層	堤下	-	(6.4)	(14.1)	
701	須恵器	皿	C	包含層	4-2a・4-3a層	(13.4)	(2.35)	-	
702	須恵器	杯A	C	包含層	4a層	(13.4)	(2.95)	(9.8)	
703	須恵器	杯B	C	包含層	4-1a層(4-2・3a含 #2)	-	(3.7)	7.85	
704	須恵器	碗	C	包含層		-	(3.6)	(9.0)	
705	須恵器	碗	C	包含層	4-2a・3a層	(14.3)	4.7	(7.6)	
706	須恵器	底部	C	包含層		-	(2.75)	(10.6)	台付皿
707	須恵器	碗	C	包含層	4a層?	(13.5)	(5.0)	(5.7)	
708	須恵器	碗	C	包含層	表探	(14.9)	(4.3)	(5.8)	
709	須恵器	杯B蓋	C	包含層	SH180	(16.8)	(1.3)	-	
710	須恵器	杯B蓋	C	包含層	SH180	-	(2.0)	-	
711	須恵器	鉢	C	包含層		(29.0)	(8.0)	-	
712	須恵器	埴鉢	C	包含層		(25.3)	(3.5)	-	
713	須恵器	提瓶	C	包含層		(4.9)	(5.75)	-	
714	須恵器	甕	C	包含層		-	(6.7)	-	
715	緑釉陶器	碗	C	包含層	4a層	-	(2.25)	-	
716	灰釉陶器 (瀬戸)	皿	C	包含層		(11.2)	(2.0)	-	黄瀬戸
717	無釉陶器 (備前)	壺	C	包含層		(10.1)	(6.6)	-	
718	青磁	碗	C	包含層		-	(2.3)	5.7	
719	青磁	碗	C	包含層		-	(4.5)	-	上田分類D類
720	白磁	皿	C	包含層		-	(1.55)	(6.7)	森田分類E類
721	弥生土器	壺	C	包含層	SK244	-	(4.85)	-	
722	弥生土器	壺	C	包含層		(17.7)	(2.15)	-	
723	弥生土器	壺	C	包含層	4-2a・4-3a層	(14.5)	(6.5)	-	
724	弥生土器	壺	C	包含層	4-2a・3a層	(13.0)	(6.65)	-	
725	弥生土器	壺	C	包含層	4-3a~5a層	(16.5)	(4.85)	-	
726	弥生土器	二重口縁壺	C	包含層	4-3a~5a層	(10.5)	(3.7)	-	
727	弥生土器	二重口縁壺	C	包含層	4-1a層(4-2・3a含 #2)	-	-	-	
728	弥生土器	二重口縁壺	C	包含層	4-2a・4-3a層	(32.9)	(5.5)	-	
729	弥生土器	二重口縁壺	C	包含層		-	(3.3)	-	
730	弥生土器	壺	C	包含層	4-2a・4-3a層	(15.2)	(6.2)	-	
731	弥生土器	甕	C	包含層	4-2a・4-3a層	(17.8)	(3.85)	-	
732	弥生土器	甕	C	包含層	4-2a・3a層	(15.7)	(4.0)	-	
733	弥生土器	甕	C	包含層	4-2a・4-3a層	(15.5)	(5.95)	-	
734	弥生土器	甕	C	包含層	4-2a・4-3a層	(16.2)	(5.95)	-	
735	弥生土器	甕	C	包含層		(14.4)	(3.55)	-	
736	弥生土器	甕	C	包含層		-	(9.3)	4.35	
737	土師器	甕	C	包含層		(31.5)	(13.75)	-	
738	弥生土器	甕	C	包含層		(26.85)	(19.7)	-	
739	弥生土器	鉢	C	包含層	4-1a層(4-2・3a含 #2)	(15.6)	(8.15)	-	
740	弥生土器	鉢	C	包含層		(13.9)	(7.5)	4.5	
741	弥生土器	高杯	C	包含層	褐色砂織層	-	(4.85)	-	
742	弥生土器	高杯	C	包含層	4-2a・4-3a層	-	(7.2)	-	
743	弥生土器	高杯	C	包含層	茶褐色土	-	(7.65)	-	
744	弥生土器	高杯	C	包含層	6-1b層(硬層)	-	(6.3)	-	
745	弥生土器	高杯	C	包含層	4-2a・4-3a層	-	(5.8)	-	
746	弥生土器	高杯	C	包含層	塚堤下層	-	(2.7)	(14.2)	
747	弥生土器	器台	C	包含層		(14.7)	(4.25)	-	
748	弥生土器	器台	C	包含層		-	(9.25)	(14.8)	
749	弥生土器	底部	C	包含層	5a層~6a層	-	(2.25)	5.55	
750	弥生土器	底部	C	包含層		-	(2.75)	4.6	
751	弥生土器	底部	C	包含層	4-2a・4-3a層	-	(4.55)	(3.8)	
752	弥生土器	底部	C	包含層		-	(3.75)	(5.0)	
753	弥生土器	底部	C	包含層		-	(3.6)	5.0	
754	弥生土器	底部	C	包含層	4-2a・4-3a層	-	(4.4)	5.65	

番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量 (cm)			備考
						口径	器高	底径	
755	弥生土器	底部	C	包含層	4-1a層 (4-2・3a含 E ₂)	-	(2.8)	(4.2)	
756	弥生土器	底部	C	包含層	4-2a・4-3a層	-	(4.5)	4.6	
757	弥生土器	底部	C	包含層	4-3a～5a層	-	(3.3)	4.0	
758	弥生土器	底部	C	包含層	4-2a・4-3a層	-	(3.15)	(3.65)	
759	弥生土器	底部	C	包含層	-	-	(3.4)	3.7	
760	弥生土器	底部	C	包含層	4-2a・4-3a層	-	(3.8)	4.15	
761	弥生土器	底部	C	包含層	-	-	(3.6)	2.9	
762	弥生土器	脚台	C	包含層	-	-	(3.05)	6.6	
763	弥生土器	脚台	C	包含層	5a層～6a層	-	(2.1)	4.4	
764	弥生土器	有孔鉢	C	包含層	-	-	(4.75)	4.35	
765	弥生土器	有孔鉢	C	包含層	4-2a・4-3a層	-	(5.5)	(3.3)	
766	土師器	蛇壺	C	包含層	暗褐色粘質土	(5.7)	(10.85)	-	約鐘形
767	土師器	羽釜	C	包含層	暗渠	(20.9)	(2.9)	-	
768	土師器	羽釜	C	包含層	暗渠の北側	(22.0)	(5.2)	-	
769	須恵器	小皿	C	包含層	暗渠	(7.7)	1.6	-	
770	須恵器	甕	C	包含層	暗渠	(22.8)	(6.0)	-	
771	無釉陶器 (備前)	擂鉢	C	包含層	暗渠	(28.0)	(9.7)	-	
772	無釉陶器 (丹波)	甕	C	包含層	暗渠	(36.0)	(8.7)	-	長谷川編年IV 期
773	無釉陶器 (丹波)	壺	C	包含層	暗渠	-	(5.25)	(11.8)	
774	施釉陶器	皿	C	包含層	暗渠	-	(2.4)	-	
775	青磁	碗	C	包含層	暗渠の北側	-	(5.45)	-	
776	青磁	碗	C	包含層	暗渠の北側	-	(2.95)	-	
777	瓦質土器	脚部	C	包含層	暗渠の北側	-	-	-	
778	須恵器	陶棺	C	包含層	暗渠の南側	-	-	-	
779	弥生土器	鉢	C	包含層	暗渠	(11.65)	(5.6)	-	
780	弥生土器	高杯	C	包含層	暗渠	-	(5.2)	-	
781	弥生土器	有孔鉢	C	包含層	暗渠	-	(4.95)	-	
782	須恵器	小皿	D	SP132	-	(7.8)	(1.55)	(5.5)	
783	須恵器	碗	D	SP132	-	(16.7)	(4.9)	(6.6)	
784	土師器	小皿	D	SP140	-	(11.7)	(2.3)	-	
785	土師器	小皿	D	SP140	-	(10.8)	(2.25)	-	
786	土師器	皿	D	SK159	-	(12.6)	(2.65)	-	
787	弥生土器	壺	D	SK159	-	(13.9)	3.9	-	
788	土師器	皿	D	SX80	褐色土(砂礫)	(11.7)	(1.9)	-	
789	土師器	鍋	D	SX80	褐色土(砂礫)	(17.2)	(3.2)	-	
790	弥生土器	甕	D	SH12	東西Aゼ1層	-	(5.8)	5.05	
791	土製品	不明	D	SH12	-	-	-	-	長5.8cm、幅 6.25cm、厚3.7 cm
792	弥生土器	甕	D	SH165	-	(14.6)	(4.3)	-	
793	弥生土器	甕	D	SH165	黄泥じり褐色土層	(11.35)	(13.25)	-	
794	弥生土器	鉢	D	SH165	-	-	(6.75)	3.9	
795	弥生土器	甕	D	SH166	中央土坑黒褐色埋 土	(13.5)	(7.15)	-	
796	弥生土器	高杯	D	SH166	-	-	(7.9)	-	
797	弥生土器	壺	D	SX163	黒褐色土砂質シル ト層：6a層	(12.8)	(4.5)	-	
798	弥生土器	鉢(底部)	D	SX163	黒褐色土砂質シル ト層：6a層	-	(4.05)	3.65	
799	土師器	杯	D	SR1	11層	13.8	3.5	6.6	
800	須恵器	底部	D	SR1	11層	-	(2.05)	(6.05)	
801	須恵器	碗	D	SR1	11層	(15.3)	4.8	4.85	
802	須恵器	碗	D	SR1	11層	(16.7)	5.5	(4.0)	
803	須恵器	碗	D	SR1	11層	(16.2)	(5.15)	7.0	
804	須恵器	碗	D	SR1	11層	(15.1)	(5.65)	(6.0)	
805	須恵器	碗	D	SR1	11層	(15.8)	(5.1)	-	
806	須恵器	碗	D	SR1	11層	(16.9)	(4.6)	-	
807	須恵器	捏鉢	D	SR1	11層	(30.45)	12.0	10.4	
808	須恵器	捏鉢	D	SR1	11層	28.15	12.25	9.05	
809	須恵器	捏鉢	D	SR1	11層	(28.75)	(10.15)	-	
810	土師器	鍋	D	SR1	11層	(31.0)	(7.15)	-	

番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量 (cm)			備考
						口徑	器高	底径	
811	土師器	鍋	D	SR1	11層	(35.8)	(7.3)	-	
812	須恵器	甕	D	SR1	11層	-	(25.1)	-	
813	土師器	小皿	D	SR1	11層	(7.5)	(1.9)	(2.9)	
814	土師器	小皿	D	SR1		(7.9)	(1.05)	-	
815	土師器	皿	D	SR1		(10.0)	(2.5)	-	
816	土師器	皿	D	SR1		(18.4)	4.1	(11.1)	
817	土師器	羽釜	D	SR1	砂藏層	(23.7)	(5.95)	-	
818	土師器	羽釜	D	SR1	砂藏層	(21.8)	(9.7)	-	
819	土師器	鍋	D	SR1		(25.5)	(8.3)	-	
820	土師器	羽釜	D	SR1		(30.5)	(12.5)	-	
821	土師器	羽釜	D	SR1		(33.7)	(12.7)	-	
822	須恵器	杯A	D	SR1	砂藏層	(12.95)	3.4	(9.3)	
823	須恵器	杯B	D	SR1	砂藏層	-	(5.1)	8.7	
824	須恵器	皿	D	SR1	砂藏層	-	(2.8)	(11.0)	
825	須恵器	碗	D	SR1		(14.7)	(3.85)	-	
826	須恵器	碗	D	SR1		(17.75)	(4.9)	-	
827	須恵器	羽釜	D	SR1		-	(7.45)	-	
828	須恵器	壺	D	SR1	砂藏層	-	(7.25)	(17.1)	
829	須恵器	捏鉢	D	SR1		(25.0)	(8.35)	-	
830	須恵器	捏鉢	D	SR1		(26.6)	(10.5)	-	
831	須恵器	捏鉢	D	SR1		(26.9)	(4.2)	-	
832	須恵器	捏鉢	D	SR1		(27.8)	(8.15)	-	
833	弥生土器	壺	D	SR1		(13.15)	(10.55)	-	
834	弥生土器	二重口縁壺	D	SR1		(16.95)	(7.1)	-	
835	弥生土器	甕	D	SR1		(14.6)	(5.0)	-	
836	弥生土器	甕	D	SR1		(15.9)	(5.7)	-	
837	弥生土器	底部	D	SR1		-	(3.95)	3.95	
838	弥生土器	高杯	D	SR1		(11.5)	(3.05)	-	
839	弥生土器	脚部	D	SR1		-	(3.5)	(16.0)	
840	須恵器	皿	D	SR160		(15.8)	(2.0)	(9.65)	
841	須恵器	杯A	D	SR160		(12.8)	2.6	-	
842	土師器	皿	D	SR160		(12.7)	3.0	(8.1)	
843	須恵器	杯A	D	SR160		13.3	3.2	8.0	
844	須恵器	底部	D	SR160		-	(2.7)	(10.8)	
845	須恵器	碗	D	SR160		-	(2.3)	7.1	
846	須恵器	捏鉢	D	SR160		(23.7)	(4.6)	-	
847	須恵器	捏鉢	D	SR160		(25.4)	(4.8)	-	
848	須恵器	甕	D	SR160		(27.1)	(7.1)	-	
849	土師器	甕	D	SR160	黒色砂	(23.2)	(9.25)	-	
850	土師器	甕	D	SR160		(29.2)	(6.95)	-	
851	弥生土器	壺	D	SR160		(14.65)	(3.45)	-	
852	土師器	底部	D	SR160		-	(3.35)	4.3	
853	土師器	脚付皿	D	包含層	オリーブ褐色砂質層	(18.2)	(4.8)	-	
854	土師器	脚付皿	D	包含層	オリーブ褐色砂質層	(17.9)	(5.4)	-	
855	土師器	鉢	D	包含層	オリーブ褐色砂質層	14.25	10.55	(7.4)	
856	土師器	鉢	D	包含層	オリーブ褐色砂質層	(14.2)	(7.85)	-	
857	土師器	壺	D	包含層	オリーブ褐色砂質層	(12.3)	11.05	8.1	
858	無釉陶器 (備前)	德利	D	包含層	灰色砂層(SR1砂層 より上層)	(5.0)	23.15	8.1	
859	土師器	小皿	D	包含層	オリーブ褐色粘質土	(7.8)	1.85	(4.9)	
860	須恵器	碗	D	包含層	オリーブ褐色粘質土	-	(3.45)	5.7	
861	須恵器	捏鉢	D	包含層	オリーブ褐色土	(21.0)	7.9	(9.8)	
862	須恵器	捏鉢	D	包含層		(32.0)	12.15	(11.3)	
863	須恵器	甕	D	包含層		(24.4)	(8.0)	-	土師質焼成
864	土師器	羽釜	D	包含層	褐色(少し明るい) 砂質土	(26.1)	(8.25)	-	
865	土師器	羽釜	D	包含層	褐色(少し明るい) 砂質土	(37.0)	(8.75)	-	
866	瓦質土器	大鉢?	D	包含層	黄褐色砂質土	-	(5.6)	-	

番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量 (cm)			備考
						口徑	器高	底徑	
867	弥生土器	壺	D	包含層		(16.2)	(9.0)	-	
868	弥生土器	甕	D	包含層	暗褐色シルト(黄褐 混じり)	(16.1)	(6.9)	-	
869	須恵器	杯	E	SB2	SP104層方	-	(2.7)	-	
870	須恵器	杯B	E	SB2	SP107層方	(15.4)	4.5	(12.0)	
871	土師器	小皿	E	SB2	SP114層方	(9.7)	1.5	(6.3)	
872	土師器	小皿	E	SB3	SP92	(10.0)	2.2	(5.8)	
873	土師器	托	E	SB3	SP92層方	-	(2.7)	(7.6)	
874	土師器	小皿	E	SP5	柱根	(7.8)	1.3	(5.2)	
875	須恵器	杯A	E	SP10		(12.6)	3.0	(8.3)	
876	須恵器	杯A	E	SP117	柱根	(13.0)	3.25	(9.65)	
877	須恵器	小皿	E	SP209		(9.7)	2.0	(5.3)	
878	土師器	鍋	E	SP185		(28.1)	(6.4)	-	
879	須恵器	碗	E	SP210		(13.4)	5.1	(4.6)	
880	土師器	甕	E	SX135		(26.5)	(22.65)	-	腹径(22.7)cm
881	須恵器	碗	E	SX135	暗褐色土	(16.0)	(5.45)	(6.1)	
882	土師器	小皿	E	SX50		(8.3)	1.4	(6.4)	
883	須恵器	碗	E	SX50		(15.6)	5.8	5.7	
884	須恵器	碗	E	SX50		(15.0)	(4.1)		
885	土師器	小皿	E	SX60		(8.35)	1.6	5.45	
886	土師器	小皿	E	SX60		(8.7)	(1.35)	(4.65)	
887	土師器	小皿	E	SX60		(9.95)	1.4	(6.6)	
888	土師器	小皿	E	SX60	焼土混赤褐土	(9.55)	(1.4)	(6.8)	
889	土師器	小皿	E	SX60	焼土混赤褐土	(8.0)	(1.05)	(4.85)	
890	土師器	杯	E	SX60		(13.0)	(2.65)	(7.6)	
891	土師器	杯	E	SX60		(13.3)	(3.2)	7.8	
892	土師器	杯	E	SX60		-	(2.2)	(7.75)	
893	須恵器	小皿	E	SX60		(9.6)	2.2	(4.6)	
894	須恵器	碗	E	SX60		(14.55)	5.2	(4.4)	
895	須恵器	碗	E	SX60		(15.45)	5.4	(5.55)	
896	須恵器	碗	E	SX60	焼土混赤褐土	(15.15)	5.2	(5.0)	
897	白磁	碗	E	SX60		(15.5)	5.55	5.85	
898	土師器	羽口	E	SD19					長(8.5)cm、 幅5.9cm、厚 1.7cm
899	土師器	杯	E	SD19		(12.1)	(3.2)	-	
900	土師器	碗	E	SD19		(11.2)	(2.65)	-	
901	土師器	碗	E	SD19		-	(3.0)	(6.1)	
902	灰輪陶器	碗	E	SD19		-	(2.6)	(7.8)	
903	土師器	小皿	E	SD40		8.0	1.6	5.0	
904	土師器	皿	E	SD40		(12.4)	(1.75)	(9.3)	
905	土師器	杯A	E	SD40		(13.1)	2.9	7.7	
906	土師器	皿	E	SD40		(13.4)	(3.2)	(9.9)	
907	土師器	杯A	E	SD40		-	(2.85)	(7.4)	
908	土師器		E	SD40		-	(3.8)	6.4	
909	土師器	碗	E	SD40		-	(3.1)	(6.3)	
910	土師器	碗	E	SD40		-	(1.6)	6.15	
911	土師器	鍋	E	SD40		34.7	(8.25)	-	
912	土師器	皿	E	SD40		(25.6)	(14.3)	-	
913	土師器	製塩土器	E	SD40		(13.3)	(7.55)	-	
914	須恵器	皿	E	SD40		(14.5)	2.6	(11.8)	
915	須恵器	杯	E	SD40		(13.8)	(3.25)	-	
916	須恵器	杯	E	SD40		(13.0)	3.25	(7.6)	
917	須恵器	碗	E	SD40		-	(3.8)	(7.3)	
918	須恵器	碗	E	SD40		(15.1)	5.2	(5.3)	
919	須恵器	碗	E	SD40		-	(1.85)	(6.7)	
920	須恵器	壺	E	SD40		-	(4.7)	(13.1)	
921	須恵器	埴鉢	E	SD40		(29.4)	(11.0)	-	
922	弥生土器	壺	E	SH65	南壁土坑	(23.4)	(6.0)	-	
923	弥生土器	壺	E	SH65	埋土下半	-	(5.75)	4.05	
924	弥生土器	鉢	E	SH65	埋土下半	-	(9.4)	(13.3)	
925	弥生土器	高杯	E	SH65	埋土下半	-	(2.05)	-	
926	弥生土器	小型器台	E	SH201		(11.3)	(2.95)	-	
927	弥生土器	底部	E	SH201		-	(2.95)	(1.9)	
928	弥生土器	底部	E	SH201	西端	-	(2.4)	3.6	
929	弥生土器	甕	E	SH230	SK244西半	(16.8)	(10.7)	-	

番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量 (cm)			備考
						口徑	器高	底徑	
930	弥生土器	高杯	E	SH230		-	(5.05)	-	
931	弥生土器	器台(口縁)	E	SH230	中央土坑SK231	(25.8)	(3.55)	-	
932	弥生土器	壶	E	SX235	5a層東層	(14.1)	(25.0)	5.25	
933	弥生土器	甕	E	SX235	5a層東層	(18.1)	(4.35)	-	
934	弥生土器	高杯	E	SX235	5a層東層	(20.6)	(3.3)	-	
935	弥生土器	底部	E	SX235	5a層東層	-	(6.3)	(7.9)	
936	弥生土器	底部	E	SX235	5a層東層	-	(7.95)	6.2	
937	弥生土器	底部	E	SP36	掘方	-	(5.2)	4.7	
938	弥生土器	鉢	E	SP84		-	(7.9)	4.6	
939	土師器	底部	E	SW67		-	(3.85)	5.1	
940	弥生土器	壶	E	SD222		(14.2)	(5.5)	-	
941	弥生土器	細頸壺	E	SD222		(9.2)	(6.85)	-	
942	弥生土器	細頸壺	E	SD222		-	(11.9)	-	
943	弥生土器	甕	E	SD222		(10.85)	(10.05)	3.85	
944	弥生土器	甕	E	SD222		(14.1)	(14.6)	-	
945	弥生土器	甕	E	SD222		(15.8)	(11.3)	-	
946	弥生土器	甕	E	SD222		(16.5)	(16.5)	4.5	
947	弥生土器	甕	E	SD222		(12.4)	(6.3)	-	
948	弥生土器	甕	E	SD222		14.85	(6.45)	-	
949	弥生土器	甕	E	SD222		(17.6)	(5.6)	-	
950	弥生土器	甕	E	SD222		(17.7)	(3.05)	-	
951	弥生土器	鉢	E	SD222		(20.0)	(6.65)	-	
952	弥生土器	有孔鉢	E	SD222		(16.5)	(12.05)	2.7	
953	弥生土器	鉢	E	SD222		(27.7)	(6.75)	-	
954	弥生土器	高杯	E	SD222		(23.4)	(5.9)	-	
955	弥生土器	高杯	E	SD222		(24.95)	(2.95)	-	
956	弥生土器	高杯	E	SD222		-	(9.1)	(13.65)	
957	弥生土器	高杯	E	SD222		-	(9.0)	-	
958	弥生土器	底部	E	SD222		-	(12.5)	(5.4)	
959	弥生土器	底部	E	SD222		-	(8.5)	5.4	
960	弥生土器	底部	E	SD222		-	(4.7)	4.1	
961	弥生土器	底部	E	SD222		-	(7.65)	4.4	
962	弥生土器	底部	E	SD222		-	(8.6)	(6.8)	
963	弥生土器	底部	E	SD222		-	(6.9)	5.4	
964	弥生土器	底部	E	SD222		-	(7.85)	4.7	
965	弥生土器	底部	E	SD222		-	(5.95)	5.1	
966	弥生土器	底部	E	SD222		-	7.7	4.25	
967	弥生土器	底部	E	SD222		-	(7.45)	3.9	
968	弥生土器	底部	E	SD222		-	(7.65)	4.9	
969	弥生土器	底部	E	SD222		-	(4.5)	3.9	
970	弥生土器	底部	E	SD222		-	(4.4)	4.8	
971	弥生土器	底部	E	SD222		-	(4.1)	5.1	
972	弥生土器	轆轤	E	SD222		(4.9)	(8.55)	-	
973	弥生土器	轆轤	E	SD222		(5.6)	(9.65)	(6.8)	
974	土師器	甕	E	SR204	土層(暗色土)	(22.65)	(5.8)	-	
975	弥生土器	壺	E	SR204	土層	(13.7)	(2.0)	-	
976	弥生土器	高杯	E	SR204	土層(暗色土)	(13.25)	(8.55)	-	
977	弥生土器	轆轤	E	SR204	土層(暗色土)	(5.0)	(4.35)	-	
978	弥生土器	底部	E	SR204	土層(暗色土)	-	(3.7)	4.8	
979	弥生土器	二重口縁壺	E	SD215		(17.4)	(3.35)	-	
980	弥生土器	二重口縁壺	E	SD215		(24.2)	(4.7)	-	
981	弥生土器	甕	E	SD215		(16.0)	(7.0)	-	
982	弥生土器	甕	E	SD215		(13.6)	(4.9)	-	
983	弥生土器	底部	E	SD217		-	(5.7)	4.35	
984	弥生土器	底部	E	SD217		-	(4.5)	(7.6)	
985	弥生土器	轆轤	E	SD217		(5.35)	(7.45)	-	
986	弥生土器	底部	E	SD219		-	(5.4)	4.75	
987	弥生土器	底部	E	SD227		-	(4.8)	?	
988	弥生土器	底部	E	SD229		-	(4.4)	4.55	
989	弥生土器	底部	E	SD229		-	(5.8)	3.7	
990	須恵器	杯-B蓋	E	SD202		(17.2)	(3.0)	-	
991	須恵器	杯-B蓋	E	SD202	東層	(13.4)	(2.75)	-	
992	土師器	製塩土器	E	SD202	東層、粘質土	(11.2)	(4.8)	-	
993	須恵器	轆轤	E	SD202	下層東層	(11.6)	(10.95)	-	
994	須恵器	甕	E	SD202		(17.0)	(7.5)	-	
995	須恵器	甕	E	SD202	下層	(24.3)	(8.3)	-	

番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量 (cm)			備考
						口徑	器高	底径	
996	須恵器	大口壺	E	SD202		(20.2)	(14.0)	-	
997	須恵器	甕	E	SD202		-	(10.0)	-	
998	弥生土器	甕	E	SD202		(17.5)	(7.5)	-	
999	弥生土器	甕	E	SD202		(17.7)	(16.55)	-	
1000	弥生土器	甕	E	SD202	上層	(12.55)	(7.25)	-	
1001	弥生土器	甕	E	SD202	下層	(14.8)	(5.15)	-	
1002	弥生土器	甕	E	SD202		(16.5)	(3.3)	-	
1003	弥生土器	甕	E	SD202	下層	(12.4)	(5.8)	-	
1004	弥生土器	甕	E	SD202	埋土	(14.4)	(7.6)	-	
1005	弥生土器	器台	E	SD202	上層	(25.8)	(4.2)	-	
1006	弥生土器	甕	E	SD202		(20.7)	(3.25)	-	
1007	弥生土器	脚台部	E	SD202		-	(5.4)	7.0	
1008	弥生土器	底部	E	SD202		-	(6.25)	(5.6)	
1009	弥生土器	底部	E	SD202	上層	-	(4.25)	5.6	
1010	弥生土器	底部	E	SD202		-	(3.5)	(8.1)	
1011	弥生土器	底部	E	SD202		-	(5.95)	5.05	
1012	弥生土器	底部	E	SD202		-	(4.0)	3.85	
1013	土師器	甕	E	SD202	SD226	(14.4)	(10.2)	-	
1014	土師器	甕	E	SD202	SD226	(13.4)	(7.4)	-	
1015	弥生土器	底部	E	SD202	SD226	-	(8.55)	4.15	
1016	弥生土器	底部	E	SD202	SD226	-	(6.95)	(5.6)	
1017	弥生土器	底部	E	SD202	SD226	-	(3.05)	4.75	
1018	弥生土器	高杯	E	SD202	SD226	(10.4)	(8.75)	-	
1019	弥生土器	甕	E	SD202	SD202・226	(17.1)	(6.3)	-	
1020	弥生土器	甕	E	SD202	SD202・226	(15.0)	(4.7)	-	
1021	弥生土器	甕	E	SD202	SD202・226	-	(9.9)	5.5	
1022	弥生土器	底部	E	SD202	SD202・226	-	(6.7)	4.0	
1023	弥生土器	底部	E	SD202	SD202・226	-	(3.0)	4.1	
1024	弥生土器	高杯	E	SD202	SD202・226	-	(9.05)	-	
1025	土師器	小皿	E	包含層		7.7	1.8	7.4	
1026	土師器	小皿	E	包含層		(7.5)	1.2	(6.4)	
1027	土師器	皿	E	包含層	5a層(一部4a層含 t2)	(13.6)	(2.1)	-	
1028	土師器	杯	E	包含層		11.3	2.85	6.55	
1029	土師器	杯	E	包含層		(11.7)	2.7	7.1	
1030	土師器	底部	E	包含層	5a層(一部4a層含 t2)	-	(2.1)	(9.25)	
1031	土師器	羽釜	E	包含層		(36.1)	(3.5)	-	
1032	須恵器	甕	E	包含層		(29.6)	(6.3)	-	
1033	土師器	羽釜	E	包含層	盛土堰堤北半、縄 層(第2b層)	-	(2.6)	-	
1034	土師器	羽釜	E	包含層	盛土堰堤北半、縄 層(第2b層)	-	(7.65)	-	
1035	土師器	甕	E	包含層		(23.6)	(3.9)	-	
1036	土師器	甕	E	包含層		(36.4)	(20.9)	-	
1037	須恵器	杯身	E	包含層		(10.8)	(3.75)	-	
1038	須恵器	杯身	E	包含層		(12.0)	(2.1)	-	
1039	須恵器	杯B蓋	E	包含層	SP39北側	(16.1)	3.35	-	
1040	須恵器	蓋	E	包含層		(26.6)	(4.0)	-	
1041	須恵器	杯B蓋	E	包含層	5a層(一部4a層含 t2)	(19.1)	(2.1)	-	
1042	須恵器	杯A	E	包含層		-	(2.15)	-	
1043	須恵器	杯A	E	包含層		(10.7)	(2.7)	(5.0)	
1044	須恵器	甕	E	包含層	5a層	-	(3.0)	(6.6)	
1045	須恵器	杯A	E	包含層		-	(1.9)	(6.8)	
1046	須恵器	小皿	E	包含層		(8.1)	2.5	(4.6)	
1047	須恵器	皿	E	包含層		(15.8)	1.75	(14.0)	
1048	須恵器	台付皿	E	包含層		(17.0)	(3.3)	-	
1049	須恵器	小皿	E	包含層		(11.2)	(3.65)	-	
1050	須恵器	杯A	E	包含層		(13.4)	2.85	(9.1)	
1051	須恵器	杯A	E	包含層		(13.1)	(3.1)	(8.8)	
1052	須恵器	杯B	E	包含層		(14.7)	4.4	(10.8)	
1053	須恵器	杯B	E	包含層	5a層(一部4a層含 t2)	(14.8)	(6.15)	(7.6)	
1054	須恵器	杯	E	包含層	現代水路跡	(18.7)	(5.7)	-	
1055	須恵器	甕	E	包含層		-	(1.9)	(11.6)	

番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量 (cm)			備考
						口徑	器高	底径	
1056	須恵器	碗	E	包含層		-	(3.45)	(8.1)	
1057	須恵器	底部	E	包含層		-	(1.35)	(10.4)	
1058	須恵器	碗	E	包含層		(15.7)	6.2	(8.4)	
1059	須恵器	台付皿	E	包含層		-	(3.3)	(11.0)	
1060	須恵器	壺	E	包含層		-	(6.2)	(10.7)	
1061	須恵器	碗	E	包含層	マンガン沈着・暗褐色土層(第4a層)	(12.1)	(5.35)	(6.6)	
1062	須恵器	碗	E	包含層		(14.8)	5.45	(4.8)	
1063	須恵器	碗	E	包含層		(14.7)	(5.3)	(6.4)	
1064	須恵器	碗	E	包含層		(14.9)	5.55	(5.0)	
1065	須恵器	碗	E	包含層		(16.25)	-	5.9	
1066	須恵器	碗	E	包含層		(14.0)	(5.0)	-	
1067	須恵器	碗	E	包含層		(15.8)	(3.35)	-	
1068	須恵器	碗	E	包含層		-	(2.4)	6.85	
1069	須恵器	碗	E	包含層		-	(2.55)	(6.7)	
1070	須恵器	埴鉢	E	包含層		(24.55)	(4.75)	-	
1071	須恵器	埴鉢	E	包含層	SH230の北側	(23.3)	(6.05)	-	
1072	須恵器	埴鉢	E	包含層		(25.4)	(3.4)	-	
1073	須恵器	甕	E	包含層					
1074	白磁	碗	E	包含層		(15.5)	(2.85)	-	II類
1075	白磁	碗	E	包含層		(15.6)	(2.2)	-	II類
1076	白磁	碗	E	包含層		(17.1)	(2.7)	-	IV類
1077	白磁	碗	E	包含層		(14.4)	(2.9)	-	IV類
1078	白磁	碗	E	包含層		-	(1.8)	6.5	V類
1079	白磁	碗	E	包含層		-	(2.7)	(7.0)	IV類
1080	白磁	碗	E	包含層		-	(1.9)	9.5	IV類
1081	白磁	皿	E	包含層		(9.8)	(1.5)	-	
1082	青磁	碗	E	包含層		-	(2.0)	5.9	1-2類
1083	土製品	粘土塊	E	包含層	5a層				
1084	須恵質	陶棺	E	包含層					
1085	弥生土器	壺	E	包含層		(14.8)	(4.25)	-	
1086	弥生土器	手焙彩土器	E	包含層	5a層	-	(3.0)	-	
1087	弥生土器	壺	E	包含層					
1088	弥生土器	広口壺	E	包含層	SD040埋土	(14.4)	(2.4)	-	
1089	弥生土器	広口壺	E	包含層	北東端	(14.7)	(5.1)	-	
1090	弥生土器	広口壺	E	包含層	5a層	(16.7)	(6.75)	-	
1091	弥生土器	広口壺	E	包含層	5a層	(11.4)	(4.2)	-	
1092	弥生土器	広口壺	E	包含層	5a層	-	(10.7)	(14.2)	
1093	弥生土器	長頸壺	E	包含層	SD040埋土	(13.5)	(11.5)	-	
1094	弥生土器	長頸壺	E	包含層		(15.0)	(10.05)	-	
1095	弥生土器	長頸壺	E	包含層		(12.9)	(4.85)	-	
1096	弥生土器	二重口縁壺	E	包含層		(21.9)	(7.2)	-	
1097	弥生土器	二重口縁壺	E	包含層	5a層	(17.3)	(4.1)	-	
1098	弥生土器	二重口縁壺	E	包含層	5a層	(28.4)	(6.15)	-	
1099	弥生土器	二重口縁壺	E	包含層		-	(4.8)	-	
1100	弥生土器	短頸壺	E	包含層		(12.8)	(7.8)	-	
1101	弥生土器	壺	E	包含層		-	(13.2)	3.5	
1102	弥生土器	甕	E	包含層		-	(12.75)	-	
1103	弥生土器	甕	E	包含層		(19.0)	(5.1)	-	
1104	弥生土器	甕	E	包含層		(19.5)	(3.2)	-	
1105	弥生土器	甕	E	包含層	SD040埋土	(13.4)	(3.65)	-	
1106	弥生土器	甕	E	包含層		(16.5)	(4.7)	-	
1107	弥生土器	甕	E	包含層		(13.8)	(6.35)	-	
1108	弥生土器	甕	E	包含層		(15.5)	(8.85)	-	
1109	弥生土器	甕	E	包含層		(15.7)	(9.0)	-	
1110	弥生土器	甕	E	包含層		(15.15)	(6.05)	-	
1111	弥生土器	甕	E	包含層	5a層	(15.2)	(7.75)	-	
1112	弥生土器	甕	E	包含層		(13.5)	(12.55)	-	
1113	弥生土器	甕	E	包含層		(15.4)	(8.55)	-	
1114	弥生土器	甕	E	包含層		(15.8)	(10.65)	-	
1115	弥生土器	甕	E	包含層		(15.7)	(9.6)	-	
1116	弥生土器	甕	E	包含層		(12.4)	(3.7)	-	
1117	弥生土器	甕	E	包含層		(14.8)	(4.25)	-	
1118	弥生土器	甕	E	包含層		(16.7)	(3.8)	-	
1119	弥生土器	甕	E	包含層		(13.8)	(2.65)	-	
1120	弥生土器	甕	E	包含層		(13.8)	(3.35)	-	

番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量 (cm)			備考
						口徑	器高	底徑	
1121	弥生土器	甕	E	包含層	5a層(一部4a層含 f2)	(14.8)	(3.3)	-	
1122	弥生土器	甕	E	包含層	5a層	(15.2)	(3.75)	-	
1123	弥生土器	甕	E	包含層	北東端	-	(21.7)	-	
1124	弥生土器	底部	E	包含層		-	(3.8)	6.35	
1125	弥生土器	底部	E	包含層	5a層 粘質土	-	(5.85)	(3.8)	
1126	弥生土器	底部	E	包含層		-	(4.7)	5.0	
1127	弥生土器	底部	E	包含層	5a層(一部4a層含 f2)	-	(3.3)	5.2	
1128	弥生土器	底部	E	包含層	北東端	-	(3.8)	(5.1)	
1129	弥生土器	底部	E	包含層	S0040埋土	-	(4.1)	(6.3)	
1130	弥生土器	底部	E	包含層		-	(3.85)	4.9	
1131	弥生土器	底部	E	包含層	5a層	-	(4.6)	4.4	
1132	弥生土器	底部	E	包含層	5a層	-	(4.6)	4.25	
1133	弥生土器	底部	E	包含層	第5a層(一部4a層含 f2)	-	(5.65)	(5.0)	
1134	弥生土器	底部	E	包含層		-	(6.5)	4.75	
1135	弥生土器	底部	E	包含層	北東端	-	(11.8)	5.2	
1136	弥生土器	底部	E	包含層	5a層	-	(5.45)	4.75	
1137	弥生土器	底部	E	包含層		-	(4.5)	4.5	
1138	弥生土器	底部	E	包含層	5a層	-	(4.1)	(4.6)	
1139	弥生土器	底部	E	包含層	5a層	-	(3.7)	3.25	
1140	弥生土器	底部	E	包含層	5a層	-	(3.7)	4.7	
1141	弥生土器	底部	E	包含層		-	3.6	5.55	
1142	弥生土器	底部	E	包含層		-	(3.25)	4.4	
1143	弥生土器	底部	E	包含層		-	(5.7)	(5.4)	
1144	弥生土器	底部	E	包含層		-	(4.3)	3.8	
1145	弥生土器	底部	E	包含層		-	(5.7)	4.7	
1146	弥生土器	底部	E	包含層		-	(3.85)	3.4	
1147	弥生土器	底部	E	包含層	5a層(一部4a層含 f2)	-	(4.55)	(5.0)	
1148	弥生土器	底部	E	包含層	北東端	-	(11.7)	5.3	
1149	弥生土器	底部	E	包含層		-	(10.6)	5.9	
1150	弥生土器	底部	E	包含層	5a層(一部4a層含 f2)	-	(4.95)	4.8	
1151	弥生土器	底部	E	包含層		-	(3.6)	5.5	
1152	弥生土器	底部	E	包含層		-	(3.35)	4.5	
1153	弥生土器	底部	E	包含層	5a層	-	(3.85)	(3.8)	
1154	弥生土器	底部	E	包含層	5a層	-	(4.85)	5.3	
1155	弥生土器	底部	E	包含層		-	(5.0)	4.95	
1156	弥生土器	底部	E	包含層	5a層(一部4a層含 f2)	-	(5.2)	3.4	
1157	弥生土器	底部	E	包含層	5a層(一部4a層含 f2)	-	(4.8)	6.45	
1158	弥生土器	底部	E	包含層	5a層(一部4a層含 f2)	-	(1.95)	5.4	
1159	弥生土器	鉢	E	包含層		(10.0)	6.3	3.15	
1160	弥生土器	鉢	E	包含層		(9.8)	(4.1)	-	
1161	弥生土器	有孔鉢	E	包含層	5a層	-	(7.7)	3.15	
1162	弥生土器	有孔鉢	E	包含層		-	(6.65)	4.2	
1163	弥生土器	有孔鉢	E	包含層		-	(4.2)	4.0	
1164	弥生土器	有孔鉢	E	包含層	5a層	-	(3.45)	(4.0)	
1165	弥生土器	有孔鉢	E	包含層		-	(2.9)	4.2	
1166	弥生土器	有孔鉢	E	包含層		-	(2.55)	3.3	
1167	弥生土器	有孔鉢	E	包含層	5a層	-	(4.45)	4.0	
1168	弥生土器	有孔鉢	E	包含層		-	(5.85)	3.6	
1169	弥生土器	有孔鉢	E	包含層		-	(10.55)	5.7	
1170	弥生土器	有孔鉢	E	包含層		-	(2.8)	4.75	
1171	弥生土器	高杯	E	包含層		(15.4)	(4.9)	-	
1172	弥生土器	高杯	E	包含層	5a層	(19.65)	(5.0)	-	
1173	弥生土器	高杯	E	包含層	5a層	-	(3.3)	-	
1174	弥生土器	高杯	E	包含層		(25.55)	(7.5)	-	
1175	弥生土器	高杯	E	包含層		(25.65)	(7.2)	-	
1176	弥生土器	高杯	E	包含層		(21.6)	(3.7)	-	
1177	弥生土器	高杯	E	包含層		(19.6)	(3.35)	-	

番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量 (cm)			備考
						口径	器高	底径	
1178	弥生土器	高杯	E	包含層	5a層	(21.0)	(13.95)	-	
1179	弥生土器	高杯	E	包含層		-	(7.2)	(11.85)	
1180	弥生土器	高杯	E	包含層		-	(8.1)	(12.0)	
1181	弥生土器	高杯	E	包含層		-	(5.8)	-	
1182	弥生土器	高杯	E	包含層		-	(6.5)	-	
1183	弥生土器	脚部	E	包含層		-	(5.3)	6.4	
1184	土師器	脚部	E	包含層	5a層	-	(4.9)	(7.8)	
1185	弥生土器	蓋	E	包含層		-	(3.85)	-	つまみ径2.9cm
1186	弥生土器	蓋	E	包含層		-	(3.1)	-	
1187	弥生土器	手箱形土器	E	包含層	5a層				
1188	土師器	壺	E	包含層		(4.9)	(7.55)	-	
1189	土師器	壺	E	包含層		-	(4.45)	-	
1190	土師器	製塩土器	E	包含層	SD040埋土	-	(4.4)	-	
1191	土師器	ヒタヤ土器	E	包含層		-	(3.3)	-	
1192	土師器	壺	E	包含層	SD040埋土				
1193	須恵器	杯	南A	包含層	水田土壌	(10.8)	(3.05)	-	
1194	土師器	小皿	南A	包含層	水田土壌の1層上	(6.2)	(1.3)	-	
1195	土師器	小皿	南A	包含層	水田土壌の1層上	(8.7)	(1.2)	-	
1196	土師器	小皿	南A	包含層	水田土壌の1層上	(9.8)	1.3	-	
1197	土師器	羽釜	南A	包含層	水田土壌の1層上	(27.7)	(4.75)	-	
1198	土師器	羽釜	南A	包含層	水田土壌の1層上	(28.6)	(6.5)	-	
1199	土師器	羽釜	南A	包含層	水田土壌の1層上	(22.0)	(6.1)	-	
1200	無釉陶器 (備前)	播鉢	南A	包含層	水田土壌の1層上	(30.2)	(6.3)	-	
1201	須恵器	杯身	南B	SP18	埋土	(10.7)	(2.75)	-	

付表3 瓦一覧

番号	種別	器種	地区	造構	層位	法量 (cm)			備考
						口徑	器高	底徑	
T1	瓦	丸瓦	A	包含層	灰色シルト質砂礫層	(9.0)	(5.0)	1.3	
T2	瓦	丸瓦	A	包含層	灰色砂礫層	(7.4)	(7.8)	1.4	罫目(細)
T3	瓦	丸瓦	A	包含層	灰色砂礫層	(9.0)	(4.1)	2.05	
T4	瓦	平瓦	A	SI17		(3.6)	(4.6)	1.7	
T5	瓦	丸瓦	B	包含層	遺構面下層	(6.5)	(3.3)	1.35	凹面つり線痕
T6	瓦	丸瓦	B	包含層	灰色砂礫層	(6.2)	(4.15)	1.5	
T7	瓦	丸瓦	B	包含層	灰色砂礫層	(5.1)	(10.2)	2.4~2.7	
T8	瓦	丸瓦	B	包含層	灰色砂礫層	(5.2)	(6.9)	2.4	
T9	瓦	丸瓦	B	包含層	灰色砂礫層	(8.0)	(4.5)	1.9	
T10	瓦	丸瓦	B	SK2302		(9.0)	(6.5)	2.55	奈良~平安
T11	瓦	平瓦	B	SI404		(7.4)	(11.1)	1.8	横長斜格子 H2類
T12	瓦	平瓦	B	包含層	灰色砂礫層	(9.3)	(5.8)	1.9	横長斜格子 H4類
T13	瓦	平瓦	B	包含層	灰色砂礫層	(6.0)	(4.2)	1.7	横長斜格子 H4類
T14	瓦	平瓦	B	包含層	灰色砂礫層	(7.4)	(8.9)	1.9	左偏斜格子 H5類
T15	瓦	平瓦	B	包含層	灰色砂礫層	(7.1)	(6.7)	1.4	罫目(細) H8類
T16	瓦	平瓦	B	包含層	灰色砂礫層	(9.8)	(6.0)	2.35	罫目(細) H8類
T17	瓦	平瓦	B	包含層	灰色砂礫層	(7.2)	(12.3)	1.8	罫目(細) H8類
T18	瓦	平瓦	B	SI404		(4.4)	(6.25)	1.9	罫目(細) H8類
T19	瓦	平瓦	B	包含層	灰色砂礫層	(5.5)	(5.6)	2.5	罫目(細) H8類
T20	瓦	平瓦	B	SI2156	上層	(10.7)	(14.3)	1.8	罫目(細) H8類
T21	瓦	平瓦	B	包含層	灰色砂礫層	(8.3)	(6.0)	1.7	罫目(細) 平安? H8類
T22	瓦	平瓦	B	包含層	灰色砂礫層	(3.5)	(3.9)	2.15	罫目(太) H9類
T23	瓦	平瓦	B	包含層	灰色砂礫層	(9.2)	(13.35)	2.4	罫目(太) H9類
T24	瓦	平瓦	B	SK2307		(7.75)	(3.3)	2.3	罫目(太) H9類
T25	瓦	平瓦	B	包含層	灰色砂礫層	(6.3)	(5.9)	1.9	罫目(太) H9類
T26	瓦	平瓦	B	SK2307		(18.5) 最大 (26.0)	(17.0)	1.9	無文(板ナデ) H10類
T27	瓦	平瓦	B	包含層	灰色砂礫層	(5.5)	(4.8)	1.7	無文 H10類
T28	瓦	平瓦	B	SP494		(15.3)	(11.5)	1.8	摩滅不明
T29	瓦	丸瓦	C	包含層	暗炭	(4.85)	(7.0)	1.6	
T30	瓦	丸瓦	C	SK287	上部埋土(黒色)	(5.1)	(4.2)	2.4	
T31	瓦	丸瓦	C	包含層	暗炭	(3.5)	(5.3)	1.15	
T32	瓦	丸瓦	C	SD249		(17.2)	14.0	1.7	
T33	瓦	丸瓦	C	包含層	褐色粘質土 (縦層より上層)	(4.1)	(5.65)	1.7	罫目(細)
T34	瓦	丸瓦	C	SP304		(3.6)	(3.55)	1.4	
T35	瓦	丸瓦	C	包含層	4-1a層(土壌層)	(7.2)	(9.0)	1.45	
T36	瓦	丸瓦	C	包含層	暗炭	(11.6)	(7.9)	2.25	コビキB
T37	瓦	平瓦	C	包含層	暗炭	(12.35)	(13.7)	1.25	横長斜格子 H3類
T38	瓦	平瓦	C	包含層	西端黒褐色土	(9.55)	(11.6)	2.6	縦長格子 H4類
T39	瓦	平瓦	C	SD249	埋土	(3.3)	(7.1)	2.2	罫目(細) H8類
T40	瓦	平瓦	C	包含層	4-1a~4-2a層	(6.8)	(5.05)	1.7	罫目(細) H8類
T41	瓦	平瓦	C	SK287		(5.2)	(4.3)	2.1	罫目(太) H9類
T42	瓦	平瓦	C	包含層	暗褐色土(包含層)	(5.3)	(8.8)	2.4	罫目(太) H9類
T43	瓦	平瓦	C	包含層	暗炭	(6.7)	(7.0)	1.95	罫目(太) H9類?
T44	瓦	平瓦	C	SR1		(5.0)	(7.45)	1.95	罫目(細) H8類?
T45	瓦	丸瓦	D	SR1		(13.9)	10.3	1.3	罫目のちなデ
T46	瓦	丸瓦	D	SR1	11層	(10.2)	(7.7)	2.5	罫目(細) H8類
T47	瓦	平瓦	D	包含層	黒褐色土	(5.5)	(8.9)	2.1	罫目(細) H8類
T48	瓦	平瓦	D	SR1		(9.8)	(10.3)	2.8	罫目(太) H9類
T49	瓦	平瓦	D	包含層	砂礫層褐色土	(7.4)	(8.4)	2.0	罫目(太) H9類
T50	瓦	平瓦	D	SR160		(10.1)	(5.7)	1.8	罫目(太) H9類
T51	瓦	平瓦	D	包含層	黄褐色砂質土	(6.7)	(9.0)	2.2	無文 H10類
T52	瓦	丸瓦	E	包含層	第5a層(一部4a層含む)	(7.6)	(7.9)	2.45	無文ナデ
T53	瓦	軒丸瓦	E	包含層	現代水路跡	(7.1)	(6.5)	1.45	左巻き巴文
T54	瓦	丸瓦	E	包含層		(8.0)	(5.9)	1.65	無文(ナデ)
T55	瓦	丸瓦	E	SD40		(12.0)	(16.9)	3.0~3.5	

番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量 (cm)			備考
						口径	器高	底径	
T56	瓦	丸瓦	E	包含層	母床南側部込み、第5a層(一部4a層含む)硬混土	(7.5)	(7.75)	2.15	無文ナデ
T57	瓦	平瓦	E	包含層		(7.1)	(7.4)	2.7	平行刻線 H7類
T58	瓦	平瓦	E	SX50		(12.5)	(11.65)	2.0	特殊 H6類
T59	瓦	平瓦	E	包含層	5a層(一部4a層含む)	(4.5)	(7.65)	2.0	罫目(太) H9類
T60	瓦	平瓦	E	包含層		(5.6)	(3.95)	1.8	無文(板ナデ) H10類
T61	瓦	平瓦	E	SX50		(7.2)	(8.45)	1.95	無文 H10類

付表4 その他の遺物一覧

番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量				備考
						長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	その他	
石製品										
S01	石器	石鏃	E	包含層	5a 層 SX62 付近	(2.25)	1.35	0.35	1.1g	サヌカイト?
S02	石製品	砥石	C	SR1		(5.7)	3.45	1.05	33.5g	泥岩
S03	石製品	砥石	A	包含層	暗褐色砂礫層	13.1	5.0	4.55	494.5g	
S04	石製品	叩き石	A	包含層	暗褐色砂礫層	(11.2)	9.6	7.1	1170.4g	
S05	石製品	不明品	B	SX2308		(8.8)	3.6	2.15	77.1g	砂岩
S06	石製品	砥石	B	SB2	SP70 下底付近	9.0	8.4	7.15	850.5g	黒雲母を多く含む
S07	石製品	砥石	A	包含層		(6.9)	(9.3)	4.4	242.0g	砂岩
S08	石製品	砥石	A	包含層	暗褐色砂礫層	19.8	7.55	4.0	1026.8g	砂岩
S09	石製品	砥石	A	包含層	暗褐色砂礫層	17.25	6.75	4.2	860.4g	溶結凝灰岩
S10	石製品	台石	B	包含層	暗褐色凝結シルト質砂	(12.55)	(10.65)	(5.15)	769.9g	
S11	石製品	砥石	B	包含層	灰色砂礫層	(8.5)	(4.5)	(0.85)	36.1g	石材不明
S12	石製品	不明品	B	SB8	P883	13.1	2.95	1.4	100.1g	
S13	石製品	台石	C	SR1	礫層	(10.95)	(8.9)	(2.3)	226.4g	溶結凝灰岩?
S14	石製品	砥石	C	SH193	下段	10.95	4.4	3.25	245.4g	
S15	石製品	砥石	C	SR1		(5.45)	(13.1)	(6.3)	743.7g	
S16	石製品	砥石	B	SX404		(13.3)	5.65	(8.3)	1092.4g	堆積岩
S17	石製品	砥石	C	包含層	堤、表採	(12.4)	6.2	3.45	396.4g	砂岩
S18	石製品	砥石	C	包含層	褐色土	(10.05)	(11.7)	5.45	711.6g	
S19	石製品	台石	C	SH156	床面	(36.8)	(24.3)	11.9	15.75kg	溶結凝灰岩
S20	石製品	台石	C	SH179	床面	24.5	19.2	6.7	4.3kg	溶結凝灰岩?
S21	石製品	石錘	C	SH156	東壁跡床面	7.85	5.2	3.35	184.5g	
S22	石製品	石錘	C	SH156	東壁跡床面	8.0	4.5	3.95	178.5g	
S23	石製品	石錘	C	SH156	東壁跡床面	9.05	5.0	3.75	223.1g	
S24	石製品	石錘	C	SH156	東壁跡床面	8.2	4.4	3.8	195.2g	
S25	石製品	石錘	C	SH156	東壁跡床面	8.0	4.7	4.05	228.6g	
S26	石製品	石錘	C	SH156	東壁跡床面	9.35	4.6	3.2	195.0g	
S27	石製品	石錘	C	SH156	東壁跡床面	8.6	5.3	3.1	231.1g	
S28	石製品	石錘	C	SH156	東壁跡床面	9.5	4.8	3.9	240.0g	
S29	石製品	石錘	C	SH156	東壁跡床面	9.3	最大幅 3.9	3.4	199.0g	
S30	石製品	石錘	C	SH156	東壁跡床面	8.9	5.15	3.4	197.6g	
S31	石製品	石錘	C	SH156	東壁跡床面	9.35	5.1	3.7	226.1g	
S32	石製品	石錘	C	SH156	東壁跡床面	10.1	5.35	3.35	268.1g	
S33	石製品	石錘	C	SH156	東壁跡床面	11.2	3.9	3.15	196.0g	
S34	石製品	石錘	C	SH156	東壁跡床面	11.25	3.6	2.4	190.1g	
S35	石製品	石錘	C	SH156	東壁跡床面	10.9	4.6	4.65	315.5g	
S36	石製品	石錘	C	SH156	東壁跡床面	9.8	5.0	3.9	336.3g	
S37	石製品	石錘	C	SH156	東壁跡床面	11.5	4.9	3.85	308.5g	
S38	石製品	石錘	C	SH156	東壁跡床面	10.8	4.9	4.1	303.4g	
S39	石製品	石錘	C	SH156	東壁跡床面	11.7	5.05	3.6	322.1g	
S40	石製品	石錘	C	SH156	東壁跡床面	11.7	6.3	3.5	399.3g	
S41	石造品	五輪塔 火輪	C	SR1		24.2	24.2	13.2	9.4kg	
S42	石造品	五輪塔 水輪	C	SR1	礫層底面	-	24.4	高 17.8	12.85kg	
S43	石造品	五輪塔	C	包含層	堤下、流路 上面	(36.1)	18.3 断面 (14.1)	断面 15.3	10.15kg	
S44	石造品	一石五 輪塔	E	包含層	現代水路	(32.2)	最大幅 13.8	水 11.2 地 11.8	10.25kg	
S45	石造品	石仏	E	包含層	現代水路上 覆瓦	52.1	25.1 断面 23.3	断面 8.0	13.65kg	
S46	石造品	石臼 (下臼)	C	SR1	礫層	径 (30.2)	高 (5.6)	(3.9)	268.5g	
S47	石造品	石臼	D	SR1		30.95	30.9	10.4	14.6kg	六甲花園岩

番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量				備考
						長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	その他	
S48	石造品	石臼	E	包含層		径 (32.0)	(16.5)	高 10.2	3.1kg	
S49	石造品	石臼 (下臼)	D	SR1		(18.5)	27.15	9.5	5.7kg	
S50	石造品	石臼	D	SR1		(27.2)	(14.9)	11.2	4.75kg	
S51	石造品	砥石	南A	包含層		(6.9)	(3.4)	(1.95)	56.3g	
木製品										
W1	建築部材	柱根	A	SB1	SP1	(49.5)	(17.9)	(12.0)		樹種：ヒノキ
W2	建築部材	柱根	A	SB1	SP10	(52.8)	34.8	34.5		樹種：ヒノキ
W3	建築部材	柱根	A	SB1	SP12	(49.9)	(38.2)	(20.5)		樹種：ヒノキ
W4	建築部材	柱根	A	SB1	SP19	(52.0)	(28.5)	(27.4)		樹種：ヒノキ
W5	建築部材	柱根	A	SB1	SP22	(31.5)	28.6	(28.8)		樹種：ヒノキ
W6	建築部材	柱根	A	SB1	SP24	(45.8)	(29.7)	(19.5)		樹種：ヒノキ
W7	建築部材	柱根	A	SB1	SP24	(44.45)	(25.65)	(24.5)		樹種：ヒノキ
W8	建築部材	柱根	A	SB1	SP31	(51.2)	38.35	(21.1)		樹種：ヒノキ
W9	部材?	杭	B	包含層	灰色砂礫層	(13.3)	3.9	(2.6)		
W10	建築部材	板材	A	包含層	灰色砂礫層	(36.5)	(9.75)	3.2		樹種：トウヒ属
W11	建築部材	板材	A	包含層	灰色砂礫層	(68.9)	9.9	2.8		樹種：ヒノキ
W12	不明	板材	A	包含層	灰色砂礫層	80.65	19.9	3.65		樹種：スギ
W13	建築部材	部材	A	包含層	灰色砂礫層	(84.6)	(17.4)	(9.1)		樹種：マツ属
金属製品										
M01	鉄器	刀子?	A	包含層	北壁断面西 部	(4.1)	2.15	0.5		
M02	鉄器	釘	A	包含層	暗褐色砂礫 層	(3.8)	0.5	0.5		
M03	鉄器	鏃	B	SH2141		(4.5)	1.9	0.5		
M04	鉄器	鏃	B	SH2098		(3.3)	2.05	0.35		
M05	鉄器	鏃(主 頭?)	B	SP984		(7.0)	0.3	0.4		
M06	鉄器	鏃	B	SH2098		(9.8)	3.65	0.3		
M07	鉄器	釘	B	SB5	SP256	(2.9)	0.7	0.75		
M08	鉄器	釘	B	SP798		(4.6)	0.55	0.6		
M09	鉄器	釘	B	SK94		(4.75)	0.65	0.45		
M10	鉄器	釘	B	SP764	上層	(5.6)	0.45	0.4		
M11	鉄器	釘	B	包含層	検出面	(9.8)	0.7	0.6		
M12	鉄器	釘	B	包含層	灰色砂礫層	4.65	0.3	0.4		
M13	鉄器	釘	B	包含層	灰色砂礫層	(5.05)	0.5	0.5		
M14	鉄器	釘	B	包含層	灰色砂礫層	6.4	0.55	0.4		
M15	鉄器	釘	B	包含層	灰色砂礫層	(7.05)	0.55	0.45		
M16	鉄器	釘	B	包含層	検出面	(9.55)	0.5	0.5		
M17	鉄器	釵?	B	包含層	灰色砂礫層	(6.3)	0.9	0.65		
M18	銅製品	不明	B	包含層	灰色砂礫層	5.9	2.85	0.6		
M19	鉄器	鏃	C	SH156	下段	(6.6)	1.75	0.5		
M20	鉄器	釘	C	SK150	暗灰色	(3.25)	0.5	0.35		
M21	鉄器	釘	C	SK150	暗灰色	(4.15)	0.6	0.3		
M22	鉄器	釘	C	SR1	周辺南側	(5.5)	0.55	0.5		
M23	鉄器	不明	C	包含層	灰色砂質土	(3.95)	2.1	0.9		
M24	鉄器	釘	C	包含層	灰色砂質土 (ラミナ)	(3.25)	0.55	0.1		
M25	鉄器	楔	C	包含層	灰色砂質土 (ラミナ)	(7.15)	1.6	0.9		
M26	鉄器	鏃	D	SH165		(3.8)	0.4	0.35	0.5	
M27	銅製品	不明品	E	SP52		(4.1)	(3.1)	0.35		
M28	鉄器	釘	E	SX50		(4.95)	0.7	0.6		
M29	鉄器	不明品	E	包含層	茶褐色礫層	(10.6)	3.2	1.45		
M30	鉄	板形滓	E	SD40	北側					

報告書抄録 (Outline of the Report)					
ふりがな	そうさいせき・そうさみなみせき			About the Report	
書 名	宗佐遺跡・宗佐南遺跡			Excavation report of the Sousa archaeological site and Sousa-minami archaeological site	
副書名	東播磨南北道路北工区（主要地方道加古川小野線）道路改築事業に伴う発掘調査			Report of the Archaeological Sites of Hyogo prefecture vol. 539	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告				
シリーズ番号	第 539 冊			The Author/Editor :	
編著者名	久保弘幸、池田征弘、篠宮 正、青木哲哉、三谷智広（パレオ・ラボ）、バリノ・サーヴェイ株式会社、(株) 加速器分析研究所、株式会社 古環境研究所			Hyogo Construction Technology Center for Regional Development Archeological Research Department Address : 1-1-1 Ōnaka, Harima-cho, Hyogo pref. Japan	
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部				
所 在 地	兵庫県加古郡播磨町大中 1-1-1（兵庫県立考古博物館内）				
発行年月日	2024（令和 7）年 3 月25日			Publication : March 25, 2024	
所収遺跡名	所 在 地	コード		北 緯	東 経
宗佐遺跡	加古川市八幡町宗佐	市町村	遺跡番号	northern latitude	east longitude
宗佐南遺跡		28210	110638	34° 47' 35"	134° 55' 24"
			110639	34° 47' 28"	134° 55' 19"
遺跡調査番号	調査の種別	調 査 期 間		調 査 原 因	
2017063 2017093 2018038 2018036 2019002 2018006 2018037	本発掘調査	2017/4/10～2017/8/10 2017/6/30～2017/12/1 2018/4/10～2018/8/10 2018/9/13～2019/1/25 2019/4/9～2019/8/8 2018/5/22～2018/8/10 2018/9/13～2019/1/25		東播磨南北道路北工区（主要地方道加古川小野線）道路改築事業	
遺跡の種別	集落	主な遺構		竪穴建物跡・掘立柱建物跡・柱穴・土坑・溝	
遺跡の時代	弥生時代～古墳時代 奈良時代 平安時代～鎌倉時代	主な遺物		弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器	
要 約	弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物跡で構成される集落跡、奈良時代から鎌倉時代にかけての集落跡などが検出された。奈良時代の掘立柱建物跡は大型で、瓦の出土から調査区付近に仏堂が存在したことが推定される。				
Abstract	The remains of a settlement consisting of pit dwellings from the late Yayoi period to the early Kofun period, as well as settlements from the Nara and Kamakura periods, were discovered. The remains of a post-hole building from the Nara period are large, and the unearthed roof tiles suggest that a Buddhist temple once stood near the survey area.				
Address of the site	Sousa, Yahata-chō, Hyogo pref. Japan		Date of the Excavation	2017/4/10～2019/8/8	
Category	Settlement ruins		Archaeological Features	Yayoi～Kofun period: Pit-dwellings Nara period: Buildings with earthfast post, Pits, Grooves Heian～Kamakura period: Buildings with earthfast post, Pits, Grooves	
Period of the Site	Late Yayoi～Early Kofun period Nara period Late Heian～Kamakura Period		Main Relics	Yayoi pottery, Haji ware, Sue ware, Ceramics, Stone tools, Iron tools, Wooden pillars	

兵庫県文化財調査報告 第539冊

加古川市

宗佐遺跡・宗佐南遺跡

－ 東播磨南北道路北工区（主要地方道加古川小野線）道路改築事業に伴う発掘調査 －

2025（令和7）年3月25日 発行

編集：公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号（兵庫県立考古博物館内）

発行：兵庫県教育委員会

〒658-0081 兵庫県神戸市東灘区田中町5丁目3-23

印刷：株式会社 ソーエイ

〒673-0898 明石市樽屋町6番6号
